

---

# ローザニアの聖王子

小夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ローザニアの聖王子

### 【Zコード】

Z3863V

### 【作者名】

小夜

### 【あらすじ】

苦難の末、王子の座に返り咲いたローレリアンは、王国の未来を憂える。

そんな彼を、アレンとモナシェイラは、支えたいと願うのだが……。ローザニア王国の王子ローレリアンと未来の花嫁モナシェイラ、波乱の恋の物語。シリーズ第2弾！

内海の東岸を支配する大国ローザニアの春は、建国節と呼ばれる祭りの季節である。

豊かな平原がいくつもの小国にわかれ土地を奪い合つた乱世の時代に終止符を打ち、現在のローザニア王国の礎を築いた聖王パルシバルが、王都プレブナンに宮廷を開き建国を宣言したのが、この季節とそれでいているからだ。

王都の春は4月中<sup>じごろ</sup>から本格化する。

風が南からの暖かいものに変わると、そこかしこに咲き誇る花の種類が急激に増え、繁殖期に入った鳥は、にぎやかに歌い始める。それに気づいた人間も、訪れた春に心を浮き立たせるのである。

しかし、祭りのムードに心を弾ませているのは、庶民だけであった。

この季節、プレブナンの王宮には、国中から集まつた貴族たちがあふれかえる。

表向き彼らは、忠誠を誓う国王へ、建国節の祝いをのべるために集まつたことになつていて

だが、実際のところ貴族にとっての建国節の祝賀会とは、秋の収穫の決算をすませ、毎年、国王へ領地経営の報告書を提出するための集まりなのだ。その季節の忙しさと負担感の重さは、国の要職につく大貴族にとつても、下つ端の貧乏貴族にとつても、大変なもの

である。

もつとも、表向きは、あくまでも祭り。

貴族が集まる王宮では、連日、なにがしかの催し物がおこなわれる。

夫や父親につきしたがつて領地から王都へやつてきた女性たちにとって、この催し物は最高の娯楽だった。

着飾つて舞踏会や音楽会へでかけていくのも楽しいし、この国のファッションリーダーである大貴族の奥方や令嬢の今年のドレスを拝見するのも楽しい。

役人に書類の不備をつかれたり、国家事業への出資を求められたりして、連日脂汗をかいている夫や父親の苦労など、彼女達には理解できない。

女子供に仕事の愚痴を吐かないのは、高貴なる男たちの矜持に類すること。

自分の妻や娘は、蝶よ花よと、甘やかす。

それが、国王陛下から領地を預かる誇り高き貴族の男の、しかるべき態度といつものなのである。

春らしいおだやかな晴天に恵まれた今日も、王宮には大勢の人があつまっていた。

人々が集っていたのは、広大な王宮の南面に位置する芝の広場で

ある。いま、その広場には臨時の観戦席がしつらえられ、二方向から見下ろす芝の舞台の中央では剣術の試合が行われている。

年に一度の、御前試合。國中から集まつた腕自慢の男たちが、その年の一番の勇者の地位を競つ、恒例の祭りだつた。

例年、この試合は、かなりの盛りあがりを見せる。

國王陛下の軍隊に仕官している者なら、たとえ平民であろうとも、この試合には出られる決まりになつてゐるからだ。御前試合で優勝して桂冠騎士の称号を得ることは、この國の軍隊において、平民が出世の足がかりを得られる唯一の機会であつた。

だから、試合に参加する男たちの意気込みは、半端なものではない。試合自体は寸止めのルールで進行するが、毎年怪我人が続出するのも、仕方がないことだと思われていた。

しかし、今年の試合は、どこか空気が違つていた。

圧倒的な強さで決勝まで勝ち進んできた第6師団の怪物ルース・フィルスが、相手に容赦のない一撃を放つては、大量の血を流していたのである。

もともとルースは好戦的な男だつた。

まるで熊のように筋骨たくましい体と、國境の小競り合いを日常とする第6師団で実戦をくりかえしてきたせいで潰れた鼻。そして、眼窩の骨折のために瞼が動かなくなり、眠そうな半眼となつてしまつた右目と、逆に右目の視界の悪さを補つために、爛々と輝くようになった左目を持つ。まさに怪物というあだ名にふさわしい、外見

をした男なのである。

決勝戦を前にして、彼は鼻息荒い。

待機所でおとなしく座つてはいられないようで、さきほどから試合場の芝の上を、抜身の剣を手にして歩きまわつている。

観客席の客も、興奮しきつていた。

とにかく誰もが、近年まれにみる大勝負を観戦できる幸運に感謝し、浮かれているのである。

決勝戦で怪物ルースと対決するのは、18歳の士官候補生だった。

彼は、王都に新設された士官学校の第一期生である。噂によると俊敏な剣の使い手で、勉励をいとわない努力家。そのうえ人望もある、第一期生の星と呼ばれる存在だという。

しかも彼は少年時代に、伝説の名剣士として名高いアストウール・ハウエル卿のもとで、見習いを務めていたという経歴を持つ。

アストウール・ハウエル卿は自身も若いころ、5年連続で、この御前試合に優勝した経歴の持ち主なのだ。人々が、因縁を感じないわけがなかった。

現在、アストウール・ハウエル卿は、近衛連隊の顧問官である。

本来なら連隊長でも務まるほどの人物であるが、彼はみずから望んで、その地位についた。彼が『我が王子』と呼んで敬愛するローザニア王国の第二王子、ローレリアンの側仕えをするためである。

いまでは彼は、『王子殿下の影』と呼ばれている。王子殿下がいるところには、必ず彼もいるからである。

才氣あふれる若者として父王から愛され、その優れた頭脳で深く考えたすえに生み出す立言の数々を重用されてきたローレリアン王子には、敵も多かった。赤子のころに死んだものとされていた王子が中央政界へふたたび姿をあらわした時、「なんでいまさら?」と笑つた者たちは、やがて既得権を失う予感におびえ、激しい恐怖を覚えるようになったのである。

その結果、数えきれないほどの刺客が、アストウール・ハウエル卿の手によって、血の海に沈むこととなつた。

王子に害をなそつとする者は、王子に近づくことすらできず、終わる。

伝説の名剣士の名声は、いや増すばかりである。

その伝説の名剣士『王子殿下の影』は、西側の試合待機所で管をまいていた。

待機所で決勝戦の開始を待つ、士官候補生をからかっているのである。

「どうだ、アレン。勝ち田はありそうか?  
あの化け物、なにか薬でもやつてるんじゃないだろうな?  
見てみる。あいつ、興奮しきつて、いまにも涎を垂らしそうじやないか。まるで、狂犬病にかかった闘犬だな。危なくてしょうがない。

あんなの、どうかへ鎭でつないでおけってんだ」

士官候補生のアレン・デュカレットは、うさん臭そつた田で、昔の上司を見た。

アストウールは3年前と、ちつとも變つていなかつた。

戦いで失つた右目は皮の眼帯の下。

氣障な形に整えられた口髭。

その髭の下には、皮肉が大好きな口がある。

どうも、王子殿下に直接お仕えして、世の中の嫌なものをいっぱい見てきたせいで、彼の皮肉好きには、さらなる磨きがかかつたようである。

いまの態度だって、とても可愛がつていた昔の部下を、励ましていよいよには見えなかつた。

柵にもたれて、ほれほれほれと、アレンが座つている椅子を蹴つてくる。

その傍若無人ぶりは、アレンに付き添つていた士官学校の教官があきれて注意するほどである。

「どうか静かにしてください、ハウエル卿。

せつにざやかにされでは、デュカレット候補生は、精神統一ができないません」

アストウールは、アレンを取り巻く大人達を、ぐるりと見まわした。

みんな、一様に、青い顔をしている。

ここまできたら、アレンに勝つてもらいたいと思つのは当然だらう。彼が御前試合に勝てば、士官学校で教育を受けた者は優秀であると、世間に証明できる。

しかし、その思いでアレンの肩に期待とこゝろの重荷を乗せるほうが、よほど彼の集中力をそぐのだがなあと思つ、アストウールである。

ところがだ。

問題の士官候補生、アレンは笑っていた。

「あいかわらずですねえ、アストウールさまは。  
俺のことなら、心配なく。

あとは、無心で頑張るだけです。

それより、いいんですか？ 王子殿下のそばから、離れたりして

アストウールも笑つて答えた。

「大丈夫だ。

いま、殿下の側には国王陛下の護衛がいる。

俺は、がんばれよと伝えて来いと、使いを命じられたのだ

「それは、どうも。殿下に、お礼を申し上げておいてください。それ……」

アレンは元上司の耳元へ唇をよせる。

「約束は、忘れないでくださいよ？」

「ふん」と、アストウールは鼻で笑う。

「王立士官学校第一期生、アレン・デュカレット候補生！ 時間です！ 中央へお進みください！」

呼び出しの大声が、二人の会話をとめる。

「では、いってきます」

呼ばれた候補生は、剣を手にして周囲へ軽く会釈をし、堂々と試合場へ出ていった。

アストウールは、まぶしげに隻眼を細めた。

アレンの後ろ姿に、3年前の面影はない。

3年前と同じだと切れるのは、癖のある茶色い髪くらいのものだ。

背はすらりと高くなり、肩はがつちりとした大人の肩になつた。胸板もずいぶん厚くなっている。

それに、なにより、雰囲気が変わった。

「さやかなおしゃべり好きの子供っぽさは、欠片もなくなつてしまつたのだ。いまの彼は士官学校の同級生や後輩たちから『氷鉄のアレン』と呼ばれているらしい。彼の冷静な表情が動くことは、め

つたないので。

アレンが無表情になつたのには、アストウールにも多少の責任があつた。

士官学校の一期生には、大貴族の子弟が大勢いたのである。初めての入学資格審査試験が行われる際、士官学校の設立メンバーの名簿に箔をつけたがつた馬鹿どもが、本人のやる気や才能をまったく無視して、貴族の子弟ばかりを優先的に合格させてしまつたからだ。

自分の出身家庭が立派であることを自信のよりどころにしている大貴族の息子たちにしてみれば、貧乏豪族の三男坊であるアレンが、同級生の中でもっとも成績優秀で武芸にも秀でているという状況は、我慢ならないものだつた。

しかも、アレン・デュカレットは、伝説の名剣士アストウール・ハウエル卿のもとで見習いを務めていたといつ、ねたましいまでに恵まれた過去を持つ男なのである。

自尊心ばかりが肥大した大貴族の息子たちは、おのれの努力が足らないのを棚に上げ、自分だつて幼少時代に有名な剣士の弟子になっていたら、もっと周囲から認められているはずだと考える。

おかげでアレンは、ことあるごとに大貴族の息子たちからいじめられた。

しかし、アレンは、そのいじめを、ことじく実力ではねのけた。

寝る間も惜しんで勉強をするから、試験の結果は、いつでも主席。剣術や馬術、はては射撃訓練まで、他の連中の一倍の練習をして、

一番を貫いた。

アレンにとっては、同級生からのごじめなど、どいつもこい問題だったのだ。

彼の目標は、ただ一つしかなかつた。

これから始まる御前試合の決勝戦に勝てば、その長年の望みは、いよいよかなうばはずなのだ。

試合場の中央で、アレンは怪物ルースと正面から向き合つた。

ルースは興奮しきつており、アレンのところまで荒い呼吸のせいで動く、空氣の氣配が伝わつてくる。

その氣配を、アレンは静かに無視した。

3年間、ずっと願つてきたことに意識を集中する。

負ける気はしなかつた。

アレンは、この日のためだけに、3年もの日々を精進に費やしてきたのだ。

剣を鞘から抜き、鞘は介添え役に預ける。

なまめかしいほど滑らかな、刃の光をながめて愛でる。

この剣は、士官学校の一年目が終了した時に、アストゥールからもらつた名剣だ。

そのころにはすでに、アレンの成績がきわめて優秀だということが、あらゆる場所で噂にのぼりはじめていた。アレンを見い出して素養を磨いたことになるアストウールにしてみれば、かなり嬉しかったのだろう。

「の剣をもらつたときに、アレンはアストウールと約束を交わした。士官学校卒業時の御前試合に勝つたら、『王子殿下の影』と呼ばれる役は、アレンに譲つてやると。

握りしめた剣に、気を注ぐ。

猛獸の咆哮（ひいきゅう）のとき雄叫びとともに、ルースは切りかかってきた。

試合の判定役が、鼻白んでいる。

ルースの切り込みは、試合開始の合図より、わずかに早かった。

勝つためなら手段を選ばない。

そういう男らしい、この怪物は。

一命、二命と、剣を切り結ぶ。

アレンの剣は、士官学校仕込みの正統派だ。

しかも、基本は名剣士アストウール・ハウエルからの仕込み。力だけで押してくる怪物の粗雑な剣を、真っ向から受け止めたりはない。相手の豪剣の勢いを利用して、右に左に剣を払うしぐさは軽やかで、美しくさえある。

戦場において、士官は馬上で剣をふるうことが多い。馬を御しながら片手で剣をふるうためには、相手の攻撃までも利用する華麗な技が必要なのだ。

3年間、ひたすら精進にはげんだアレンの剣筋は、まるで熟達した舞い手の踊りのようだった。

そして、相手の剣がわずかに泳いだすきを利用して、すれちがいをまに、わきを狙う。

観客が、いっせいにどよめいた。

ルースはかるくじて逃げたが、アレンの剣は彼の脇腹を、確実にかすつっていた。

第6師団の赤い制服の切れ端が、まるで血のように風に舞う。

今日初めて怪物ルースは、一撃を浴びた。

怪物の顔に、血がのぼる。

アレンは思った。

怒りに醜くゆがんだ赤い顔は、人間を悪事へ誘う魔王オプステイネにそっくりだ。

子供のころ村の祭りで、よく人形劇を見た。

赤い顔のオプステイネは、正義と公平の神口トに必ず倒される。

自分が口トだとは言わない。

ただ、ルースには負けたくなかつた。

ここで彼に勝ちを譲ることになれば、彼にはそれなりの地位が与えられる。

こんなやつが人の上に立つて、理不尽に権力をふるつたりしたら、それこそ無数の不幸を量産してしまう。

たいした努力もせずに威張り散らす貴族達にも、上層にも、もううんざりだ。

ルースは技を極めただけ、そんな連中よりはましかもしれないな。そう思いながら、もう一度彼の豪剣を受け流したら、ルースは激しいののしり声をあげた。

「この、卑怯者め！」

ちょこまかと逃げを決め、人の隙ばかりを狙いある！

それが、士官学校仕込みの剣か！

臆病者の、小童め！」

まともな剣の技をさして、卑怯とは笑わせる。

そもそも、卑怯なのはお前のほうだろ？。

相手を恫喝して心理的な揺さぶりをかけよつとする」ことをさして、

小賢しいというのではないのか？

まあ、戦場では、それが正しいやり方なんだろ？

どんな方法を使ったって、勝ったほうが正義になるのが戦だ。

だが、俺はだてに、鉄だの氷だと呼ばれているわけではない。

つまらない挑発には、のらない。

ここは王都で、いまは剣術試合のまつ最中。

あくまでも、相手のすきをついてこの、勝つ剣だ。

意識を、剣のみに集める。

雑念を捨てろ。

そら、よろめいた、その足元。

ひとつ突いて返す手で切りつければ、一方的に押しまくるチャンスが、こちらにやって来る。

激烈な勢いで三歩踏み込むあいだに、剣が一度鳴った。

「や！」までつ！ や！」まで！」

判定役の士官が、両手をふりあげ死闘を止めた。

最後の一合には、一人の剣士の本氣がこもっていたのだ。制止が、あと一瞬遅れたら、間違いなく多量の血が流れていただろ？

ルースが地面に膝をつき、咆哮する。

観客が、大喜びの声をあげている。

自分の呼吸の音が、やけに耳に響いた。

これで本当に、3年の苦労が報われたのか。

十面学校の同級生や後輩たちが、試合場へ駆けこんできた。

彼らは口々にアレンの名を叫び、肩を抱く。

もみくちゃだ。

いつも陽気なアンダーサーダが、おどけた口調で命令をかけた。

「みな、帽を取れ！」

「こやあつー！」

掛け声とともに、十面候補生たちの帽子が、一斉に空へと舞つた。

現金なのだ。

最初のこひは身分の低い同級生をいじめていた連中も、いまではアレンを、血縁の仲間あつかいする。

「勝者は、前へ出よ。」

観客席の中央から、呼び声がかかつた。

大騒ぎしていた士官候補生たちは、たちまち黙つた。

アレンを呼んだのは、ローザニア王国の宰相カルミゲン公爵である。現国王バリオス3世の舅として長年権勢をふるつてきた大公爵の声は、多少しゃがれてはいたものの、重々しい威厳に満ちていた。

アレンが導かれるままに一段高くなつた舞台へのぼると、そこにはおそれ多くも、国王一家がお立ちになつていた。

中央には、おだやかな雰囲気の持ち主である国王陛下。

一歩さがつた斜め後ろには、今年30歳になる王太子とその妃。さらにもう一人、王太子の妃であるエレーナ姫と、エレーナ姫の息子にあたるローレリアン王子の姿が見える。

アレンは、自分の胸のうちが震えるのを感じていた。

あれから3年。ローレリアンは22歳になつていて。

自分が変わつたように、ローレリアンも変わつていた。

彼はいまや、立派な王子殿下だ。

秀麗な容姿には、優雅な落ち着きが。

もとから上品だった身のこなしには、王族の威厳が。

そして、いつも口元にある微笑には、この国の豊かな未来を想像させる深い知性のあかしが読み取れる。

跪拝し首を垂れるアレンに、国王が話しかけてくる。

「アレン・デュカレット。みじとな勝利であった。

我が国の軍制改革の一環として新たに設立された王立士官学校の最初の卒業生が、この名勝負をなしたこと、余はたいそう嬉しく思う。

みんなもの、注目するがよい。

この試合の勝者は、国一番の剣士である。

ここに、その名前をたたえ、桂冠勲章を授与するものである

これで、アレンは今日から騎士様だ。身分も一代貴族とはいえ、立派な貴族の一員。

国王の手から勲章を受けとった宰相が、輝くそれを、アレンの胸にピンで留めつけてくれる。

その様子を見ながら、国王が約束されている質問を、くりだしてきた。

「毎年、試合の勝者には、褒美として何が欲しいか、たずねてある。そなたも、忌憚のない希望をのべるがよい」

かしこまつつつ、それでもはつきりと、アレンは望みを言った。

「おそれながら、申し上げます。

どうか、わたくしに、緑の衣の着用をお許しください。

そして、心よりお慕い申しあげるローレリアン王子殿下の、お側へ仕えさせていただきたく存じます」

緑の衣とは、近衛連隊の濃緑色の制服を指す。士官に任命されたあつきには、ぜひとも近衛連隊に入隊し、ローレリアン王子へ仕

えたい。アレンはそのためだけに、士官学校で主席をつらぬかれてきたのだ。

国王は声を立てて笑つた。

「王子よ、そなたに仕えたいと申す者が、また一人増えたな」

「おそれいります」

ローレリアン王子は懲懲いんぎんに腰を折つた。

アレンは、国王の前で無礼と知りつつ、驚いて顔をあげてしまつた。

ローレリアンは王宮じやうぐうへもどつて殿下と呼ばれる身分になつてからも、丈が短い聖職者の法衣を愛用している。黒づくめで飾り気がないその衣装は、いつも王子の美貌をより輝かせると言われているのだが。

しかし、今日の彼は憂鬱う��そうだ。

しかも、父親であるはずのローザニア国王のまえで、この陰氣な表情は……。

だいたい、こいつのお辞儀じぎのしかたは腰の角度からして、礼儀作法の教科書の解説どおりに分類するなら、臣下の礼と呼ばれるたぐいのお辞儀だぞ。

王族ともなると、親子の間にも、主従関係が生じるのかな?

アレンが、もやもやと考へこんでいるつがい、ローレリアンが前へしてきた。

観衆が、どつと沸いた。

最近、この美貌の王子は、どこへ行つても大人気なのだ。

それはそうだらうと、アレンは思う。

王のとなりに控えて不機嫌そうな顔をしている王太子ヴィクトリオは、さえない容姿の持ち主だった。

髪は、つやのない赤毛。

瞳の色は茶色で、顔立ちは平凡そのもの。

体つきだつて中肉中背で、とくに特徴もない。そのうえ大人になつてからは趣味の狩猟でくらいしか体を動かしていないものだから、なんとなく、しまりのない体型だ。ゆつたりとした服装で隠しているが、裸になれば間違ひなく、腹が目立つてしまふ中年体型だらう。

だいたい、若いころは美丈夫でとおつていた現国王バリオス3世と王太子は、似ても似つかない外見なのだ。

バリオス3世は、金色の髪に水色の瞳をもつてゐる。この特徴は、ローザニア王家に生まれる人間に、よくあらわれるものとされてゐる。王国の開祖聖王パルシバルも、金色の髪に水色の瞳の持ち主だったそうだ。

そして、ローレリアン王子も、金色の髪と水色の瞳の持ち主。

王子の母親、エレーナ姫もだ。

この3人が並び立つと、人々は恐怖の念にかられる。彼らはまさに、伝説の王から受け継いだ、高貴なる血筋を体現しているような親子だからである。

その3人の中にいると、王太子のさえない容姿は悪目立ちした。

口をがない者などは、「王太子はきっと、千宝の女神ユピが取り間違えた子なのだろう」といつて笑う。

ローレリアン王子の人気が増しているいまでは、「完全に負けている兄のほうの名前が『ヴァイクトリオ勝利』とは大笑いだ」と囁く者までいた。

アレンの前までやつてきたローレリアンは、優しげな笑みで表情をゆるめた。

それを見て、アレンは、ほつとした。

ローレリアンのほほ笑みは、アレンと出合つたことなど、ちつとも変つていなかつた。

このほほ笑みには、だれよりも優しく他人のことを思いやる、かつての金髪の神学生、ローレリアンの真心がこもつている。

よく通る澄んだ声が、アレンに話しかけてくる。

「ひをしづりだ、アレン」

「まったくです。」このままでお側近くにやらせていただぐのは、3年ぶりになります。レヴァ川の桟橋で、お別れして以来ですよ」

「堅苦しこのは、なしにしよ。きみは、わたしの友人だ。また会えて、本当にうれしこよ」

立てと、じぐせでうながされ、アレンは立ちあがった。

ローレリアンの綺麗な顔が、ちょっとばかり驚いたふうに動く。

「まいっただ。  
きみときたら、ずいぶんと背が高くなつていなか?  
わたしより、視線の位置が高いじやないか」

「この3年で、俺も成長したんですね」

「すべすべと、育つたものだな」

「ですから、もう餓鬼がきあつかいは勘弁かんべんしてください。殿下との約束を果たすために、俺はがんばってきたんです」

「おや、わたしは、なにかきみと約束を交わしただろうか?」

アレンは笑つて答えた。

「おまえの背中は、俺が守つてやる。」

俺は、頭の出来じや、とても殿下にはないませんが、体を使った仕事は得意です。

きつと、お役に立ちますよ」

王子は、一瞬、眼を見開いた。

次の瞬間には、切なげに、その眼が細められる。

「国一番の剣士が、なにを言つ。  
力を貸してくれるという申し出も、ありがたいと思う。  
きみを友と呼べて、わたしは、とても幸せだ」

アレンはローレリアンに抱きよせられた。

彼の頬にあたつた友人の金の髪の感触は、とても懐かしいものだ  
つた。

ただ、美貌の王子と国一番の剣士の称号を得た若者との間でかわ  
された友情の抱擁を見せられて、観衆が大喜びしたのだけが、違和  
感となる。

アレンは新たに、誓いを立てた。

これから俺は、ローザニア王国に仕える士官となるのだ。

立場は、あくまでも公人だ。

ローレリアンとの友情に甘えることなく、しつかりと、公務をこ  
なさなければと。

建国節の御前試合は、その季節の昼間の行事の最後を飾る催し物だった。

その夜、王宮で開催される舞踏会は、国をあげての大舞踏会になる。この舞踏会が終わると、各種の報告のために王都へ上つてきていた地方領主たちも、領地へ帰つていくのだ。

舞踏会の会場は、きらびやかな装いで着飾つた人々でいっぱいだった。

しかも、その場の空気には、人いきれと脂粉の香りが充満している。

天井を見あげれば、日もくらむシャンデリアの照明。

その照明のむこうからは、天井画に描かれた神話の神々が、集まつた人々を見下ろしている。

宴はまだ始まつてから間もなかつたが、御前試合の優勝者として大勢の人間に囲まれて話しかけられ続けていたアレンは、すでにうんざりしあじめていた。

衣食住に不自由していない貴族たちは、普段の生活に退屈しきつており、劇的な出来事が大好きだ。

勲章を授与されるとき、衆目の前でローレリアン王子と友情の抱

擁をやってのけたアレン・デュカレット卿は、彼らの好奇心の絶好の獲物だったのである。

アレンは、そんな連中の質問に対しても、「王子殿下の個人的なご事情にかかる質問には、いつせい、お答えできません」と冷たく返答しつづけた。

幸いなことに彼のまわりには、士官学校の同級生たちがいつもいた。彼らは、このあと王国の軍の士官として、各地へ旅立っていく。その門出を祝う意味で、この舞踏会へ招待されていたのである。

栄えある王立士官学校の卒業生として、同級生たちは舞踏会の雰囲気を、おおいに楽しんでいた。

その同級生たちは、アレンの代わりに、いへりでもしゃべってくれる。

「どうか、この男の無愛想ぶりを、許してやってください」

「この男は、不言実行が信条で、めったに感情をあらわにしないのです」

「ついたあだ名が、『氷鉄のアレン』ですよ」

「その名の通り、冷たく固い男です。我々がいくら友誼を結ぼうと誘つても、そつけないことにのつえない」

「おまえの誘いは、悪事への誘いばかりではないか」

「酒場で結ぶ友情も、士官学校の同期生にとっては大切な関係です

よ。将来一軍を率いる立場になったとき、将官同士がお互のこととをよく知つていれば、勝機につながる作戦も立てやすいというものです」

「大きく出たな！ 貴公、将来は將軍になるか！」

「あたりまえだ！ その氣概がなくて、士官候補生になど志願するものか！」

晴れがましい席で卒業を祝つてもらい、同級生たちは浮かれまくつていて。

知らないといつゝことは、幸せなことでもあるのだなど、アレンは思つた。

きっと、新任士官として任地へ赴いた彼らは、そこで現実の厳しさを知るのだろう。

平民出身の下士官や兵士たちは、ただ頭でっかちなだけのエリートになんか、従いはしない。

圧倒的多数の兵士たちが求めているのは、自分たちに命令を下すだけの器量を持つ人間である。

軍人として、優れているかどうか。

求められているのはそれだけで、指揮官の身分など、伯爵の息子だろうが、男爵の弟だろうが、どうでもいい問題なのだ。

人垣のむこうが、ざわめいた。

「どうぞ、王子殿下のために道をお開け下せ。」

式部官の先触れとともに、あわてた人々が後ずさり、腰を折る。

アレンも騎士の作法にのつとつて、首を垂れた。

頭の上から、涼しげな声が言った。

「人気者だな、アレン・デュカレット卿は。ここまでたどり着くために、わたしは何度も、道を開けてほしいと、周りの者に頼まなければならなかつたよ」

この場でしゃべつてもよいのは、王族に話しかけられているアレンだけである。アレンは緊張して、言葉を返した。

「お呼び下されば、わたくしのほうから、御前へまいります」

ローレリアンは、楽しそうに笑つた。

「顔をあげる、アレン。

きみは、今夜の宴の主役の一人じゃないか。その、ぶつちょう顔は何だ？  
もつと楽しそうにしたらどうなんだ」

王子の親しげな態度を受けて、アレンはつに、気をゆるめ。

「俺は、もとから、いつこう顔なのです」

「本当は、もつと陽気な男だと、知っているのはわたしだけなのか？」

それもまた、楽しくて結構な話だが。

しかし、公式の場で無愛想なのはいただけないな。  
もつと場の雰囲気を楽しむがいい。

そうだな、すこし、いつしょに会場を歩いつか。  
わたしと親しい者達に、新任の護衛官を紹介しておきたいし

「はい、お供いたします」

かたずをのんで王子殿下とアレンの様子を見守っていた貴族たち  
や士官学校の同級生たちは、いつせいに羨望のため息をついた。

今日、国一番の剣士の称号を得た青年には、出世の道が約束され  
たのだ。王子殿下みずからが青年を友人として認め、それを公言し  
て歩いつのうのだから。

人垣から離れて歩きだした一人は、じつに見事な組み合せだつ  
た。

威厳に満ちたローレリアン王子は、いつもの黒い法衣に茜色の大  
綬と王子の身分をあらわす銀の星章をつけていた。

つき従う桂冠騎士のアレンは、士官候補生の礼装姿だ。純白に濃  
紺と金のブレードで飾りを施した礼服を身にまとい背筋を伸ばして  
歩く青年の姿には、これから背負う任務の重さへの覚悟と気負いが  
満ちていた。

もちろん、彼の左胸には、勝利をあらわす円桂樹の冠を意匠した  
新しい勲章が輝いている。

彼らとすれちがう時、貴族の令嬢は、みな小さな悲鳴をあげた。

建国節の王都に集う適齢期の貴族の令嬢たちは、自分と身分が釣り合つ結婚相手を探しているのである。王子殿下のお気に入りの青年士官などは、結婚相手としては極上の部類だ。

当然、アレンには熱い視線が注がれた。

ローレリアンは、それを見て、愉快だと笑った。

「す」「いな、アレン。 令嬢たちが君を見る目とおもたら

青年騎士は、しらけた顔で答えた。

「あの者達は、あなたを見ているのです。王子殿下」

「そんなわけがあるか。

なんなら試しに、そのへんにいる令嬢へ声をかけてみるがいい。踊つてくださいとお願いすれば、みな一いつ返事で承諾するが」

「ダンスなど、興味がありません。

それより、殿下こそ、他の者にお声をおかけにならなくてよろしいのですか」

「ダンスが嫌いとは、武骨なやつだな。

ほら、聞いてみる。

この曲は、いま王都で売れっ子の作曲家、ムーランの新曲だ。聞いているだけで、足がステップを踏みそうになるではないか

やけに機嫌がいいローレリアンは、音楽にあわせて人差し指を振つた。

あきれてアレンは言つ。

「楽しそうですね、殿下」

「楽しげ。わたしは、舞踏会が大好きでね」

アレンは驚いて、あたりを見まわした。

アレンと出会ったばかりのこのローレリアンは、富を独占している貴族たちのことを、あまりよくは思つていなかつたはずなのだが。

絢爛豪華な大広間には、喧騒が満ちている。

中央には、音楽にあわせて華麗にぐるぐると舞う男女の群れ。

「婦人方のドレスは様々な色で、それが一斉に「はじめく」と、見ているこつちは目がまわりそうになる。

なにしろ貴族たちにとっては、この建国節の舞踏会は大舞台なのだ。

着飾つて集まり、子弟の結婚相手を探したり、領地経営にまつわる産業の関係者に顔つなぎをしたり、政治の根回しをしたり。

踊る男女の集団が、アレンには化け物じみて見えた。

あの貴婦人が身につけている衣装一式分の金があれば、今年の冬に流行した悪性の感冒で親を失つた子供たちを、何人救つてやれる

だらつか？

水不足であえいでいる南東地方の民のために、何本の井戸を掘ることができる？

くつそー、一重二重に首に巻いた宝石なんぞを、キラキラさせやがって！

そんなことを考えたせいで、アレンは不機嫌になつた。

表情をゆがめて、陰気に言い放つ。

「舞踏会がお好きなら、俺のことなど放つておいて、殿下も踊つておこになればいいのです

胸元の護符に手を当て、お祈りのじぐわをしながら、歯のはじでローレリアンは笑つ。

「馬鹿を言つな。

踊る神官など、滑稽なだけだ。

それに、わたしが特定の女性と、踊つてみる。

たちまちその女性は、妃候補などと驕り立てられて、日常の生活もままならなくなるが

「…………

思わず、言葉を失つアレンである。

確かに、その通りかもしれない。

才能豊かな、第一王子。

兄の王太子をしのいで、この国の未来を変える人間になるのではないかと、國中から期待されている青年。

それが、目の前の、この男だ。

歩みを止めたローレリアンは、じつとアレンを見ていた。

彼の水色の瞳には、深い憂慮がたたえられている。

アレンの胸は、切迫感につまつた。

ローレリアンの瞳から、目が離せない。

まるで、底が知れない深淵を、のぞきこんでしまったかのような気持ちになる。

王子は低い声で言った。

「貴族たちの舞踏会は、社交の名を借りた謀議の場所だ。彼らは集まって踊りながら、この場で、ローザニアの未来を動かしてしまつ。」

議会は茶番。

国民の意志など、彼らには関係がない。

ならば、この謀議の場所を、わたしも利用してやるだけのことだ。なにか相談事が生じたら、相手へ簡単に声をかけられるだろ？

だから、わたしは、舞踏会が好きなのぞ。

「の人に」みの中で歩きながら話をすれば、秘密はぜつたに守られる。

わたしの「しろを歩いて」いる『王子殿下の影』に逆らつて、わたしと密談中の者に近よつて、話を立ち聞きするには不可能だ。

だから、アレン。

きみも言つたいことがあるのなら、こまゝにで言つてしまえぱい。

聞いてこるのは、『王子殿下の影』だけだ

背中に視線を感じて、アレンは振り返つた。

そこには、近衛騎士の正装で身を飾つた、アストウールが立つていた。

濃緑色の上着に、金ボタンと金のブレード。

胸には、ずらりと、武勲を示す勲章が並んでこる。

そして、腰には立派な剣。

この会場で佩劍はいけんを許されている人間は、じくわづかだ。

そのうえ、アストウールが担つてゐる役割は、王子の護衛だけではないらしい。

王子殿下からの「ちよつといつしょに、歩きましょうか」というお誘いには、じつは恐ろしい意味があつたのだ。

ローレリアン王子は聖職者の衣と優しげな微笑をかくれ蓑みのにして、貴族たちのもとへ国王からの困つた要求を運んでくる、恐怖の使者なのだった。

「アレン」

ローレリアンは、静かにいった。

「きみがこれから足を踏み入れようとしているのは、一いつこう醜い世界だ。

本当に、いいのか。

何もかも承知の上で、まだ、わたしの友人でいてくれるのか？」

浮かれ騒ぎの喧騒が、アレンのまわりから引いていく。

彼とローレリアンのあいだには、重い沈黙があった。

たがいの瞳を見つめ合い、二人は未来について考えていた。

いつかは、実現したい夢だ。

ローザニアを、すべての人が幸せだと実感できる国に変える夢について。

アレンは、ため息をついた。

心からの、安堵のため息を。

だれも聞いていないというのなら、俺の本音を、俺の言葉で言つてやるわ。

「よかつたよ、rian。おまえは、3年前と、ちつとも変わってないんだな」

「たったの3年で、人間がそんなに変わったりするものか」

「俺は、かなり変わったと、思うんだけどな」

「外見だけはな」

「ひどい言われようだな。

でも、あの時の誓いだけは、変わらないからな。  
おまえの背中は、俺が守つてやる。

だからお前は安心して、前だけを見てる」

ローレリアンは心底嬉しそうに、アレンの肩を抱いた。

そしてふたたび、歩きはじめる。

「それでは、わたし個人へ腹心の誓いを立ててくれている者達と、  
引き合わせよう」と言いながら。

何も知らなかつた無邪氣な少年のときに立てた誓いは、いまふた  
たび重い責任をともなつて、アレンを縛つた。

だが、これでいいのだと、アレンは思った。

彼はここで、人生をかけるにふさわしい大望を得た。

この誓いこそが、男子一生の本懐に、まちがいなかつた。

舞踏会の夜はふけてゆく。

王太子ヴィクトリオは、ほろ酔い気分で、舞踏と音楽が最高潮に達した大広間をながめていた。

彼は、つい先ほど、会場へ入ったばかりだ。

最近は、いつもわざと遅れて、会場入りするのだ。とくに、座が乱れる舞踏会などでは。

遅れて会場入りすれば、目立たなくて済む。

人々はもつとつしく、会場へ入場してくる王族への興味など失っている。

若者はダンスへ、年寄は社交といふ名の密談へ、夢中だからだ。

本當なら、舞踏会になど出たくなかつた。

つまい酒を飲みながら、女と寝所ですこすほつが何倍も楽しい。

しかし、王宮の行事をすっぽかすと、祖父のカルミゲン公爵から苦言を呈されてしまつ。

殿下は次代の国王なのです。国王になるお方りしく振舞つてください、などと。

酔った勢いで、ヴィクトリオは笑った。

最近は、しらふでは笑えない。

しかし、酔った勢いで笑うと、もつと惨めだ。この、こみあげてくるおかしさは、自分自身を滑稽だと思つてゐる、自嘲のおかしさなのだから。

あなたは、次代の国王です。

もうそつと思つてゐるのは、ローザニア王国の宰相であり国王の舅でもある立場を利用して、長年にわたり中央政界で権勢をふるつてきたカルミニゲン公爵だけだ。

3年前、異母弟が王都へもどつてきたときには、すべての人々はヴィクトリオを見捨てたのだ。

面と向かつては言わないうが、臣下の者はみな、ヴィクトリオを愚鈍だと思つてゐる。

さえない容姿。

焦ると出る頬の痙攣。

考えることが苦手な頭。

趣味といえば、酒と女と狩猟。

王子に生まれなければ、早々にどこかでのたれ死んだのではない  
かと、自分でも思つ。

なにしろヴィクトリオには、やる気といつものが欠片もない。

兄とは対照的に、弟王子のローレリアンは、やる気の塊だ。建国節に入る前の一ヶ月間は、内海の港町ラカンへ出かけていた。

その地は、王国に仕える5人の公爵のうちの一人、ラカン公が領有する街だ。

弟はそこで何やら、難しい交渉事をまとめてきたらしい。

王都への帰還は、ラカン公といつしょだった。

弟と馬の轡くわをならべて仲良く王都入りしたラカン公は、現国王バリオス3世にむかって、我が娘をローレリアン王子の妃にどうかと、進言したらしい。

国王と側近は返答にこまつた。

ラカン公爵の娘は、まだ8歳なのだ。

14歳の歳の差を無視してまでして、ラカン公爵はローレリアン王子との血縁関係を望んでいる。

その事実は、貴族たちを震撼させた。

ローレリアン王子は、すでに玉座へ片手が届いているのではない  
かと。

ローレリアン自身は、その可能性を否定している。

事ある」といに、あの異母弟は、「兄上のお立場をないがしろにし

て、わたしが差し出がましこじをしようとは思ひません」と囁く。

「わたしは正嫡の王子ではあつませんので、王座に野心はないのです。

父国王陛下のおんため、いぐばくかのお役にたてねばと、それだけを望んであります。

結婚も、する必要はないと考えております。  
わたしは、一度は神々の御意志に、お仕えしようとした身。  
いまも、神官位を返上しようとは思つておりません」

そういって異母弟は、父国王や兄王太子に対し、臣下の礼を取る。

真実、嫌味なやつだと、ヴィクトリオは思つ。

あいつが深く礼をするたびに、ヴィクトリオは人々から、嘲笑を浴びるのだ。

馬鹿な兄上をお持ちだから、ローレリアン王子は御苦労なさると。

宰相カルミゲン公爵は、聖職者として生きることに未練を残すローレリアンの気持ちに、最後の望みを託していく。

だから、ヴィクトリオには、大きな問題を起こすなといつのだ。

おとなしくさえしていれば、異母弟は、ヴィクトリオから王位継承権を奪いまではすること。

異母弟が、結婚もせず、神官位も返上しないというならば、ヴィクトリオを王位にすえて、陰ながら国を守る立場に徹してくれるに

ちがいないと。

「わたくしとて、孫である王太子殿下の行く末が心配なのです。

それに、我が孫にこそ王位へ着いてもらいたいと願うのは、あとは枯れ木の「」とく朽ちていくしかない、この老いぼれめの最後の夢ですぞ」

そういうながらカルミゲン公爵は、ローレリアン王子が誕生日を迎えるたびに、聖職者の位を贈ってきた。意地でもローレリアン王子には、国家の要職や肩書を与えるつもりはないようだと、人々は噂している。

遠い田で、ヴィクトリオは大広間のむこうの側にいる異母弟の姿を追つた。

弟は今日も、黒い法衣を身にまとつている。

右肩から斜めにかけているのは、王子の身分をあらわす銀の星章に付随する茜色の大綬だ。

銀の星章を身に着けなければならぬ正式な場所へ出るときには、神官位をあらわす記章が略章では格が釣り合わないので、腰に神官の典礼服と同じサッシュベルトを結んでいる。

毎年、異母弟の神官位は上がっているから、いまのサッシュの色は3位の浅黄色である。

茜色も浅黄色も、黒衣によく映える色だ。ローレリアンの秀麗な容姿を、さりに美しく引き立てて見せる。

そして、あの異母弟が持つ、金色の髪と、水色の瞳……。

ヴィクトリオは奥歯を噛みしめ、拳をこじりつた。

せめて、わたしにも金色の髪と水色の瞳があれば、ここまで惨めな思いをせずとも済んだであろうに……。

泣きたい気分で、ヴィクトリオは、そばの椅子へ倒れこんだ。

最近ではいつも舞踏会のセレモニー、彼はこうして座つている。酒に酔つて座つていれば、誰も彼に話しかけようとはしない。さらぬ神にたたりなしとばかりに、放置しておいてくれるのだ。

ヴィクトリオは、ぼんやりと、宙をながめつづけた。

じのまま、空氣の中に溶けて、消えてしまつたかった。

しかし、その彼の前に、目が覚めるような光景が現れる。

女である。

美しい女。

若い女。

その女は、しなやかな細腰と滑らかな肌と、豊かな黒髪の持ち主だった。

白い優美なデザインのドレスを着ている。

そのドレスには、着飾った他の貴族の娘たちのよつこ、じじゅうとした飾りがついていなかつた。

ただ、幾重にも重ねた薄縄の上に、同じ白糸で施した刺繡が素晴らしい。

胸元や肩口に飾られた、レースもだ。

レースのふちどりには、淡い紫の糸が使われているのだ。

そのせいで、たっぷりとギャザーを取ったレースの美しさが陰影を得て、際立つて見えている。

身につけているアクセサリーは、透明な石のシンプルなネックレスとイヤリングのみ。

黒髪には白い薔薇。

だから、レースのふちどりの薄紫と紫の瞳だけが、この女の姿に色を添えるのだ。

しかも、その瞳が……！

なんと印象的な色をした瞳だらうか。

生き生きとした、生命感にあふれる色。

これは、すみれの花の色だ。

春がくると陽だまりに群れて咲き、可憐な花弁を風にゆらす、すみれの花。

「く、く、く、ヴィクトリオの喉が鳴る。

久しぶりに感じる、女への欲情。

ローレリアンが王都へ帰つてくる前までは、暗愚だ、愚鈍だと馬鹿にしながらも、貴族たちは王太子ヴィクトリオへ、娘をさしだすことを嫌がりはしなかつた。

一夜だけの相手に、不自由などしたことはなかつたのだ。

しかし、いまではヴィクトリオの相手をしてくれる女は、商売女か、借金で困つている既婚の夫人たちだけである。

父親たちは、娘の純潔をわざげるほどの価値を、ヴィクトリオに見い出していくない。

欲しい。

あの女が欲しい。

あの美しい衣を脱がせて、しなやかな肢体をあらわにしたい。

黒髪に指をからめたい。

滑らかな肌に手を這わせ、嬌声をあげさせたい。

何度も何度も責めさいなみ、もう許してくれと、泣かせたい。

女は、椅子に座つて、じつと自分を観察しているヴィクトリオの存在に、まだ気づいていなかつた。

連れの男にむかつて、快活に言ひ。

「お願ひ、お兄様。

もう一度、もう一度だけでいいですから、踊つてくださいな。そうね、あのあたりを、ななめに突つ切りたいわ。あそこのあるたりには、衣装にお金をいっぱいかけた、成金令嬢や夫人が大勢いるもの」

腕を揺すられた男は、うんざりした様子だつた。

「モナ。さつきから、もう一度、もう一度、これが最後だからを、何度もくりかえしていると思う？  
わたしは、もう疲れたよ。

おまえはよく動くから、ダンスの相手も大変なんだ」

「しかたがないでしょ！

このドレスが、どれだけ素敵かを見せつけるためには、ターンをくりかえして、裾をひるがえして見せないと」

「ふいと、そっぽをむいた女は、悪戯っぽく笑う。

「いいわ。お兄様がお疲れだというのなら、そのへんの男性を捕まえて、お相手をお願いするから」

女の兄は、慌てふためいた。いくらか年が離れたように見える兄からすれば、妙齢の妹は可愛くてならないのだろう。

「よせ、やめろー。

わかつた、いくらでも相手をしてやる。

だから、適当な男と踊るのはやめなさい。

おまえを、どこの馬の骨とも知れない男と踊らせたりなどしたら、

わたしは父上から殺されてしまつ

「ありがとう、お兄様！

ごめんなさいね。

本当は、アレンに相手をさせようと思っていたのよ。

だけど、あの子、もう早々とローレリアン王子殿下の御付きみた  
いに、なつちやつてるんですもの。声なんか、かけられないわ

女は兄から、たしなめられる。

「モナ。アレン・デュカレットは、桂冠騎士の称号を得たのだ。も

う氣安く、あの子などと、呼んではいけない。

王子殿下のお仕事の、邪魔をしてもいけないよ

「はーい。わかってます」

「まあ、わたしも、あの坊やが、あんなに偉くなるとは思つていなかつたがね」

「失礼ね、お兄様。アレンは、とても努力家よ。あつと今こ、王子  
殿下の片腕と呼ばれるようになるわ」

ヴィクトリオは不快になつた。

また、ローレリアンが話題になるかど。

そばに控えていた式部面を手招きする。

「あの令嬢は、ビニの家の者だ」

式部面は、ひやひやしく答えた。

「兄上様と呼ばれておこでになるのは、ヴィダリア侯爵家の三男、王国軍第一師団の士官ロワール様です。おそらく、お嬢様は末の姫君、モナシエイラ様かと」

「ほう、南三国の王家出身の母親を持つ、なかなかに高貴な血筋の姫だな。だから、珍しい瞳の色をしているのか。髪も黒髪で」

「いまにも舌なめずりを始めそつなヴィクトリオの顔を見て、式部官が鼻白んでこる。

しかし、ヴィクトリオの衝動はおさえがたかった。

もともと意志薄弱なうえに、酒に酔っているのだ。彼には、まともな判断力など、ほとんど残っていない。

「あの者を呼んでもいいれ」

命じられて、式部官は恐れおののく。

「王太子殿下、の方は……」

「呼んでもいいれと申しておる。」

「しかし、の方は内務省長官、ヴィダリア侯爵の……」

「ええいっ、もうよいわ！」

しひれを切らしたヴィクトリオは勢いよく立ちあがり、仲良く腕を組んでおしゃべりをしながら、次の舞曲がはじまるのを待つ兄妹へと、近づいていった。

宴もたけなわの大広間の反対側では、ローレリアン王子を囲んで、ちよつとした打ち合せがはじまっていた。

なるほど。ローレリアンが舞踏会を愛する理由が、これでわかつたぞ。

アストウールとともに王子の背後へ控えていたアレンは、妙に納得していた。

さつきからローレリアンは、腹心の部下たちへ、細かい指示を与えている。

「クーラント伯爵は水門の建設に対する土地と資金の提供を承諾したか」とか、「アルケメネ男爵を脅しつけた感触はどうだ?」とか。

たしかに、舞踏会は、謀略が張り巡らされる場所だった。

その中で、もっとも大きな網を張っているのが、王子殿下なのだから恐れ入る。

その網は、まるで大蜘蛛の巣のように粘っこく、哀れな生贊をからめ捕るのだ。

手持無沙汰のアストウールは、早々とアレンに仕事の引継ぎをはじめていた。体力がものをいう護衛の仕事は若手に譲ることにして、彼は、また違う仕事を王子のために始めるつもりなのである。

あれから3年の月日がすぎて、王子のまわりには信頼できる優秀な人間が、ずいぶんと増えた。もういかげんに、くたびれた中年が、つきつきりで側にいなくとも大丈夫だらうといつわけだ。

「世間の連中は、ローレリアンさまが22歳になるといつに肩書ひとつ与えられていないことを、宰相カルミゲン公爵の圧力によるものだろうなどと、邪推しているがな。

本当のところは、国王陛下の御意志なのだ。

ローレリアンさまが王都へ帰還なさつてからじばりくのあいだ、国王陛下はローレリアンさまに国務の何たるかを教えようと、つねにじ自分側へ置かれた。

国王陛下のもとへ上がつてくる報告の書類を、すべて読ませたのを。

ローザニアほどの大國になれば、国の政治に携わる者の数は膨大なものだ。

それらがどのような方向へ動こうとしているのかを常に把握しておこうと思つならば、結局、上に立つものは、上がつてくる報告に丁寧に目を通していくしかない。

王なんて立場の人間は、いつだつて書類につづもれている。

しかし、われらが王子は並の人間ではない。

たちまち国王陛下が苦慮しておいでになる書類のすべてを把握し、分類整理、取捨選択に始まり、新たな秘書官の配置や要約筆記の作成など、ありとあらゆる手段を行使して、国王陛下の仕事の量を半分に減らしてしまわれた。

こまでは国王陛下は、書類に王子が書いた要約がついてくれば、

それにしか目を通されない。

そのほうが効率的だからだ。

王子に役職を持たせるのも、無駄だと言われる。

直接国王の輔弼ほひつをさせたほうが、将来のための経験を積めるだろうとな」

アレンは声をひそめた。

「ヴィクトリオ王太子は、廢太子決定ですか」

アストウールも、小さな声になる。

「そう簡単にはいかん。

廢太子の決定は、ヴィクトリオさまが公務に耐えられないほどの御病気になられるか、精神に異常でもきたされない限り、なされないだろう。

一度、国の跡取りと定められた人間を、その地位から引きずりおろせば、その人間は社会的に抹殺される。そんな人間を国の跡取りに定めていた、国家の権威も地に落ちるだろう。ローザニアは近隣諸国から、いい笑いものにされてしまう。

だから宰相のカルミゲン公爵は、毎年せつせと、ローレリアンさまに神官位を贈るのだ。

人の世の至高の地位はお渡しできない。

かわりにどうか、神々の世界の権威で、ご満足いただけまいかとな。

宰相閣下は、自分の娘が生んだ男に、精神異常の烙印を押された

くないのだ

「では、あいつは将来、この国の宰相とこいつ」と云ふ。

「あるいは、摂政か。

王弟がプレブナン大神殿の大神官長の地位と、摂政大公の地位を兼任した例は、過去にもある

「ああ、知っています。

戦傷王コムメット一世陛下の御世ですね。

戦で負われた傷のせいで、後半生を寝たきりです」とされたという

「コムメット一世陛下と摂政大公を務められた王弟殿下の関係は、うるわしの兄弟愛として有名だがな」

「ローレリアンとヴィクトリオ王太子の場合は……」

「まあ、ヴィクトリオさまが大きな問題でも起こされない限りは、兄弟仲が今以上に険悪になることは、ないと思つが」

「問題、ねえ……」

アレンがそうつぶやいたところで、新たな人間がローレリアン王子へ話しかけてきた。

「殿下」

おやと、アレンは思つ。

話しかけてきたのは、役人やローレリアン王子にしたがう若手の

貴族ではない。

富廷の式部富だ。

式部富は、何事かを、ローレリアン王子へ耳打ちした。

たちまち王子の顔色が変わる。

「アレンー！」

呼ばれたアレンは驚いた。

俺つてば、今日は見学でいいんだよな？  
仕事のことは、まだなんにも、わかんないぞ。

血相を変えた王子は、さらに大声で言つ。

「モナは王都へ帰つてきてるのか！」

なんだ、そのことか。

話があもしろい方向へ進みそつだから、アレンは笑う。

「ああ、帰つてくるよ。

俺が御前試合に出る」とになつたつて手紙に書いたら、じゃあ応援したいから、建国節が終わる前に王都へもどるわつて、返事がきたもんな。

モナ様も、けつきよく三年、アミテージでかんばつてたからなあ。  
試合、見てくれたのかなあ？  
お田にかかるのが、楽しみ 、つて、うげつー！」

油断していたアレンは、怒ったローレリアンから、鳩尾に一発食らひ。

なんて乱暴な神官だ！ 自分で一方的に片思いだと決めこんでいるお姫さまと、俺が仲良しだからって、やつあたりかよ！

げほげほ咳きこむアレンのとなりで、アストウールが大声をあげる。

「殿下、おまちをー」

怒ったローレリアンは、足早に大広間を横切っていく。

アストウールが焦つて追いかける。

優雅に踊っている人々の間を縫つて大広間を横切るなど、普段のローレリアン王子には見られない態度だ。

驚いた何組かの男女が、ダンスのステップを踏むのをやめて、王子を見ている。王子がどこへ行くのかと。

その行く先を見て、彼らは息をのんだ。

王太子だ。

ヴィクトリオ王太子が、若くて美しい令嬢を口説こうとしている。

人々は、歯噛みした。

兄王子は、何と馬鹿なのだろうかと。

賢い弟王子が慎み深く兄へ恭順の態度を示してくれているのは、あくまでも兄が害のない人間でいることが条件だというのに。

この人つてば、なに？

気持ち悪い！

なんなの、この手ぇ！

ヴィクトリオ王太子に迫られている最中のモナは、背中にだらだらとたれる汗を感じていた。

王太子はいきなり、モナの手を握ったのだ。名乗りもせずに。

もちろん、名乗られなくても彼が誰なのかは知っていた。王太子殿下は、この国の玉座に、いざれ座る人なのだから。

ヴィクトリオは、やわやわと、ドレスにおおわれていないモナの素肌の部分に触れてくる。

首筋や、二の腕だ。

そのさわり方には、性的ないやらしさがある。

あせったモナは、心中で絶叫だ。

こんなさわり方で女性に触れてもいいのは、寝室でだけでしょう。寝室でだって、同意がなかつたら、犯罪だわよっ！

モナは深窓の姫君ではない。男女の尊みにつけいても、遊学先のアミテージで貪しい人々とともに働いているあいだに、実学として学んでしまった。

娼婦と密の喧嘩の仲裁をさせられたり、出産の手伝いをしたり。

庶民といつしょに、たくましく生きていたら、いへりでもうこう場面にぶつかつたのだ。

モナの前では、兄のロワールが、こまわりはてている。可愛い妹のためなら決闘だつて辞さない彼だが、相手が王太子ではどうにもならない。下手に問題を大きくすれば、父や他の兄弟たちにも迷惑をかけるだろうと。

「おはなししください、王太子殿下」

いつも下町で男どもをあしらつているのと同じ調子で怒るわけにもいかず、モナは弱々しく、言つてみた。

しかし、かよわい姫君ぶつた演技は、ヴィクトリオを喜ばせるだけだった。

「あなたは、南三国の王家につながる高貴な血筋の姫と聞く。どうだ、わたしの愛人にならぬか」

「おたわむれを。王太子殿下には、すでに妃殿下も、お子様もおいでになるではあつませんか」

「最近、妃は病弱を理由に同衾を拒むのでな。わたしは、男子の子供が欲しい。」

将来の王子がな。

そなた、わたしに息子を授けてくれぬか?  
そなれば、そなたは未来の国母だぞ」

「ちよつ……、やめ……。」

酒臭い息が、首筋にかかる。

再度、心の叫びをあげるモナである。

だから、あんたは奥さんに嫌がられてるんじゃないの、このトコ  
ヘンボク!

血膿の腕つぶしで、ぐこつと王太子の顔を自分の首から遠ざかる。

しかし、止まつた。

まさか、この場で王太子殿下を突き飛ばすわけにはいかないだろ  
う。

やつうと想えど、どうもナビ。

いや、でもある。こんな筋肉がない、ぶよぶよ男なら。

体術を使えば、投げ飛ばすのもできやう。

やつないにゃ。

だつて、こいつは王太子殿下なのよー、わたしこそ、ビリシミツ  
このー!

モナは必死である。

「殿下、わたくし、約束が

「ローザニアの王太子を袖にして、守らなければならぬ約束とはなんだ」

ねちつじく、王太子はモナの鎖骨のあたりをなでた。そのときだ。「遊学先からおもどりになられたら、わたしと一緒に踊つてください」という約束です」

凛と通る男性の声が、突然、一人の会話のあいだに割りこんできだ。

声の主は、モナの空いているまゝの手を取つた。

王太子の耳元へ唇をよせ、静かに彼は言つ。

「兄上にも、約束を思い出していたかなればなりませんね。臣下の未婚の令嬢には、けして手を出さないといつ、わたしとの約束を

その声は、王太子とモナにだけ聞こえる、小さな声だった。

「ローレン、……！」

王太子のほほは、緊張のために、ぴくぴくと痙攣している。

小声のローレリアンは、むづ一皿。

「酔いに免じて、一度だけは田口ほしにいたしましょ。ですが、肝に銘じてください。今宵、一度限りです、」

モナをとらえていた王太子の腕から、力が抜けていく。

つぎの瞬間、モナの体はローレリアンに引きよせられ、気がついた時には、しっかりと抱きとめられていた。

モナは激しく動搖していた。

どうしよう。胸が、ローレリアンの体にあたつて。ドレスつて、ズボンつてもつとちやんと、体を包んでくれないのかしい。

やつぱり、わたしはまだ、ローレリアンのことが好きなんだ。ちよつと体が触れたくらいで、こんなにドキドキしたりして。

やう思つたといひで、体が離れた。

体が離れたら、ローレリアンの顔が見えるようになる。

心配そうな顔で、彼は言ひ。

「大丈夫だった？ 兄が失礼をした。おわびする」

「ええ、だいじょづぶ。この程度、どうつてことないわ」

明るく笑つて返事をしたけれど、やつぱりまだ気持ちが悪い。

モナは手袋を外して、汚ことばかりに指先でつまんだ。つこせつまで、この手袋にして、モナの手は王太子に握られていたのだ。

苦笑したローレリアンが、その手袋を受け取り、そばに控えていた式部官に渡す。

そのままモナの手を取り、ローレリアンは大広間を歩きはじめた。わなわなと震えている王太子の前から、モナをつれだしてくれるつもりなのだろう。

ああ、幸せ。いつもして、もう一度、ローレリアンの手を握れるなんて。

その感動を感じた瞬間、モナは、しまつたと思つた。

なんで、手袋を取つてしまつたんだろう。

モナの手は、かなり荒れていた。田焼けやそばかすは化粧で、まかせるけれど、荒れた手だけは、どうにもならない。

ローレリアンと再会するまでの3年間、モナはアミテージで悪戦苦闘していたのだ。

下町の子供たちの家を、なんとかまともな孤児院にまで変え、貧しい人でも通える学校の経営を軌道に乗せ、その合間にアレオニシユ医師の手伝いもしていた。

この仕事をやつとげなくやら、アミテージから離れられない。

その一心で、懸命に頑張つたのだ。

結果が、この手。

これは、貴婦人の手ではない。

ふと、ローレリアンが立ち止まった。

モナが氣にしている荒れた手が、もちあざられる。

「きみは、ちつとも変っていないね。  
その素敵なドレスのせいで、最初はどこの御令嬢かと、思つたけれど」

「じめじめしながら、モナは答えた。

「あの、手を離して」

「じりじり？」

「だつて、荒れてるから」

「この手が、きみは変わっていないのだと、わたしに教えてくれた。この手は、世界で一番、美しい手だよ」

やつと手の甲に、口づけられた。

「じりひやー、じりじりー！」

そのモナの心の悲鳴とともに、舞踏会の会場からも歓声があがつた。

いつのまにか、音楽もダンスも止まつてしまつており、会場にいた人々はみな、ローレリアン王子とモナ・ショイラ姫に注目していたのである。

それはどうだう。

今まで女性には見向きもしなかつたローレリアン王子が、特定の女性のために怒つて舞踏会の会場を突つ切つて歩くなんて真似をしたうえ、王太子から女性を奪い取り、「彼女とは、遊学から帰つてから、いつしょに踊ると約束していた」などと宣言し、そのあげくに、手の甲へ口づけを贈つたのである。

しかも、その女性は、18歳の妙齡の美女。

ほつそりとした優美な肢体に、個性的な美しいドレスをまとい、黒髪に薔薇をかざつて、名門侯爵家のお姫さまだ。

その血筋は南三国の王家に連なり、王妃にだつて立てる身分の女性。

ちよつとばかり変わり者だという噂もあるが、ローレリアン王子殿下も普通の育ちとは言い難い方なのだから、ちよつとつりあいがとれて、よろしいのではないか。

舞踏会の客は、全員が、そう思つたのである。

王子とモナのつじつじ、そろそろとついて歩いていた側近たちは、内緒話に余念がない。

「馬鹿だなあ、リアンのやつ。踊る神官なんて滑稽だとかいって、踊るの嫌がつてたくせに」「元気だよ！」

「あの場を丸く收めるためにモナ様の言葉を取けて、約束がどうのと答えしてしまったようだがな。いつこう経緯をして、みずから墓穴を掘るというのだ」

アレンとアストウールの会話を聞いて、モナの兄、ロワールが苦笑する。

「殿下がモナと一緒に踊らない限りは、この騒ぎに、收拾はつかないでしような」

「勝手なことをいいやがつてと、王子がこちらをにらんでいるが、側近たちは面白がるばかりである。アレンやアストウール以外の者達も、言いたい放題だ。」

「忍ぶれど色に出にけつとは、おぞにこのことですね。切れ者で名高い王子殿下も、色恋沙汰には、うとかつたか」

「いやいや、ほほえましいではないか。殿下にも若者らしこじいろがおありになるとわかつて、わたしは、ほつとしましたがね」

「まつたくです。このままでは、神々にお祈りするだけで枯れ切つた若年寄りになってしまわれるのではないかと、心配しております」

側近たちには、苦境にある王子を救おうといつ氣持ちは一切ない様子。

令嬢を助けるために、なりふりかまわず吹っ飛んで行ったのだし、あなたの手は世界一美しいなどと気障な台詞を吐くくらいだから、まちがいなく王子の側にも好意があるのだろう。がんばれ若者よ、といった態度である。

しかも、ローレリアンの日に前にいるモナは、男心をくすぐる可愛らしい田で、彼を見あげて言つのだ。

「あの……、あのね、ローレリアン」

「うん」

「その、迷惑でなければでいいのだけれど、一曲だけ、わたしと踊つてもうえない？」

王子の整つた顔が、苦慮にゆがむ。

愛しくてならない、すみれ色の瞳をもつ姫君の希望はかなえてやりたいが。

しかし、その望みが、ダンスとは。

人々の興味本位の視線を浴びながらダンスを踊つたりしては、神聖なる神官位をつっしんでいただき、朝と夕べに静かに祈ることを田課としている王子の自尊心は、著しく傷つくるのである。

モナは自分のドレスを、優雅につまんで見せた。

「いのドレス、とても素敵でしょ?」

「そうだね」

「一番上にかぶせた布が、砂漠渡りの東国の薄綿なの。その薄綿に、いちめんの刺繡を施したのよ。

この布を、アミテージの新しい特產品にしたいの。草原の中の街に、今までにない仕事を生むのは、とても難しいわ。

この薄綿が国中で流行れば、国境の街の人たちへ、刺繡の仕事をあげられる」

「なるほど」

「わたし、べつにダンスをしたくて、ここへ来たわけじゃないの。ただね、建国節の王宮の舞踏会で注目を浴びた女性が着ていたドレスは、その年のローザニアの流行になるのよ。すこしでもたくさん的人に、このドレスを見てもういたいの」

「うーん……」

「それに、じつちのレースは、ローザニアの名産品にならないからと思つていてるのだけれど」

「我が国の?」

「そうよ。ローザニアには、優れた織物技術を持つ工場が、いっぱいあるのは」「存じでしょ」

「まあね。国の産業の発展については、政府にも重大な責任がある」

「ヴィダリア侯爵領にある織機を作る会社が、レースを編む機械を

開発したのよ。

「今までレースだけは人の手で編むものだと思われていたけれど、機械で早くたくさん編めるとなつたら、お金持ちだけじゃなくて普通の市民もレースを買えるようになるわ。

そうなれば、市場規模つて、ものすげいものになるんじゃないかしら？」

きみはいつたい、何を考えているんだと、ローレリアンはあつけにとられる。

「市場規模、だつて？」

「そうね、『相手は世界!』みたいな？」

「こんなことを考えているお姫さまなんて、この世には一人しかいない。

「モナ！」

「ねえ、ローレリアン。あなたには、どこの役所から、産業奨励金みたいなお金を融通できる力はある？ それとも、どなたか投資家を紹介してもらえないかしら？」

「は？」

「レースを編む機械は高価なのよ。実験的な工場をつくるためには、すこしきな初期投資が必要かなー、なんて。

父には、こんなこと、おねだりできないの。女が男の仕事に手を出すなんて、とんでもないと、叱られてしまつわ」

「…………」

「ここに王子殿下は黙つてこんでしまつた。

モナは、普通の貴族の令嬢ではない。それは、よくわかつていつもりなのだが……。

ふたりの会話に聞き耳をたてていた側近たちも、あきれ顔だつた。

「なんだよ、あの色氣のない会話は」

「いや、あれも立派なおねだりだ。その証拠に、愛らしき令嬢に、ねえと迫られて、王子殿下はおこまりだ」

「せひ、しまつて、しまつて」

モナは、とじめとばかりに微笑んで、ローレリアンを見つめた。もちろん、両手は可愛らしく、お祈りの形にあわせられている。

「お願い。わたしど踊つてください。ローレリアン王子殿下」

王子を見あげてくる瞳は、美しいすみれ色だ。いつもローレリンが切なさに胸を痛めながら、懐かしく思つていた瞳である。

盛大なため息をつきながら、王子はモナにエスコートの腕をさしだした。

「お手をどうぞ、モナショイラ殿」

ぱあっと、モナの顔が輝き、王子は苦笑する。嬉しそうな彼女を

見ると、ローレコマンも幸せなのだ。

舞踏会の会場は、割れんばかりの拍手で満たせれてくる。

その中にむかって、見事麗しい王女と令嬢のカップルが、楽しそうにしゃべりながら歩いていく。

「ねえ、ローレコマン。あなた、神官さまなのに、ダンスも踊れるの？」

「あたりまえだわ。王女と呼ばれるよくなつてから、わたしの苦労を察してほしいね。王族に必要とされる教養は、ひとつおり身に着けさせられたよ」

「あら、じつせ涼しい顔で、なんでもすげえよくなつたんでしょ、つ？」

「いや、ダメだね。国王陛下に面会せると、わたしは芸術音痴であるらしい。

美しい絵画や彫刻で国民の腹は満たされないと申し上げたり、お叱りを受けたよ」

「あらあ、それって真理なのに。

綺麗なものを綺麗だと思える心つて、戦争がない平和な時代に、おなががいっぱいの状態でいて、はじめてもてるものだと思つた

「さみ、アミテージで、やつとつ苦労したんだね」

「やつやあもつ、ヨコツツモビー。」

「では、アミテージの貧しい人々のために、せいぜい華麗なダンスを踊るとしよう」

ふたりが大広間の中央にたどり着くやいなや、華やかな音楽が鳴り響く。

そつとモナの耳元に、ローレリアンは囁かやいた。

「左手で、ドレスの裾をつまんで」

言われたとおりにモナがドレスをつまむと、ローレリアンは大胆に足を踏み出した。

モナは「ひやあー」と小さな悲鳴をあげる。

こんなに広い歩幅でステップをリードされたのは初めてだつた。

まるで宙を飛んでいくみたいだ。

腰を支えられながらターンを切ると、モナの左手でもたげられたドレスの裾が、風をはらんで大輪の花のように開く。

その効果を見たローレリアンは、「ふむ。これはいい」とうなずいた。そして、モナに「ついてこられるね?」と笑いかけると、くねり、くるりと回転するステップをくりかえして、大広間をなめに横切つていく。

観衆から、どよめきと拍手が湧きあがる。

またに、軽やかなドレスを見せびらかすためのダンスだった。

しかも、見ている者も、踊っている者も、最高に楽しい。

ローレリアンは、モナが俊敏な名剣士だと知つていて、こんなに大胆にふるまうのだ。普通の貴族の令嬢では、こんなリードには、とてもついていけない。

舞踏会に集まっていた貴族たちは大騒ぎだった。

とくに女性たちは、興奮しすぎて卒倒寸前の者まで出る始末である。

堅物だと思われていたローレリアン王子は、もとが美形なのでたいした貴公子ぶりだし、お相手の令嬢も、とても魅力的。

とにかく、老いも若きも流行に敏感な女性たちはみな、明日になつたらただちに、あの薄綿のドレスを注文しようと思つた。

その後、薄くて軽いドレスの裾をつまんでくるくる回るダンスは、貴族たちのあいだだけでなく、ローザニア王国の国中で大流行となつたのである。

ローザニアの王都プレブナンの王宮は、街の中心部を大きく蛇行して流れるレヴァ川のほとりの丘の上にある。

王宮の川側は建築物を建てるには傾斜が強すぎる斜面となつており、古い時代にはその斜面が城を守る天然の防御帯として利用されていた。この斜面を駆け登ろうとした敵は、上から石や煮えたぎった湯などをあびせかけられ、ことごとく撃退されたというわけである。

もつとも、一二〇〇年のあいだ、ローザニアは首都へ他国の侵入を許していない。小競り合いの戦争は数限りなくあつたが、国を疲弊させるほど大きな戦がなかつたおかげで、いまのローザニア王国は豊かな繁栄の中にあるのだ。

王宮がある丘を取り囲む城壁の内側には、壯麗な宮殿のほかに、さまざまな公官庁の建物と、いくつかの神殿、それに貴族の屋敷が建ちならんでいる。

古い時代の都市城壁の内部の広さは、中央集権化が進んだ今の時代の国家の首都としては、とうに手狭になつてゐるのだ。なにしろ大国ローザニアの公官庁で働く人の数は、王都プレブナンだけでも、5000人を超えている。

結果として、古い城壁の内側は国の政治中枢機能を維持するための街となり、城壁の外側には、商業地区や庶民の街が広がるようになつたわけである。

現在の王都の人口は公称30万人だが、働き口を求めて下町へ流れ込んでくる貧しい人々の数は増加の一途をたどっている。城壁外の街は外へ外へと日ごとに成長しつづけており、街の外縁はこれらも、無限にふくらむのではないかとさえ言っていた。

＊＊＊＊＊

6月の早朝、王宮の奥深くに位置する王族の居住区で小姓として働くラツティ少年は、夜明けの光に輝く窓からのながめを見て、感嘆のため息をついていた。

彼がこの王宮で、プレブナンが最も美しい季節とされる6月をむかえるのは、これで3度目となる。

何度見ても王都の6月はすばらしかった。

街のそこかしこに植えられたマイカの木の枝には白い花がびっしりとついており、その光景を高い位置にある王宮の窓からながめおろすと、まるで街全体が白い雲でおおわれたよつて見えるのだ。

「さて、急がなくちゃ」

深呼吸で感動を胸におさめ、ラッティは先を急ぐ。

奥の廊下に人影はない。

やたらと高い天井からは、ラッティの足音だけがこだまとして返ってくる。

夜明けの直後なんて時間は、貴族たちにとつては、真夜中も同然なのだ。

王都が大きな街になつたせいで、旧市街を守る城壁の門は、昔のように日暮れとともに閉じられることがなくなつた。そんなことをしていたら官庁街と商業地区が分断され、街全体の経済活動に支障をきたすからである。

城門が夜も開かれるようになると、帰宅の心配をしなくてもよくなつた人々は、夜の街へくりだして長い一日を楽しむようになった。太陽の動きとともに日覚めたり眠つたりしていた原始的な生活の時代は、都市の発展とともに終わつたのだ。

夜の楽しみを覚えた人々は、昼間の仕事がすんでから、観劇や音楽会、居酒屋での会合などにでかけ、夜中まで忙しくすゞす。

とくに社交が生活の大切な部分をしめている貴族は、夜が遅くなりがちだ。いまでは貴族の昼食会は、午後4時ごろに開かれるのが常識。だから、早朝の王宮も、いまだ寝静まつたままなのである。

静かな廊下を歩くラッティの手には、銀の盆がある。

盆の上ののつているのは、パンと、ゆで卵と、新鮮な野菜で作った料理がひとつ。それに、熱いお茶と、バターが少々。

これはラッティがお仕えするローラーの第一王子ローランの朝食だ。

ラッティは王宮の使用人として召し抱えられてから、しばらくなあいだは国王陛下の寵妃エレーナ姫にお仕えしていた。エレーナさまはとてもお優しい方で、宫廷作法の何たるかは、すべてこの方に教えていただいた。

ラッティがやつと、だいたいの仕事や作法を覚えたころだったと思つ。エレーナ姫のところへ、宫廷の奥向きを取り仕切る侍従長がやってきた。

彼は来るなり、エレーナ姫に訴えた。

「ローラン王子殿下は、侍従たちが懸命にお仕えするのに、すべてがお気に召さない様子です。最近では怒りっぽくなられて、口をきいて下せらなこともあります」

侍従長の訴えを聞いたエレーナ姫は、笑つて答えた。

「さつとやうなると、思つておりましたわ。

侍従長、試しこの子をつれていつて、王子の身の回りの世話を任せていりとなさい。

他の者は、この子がすることの邪魔をしてほこませんよ

かくしてラッティは、ローレリアン王子殿下のお気に入りの小姓として、お側へ仕えたことになったのである。

真相は、なんといふこともなかつた。

王子はただ、侍従たちの過剰な仕事ぶりに、「ござつしていただけなのだ。

彼らは宫廷の慣例にしたがつて、一生懸命王子殿下のお世話をしようとしたのである。

たとえば朝の御仕度などは、王子殿下が用を覚まされると、夜どうし部屋のすみに控えていた宿直の侍従が「殿下がお用覚めでござります」と触れてまわるところからはじまる。

すると、別室に控えていた御仕度係がそろそろと寝室へ入場してきて、まずは靴係の侍従がベッドの足元へ室内履きをそろえて置き、つぎに寝間着をお脱がせる係が前に進み出る。その次は、下着を着せかける係が、ガウンを着せかける係が、洗面道具をさしだす係が、おひげをあたる係が、髪を整えさせていただく係が……。

かなりの時間が経過したあと、上着を着せかけてもって、時計係からネジを巻きおえた懐中時計を受け取るころには、王子殿下はすっかり不機嫌というわけである。

ローレリアン王子自身も、これでは居心地が悪すぎるのと、何度も侍従長を呼びつけでは改善を要求した。すべてにおいて、無駄が多すぎると。

しかし、あわれなお育ちの王子殿下に誇りをとりもどしていただけ、宮廷で快適にすごす方法を御伝授申し上げるのも自分の役目と真剣に思い込んでいた侍従長は、ただひたすら「すべて宮廷の習慣でござります。殿下には、慣れていただくしかござりこません」と答えたのだった。

賢いラッティは王子殿下にお仕えするようになると、殿下と侍従たちの間に横たわる、あつとあらゆる物事に対する認識の食い違いに驚くはめになつた。

とにかく、毎日が苦難の連續だつたのだ。「王子をよろしくたのみますね」とおっしゃるトレーナさまは、「どうぞお任せください」と約束してしまつたことですが、後悔してしまつたほどである。

王子殿下に毎朝一個の卵と少々の野菜を召し上がっていただくなめにだつて、ラッティは大粒の涙を、これでもかといつまど流さなければならなかつた。

ラッティがお側に仕えるようになつたばかりのころ、毎食10人分の食事を目の前に出されて、王子殿下はたいそうお怒りだつたのだ。

今日の食べ物にすら、こまつて居る民が我が国には大勢いるというのに、この無駄と贅沢にまみれた食事の支度について、侍従たちはどう考へてゐるのかと。

侍従たちには、侍従たちの言い分があつた。

王子殿下に、お好みのものを御不自由なく召しあがつていただけるよつて、どうぞおりなく仕度を整えるのが、我らの役目でござります。

ます。その時、なにを召しあがりたいかは、体調や御気分にもよりましよう。それに、殿下がお召しあがりにならなかつた料理は、貧民を救う慈善事業の一環として街角でふるまわされております、粥の中へ入れられますので。けして無駄になど、しておりませんと。

しかし、庶民の暮らしをよく知るローレリアン王子は、それを聞いて、なお怒つてしまわれた。

救貧院で配る粥とは、ひどい代物なのだ。あちこちで回収された残飯を、元が何の食べ物だったのかわからないほどドロドロに煮込んで作る粥は、薄くて、臭くて、味もおかしい。

ところが、そんな粥でも命をつなぐ糧にはなるので、粥がふるまわれる時間帯の救貧院の周囲には、飢えた人々が群れ集うのだ。

あんなものを食べていって、明日のために働くことの意欲など起ころばずもない。

宫廷でまかなわれる、この豪華な食事をわざわざ無価値な粥に替えて、多額の金を空中にただよつ泡の「」とく消し去つてしまつくらいなら、最初から、その金で貧しい人々に仕事を与えればよいではないか。

無駄に大きくなつた王都には、道端につむる馬糞をかたづけたり、下水道にたまる汚泥を掃除したりするような、行政主導でなすべき仕事がいくらでもあるだろ？。

たとえ汚れる大変な仕事であろうとも、その仕事は人の尊厳を守る、大切な仕事なのだ。仕事で得た小銭で買つパンを食べるほうが、ただで配られる粥を食べるより、生きる意味を実感させてくれる。

動物の餌と大差ない粥を道端で配り、自分はこんなものを食べてしか生きられないのかと貧しい人々を絶望させることは、慈善でもなんでもないのだ！

そのように叱られた侍従たちは、戸惑うだけだった。

毎日つつがなく、高貴なお世話ををする。

それが侍従の仕事であり、変わらない」とこそが、彼らの誇りだつたのだ。

その後、びくびくしながらも古くからのしきたりを変えようとして侍従たちに怒った王子殿下は、とうとうお食事をなさらなくなつてしまわれた。

パンと水だけでも人は生きていけることを、立派な教育を受けた馬鹿どもに、教えてやうといつのである。

しかし、ラッティには、精力的に働く大人の男の体が、パンと水だけの食事に長く耐えられるとは思えなかつた。

そばで見ているとローレリアン王子は、朝から晩まで休むことなく、大変な集中力を持つて仕事をつづけている。

休むべき時には休み、疲れを癒すために滋養のある食べ物を召しあがつていただかなければ、いつかは倒れてしまわれるのではないかと、ラッティは本気で心配しつづけた。

殿下と呼ばれる身分になつても、ローレリアンはラッティにとつ

て、「大好きなリアン兄ちゃん」なのだ。辺境都市の下町で犯罪に手を染め、転落人生に陥る寸前だった自分に、新しい未来をくれた人である。

王子殿下と侍従たちの無言の戦いが3週間目に突入すると、ついに耐えきれなくなつたラッティは、泣きながら王子に懇願した。

「お願いです、殿下。

ぼくが責任をもつて、殿下のお食事の手配をさせていただきます。普段のお食事はなるべく質素にいたしますし、量にも気をつけます。ですから、どうか、もう少しだけ、ほんのちょっとでいいですから、まともなお食事をなさつてください。

侍従の方々も、お願いです。

貧しい人々の暮らしづくりを憂える王子殿下の優しいお気持ちに、どうか、よろそつてさしあげてください」

心から王子の健康を気遣う少年の涙は、かたくなな大人たちの心を動かした。

その日から、ローレリアン王子のお食事に関するすべての決定権は、お小姓のラッティが握ることになつた。

もつとも、後日、泣かせてしまつて悪かつたと謝つてきた王子殿下にむかつて、ラッティはけろりと、言い放つたのだが。

「ほんと、大人のプライドつて、めんどくさいですよねー！  
まつ、いいじゃないですか。

これでまた一つ、リアンさまの身の回りの問題がかたづきましたから。

ぼくは、自分の仕事が《涙ぼろり》でやりやすくなるなら、いく

らでも泣いて見せますよ。

涙なんて、タダです。お安いもんじゃありませんか」

したたかな詐欺師ラッティ少年の本質は、王宮に仕える優雅な小姓になつても変わつていなかつたのである。舌先三寸で大人を手玉に取る彼の才覚は、その後もおおいに王子殿下の助けとなつたのは言つまでもない。

「おはよう」「おはよう」

「おはよう」

銀の盆を手にもつて王子殿下の居室へ通じる廊下へ入るとき、ラッティはいつもその場で、殿下をお守りする近衛隊士に挨拶をする。廊下で宵晚に立つ隊士はかなりの下っ端だが、おのれの分をわきまえているラッティは、丁寧な態度を崩さない。

ローレリアン王子の居室は、王族が住まわれる区画の端のほうにある。

奥の宮の東翼と呼ばれるその一角は、本来ならば前々国王の嫁に行きそこねた娘という肩書きをもつ老婆とか、病氣がちで頭の弱い甥といったような、王宮外に宮をもてない王族が、ひつそりと暮らす場所である。

ローレリアン王子が王都へもどった当初、宮廷の官吏たちは王子のことを、宮廷外で育つた庶出子とてあなどっていた。まさか、わずか3年で父国王から輔弼の王子として頼りにされ、兄王太子よりも玉座に近い男として國中から畏怖のこもつたまなざしで仰ぎ見られる人になると、夢にも思つていなかつたのである。

人々の王子を見る目が変わると、あわてたのは王子に東翼の部屋をあてがつた侍従たちだった。

しかし、侍従長から何度も、もつと中央に近い便利で格式の

ある部屋へ移るよつにと勧められたにもかかわらず、ローレリアン王子は「奥まつていて静かな今の部屋が好きだ」といつて、まつたく取りあおつともしなかつた。

現在、宫廷の奥向きを預かる人々は、さまざまな意味で怯えている。

原因は、王子殿下だけではない。

王妃に先立たれてから20年ものあいだ独身をつらぬいてきた国王は、ローレリアン王子の母親である寵妃のエレーナ姫が手元にもどるとい、まるで長年連れそつた夫婦のよつた態度で彼女を迎え入れた。もちろん、閨房の営みもあるといつ。

王子殿下と母君の御寵妃を軽くあつかったむくいが、いつか我が身にかえつてくるのではないかと、怯える官吏の数は年々増える一方なのである。

廊下の入り口で近衛隊士に挨拶をすませたラッティは、どんどん奥へと進んでいく。

さきほどとは打つて変わつて、この一帯には、すでに活動をはじめた人の気配が満ちていた。

執務室や接見室の窓は、王子の秘書官によつて、すでにあけられている。あたりには六月のさわやかな風が、そよそよと吹いていた。

王子殿下の秘書官には、順番でまわつてくる当直当番をこなす義務がある。王子殿下が夜遅くにされたお仕事の結果として、朝一番で各所へ配られる文書などは、夜の間に整えられるのだ。そのほか

にも、夜間の急使に備える意味もある。

昔は、よほどのことがない限り、王宮への夜の使者は国王や大臣が目覚める時間まで待たされるのが慣例だった。

その慣例がまた、王子殿下のお気に召さなかつたのだ。

時代は変わり、人々は夜も起きて活動している。そういう時代の夜の急使には、夜を徹して走つただけの、重大な意味があるのだと。

先を急ぐラッティは、その夜の仕事を任せている秘書官とも廊下ですれちがつた。

「おはよー、ラッティ

「おはよー、ラッティ

相手は眠そうだった。きっと、夜通し、書類づくりにいそしんでいたのだろう。

奥の宮の東翼は、窓の下がレヴァ川をながめおろす急斜面という、正真正銘の奥まった一角である。そのため、このあたりのお部屋に住まわれている王族は、庭園の散歩を楽しもうと思うと、広大な王宮の建物の中を、かなり歩いて移動しなければならなかつた。

奥の宮で、ひつそりと暮らす王族には、老人や体が不自由な方も多い。そつした方々の無聊をお慰めするために、奥の宮の廊下の内側には小さな中庭がしつらえてあつた。

もともとその中庭には花壇やささやかな噴水などがあつたのだが、ローレリアン王子が東翼の主となつてから、それらはすべて撤去され、地面はプレブナンの街の一般的な石畳と同じ素材の敷石で舗装されてしまった。

いま、その中庭では、王子殿下の護衛任務につく近衛連隊に所属する小隊の早朝訓練が行われている。

一定の距離をとつて並んだ近衛隊士が、士官の命令に合させて剣術の型の練習をしている姿は、じつに見事だ。

突きや払いなどの決め技がくりだされるたびに、「えいー」「やあー」といった気合いの声が聞こえてくるのも勇ましい。

ラツティは、その光景を横目でながめながら、さらに先を急いだ。

夜明けとともに、ローレリアン王子の住まわれる東翼は、活動を開始する。あと少ししたら大勢の事務官が出勤してきて、この廊下には忙しそうな人が、とぎれることなく行き交うようになるのだ。

この活気に満ちあふれた職場が、ラツティは大好きだった。

貴族の生活につきものの、頹廃しきつた怠惰な雰囲気など、ここには微塵もない。

あるのはただ、国家のために働くこと決意した男たちの気概が醸す、厳しい空気だけである。

東翼の主、ローレリアン王子の口癖は『王族は、国家の僕として国のために働くべく、運命づけられた人間であるにすぎない』だつ

た。

「の言葉のせいで、王子のまわりには、王子を慕う人が集まる。

聖王と呼ばれた初代ローザニア国王パルシバルは、みずからを『神々の御意志により選ばれし神聖なる統治者』と称した。国の頂点に立つ王を神格化し、人々の神々に対する恐れの気持ちまでも、国を支配するための力のひとつとして利用したのだ。

ある意味、ローレリアン王子の考え方は、初代聖王の宣言を全否定している。

自分は選ばれたわけではなく、たまたま王族に生まれただけの、ただの人間だと宣言しているのだから。

王子に言わせると、『わたしが神官の法衣を脱がないのは、王族の一員として大きな力を手にしても、この身は万物の命をつかさどる大いなる神々の意志のもとに生かされている、一個人間にすぎなことを忘れないため』なのだ。

それらの言葉のすべては、王子の行動によって、誠の心であると証明される。

勤勉な王子は夜明けとともに起きだして、一日の活動の前に静かに祈つてすこす時をもつ。その祈りには、ローザニア王国の民の末永い幸福への願いがこめられている。

今も昔も、王族の暮らしぶりに対する庶民の関心は高い。

噂は噂を呼び、近頃街の人々は、ローレリアン王子を、こうあだ

## 『ローザニアの聖王子』

「のあだ名には、敬意と揶揄が入り混じっている。

王子殿下のお考えは立派だが、そこに若者特有の理想に溺れた甘さがあるのも事実だ。

国といつよりは巨大な経済活動圏と化したローザニアは、まるで勝手に動きまわる怪物。富める者と貧しい者の格差は、もはや崩せない断崖絶壁そのものだ。虐げられた者達のなかには、暴力をもつてこの断崖絶壁を突き崩そうともくろむ、過激な行動に走る一派まで出てきている。

人間の欲望といつ名の混沌のなかで混乱しきっている現在の王国を、はたしてこの王子は、どのように導くのか。

口先だけではなく、本当に彼は、この国を変えられるのか。

聖王子といつ名には、そんな国民の期待と不安が、こめられているのだ。

「おまよヘリヤリコモー。」

やつと王子殿下の私室にたどり着いたラッシュは、背筋をぴんと

のばして、ドアをたたいた。

「入りなさい」

ドアのむこうから、王子の声。

許可を得てドアを開けたラッティは、部屋の中に入る。

そこにおいてになるのは、王子殿下お一人である。

王子と侍従たちの3年にわたる長い戦いは、ほぼ王子側の勝利で決着していた。いまでは「睡眠をとるという、もつとも人として無防備な行為の最中である王子殿下を、お一人にすることだけはできません」という侍従の主張のみが、生き残った過去の習慣だ。

夜通し寝室で王子殿下を見守る宿直役は、その場に刺客が入りこんだとき、自分の命を盾にしてでも眠る殿下に警告を発する役目を帯びている。

しかし、王子殿下の目が覚めれば、そのような役目の人間も必要なくなる。今現在、宿直の侍従は、王子殿下がお目覚めになれば、うやうやしい一礼とともに寝室から退出することになっている。

ラッティは部屋の奥にすすみ、王子殿下がいつも簡単な朝食をめしあがるために使っているテーブルに、銀の盆を置いた。

すでにローレリアン王子は室内着へのお召し替えをすませられ、窓辺の椅子でくつろいでおいでだった。朝のお祈りもすんだ様子で、寝室の隅に置かれた小さな祭壇の扉は閉じられている。

ベッドの寝具は見苦しくない程度にかたづけられ、その上には軽くたたんだ夜着が置かれていた。

お田覚めになられた王子殿下は、そこまでの身支度を、お一人で済ませられるのだ。

どれもこれも、いつもと同じ光景だ。

それを見て、ラッティはほほえとする。

昨夜はベッドで寝てくださったのだなと。

時々王子殿下は、徹夜仕事をなさるのであるのだ。

お休みになつた形跡のないベッドを見ると、ラッティは心配のまつー日を憂鬱な気分です。すはめになる。

とりあえず安堵したので、起きぱきと元気よべ、ラッティは動きまわる。

まずは、鏡台に置かれた洗面道具を、寝室の奥にある衣装室へ運び込む。

ここには殿下の身支度のお手伝いをする侍従がつねに控えていて、王子が使つた道具を洗つたり、剃刀の手入れをしたりといった、裏方の用をはたしてくれる。

道具の受け渡しをしながら、ラッティは侍従と田で会話をする。

今日の御召し物は？

ちゅうと、まつしていくだせー。

王子の寝室へもどったラッティは、熱いお茶をカップに注ぎながら、なにくわぬ顔でたずねた。

「コアンセモ、本日の「」日程は?」

もちろん、王子の日程は、ほとんどの場合事前に決まつてこる。

けれども、この王子は、普通の王子ではないのだ。日程はしばしば、王子の気まぐれで変更になつた。

読んでいた小冊子から顔をあげたローレリアン王子は、ふふっと笑つた。

「ちうだな。毎日、ちゅうと街へでかけよつかと思つんだが

「では、法衣ではなく、地味めの上着を」用意いたしますね

「そうしてくれ

「どうぞ、朝食をお召しあがりください」

王子が席に着き無事に食事が始まつたのをみどりかると、ラッティはまた動きまわる。

衣装室の侍従に今日の御仕度の内容を伝え、近衛隊の待機所にも走つていぐ。

「おはよウジヤエコササー。」

大きな声で、あいさつをしながら待機所へ入つて、いたら、そこにはアレン・デュカレット卿と数名の部下がいた。

王国一の剣の使い手の称号である桂冠騎士の名を得ると、その騎士には名誉だけでなく、地位まで授けられることになつて、いる。

士官学校を卒業したばかりのアレンに与えられたのは、ローレリアン王子付き護衛小隊の隊長の地位だった。

王族の護衛任務には、通常、三個小隊が交代でつくることになつてい。

「勤務は、二泊三日。一隊が王宮に泊まり、むときにこま、もつ一隊が王宮の側にある近衛連隊の練兵場で訓練、最後の一隊が休暇となる。王宮へ詰めている7-2時間のあいだは、交代で仮眠を取りながらの勤務になるので、このよつた勤務体制になつて、いるのだ。

「王子殿下はお忙いり、街へおでかけになるそうです」とラッティイが告げると、濃緑色の軍服の襟元を広げて朝の鍛錬で吹き出た汗をぬぐっていたアレン・デュカレット卿は、チクショウとばかりに、手にもつて、いた布を投げ捨てた。

「あんにやうひー、気まぐれで予定を変えられる、いひちの苦労なんぞ、ちつともわかつちゃいやがらねえ！」

まああと、部下たちが、アレンをなだめにかかる。

ラッティイは、昔の旅の仲間のなかで一番変わったのは、アレン兄

ちやんだよなあと思つ。

陽気な少年の面影はなりをひそめ、外見は背が高くてしなやかな筋肉をもつ、強そつで無愛想な武人になつた。

そのうえ武芸一辺倒ではなく、頭の中には三年におよぶ士官学校生活のあいだに蓄えられた豊富な知識が詰まつてゐるし、性格は冷静で、決断力も抜群だ。しかも静かな表情の奥には、ゆるぎない正義感と、まだ若さに滾る熱い血ももつてゐる。

アレンが隊長に就任した当初、部下たちは年下の上司の存在に、かなり戸惑つてゐた。軍隊における階級は絶対だが、士官学校を卒業したばかりの青年に、上司面されるのも面白くなかったのである。

しかし、アレンは不言実行を信条とする、実直な人間だった。

小細工は一切なしで、部下には体当たりで接したのだ。

アレンが隊長に就任してから、わずか3か月の期間で、彼の小隊は王子付きの小隊のなかで、もつとも剣術の腕が優れている小隊となつた。もともと近衛隊士は優れた資質を持つ選ばれた人間ばかりだし、その彼らに國一番の剣士が、もてるすべての力を注いで指導にあたつたのだから、当然と言えば当然である。

厳しい鍛錬のなかで「おまえの持ち味は敏捷さだから、この手を覚えるといい」とか、「剣を返すときに肘を張る癖をぬけば、もつと素早いいい位置に剣を構えなおせる」などといった的確な助言をもらい、部下が己の成長を実感できるようになれば、自然と敬意も生まれる。

しかも、「挑戦なら、いつでも受けたやるぞ」と宣言され、「今日は俺が」と意気込んで毎日アレンにいどみ続けた部下たちは、いまだに連敗記録を更新中なのだ。

それにアレンが部下から尊敬を集める理由は、剣だけにあるわけではなかつた。

「俺たちの使命は、命に代えても王子殿下をお守りすることだ。古臭い騎士道に固執する、くだらない矜持の持ち合わせなど、俺はない。使える物は何でも使うから、おまえたちもそのつもりでいろ」

そう宣言した桂冠騎士は、射撃の名手でもあつたのだ。

アレンは自分の小隊が練兵場での訓練勤務にあたつているときに、さまざまな態勢からの射撃の方法や、王子をお守りする際、小隊にどのような陣形を取りさせるなどを、熱心に研究した。

その過程においては部下にも忌憚のない意見を言わせたもので、アレンの小隊の隊員たちの結束力もまた、王子付きの部隊のなかでは一番だと言われるよつになつた。

「おい、短銃を出せ。朝のうちに殿下の外出先での担当部署の組み分けをするから、他の連中も集めろ」

無茶ばかり言つ友人に対する怒りをおさめたアレンは、たちまち冷静な護衛隊長の顔にもどつた。

部下たちは命令にしたがい、機敏に動きだす。

武器棚の力ギが開けられ、テーブルの上に並べられるのは最新式

の短銃だ。この短銃の点火システムは軍事機密に類するあつかいになつてゐるので、普段から護衛隊士達が持ち歩くことはない。

「うひやあ、怖い！」

黒光りする危険な武器をまのあたりにしたラッティは、首を縮めて退散を決めこむことにした。

王子をお守りしたい気持ちは自分にだつてあるけれど、お小姓の武器はあくまでも、たくましい生活力と如才ない人あしらいの能力だよなと思う、ラッティなのだった。

そんなわけで、ローレリアン王子とアレン・デュカレット卿は、その日のお昼すぎ、王都の繁華街を優雅に散歩していた。

彼らが歩いているフィールミンティア街の周辺は、商業地区の中でもひときわ賑わっている区画である。道の両側には石造りの立派な建物が並び、その建物の一階や地下は、ほとんどが商店になっている。

「この界隈は、まだ新しい街ですね。

ほら、見てみたまえよ。

たとえば、あの建物の間口の広さだ。

あの広さが実現できるようになったのは、じつは、1910年ほどのことなんだ。

その秘密は、鉄の精錬技術の進歩にあるんだ。強さだけではなく、しなやかさまで合わせ持つた鉄鋼を作る技術が開発されたおかげで、建物の天井には長い梁を入れられるようになった。だから、あれだけの間口を持った建物を、強度をそこねずを作れるようになったのだ。

鉄は、これから技術の発展の可能性を、大きく膨らませる素材だよ」

アレンを相手に建築技術と製鉄法の話をはじめたローレリアンは、瞳を輝かせて、『機嫌だった。

そういえば、こいつは昔から、ものづくりの話が好きだったなど、アレンは思った。有名な建築学の権威の私塾に出入りしながら、大

きな橋の設計図を引いたりして、喜んでいたけれど。

それなのに、いまじや王宮の中で報告書の山にうもれ、陰険な貴族たちとの陰謀合戦を主な仕事としているのだから、氣の毒になつてしまつ。

あたりを見まわしたあと、アレンは商店の窓に映る、自分とローレリアンの姿を見つめた。

アレンは、格子にはめこまれた板ガラスに映る、自分たちの姿を確認するのが好きだ。そこには自分達だけでなく、自分たちの背後にいる怪しげな人物の姿も映りこむからである。

もつとも、ショウウインドウをのぞきこむアレンの姿は、あくまでもウインドウの中身を検分する、ちょっとだけ裕福な若者といった感じだ。街をお忍びで散歩するために、ローレリアンとアレンは、貴族ではない街の金持ちの男たちがよく着ている、濃い色合いのフロックコートを身につけていたのだ。

最近、王都の商業地区では、このフロックコートが、もつともスタンダードな服装となつてゐる。

一昔前までは、商売や工場経営などに成功した成金の平民は、みなこぞつて貴族の生活や服装をまねようとしたものだつた。けれども最近になつて裕福な平民の数が増えてきたら、彼らは彼らでひとつ社会階層をつくるべく、そのなかで人付き合いをするようになつたのだ。

毎日を忙しく働いてすごす商業地区の住民にとつて、装飾過剰な貴族の服装は、手入れが大変なだけで邪魔な存在なのだろう。勤勉

な彼らの生活様式には、上等な生地で丁寧に仕立てたシンプルな服こそが、日常生活にもつともふさわしい服装として受け入れられたのである。

ローレリアンが目指すのは、そういうた裕福な平民が多く集まる、フィールミンティア街にあるカフェの一軒だった。

カフェはもともと東国渡りの珍しいスペイスを入れたお茶を飲ませる店だったが、いまでは裕福な平民の社交場となっている。おたがいを自分の屋敷へ招待し合って、お茶会や晩さん会で交友を温める貴族の社交界から完全に締め出されている彼らは、彼ら自身にふさわしい交友の場を求めて、街のカフェに集まるよつになつたのだ。

酒が入らない昼間のカフェに社交の場を求めたのも、いかにも彼ららしい選択である。勤勉を美德とする働き者の彼らは、一杯のお茶とともにカフェで友人や同業者たちから情報を仕入れ、最近庶民のあいだでまで読まれるようになった新聞を読み、また仕事へともどつていく。

現在、王都には、200を超えるカフェがあると言われている。そこでは、毎日、この国の経済を動かしている人々が、お茶を飲み、情報を交換しあっているのだ。

なかでもフィールミンティア街にあるカフェの『ふくろう亭』は、活氣あふれる店だった。

ローザニアの神教によると、ふくろうは知恵の女神サガスのお使いとされている。大きく見開いた両の目で、すべてを見透かす知恵を持つと。

その名を店名に掲げた『ふくろう亭』の主人は、哲学者としても有名な学者だつた。その店主の人柄が表れたせいで、『ふくろう亭』は王都のカフェのなかでも、もつとも置いてある新聞や本の数が多くて、内容も吟味されたものばかりだという評判なのだ。自然と集まつてくる客も、新進気鋭の学者、新聞の記事を書いている論客の名士、作家や出版社の社員といった、情報を発信する側の人間が多いのである。

ローレリアンはためらうことなく、この店の中へ入つていった。

店のつくりは開放的で、おもての通りに面した部分には、ガラス窓がたくさん並んでいる。この店も、最新式の建築技術の恩恵を受けている建物なのだ。

外の気候がさわやかな今の時期は掃きだし窓がすべて解放されていて、店の内部には表の通りの賑わいが、そのまま入りこんできていた。

「やあ、リアン。しばらく顔を見なかつたが、元氣かい？」

奥のテーブルで談笑していたグループが、ローレリアンの姿を見つけて声をかけてきた。

アレンは緊張を顔に出さないよつた氣をつけながら、その連中を観察した。

全員が同じような、地味な色合いのフロックコートを着ている。年のこころは二十代から、せいぜい三十代の前半くらいまで。外見は、害のないインテリといったところか。

挨拶として片手をあげたローレリアンは、その連中へ近づいていった。

「ひやしふりだね。ここにしばらく、わたしは父の仕事の旅行につきあつていたもので、王都にはいなかつたのを。」  
「うちの連れは、クローネくんだ。取引先の御子息で、いま我が家に滞在中なんだ」

「やあ、どうぞよろしく」

同じテーブルについていた青年たちが、つぎつぎにアレンへ握手の手をさしだしてきた。

握手をする瞬間、なんとなく値踏みの目で見られてくるよつた感じがするのは、アレンの氣のせいではない。

青年たちは、いかにも他人のお下がりをもらつて着ているようなアレンの身に合わない上着を見て、心の中で「田舎者だな」という判定を下している。

アレンは、内心でほくそ笑んだ。

彼はもともと田舎出身だから、田舎者であるといつ演技は得意だ。といつよりは、演技をする必要が、まったくないのだが。

やぼつたくて大きすぎる上着も、腋の下のホルダーに短銃をかくし持つためには、かえつて都合がいい。

だからアレンは、ローレリアンのお忍びの行動を護衛するときは、田舎商人の息子を演じることが一番多い。

ゆつたりとした動作で知り合いのとなりにすわるローレリアンも、やや鈍そうな雰囲気を、そこかしこからにじませていた。

田立ちすきる秀麗な容姿の印象を薄めるためにかけている眼鏡が微妙な位置へとずり落ちて、頭はいいが切れ者とは言い難い金持ちの息子という役柄が、ぴたりとはまりこんでいる。

仲間たちとローレリアンは、のんびりと会話する。

「へえ、リアンのお父上は、流通関係の会社を経営なさつておいでになるのだったな」

「そうだよ。いい加減に会社の後を継ぐ覚悟を決めろと、父からは旅行のあいだじゅう、説教されてしまった」

「それは災難だったね」

「のんびり者のわたしには、会社の経営など向いていないと思うんだ。ところが父ときたら、せっかくここまで自分が大きくした会社を、息子のおまえは見捨てるのかと、大憤慨だ」

「とりあえず、後を継ぐようなふりをしておけばいいじゃないか。きみの代になつたら、実際の経営は、社内の優秀な人間に任せてしまえばいい」

「腐った根性をたたき直してやるという父親から尻をたたかれてしるわたしに、ついてくる人間など、いるだろつかね？」

「きみに必要なのは経営の知識より、社員にだまされて会社を乗つ

取られないようにする、法律の知識かもしれないな

彼らの会話を聞いて、アレンは思わず漏れそうになる苦笑を、こらえなければならなかつた。

ローレリアンは、たいした役者だ。

一代で財を成した裕福な父親は、息子の教育には失敗したらしく、誰もが信じてしまう見事な演技である。

このカフュには、一種類のお客が集まるのだ。

表側の明るい場所に位置するテーブルにすわっているのは、本物のインテリ。

奥側の薄暗くて読書や勉強にあまりむいていない席にすわっているのは、有名人が集まる『ふくろう亭』の常連を気取りたいだけの、似非インテリである。

じばらくローレリアンと友人たちは、王都の最近の流行についての話題で盛り上がつた。

王都のもとへ上がつてくる報告書には、街の様子の報告もあったから、この話題にローレリアンがついていくのは、苦もないことだつた。

「さやかに、ビヨレ公園の乗馬コースに出没する美女の話だの、つい最近市場に出まわりはじめたイストニア産の工業製品の話などがつづく。昔は海の向こうの遠い国だったイストニアは、今ではローザニアの重要な商売相手なのである。

「まさか、あの広大な内海を三日で渡れる日が」よつとは、むかしの人々は、夢にも思わなかつただろうなあ」

「蒸気機関と自動織機の普及のおかげで、大きくて丈夫な帆布を、難なく織れるようになつたからね。

内海を渡る船は、いまじやスピード合戦に夢中だ。ローザニアから今年最初の新茶をイストニアに一番に運び入れると、『祝儀相場でもつて、20倍の値がつくそつだから』

「それだけじゃない。その一番茶を運んだ快速艇を所有している船舶会社には、他の仕事も殺到するそうだ」

「なるほどねえ、宣伝効果か」

「ラカンの港にずらりと並ぶ、貿易船の船列は、それは見事なものだ」

「へえ、リアンは今回の旅行で、ラカンへ行つたのかい？」

「ああ。父の商売の話は、船とはまったく関係がないものだつたけれどね」

「なんの商売をしにいつたんだ？」

「石炭の販路拡大だよ。ラカンでは最近、製鉄業が盛んなんだ。いろいろな加工製品のもとになる棒鉄を最新型の高炉で作りまくつてある。その高炉に火を入れるためには、良質の石炭がたくさん必要なんだ。

それにラカン公爵は、近年小型化が著しい蒸気機関を、鉄の荷車

に乗せて工場内で使つている

「なんだ、それは？ よく意味がわからない」

「馬が必要ない馬車といえぱいいかな？」

蒸気機関を動力にして、自走する荷車だよ。荷車 자체が重たいから鉄のレールの上しか走れないんだが、ものすごい馬力を持つているから、重い棒鉄の運搬なんかに威力を發揮している」

「へえ、そりゃあすゞいなあ」

「将来は、内海を渡る船にも、蒸気機関が積まれるんじやないかな？ ラカン公爵は、鋼鉄製の船を作ろうとしているらしいし」

「すゞいなあ。ラカン公爵は、貴族にしては珍しい、先見性に富んだ企業家だね」

「公爵のように柔軟な思考を持った人物が、中央政界に打つて出でくれればいいのに」

「思考停滞を起こした枢密院の議員連中には、問題山積みの今のローザニアを、どうこうする力はないからなあ」

「結局は御老体に鞭うつた宰相カルミゲン公爵が、その場しのぎの政策をひねり出して、苦境をなんとかしのいで、おしまいなんだ」

「我が国の将来は、これからどういう方向へ進むつていうのかね」

「低収入にあえいでいる末端の庶民は、ひどく暮らしづらしだし」

「農民は地主の貴族に搾取され、工場労働者は企業家に搾取される」

「なにをえらそつに。」

その搾取した金で遊び暮らしているのが、君じゃないか」

「いや、これはやられた！」

優雅な似非インテリ仲間が、どつと笑い声をあげる。

アレンは冷や冷やしながら、ローレリアンと友人たちの会話を聞いていた。

これは立派な政府批判だ。

宰相派の息がかかつた憲兵などに聞かれたら、その場で逮捕されかねない会話である。

その会話の内容を聞きとがめたのか、笑い声がうるさかつたのか。店の表側のテーブルで静かに話していたグループの中から、一人の男が抜けだして、こちらへやってきた。

アレンの背筋に、ぴんと何かが走る。

相手の男は、一見物静かな雰囲気だった。

古めの「ザイン」の黒いフロックコートを着ており、痩せた体と、やや病的なうるんだ瞳の持ち主だ。年齢は三十歳くらい。髪の色と瞳の色はローザニアで最も平凡な茶色で、大勢の人の中に紛れ込んだら、その中に溶け込んでしまって見つけられなくなるだろうといつた外見である。

けれど、この男は危険だ。

國一番の剣士の警戒心が、びりびりとアレンの体中に、警戒せよ  
と警告を発している。

さつと今の自分の瞳には、鋭い光が宿つてしまつてゐる。だから、この男とは、目をあわせるわけにはいかない。

心のうちで、やう考へながら、なにくわぬ顔で視線をそらしたアレンは、自分の部下の配置を確かめた。

カウンターに一人。

掃きだし窓の外のテーブルに一人。

その一人を介して、すぐに連絡が取れて現場にかけつけられる位置には、最新型のライフル銃をもつて完全武装している騎馬兵を、さらに一人ずつ二カ所に配置してある。

つまらなさうに、アレンは下をむく。

いまアレンの役どころは、裕福な会社経営者であるリアンの父親のもとへ、修行としょうして預けられた地方の商人の息子だ。有名な『ふぐろう亭』へつれていつてやるといわれてリアンについてきたもの、王都の青年たちの話題にはとてもついていけなくて、退屈しきつてゐる田舎者。

この場にいる連中は、アレンがあたりの空氣に神経を張り巡らせていることになど、まったく気づいていない。

じょじょに、筋肉へ緊張をためる。

相手に気づかれないよう、極力静かに。

もし、近づいてくる男がローレリアンに何か害をなすようなら、アレンは迷いなく腋の下のホルダーから短銃を抜いて、撃つ覚悟だつた。

「声が大きいよ、諸君」

痩せた男は苦笑しながら、ローレリアンと友人たちをたしなめた。

「これはどうも、失礼しました。リュミネさん」

仲間たちのうちで一番声が大きかつた青年が、丁寧に謝る。

他の者達も、同意の意思表示として軽く目礼する。どうやら、このリュミネという男は、このカフュでは尊敬される立場にいる人間らしい。

リュミネは、いいんだと手で示しながら、落ち着いた口調で言った。

「きみたちの心配もわかるがね。さつきのような話は、公共の場所で、おっぴらにやるべきではない。万が一のことがあれば、我々に交流の場所を提供してくれている『ふくろう亭』の主人にも、迷惑がかかるかねないのだから

「そのとおりですね」

「配慮がたりませんでした。おわびいたします」

口々に仲間が謝るのを聞きながら、ローレリアンがアレンに言つ。

「クローネくん。」けいは有名なサンエット紙の論説委員、ジャン・リュミネ氏だよ。リュミネ氏がお書きになつた社説には、いくつも有名な名文がある

なんてやつだと、アレンは思った。

ローレリアンの演技力は、どんな名優も真っ青になるほどのものすごいだ。

いまの彼は、どこから見ても、有名新聞の論説委員を知り合いとして田舎者の取引先の息子に紹介できて、大喜びしている社長のバカ息子である。ほほがかすかに赤くなつており、さぞや彼の小さなプライドは、満足で満たされているのだらうなといつ風に見える。

リュミネの表情にも、苦いものが浮かぶ。

彼は人間を、尊敬できる人物と、そうでない人物とで、分類するタイプであるようだ。

「はじめまして、ローリイ・クローネと申します。高名なリュミネ氏にお目にかかる光榮です」

おそらくリュミネの記憶には、自分の偽名は欠片も残るまいなと思いつながら、アレンは握手を交わした。

ちなみに、ローリイ・クローネとは、古語で『月桂樹の冠』という意味の言葉である。桂冠騎士の称号をもじつただけの、じつにくだらない偽名だ。

アレンの予測は正しく、握手の手を離した瞬間にはもう、リュミネはアレンへの興味を失っていた。

そして、ローレリアンに話しかける。

「ところで、リアンくん。

大きな声だつたから聞こえてしまつたが、ラカンへ行つていたんだつて？ むこうは、どうだつたかね」

嬉々としたローレリアンは、尊敬する文筆家に、『報告だ。

「なにをお知りになりたいですか？ なんなりと、おたずねください」

「うーん、そうだね。

ラカン公爵が鉄の増産をためらわない理由について、なにか知つていることはないかね。普通、物を作るときには、需要と供給のバランスを考えて生産量を決めるものだろ。

きみのお父上も、ラカンはまだまだ石炭を買つと判断されているようだし。

建国節の直前に、国王の密命をおびて、ローレリアン王子がラカンへ行幸しただろう。あのあとラカン公爵は、王子へ急接近したように見受けられるし。

なにか、国家としての介入があつたのではないかと、識者はみんな思つてゐる

「国家としての、介入ですか？」

「たとえばその……」

リュミネは声をひそめた。

「ビリの国と、戦争とか」

ローレリアンは、眼を見開く。

「まあか！ この大国ローザニアに、戦争をしかける国が、ビリにあらとうのです？」

「声が大きいよ、ロアンくん」

「すみません、リュミネさん。

あんまり、びっくりしたもので。

でも、それはありませんから、安心なさいください。

王子はね、ラカン公爵の馬がいらない鋼鉄の荷車を、国中に走らせたいとこう構想を、おもちなんですよ。

ラカンの技師たちは、鉄道とか、いつていきましたが。

技術的には、もう十分、実用可能なのだそうです。あとは、資金と、国中にレールを敷いていく仕事を推進する、なにがしかの強力な意志さえあればいい。

王子はその『意志』とは、国の『意志』であるべきだと、考えていいらしいですよ。10年、20年先の国の在り方を考えるのが、国政ということでしょう。

國中に計画的に鉄道を建設すれば、建設のおかげで經濟も潤うし、國民に仕事も与えられる。できあがった鉄道は、物資の流通の速度と量を劇的に変えるでしょうね。

そうなれば、ますますローザニアの經濟は發展し、國際競爭力も

増すでしょう。国民の仕事も増える。仕事が増えれば、限りある人的な資源の奪い合いが起こりますから、国民の生活も今より良くならはずですよね

おおと、ローレリアンの友人たちが、うなり声をあげた。

「わづかー！」

「我がローザニアには、まだローレリアン王子がいたのか」

「こまに、あの若い王子が、この国を導くようになるのか？」

「ローザニアの聖王子が」

「ラカン公爵が8歳の娘を、王子の妃にしたがつた理由がわかつたぞ」

口角から泡を飛ばす勢いでしゃべる青年たちの姿を見ながら、アレンは震撼した。

店の表側に集まっていた知識人たちは、それとなく、こちらの話を聞いている様子だ。

きっと、今日のこの話は『さるすじからの情報によれば』などといった表現で、新聞の記事になつたりするのだろう。

貧富の差が爆発的に拡大し、貧しい国民の苦悩が激となって世間によどんでいるいまのローザニアにおいて、国民の不満を他にそらすためには、もう他国へ戦争をしかけるしかあるまい。

そういう決断を、国王が下すのではないかと、識者の間では危惧されていたのだ。

ローザニア王国はローレリアンが言うとおり、大国である。今の一  
段階では、他国から戦争をしかけられるとはまずない。あるとし  
たら、戦争によって他国を植民地化し、その富によって現在の苦境  
から脱出しようと、大国ローザニア側からの身勝手な宣戦布告  
だけだわい。

しかし、ローレリアン王子は、そんな人として恥ずかしい方法で  
問題解決をするつもりはないのだ。

しかも、大方の予想とはまったく違った展望で国の未来を思い描  
き、その方向性を国民に示そうとしている。

俺は、なんて男に、仕えることになったのだろうか……！

アレンは、ぼつせんと、にこやかに笑うローレリアンを見つめて  
しまった。

文筆家のリュミネは、また苦々しい顔をして、興奮する青年たち  
を見ている。

「諸君は、甘いよ」

高まつた熱気を、いっさに醒めさせる一言を、リュミネは発する。

「たつた一人の英雄の力にたよるよになつたら、その国の命運は  
もう終わりだ。

その英雄がどんなに優れた人間でも、人間であることには変わり

がない。

判断を誤ることだつてあるだらうし、病氣で倒れたり、事故にあつたりする」とだつてあるだらう。

現代の国家が、たつた一人の人間の意志によつて動くなんてことは、あつてはならないことなんだ」

ローレリアンは、おつとつと言ひ。

「そうですねえ。これから、この国がどうこつ方向に進むにしても、議会の制度は改革されるべきですよねえ」

むつとしたコミネは、ローレリアンをこりんだ。

「きみ、それがどれだけ大変なことが、わかつていて言つているのか」

「あはは、すみません。我々にも選挙権をよこせとこつのは、ローザニア王国の国民の宿願ですね」

青年の一人が、口をはさむ。

「ちよつとすみません。

ローレリアン王子は、第一王子として王都へもどつた直後から、いづれは貴族ばかりが優遇されている税制度や議会制度を改革するべきだと明言していたと聞きます。

そのせいで、彼は『王子殿下の影』とよばれる、すい腕の護衛騎士を、片時もそばから離せない生活を強いられるはめになつた。公式な発表はないが、彼に襲いかかつた刺客の数は、片手じやたりないといつ噂ですよ」

アレンは心の中でつぶやいた。

片手で足りないじじいではない。両手両足でも足りねえよと。

青年たちは三つある。

「それでも信念を曲げない王子は、いへばくかの期待をかけてしまったのは、われわれの甘えでしょうか？」

「王子を指導者として仰ぎながら、国民もともに頑張るという姿勢では、ダメなのでしょうか」

リュミネは一瞬鼻白んだあと、皮肉っぽい笑みを唇に浮かべた。

「人間というのは、楽なほうへ、楽なほうへと、流されたがる生き物だな。

いまのローザニア王国が、荒療治ぬきに、まともな方向へ進めるとは思えない。

王子も、ただの人の子だ。

彼自身も、それを認めている。

そうだ、おもしろいものがあるから、諸君に進呈しよう

懐から小さな冊子を出すと、リュミネはそれを青年たちのテーブルの上に投げ置いた。

なんだなんだと青年たちが冊子を見ると、それは出版元すらわからない、パンフレットと呼ばれる庶民向けの読み物だった。街角でパンフレット売りが、ひとつ20カペくらいで売り歩いているものだ。内容はきわめて低俗で、社会風刺や艶聞が多く、小銭を払って手にした客が、浮世の憂さをはらすための読み物である。

10ページほどのパンフレットには、銅版印刷のイラストが、いっぱい入っていた。パンフレットを買つような客は、読み書きがやつと程度の教養レベルであることが多いので、絵が多いほうが喜ばれるのだ。

パンフレットを手に取つた青年が、タイトルを読みあげる。

「『踊る神官』？ これは、ローレリアン王子のことだらうか？」

アレンは、頭が痛むよつた気がした。

そのパンフレットには、建国節の最後におこなわれた舞踏会での、ローレリアン王子とヴィダリア侯爵令嬢のダンスの様子が、おもしろおかしく書かれていたのだ。

愛らしい白いドレスの令嬢をつぱいあつ王太子と第一王子。

神官の法衣姿で、大胆なダンスを披露するローレリアン王子。

初めて王子殿下のダンスを拝見して、失神しまくる貴族の令嬢と奥方。

最後に王子と侯爵令嬢は、接吻をかわして別れを惜しんだことになつている。

事実が三割、勝手にくつつけた大げさなエピソードが七割といった内容だ。

それを読んだ青年たちは、声をあげて笑つた。『婦人方の連續失

神の様子など、まるつきつ喜劇そのものだったのだ。

やつべー、ローレリアンが怒りだしたら、王子殿下の正体が  
ばれちまうー

あわてたアレンは、パンフレットから目をはなして、ローレリアンを見た。

しかし、当のローレリアンは、かくしきれなかつた厳しい色を少しだけ宿した目で、カフェの出口のほうを見ていた。

視線の先には、ジャン・リュミネの後ろ姿がある。

その後ろ姿は、すぐにカフェの外の通りの喧騒にまぎれて、見えなくなってしまった。

5分後、ローレリアンとアレンは、ふたたびフィールミンティア街の路上にいた。

アレンはローレリアンがパンフレットの件で怒りだすのではない  
かと思っていたのだが、王子はあくまでも冷静だった。

「まあ、あのイラストが下手で助かったな。ちつともわたしに、似  
ていなかつた」

アレンは笑つた。

「似ていないとひか。あのイラストに『ローレリアン王子は絶世  
の美男子である』なんて文章がついているんだから、笑つちまうよ。  
どう見ても、あのイラストの王子殿下は、ソラマメに田鼻を描いた  
よつな不細工顔だ」

「地下出版物の発行元に銅版画を作つておろす印刷屋なんて、腕が  
悪くてつぶれかかつたような印刷屋ばかりだ。当然といえば、当然  
だな」

「地下出版物だあ？」

「やうだ。じつは、あのジャン・リュミネといつ男は、反政府系の  
宣伝パンフレットを世間にばらまいている組織の幹部ではないかと  
にらんでいる。

」のところ、また反政府的な内容のパンフレットの発行数が増え  
てこるので、直接様子を見てやろうと思つて、来てみたんだが。な

かなか尻尾は、つかませてくれないな

「今回ることは、証拠にならないのか？ サンエット紙みたいな格調高い新聞の論説委員が、『踊る神官』なんて低俗読み物を、懐にもつてたんだぜ？」

「証拠にはならないが、疑いの灰色が、かなり黒へ近づいたことはまちがない。彼が書くのは過激な論調の改革論だけかと思っていたが、個人攻撃の中傷物も書くとは意外だつた」

「庶民のあいだでも、おまえの人気が上がっているから、焦つてんじゃねえのか？」

過激な改革論つて、民衆をあおつて革命を起しそうとか、そういうやつのことだろう？

だけど、ローレリアン王子は、そんな乱暴な方法を使わずに、世界を変えることを目指している

「わたしは将来のこの国に、王も貴族も必要ないというのなら、それでいいと思つていい。

だが、暴力的な方法による急激な変化は、膨大な犠牲を生むだけだ。

「うちが必死になつて犠牲が最小限ですむ落としどころを探つているというのに、革命など起こそれたのではたまらない。不穏分子には、早々に消えてもらつ

「うひー、怖いねえ」

「こちだつて、殺されそくなつたのは、一度や二度じゃないんだ。わたしにむけて刺客を送りこんできたのは、既得権を守ろうとする貴族だけではない。王朝の継続を望んでいない過激な革命主義

者とか、こうこうや。

霸権を望むなら、おたがいに犠牲は覚悟のつだう。ココノネ  
のよつな男に、遠慮する氣など毛頭ない」

「おまえ、性格がすさんだなあ」

「受け入れざるを得ない変化とこつせつだ」

やれやれ、可憐そつこと、アレンは躊躇を歩くローレリアンの肩  
を抱いた。

ローレリアンは、驚いて目を見開いた。

アレンに肩を抱かれた瞬間、憂鬱な気分が晴れたのだ。

だれかに、こんな打ち明け話ができたのは初めてだつた。

心から信頼しているアレンが相手だから、ローレリアンは愚痴を  
言える。

けらけらと笑つているアレンは、自分の存在によつて、どれだけ  
ローレリアンが救われたかになど、まったく気がついていないが。

アレンは、色とりどりの看板がならぶ、フィールミニンティア街の  
華やかな街並みを見あげて言つた。

「せつかくここまで出てきたから、気分転換に、もう一軒よつてい  
こつせつ。『ふくろう亭』のお茶はうまいといつ評判なこと、俺はち  
つとも味がわからなかつた」

「やつだな。どうか、つまごお茶を飲ませる店を知つていろか？」

「つまごがどうかは知らないが、知り合の店がすぐ近くだ」

そう言つてアレンがローレリアンをつれていつたのは、まだ新しそうに見えるのに、たいそう繁盛している店だった。

気候がよい。風もさほどなく、カフフの椅子は石畳の路上にまであふれだし、満席のお客のなかを店員が忙しそうに動き回つてゐる。

「うそだな」

アレンは挨拶をしながら、店の奥へ入つていぐ。知り合の店だところから、それも当然かと思ひながら、ローレリアンも後につづいた。

すると、店の奥で忙しそうに立ち働いていた若い女が、声に氣づいてやつてくる。

「あら、アレン。忙しそうか言つてたくせに、きてくれたのね」

「ええ、きましたよ。開店のお祝いには、ちょっと遅いけれど、贈り物つわでね」

「そんな氣を使う必要は、ないのに……」

思ひもよらぬやかにしゃべつていた女は、じりりと見て絶句した。

「口ー」

「うわ、ちょっと、たんまー！」

「むが、ふがあー！」

思わず王子の名を大声で呼びそうになつた女は、アレンに口をふさがれる。

ローレリアンは、笑顔をかすかにひきつらせた。

この一人が主従だつたのはむかしのことで、いまでは手紙のやり取りをするほど、親しい友人なのだ。それくらいはローレリアンにだつて、わかつてゐる。

しかし、侯爵家の姫君を後ろから羽交い絞めにして、口をふさぐとは、なんたる無礼。

そもそも、騎士にとつて、姫君の唇とは神聖なものであるはずだ。古いバラードに出てくる騎士たちは、姫君から頂戴する口づけひとつのために、命を懸けた戦いへおもむくではないか。

それなのに、この能天気な男は、気安く姫君の唇にふれて……。

そこまで考えて、ローレリアンは、はとと我にかえる。

何を怒つてゐるのだ、わたしは？

そう思つた瞬間である。

ローレリアンの懷へ、女性の華奢な体が、体当たりの勢いで飛びこんできた。

はしゃいだ声が囁く。

「リアン！ おひなじぶつ！ 会えて嬉しいわ！ アレンたら、なんて素敵なプレゼントを、考えててくれたのかしりー。」

ぎゅっと、胸のあたりを抱きしめられた。彼女の背せ、ローレリアンの肩を少し超えるくらいしかないものだ。

名門侯爵家の姫君だというのに、この令嬢には、つつしみとか、恥じらいとか、やうにしたたぐいの感情の持ち合せは、あまりないのだ。

でも、そのおかげでローレリアンは、ためらつもなく彼女を抱きしめかえせる。

それが、こんなに嬉しいのだから、我ながらあきれてしまう。

「こんじは、モナ」

「お忙しいの！」、わざわざきてくださったの？

「近くに用事があったので」

「あら、わたしのところは、ついでなのね。  
でもいいわ。会えて嬉しいから、なんでも許しちゃうー。」

そういうた侯爵令嬢モナ・ショイアは、めいっぱい背伸びをすると、ローレリアンの頬にかすめるようなキスをした。

それは単なる挨拶がわりの口づけだった。

なのに、ローレリアンの胸は躍る。

王子と名乗らなければならなくなつてから、ローレリアンに挨拶のキスを贈るのは、母親のエレーナ姫くらいしかいなくなつてしまつていたのだ。

しかも王族などといつものば、肉親の情には恵まれないものだ。國務の輔弼をするようになつて父の国王とは毎日のように顔をあわせているが、母とは月に一、二度、他人も同席している堅苦しい晩餐会の席で会うだけである。

親しい人と気軽に肌をあわせる感覚が、こんなにも幸せな感覚だつたとは。

しかも、物怖じしないモナは、ローレリアンを見あげていつてくる。

「やだ、rian。

その伊達眼鏡、すゞく似合つてるわよ。

頭がちよつと弱そうな美青年つて感じに見えるわ。とても、すて

れ

自分の腕のなかで、モナにけらけらと笑われて、ローレリアンはいいかえす。

「そういうつきみだつて、とても侯爵令嬢には見えないが。きみは、ここでいつたい、何をしているんだい？」

モナは型押し染色で花模様を染め付けた明るい色のドレスを着たうえに、大きな白いエプロンをつけていた。髪も娘らしい形に結つて、小さなレースのキャップで後れ毛がでないようटリミングをおおつ正在。外見は、可愛らしい町娘といったところか。

軽い身のこなしで、モナはローレリンの腕のなかから、すり抜けていく。

「ふふと笑う様子は、とても得意そつだ。

「このお店は、わたしのお店なの！」

驚いて、ローレリアンは、あたりを見まわした。

先ほどまでもローレリアンとアレンがいた『ふくろう亭』ほど大きな店ではないが、この店もそこそこ広さだし、それになにより繁盛している。路上に出したテーブルも店内のテーブルも、ほぼ満席状態だ。

「ああああ、ビーブ。おすわりになつて！」

そう言しながら、モナは、空席を探す。

アレンがわきから、口をはさむ。

「路上の席は、やめてくださいよ。ビーブの建物の窓から、狙撃される危険がある」

「まあ、護衛隊長さんで、大変なのねえ」

「リアンが、えらくなりすぎたんですよ。おかげで俺は、苦労がたえません」

アレンと王子殿下を、遠田に見守っていた部下たちは驚いていた。怒るとき以外は、めったに感情を見せない無愛想な隊長殿が、笑っていたので。

国一番の剣士にふさわしい立派な武人の体つきをしているくせに、彼らの鬼の隊長殿は笑うと、どことなく可愛いかった。

そんな笑顔を見せられて、部下たちは、ほっとしてしまったのである。

「ふう！ なんか、いいねえ」

「隊長殿は俺たちより、年下なんだよなあ」

「普段は俺たち、忘れてるけど」

「たいちょー、じゅーもん」

「それにさあ、王子殿下も、ちょっと幸せそうに見えないか？」

「うん。俺、王子殿下の目が本気で笑っているところを見たのは、初めてかもしだれん」

護衛隊士の前では、ローレリアンはいつでも、完璧な王子だった。

聖職者でもある王子は、決して他人に不機嫌な顔を見せない。い

いつも口元には、気品と優しさに満ちた微笑を浮かべている。

側近たちの前では気をゆるめて普通の顔も見せるが、その顔はいつも、憂鬱そうな顔だったり、疲れた顔だったりするのだ。

アレンの部下たちは、ローレリアン王子の護衛任務につけたことを、心から誇りに思っている。自分たちが守るのは、ローザニア王国の未来であると。

だから、彼らは上機嫌で、王子殿下と隊長と姫君の姿を見守った。尊敬してやまない王子殿下がお幸せそうなので、彼らはとにかく、嬉しかったのである。

結局、混雑した店の中に適当な空き席は見つけられず、アレンとローレリアンは従業員の休憩用の椅子にすわって、カウンターのそばで忙しそうに働くモナと会話をしながらお茶を飲んだ。

モナは、ぐるぐると、よく動く。

彼女は侯爵令嬢らしからぬ才能をいろいろともつた女性だったが、どうやら飲食店の切り盛りの才能も持ち合わせていたらしい。焼き菓子やお茶のよい匂いがただよつ店の内部は小奇麗に整えられ、掃除もゆきとじいていて、居心地はとてもよかつた。

そのうえ、彼女は調理係や接客係の動きまでをしつかりと見守り、お客様が気持ちよくすむせるよう、細やかな指示をだしながら働いている。

わかれで「」した二年の間、彼女は彼女なりに一生懸命、いろいろなことを身に着けてきたのだなど、ローレリアンは思つた。そのひたむきさと、ひきつけられる。

「はい、どうも。これがうちのお店の看板商品なの。これのおかげで、連日満員御礼なのよ。召し上がってみてね」

モナが頃合いをみてカウンターの上に出してきたのは、チョコレートケーキだった。それられたクリームが、ここんもりとした固まりになつておひ、白と黒のコントラストが、とても綺麗な一品だ。

「『』のクリームは、どうやって固めたんだい？」

スプーンでクリームの塊をつつきながら、ローレリアンはたずねた。

モナは悪戯っぽく笑う。

「食べてみれば、わかるわよ」

そう言われてクリームの塊にスプーンをさしてみるが、ムースやゼリーとはちがう硬さだ。この辺のローレリアンは、否応なく美食にもくわしくなったが、こんな感触の食べ物には初めて遭遇した。

なんだか怪しいなと思しながら、クリームを口に入れてみる。

「冷たい！？」

驚いて声をあげると、モナはしてやつたりといつた顔をした。

「砂糖と泡立てた卵白をクリームにまぜて凍らせたの。香りづけには、シヤンカラ酒を一二」

「凍らせたって、どうやって？」

「レオニシユ先生の機械を使つてよ」

「先生の…？」

懐かしい人の名前を聞いて、ローレリアンは目を細めて笑つた。

レオニシュは、かつてローレリアンに医術の手ほどきをした学者である。研究費を稼ぐためにアミテージの下町で開業医をしながら、薬の研究や、その薬を作るための技術開発などにいそしんでいる。

教師としてだけでなく、まるで父親のような態度でローレリアンに接し、いろいろなことを教えてくれた人もある。親の存在を知らずに神殿で育つたローレリアンが、肉親の情とはこんなものだろうかと想像できる人間に育つたのは、この師匠のおかげだった。

「先生は、お元気だらうか？」

「とてもお元気よ。時々、診療所のお手伝いもしていたの。先生からば、よくあなたの思い出話を聞かされたわ」

「そうか」

モナは手を止めて、カウンターのまゝへ身を乗り出した。

「ねえ、どうしてレオニシュ先生へ、手紙のひとつも書いてあげないの？」

先生は、いまだにあなたのことを、心配していらっしゃるのに

ローレリアンは目を伏せた。

「先生には、嘘をつきたくない。だから、いまの状況を、どう説明したらいいのか、わからないんだ」

一瞬、言葉を失つたあと、モナも目を伏せた。

「やう。 そうよね……」

レオニシュは現実主義者で、彼の頭の中は、田の前の問題だけでいっぱいなのだ。

国境の街では、市長夫人の社交サロンか、王都で発行されたあと10日遅れでアミテージへ届く新聞を共同購入して読む知識人のクラブにでも出入りしていなければ、中央政界の最新の話題を知ることはできない。かつての愛弟子が『ローザニアの聖王子』とあだ名される国民期待の王子になつていては、レオニシュは夢にも思つていなければ。

その現実は自分にだつて、いまだに受け入れられない出来事だと、モナは思う。

田の前にいるローレリアンは、昔とちつとも変らない、おだやかな青年なのに。

わたしだって、あなたを好きだと思ひ気持ちを押し殺すのに、こんなに切ない思いをしているんだもの。

きっと、先生にも、お知らせしないほうがいいのよね。先生は、とてもローレリアンのことを大切に思つていらつしやるから。事実を知らせたら、きっとローレリアンのことを心配なさつて、夜も眠れなくなつてしまつにちがいないわ。

東の果ての草原のなかにある街に思いをはせながら、モナは言った。

「先生の珍発明つて、あまり現実には役に立たないものが多くつたけれど」

「そうだね」

遠い目をして、ローレリアンが、ふたたび笑う。

その笑顔を見ると、モナの胸は、きゅっとしめつけられた。

きっと彼の心は、楽しかった少年時代へ飛んでくるのだ。ビニにでも自由に行けた、夢のような時代へと。

カウンターの奥に置いてあるビール樽ほどの大さの機械を、モナは「ほら、これよ」と、たたいて見せる。

「このクリームを凍らせる機械だけは、大発明だと思うのよ。本當は、物質の融点のちがいを利用して、混合物を分離するための機械らしいんだけれど」

「へえ、なるほど。薬の研究に使つたりだつたんだね」

「なんでも、氷に硝石をまぜると、マイナス20度まで温度が下がるらしいの。硝石はまた氷が溶けた水から回収できるから、便利な薬品だわ」

「ちよつと、まつた！」

ローレリアンの秀麗な顔が曇つた。

眉間に、難しい考え方をするときこ見られる縦じわがある。

あら、この顔は、久しぶりに見るわ。

モナは喜んで、歯をほほめさせた。

恋の病に侵されたモナの心臓は、ローレリアンのどんな顔を見て  
も、どうぞと脈打つてしまつのだ。

難しい顔で、ローレリアンは言つ。

「モナ、硝石は火薬の原料だ。国家が流通を規制している禁制品じ  
やないか」

ふたたびカウンターから身を乗り出したモナは、ぱちんと、ロー  
レリアンの額を指先ではじいた。

「固いこと、言わないでちょうどいい！  
研究目的の申請を出せば、少量なら貰えるのよ！  
だいたい、あなたが黙つてくれれば、お役所にだつてばれや  
しないわ！」

「痛いなあ。きみはあいかわらず、手が早いんだ」

「ふふんだ！　この機を見て俊敏に動く頭脳のおかげで、わたしは  
いろいろと、やりたいことを実現してきたのよー！」

「半分は、感情で動いているくせに……」

「どうして、この店を持つことにしたのかなと、言つたんだ」

「どうして、この店を持つことにしたのかなと、言つたんだ」

「うそつきね。まあいいわ

手にしたポットから茶碗にお茶を注ぎ、まつていた店員に「これ、7番のテーブルね」と渡してから、モナはカウンターの中から出ていった。

そして、ローレリアンの隣りへすわり、真剣な顔で話しあじめる。「このお店の売り上げで、プレブナンの下町にも、診療所を開こうと思つた。

プレブナンの下町も、アミテージの下町に負けず劣らすの貧しさだわ。きっと、患者さんの半分は、薬代を払えないと思つ。だから、診療所の運転資金を、どこかで稼がないと。

お金がなくちゃ、せっかく診療所を作つても、ひと円で潰れてしまつでしょ？」

ローレリアンの表情も、たちまち真剣になつた。

「本来、それは、国がするべきことなんだが……」

「いまのローザニアに、そこまでする余裕がないことくらい、知つてるわ。

いつけん、この国は豊かに見えるけれど、富はほんの一握りの人間に独占されているものね。

国の財政だつて、積もり積もつた過去の債務で、大変な状態なんでしょう？」

「恥ずかしながら、そのとおりだ。

三代前のステラス王が、王宮の増改築をくりかえすような浪費家だつたもので、困窮しきつた国庫の状態に、どじめを刺した。

国民はみな、宰相のカルミニゲン公爵を悪く言つがね。わたしは、彼を高く評価している。

彼が前国王と現国王のもとで優秀な国家官僚として辣腕をふるつてきたからこそ、ローランニアは、まだなんとか、国王を頂点としてあおぐ中央集権国家としての形態を保つてこられたのだ。

彼が国家権力を維持するためにおこなつてきた改革は、すばらしいものだよ。

「地方」との慣例で進められていた行政を中央主導で一つの法律をもとに動くように統一したり、神殿を動かして国民に文字を教える寺子屋を全国で開かせたり、高度な学問を教える学問所の創設を援助したりね。

技術がいくら進歩しても、それを使いこなす人材がいなければ、経済発展にはつながらない。それに最も早く気づいていたのが、カルミニゲン公爵だと思う。

軍の再編と近代化だって、御老体に鞭うつて、頑張つてやつている。

国庫がいよいよ厳しくなれば、國家を破たんさせないために戦争をしなければならなくなるかもしれないとまで、彼は未来を予測していたんだ。

すごい男だと思うよ。

ただね。彼の欠点は、既存の価値観から抜け出せなかつたところにある。国家を動かすのは選ばれた人間の仕事だと考えて、人材登

用はすべて貴族階級からおこなつた。

急進的な改革を推し進めるためには、信頼できる優秀な人材が、たくさん必要だ。だが、慎重に人材を吟味している時間がなかつたから、彼はその仕事をつぎつぎに、ある程度人柄を知つていて、自分に逆らう心配がない親族へ任せていつた。

その閉鎖的な人事のせいで、彼はいま、社会からの批判にさらされているわけだ。

わたしは、そのどしゃくさに紛れて彼の手柄を横からかすめとり、救国の英雄を氣どりうとしている、ずるい男なのさ」

モナはうつとつと、ローレリアンを見つめた。

「でも、それは、だれかがやらなければならぬことなのよ」

「そうだね。やらなければ。

王朝が倒れたら、この国は、未曾有の混乱の中で崩壊してしまつ

「あなたは、あなたにしかできないことをやつて。

わたしは、わたしにできることを精一杯やるわ。

「ううう。このあいだ、レース工場の話を聞かせてくれた人が、わたしがたずねてきてくれたわ。

工場の建設に、資金を出してもらえたうなの。

「あなたのご紹介ですかどうかがつたら、クレール商会の若旦那さんだと、おっしゃつていらしたけれど」

「じぶしで口元をかくしながら、くつと、ローレリアンが笑う。

「それは、わたしの偽名だ。この眼鏡をかけて街をうろついているときには、わたしはクレール商会の社長のバカ息子とこいつとここについている」

「やつぱり？」

ふたりはひとしきり、楽しげに笑つた。

その楽しい声に自分も参加しながら、アレンは思った。

「この二人は、出会うべくして出会つた、運命の恋人同士ではないだろうかと。

気難しいローレリアンがくりだす政治論を、きちんと理解したうえで、うつとりと聞ける貴族の令嬢なんて、モナさまをおいて他にはいない。

ちよつとした気晴らしにでもなればと思つて、王子女をお茶に誘つてみたが。

「こんなに楽しそうなら、また連れてきてやうなればなるまい。

護衛の手配は大変だが、ローレリアンの笑顔が見られるなら、その苦労も報われるといつもの。

アレンは、いつも憂鬱そうな親友のことが、心配でならなかつたのである。

ローレリアン王子の主席秘書官は、カール・メルケンという平民出身の男だった。

年齢は、ちょうど王子と10歳ちがいの32歳だったが、くすんだ灰色の髪と薫色の瞳の持ち主で、鼻の下に富裕層の平民のあいだで流行りだしている髪を蓄えているもので、年齢よりもかなり落ち着いた印象を他人に与える人物である。

彼はもともと、王国の金庫と呼ばれるグリンワルド王立銀行の優秀な行員だった。

優れた頭脳と行動力を認められ、若くして王立銀行の幹部の一員に名をつらねるようになった彼は、王国の経済について講義をしてもらいたいと依頼されて、王子のもとへ出向いた。王子の教育係として王宮に招かれることは平民の彼にとって大変な名誉だったし、聖王パルシバルの生まれ変わりと噂される、王子の美貌にも興味があつたのだ。

まだほんの赤子のころに刺客に襲われたせいで、死んだものとされ密かに守り育てられていた王子が王都へ帰還した時、人々はまず王子の容姿に驚いた。

秀麗なる容姿とは、彼のためにある言葉だと、王子に接見を許された者達は口をそろえて言つた。

そのうえ、神官の位を持つローレリアン王子は、自身の虚栄の心

を戒めるためとして肖像画をいつさい描かせなかつたから、噂ばかりが肥大して、ますます人々の興味をかきたてていたのである。

求めに応じて王子のもとへおもむいたメルケンも、かなり驚くはめになつた。

金色の髪と水色の瞳をもつ、ローレリアン王子の尊通りの外見にはもちろんのこと、王子の博識ぶりと、知らないことに対する知識欲の旺盛さ、疑問に対してもさまざまな方向から回答を求めようとする深慮の姿勢、正論や先入観にとらわれない発想の豊かさ、物事の本質や将来を幾通りにも予測する洞察力といった、すべてのことだ。

それに何より、この王子は、ローザニア王国の未来について深く憂えていた。

メルケンは王子から、王国が抱える政治経済に関するありとあらゆる問題についての論議をふっかけられてしまい、いつも決められた時間から大幅にはみ出して、意見を戦わせつづけた。その論議は、ひどく疲れるものであつたが、充実したものであつた。

王子との三度目の接見が、またもや大幅な時間オーバーのすえに終わらうとしたとき、メルケンは王子から「あなたの卓越した知識をもつて、わたしを助けてもらえないだらうか」と問われた。

その求めを口にしたときの王子は、もの柔らかに笑つており、とても率直な態度だつた。

メルケンは、あくまでも対等な人間として、自分はローレリアン王子から協力を求められているのだと感じた。

平民の自分がである。

みずからが貴族であるか、あるいは貴族につながる血縁でももつていらない限り、ローザニア王国の官僚の世界では、出世できないのがあたりまえだった。

だからメルケンは才能ある男だつたが、国の政治を動かせる官僚になるのはあきらめて、王立銀行の実務家になつたのだ。

突然、目の前に大きな道が開けたような、爽快感を感じた。

気がついた時には深く首を垂れ、「わたくしのような下賤の身で、殿下のお役に立ちますものなれば」と、メルケンは答えていた。

その返答に対し、王子は眉をひそめ、静かにいった。

「メルケン殿。人は生まれながらにして、その価値を決められるものではないと思いませんか。

その人の業績とは、いかに生きたか、なにを成したかで、後世の人が判断するものだとわたしは思つていて。

わたしを手伝ってくれるつもりがあるのなら、わたしの前では一度と、身分がどうのという話はしないでもらいたい」

その時からカール・メルケンは、ローレリアン王子に対して、絶対の忠誠を誓つている。

＊＊＊＊＊

ローレリアン王子が住まわれる王宮の奥の宮の東翼は、午後になると大勢の人が行きかう、騒がしい場所であった。

それもかなり、うつとうしい雰囲気だ。

東翼にはローレリアン王子との接見の順番をまつ控室に出入りする人、広い秘書官室で書類のやり取りをする人、国王の執務室や、さまざまな公官庁舎へ連絡におもむく人など、さまざまな人が集まつていたが、どの人も申し合わせたように黒っぽい服装をしていたからである。

王子は自分の側近に登用する人物を、身分にこだわることなく、どのような専門性を發揮できるか、交渉力や統率力をもつた人物かどうかといった、人としての本質で見極めて採用しようとした。

重要な役割をはたす人物には必ず何度も自身で接見したし、身内を雇つてもらえまいかといつよつた安直な推薦は、ことじとくはねのけた。

自分は何ができるかを客観的に書いた身上書を準備して、出直してこいと。

結果として、王子の側近には、高等教育を受けた平民や、才能はあるが没落した家系の出身で中央官庁に入職するロネをもたない貧

「貴族などが多くなつた。

彼らには、絢爛豪華な富廷服を何着ももつよつた経済力はない。

第一、そのような華美な服装を、東翼の主であるローレリアン王子自身が、なによりも嫌つた。

お仕えする主人が、いつも同じ質素な黒の法衣を、身にまとつておいでになるのである。

王子の側近は自分たちも大喜びで、黒や濃紺のフロックコートを着て、仕事にいそしむよつになつた。

いまでは、ローレリアン王子がお住まいになる一帯は、そこで働く人々の服装の特徴のせいで、『黒の富』という俗称で呼ばれている。

『奥の富の東翼』という名称には、王族のなかでも日陰の身である人々が住まわれる場所というイメージが定着してしまつてゐるため、ローレリアン王子のお住まいの名としてはふさわしくないと、みなが思つてゐるのである。

その『黒の富』のなかを、ローレリアン王子のお氣に入りの小姓であるラッティ少年は、小走りで移動してゐた。

彼はお仕着せの水色の富廷服を身にまとつてゐる。

本来、王宮に仕えるお小姓の制服は赤と決まつてゐるが、赤と金の派手派手しい富廷服を見たローレリアン王子が、「その服は、どうしても赤でなければならないのか?」と、ため息をつきながらお

つしやられたからである。

それに対する侍従たちの返事は、あながち的外れでもなかつた。

「王子殿下のお気持ちもお察し申し上げますが、おやじこの少年は、国王陛下や御寵妃さまのもとに、お使いなどに行かねばなりませんでしょう。

その際、この者に粗末な服をあてがつておきますと、この者が軽んじられて、辛い思いをいたしかねません。

臣の格式とは、そういうものでござります」

そのあと、「殿下の小姓のお仕着せに關しましては、どうぞ、わたくしめにお任せを」と王子に申し上げた侍従長は、ラッティに淡い水色の宮廷服をあつらえてくれた。

カフスと前立てに銀糸で刺繡が施されているが、見た目はそれほど華美ではない。

けれども、ブラウスの袖のレースは一級品だし、ポニーの尻尾のみにラッティの髪を可愛らしくまとめている紺色のリボンは、幅広の縄で厚みもある立派なものだ。

この服のおかげで、ラッティは王宮のどこへ行っても、王子殿下のお気に入りのお小姓として大切にあつかつてもらえる。いつのまにか水色の制服は、ローレリアン王子つきのお小姓のトレーデマークになってしまったのである。

王子の私生活の手足となることを、無上の喜びとしているラッティことつては、それはとてもありがたいことだった。

王子殿下は、こつだつてお忙しいのだ。

つまらない理由で伝言の返事が遅れたりするのは、自分の不名誉であると、ラッティは思つてゐる。

その特製の小姓のお仕着せのおかげで、ラッティは『黒の宮』のなかに何か所がある警備上の閑門で呼び止められることもなく、軽い挨拶をくりかえしただけで王子の執務室へたどりついた。

まずは秘書官の部屋のドアから中へ入り、王子の執務室に大切な客がいないことを確認する。

「いま、殿下のおそばにいるのは、メルケン主席秘書官だけだよ」

仲のいい若手秘書官に、そう教えてもらい、礼を言つたあと、王子の執務室へ通じる内扉をたたく。

「どうぞ」と低い声で返事をしてきたのは、メルケン主席秘書官だ。ラッティは「失礼いたします」とかしげまりながら、室内へ入つていた。

「殿下あてにヒーラー姫さまから、お手紙がまいました」

執務室の中央窓寄りには、大きくて立派な執務机が置かれている。そのうえで書類の山に埋もれかかっていたローレリアン王子は、顔もあげずに答えた。声には心底嫌そうな響きがこもつてゐる。

「どうせまた、お茶会に来ている見栄つ張り伯爵夫人が王子に会いたがつてゐますが、どう言い訳してお断りしておきましょうか、な

んていつた内容なんだ。

カール、かまわないから、きみが読んでくれ

「はい、それでは失礼いたしまして」

王子の机のそばに立っていたカール・メルケン主席秘書官は、ラッティが差し出した手紙を受け取り、丁寧に開いた。

王子は田の前の書類にサインをしながら、ぶつぶつと言つ。

「まつたく、国王陛下は何を考えておいでになるんだ。

母上を寵妃の身分に甘んじさせておきながら、宮廷のご婦人方につきあいには参加させて、王妃の義務の真似事をさせられる。

母上は物静かな方なのだ。

本当は、手ずから花を育てたり、菓子を焼いたりといった、ささやかな日々の生活に心の慰めを得るような女性だといつて」

メルケンは、読み終わった手紙をたたみながら答える。

「母君さまがお忙しい件につきましては、殿下にも責がござります。宮廷のご婦人方は『ローレリアン王子殿下の母君』であらせられるエレーナさまと、御懇意になりたいのでござります。

あわよくば夫や息子が、人材をお求めになられる、殿下のお目に留まるようにと。

それに、エレーナさまは前王弟の姫君。

現在の我が国において、王太子妃殿下につぐ高貴なご身分となる女性であらせられます。

茶会や晩さん会をお開きになられて、要人をもてなされるのも、王族の女性の大切な義務でござります」

「ふん！ なんでもかんでも、わたしのせいにするな！

兄上の妻が、病弱だのなんだのといわれて、王太子妃の義務を果たそうとなさらないからな！

先週なんぞ、まわりがやいのやいの言ひて、やつと動いた王太子妃が、直前で主催の茶会をすつまかし、急きょ母上が代理を務めたそうではないか！

「王太子妃殿下は御病氣だといったのですから、いた仕方」ございませんな」

「夫婦そろつて、なまけ病か！」

「殿下……」

メルケンは、やれやれと嘆息する。

勤勉なローレリアン王子は、兄の王太子とそりが合わないのだ。

なにしろ王太子は、気がむいた時にしか仕事をしない。彼に与えられている仕事といえば、論功行賞の決定書類や官僚の辞令にサンをしたりといった、簡単な仕事だけだというのに。

今にも舌打ちしそうな様子で、王子は書類の山から、つぎの紙ばかり取りあげた。

それを広げて、声を荒げる。

「これは、なんだ！ プレブナン商業地区、自警消防団団長、勤続  
20年表彰状だと？！」

メルケンは、しまつたと、額をおさえた。これは王子の機嫌がよいときをねりつて、さりげなく出す予定の書類だったのに。

しかし、説明しないわけにはいかない。

「申し訳ございません。その表彰状は、申請が来てより、もう3か月も放置されておりますもので。

式部長官より泣きつかれまして、仕方なく殿下のもとへ、おもちいたしました。

なんでも、表彰式は明日だそうござります」

王子は手にしたペンで、インク壺を何度もたたいた。

ちんちんちんと、耳障りな音が執務室の内部へ響く。

「つまり、その表彰式へまことに、わたしにサインをしようといつのだな？」

本来、国王陛下のお膝元にあたる王都の治安を守るのは、王太子の責務ということになっているだろう？

王都の治安維持に協力してくれた臣民を慰労するべく、王族として表彰状に自分の名を書きこみ、この紙切れに名誉と権威の価値をこめるのは、兄上の仕事ではないのか？

「そうなのですが……」

椅子をけつて、王子は立ちあがつた。

書類の山が、机からなだれ落ちる。

メルケンとラッティは、あわててそれに飛びつき、大惨事を回避

しようとしました。

床に飛び散った書類の上に、何かをこぼしたりしたら大変だ。ローレリアン王子の執務室へ集まる書類には、替えがきかない重要書類も多いのだ。

「もう我慢がならないぞ！」

兄上をとつつかまえて、首根っこを押さえつけてでも、たまつた仕事をやらせてやる！」

書類の山を元にもどしながら、メルケンは必死で王子に訴えた。

「仕事は、そんなにたまつておりません！」

ローレリアンさまが本気を出してお取り組みになれば、2、3時間程度で終わる量です！

ですが、それが王太子殿下の、3か月分のお仕事なのです！」

怒っていたはずの王子の表情から、力がぬけていく。

「なんだって？」

「ですから、申し上げている通りです」

「いつたい兄上は、その程度の仕事を相手に、なにをしてこずっとおいでになるのだ？」

「てこずるもなにも王太子殿下は、御公務がお嫌いなのです。

そもそも、王太子殿下のもとへ、その程度の簡単な仕事しか回らなくなつた理由は、王太子殿下御自身が、酒に酔つたり寝すごしたりされて、大切な公務に何度も穴をあけてしまわれた結果なのだと

「うう」とですよ

崩れるようにして、王子は椅子にすわる。お

「なんだ、それは？ それじゃ、国王陛下は、なにをなさつておいでになるのだ？」

父親として、息子に説教のひとつでも……」

そこで、王子は首をふった。

国王と王太子の関係は、冷え切つている。最近では、公式の席でしか顔をあわせていない様子だ。

だいたいにおいて、まだ長男に対する情が残つてゐるならば、国王はここまで次男のローレリアン王子を重用したりはしなかつたはずだ。

国王は父親である前に、一国の王なのだからと想つ。

22年前、ローレリアンと母親を王宮から遠ざけた時と同じ無情さで、今度はできの悪い長男を見捨てようとしているのだ。

ローレリアンは、さきほど机のはしに投げ捨てた紙ばさみを取りあげ、なかに挟んであつた表彰状に、ゆっくりと美しい文字を書き入れていった。

王子といつ肩書きが、今日ほどむなしく感じられたことはない。

もつと平凡な家庭に生まれていれば、兄も、ここまで無気力な人間になつたりはしなかつたのだろうか。

黒々とした文字の上に、メルケンが吸い取り紙をあて、丁寧に余分なインクを取りのぞいていく。

ため息をつきながら、ローレリアンは首席秘書官の横顔をながめた。

この男はとても優秀な男で、王子の公務にだけでなく、感情の起伏の波にまで、何食わぬ顔でつきあってくれるのだ。

自分も、いまのこの男の歳に追いつくには、もう少し落ち着いた人間になればよいのだが。四六時中忙しくしていないと不安になつてしまつおのれの余裕のなさには、すっかり嫌気がさしてしまつている。

そう思いながら、ローレリアンは小姓を呼んだ。

「ラッティ、わたしは疲れた。お茶を一杯、くれないか

すると、できあがつた表彰状を紙ばさみにもどしながら、メルケンが言つ。

「お茶を！」所望でしたら、母君さまのお茶会へおいでになればいか

がですか。今日のお茶会の会場は『夏風の間』だそうです。さつと、さわやかな夏の風を楽しみながら、お茶を召し上がれますよ」

「よしてくれ。なにが、さわやかだ。疲れているときは、『婦人方のキンキンした声を聴くのは、拷問みたいなものだ』

「そうですか。母君さまからのお手紙には、今日のお茶会には、ヴィダリア侯爵令嬢がおいでになるので、お仕事に、都合がつくようしたら殿下もどうぞと、書かれておりましたが」

王子が一瞬言葉につまるのを見て、メルケンは、してやつたりと笑う。

笑われたのは悔しいが、ローレリアンは、すでに仕事をする気をなくしていた。

「カール。どのくらいなら、席を空けてもいい？」

メルケンは手にした紙ばさみを、指先でたたいた。

「どうしても今田中という仕事は、これで終わりです。次の接見の予定は2時間後ですから、それまでにおもどりいただければ、あとのお仕事は何とでもなりますよ」

ポケットから時計を出して、一時間だなとつぶやく王子を田の端で見ながら、メルケンは呼び鈴を鳴らし、メッセンジャーを護衛隊の詰所へ走らせた。

ほどなく、護衛隊長のアレン・デュカレット卿が執務室へやつて来る。

「アレン隊長、殿下は母親さまのお茶会へおこでになるやつだ。お供をしてくれ」

「へえ、珍しいですね。おばさんたちの井戸端会議とかいつて、普段はお茶会なんか、毛嫌いしているやせに」

「ヴィヴィアニア侯爵令嬢が、おこでになるのさ」

「ああ、なるほど」

「いわむかこなど、ローレリアンは顔をしかめた。

「例のクリームを凍らせる機械に、国王陛下から特許状をいただけるよう、母へ口添えを頼んだんだ。国王陛下からの特許状があれば、禁制品の硝石だって、堂々と買いつけることができるようになるだろう。そうすれば、彼女はあの機械をつかう店の数を増やすこともできる。

貧しい人のために診療所を開くといつ、本来国がするべきことを、彼女は代わってやってくれるというんだ。王太子のわたしだって、なにか手伝えることがあれば」

「はいはい、御託はいいから、せつせと行きましょ。よかつたな。モナ様と会つのは、ひと度ぶつかりにか?」

「御託とはなんだ! 法律とはそもそも」

わあわあしゃべりながら、王太子と親友の護衛隊長は執務室からでていった。

こつてらつしゃいませと慇懃に腰を折りながら、ラツティとメールケンは、こつそり笑いあつ。

素直ではない王室殿下にお仕えするものとして、首席秘書官とお小姓は、おたがいの苦労を思いやりあつ仲だったのである。

国王陛下の寵妃エレーナ姫の茶会は、いまではローザニア王国で、一番格式の高い女性たちの集まりだった。

本来ならば王妃不在のいま、国の跡継ぎである王太子の妻の妃殿下が開催されるお茶会が一番格式の高いお茶会ということになるのだが、王太子妃は最近、病気を理由にあまり人前へは出ようとしない。

王太子と妃の間には、まもなく5歳になる姫がいたが、皇太子妃はこの姫をたいしてかわいがりもせず、一人で部屋にこもっていることが多いという。

貴族たちの間に広まっている噂によると、王太子妃は夫と容姿が似通っている幼い姫をうとんじており、養育係には、そばに近づけるなどまでいっているのだという。

また、この姫が大変な癪癩持ちで、何か気に入らないことがあると火がついたかのように泣きわめき、手が付けられなくなるという噂だった。

口さがない者たちは、姫が普通の子供でないのは、父親からの遺伝に違いないと言いあっていた。

その噂がまた王太子妃を苦しめるのだから、無責任な者たちは、さらに噂しあうのである。

エレーナ姫は、こうした無責任な噂が大嫌いだった。

そもそも彼女は、ローレリアン王子を身ごもつたとき、王宮に入りする貴族たちの噂にさんざん苦しめられた過去を持つ。何度も不審な事故にあつたり、食べ物に虫の死骸や汚物を入れられたりしたのも辛かつたが、なによりも精神的に彼女を追い詰めたのは、無責任な噂だったのだ。

そうした過去の経験から、エレーナ姫は自分のお茶会で、貴婦人たちが他人の噂話をするのを禁じてしまった。

女性の口から出る他人の噂を封じるのは困難だと思われがちだが、意外にもそれは簡単であった。

エレーナ姫は「どことこの子爵が、また使用人の女に子供を産ませて捨てた」などといった無責任な噂話を始めた名門伯爵家の夫人にむかって、ほんの少しだけ怒った顔で「わたくし、人の噂は、あまり信じないようにしているのです。けれども、今のお話は聞き流せませんわ。その子爵が捨てたという、何人の女性や子供の、不幸を思いますとね。噂が真実かどうかを調べてほしいと、息子に頼んでみるとことにいたします。ですから、いま、その噂の内容について、わたくしに返答を求めるいでくださいましね」と、言つたのだ。

言われた伯爵夫人は震えあがつた。

エレーナ姫の息子、つまりローレリアン王子殿下に、自分のことを無責任な噂話に興じる愚か者だなどと報告されでは大変だ。

その伯爵夫人は、お茶会のあいだじゅう、どうか噂の出どころが自分だと王子殿下には言わないでほしいと、エレーナ姫に懇願しつづけた。しまいには哀れになるほど、憔悴しきつっていたといつ。

以来、エレーナ姫のお茶会では、他人の噂話は「法度となつて」いる。変な噂などを話題にすれば、すべてローレリアン王子へ報告がいつてしまつと、招待客たちは思つてゐるのである。

だから、エレーナ姫のお茶会は、とても優雅な雰囲氣で進行する。詩の朗読があつたり、新作歌劇の感想を論じあつたり、流行のファッションについて語りあつたり。

まさに、国一番の格式を誇る女性の集まりにふさわしい格調の高さである。

そんな高貴な雰囲氣のなかで、今日のお茶会の話題を一手にさらつたのは、内務省長官ヴィダリア侯爵の令嬢モナシェイラだつた。

彼女はローレリアン王子の妃筆頭候補として、いままさに噂の渦中の人である。

しかし、エレーナ姫のお茶会で、噂話は禁じられている。そのルールのなかで、モナが本日のお茶会の主役になれたのは、やはり彼女が普通の貴族の令嬢ではなかつたからだつた。

まず、お茶会に招待されていた貴婦人たちはみな、モナのファッショングに驚いた。

夏の午後のお茶会には淡い色のドレスを着て参加するのが貴婦人たちのあいだの暗黙の了解だというのに、彼女は紫がかつた紺色の乗馬服を着ていたのだ。さすがに上着の下にはズボンではなく、スカートをあわせていたが。

ヴィダリア侯爵令嬢モナシェイラは、そんな目立つスタイルでお茶会の会場になっている『夏風の間』へ入室してくると、あっけにとられている招待客の前を颯爽と通りすぎ、エレーナ姫のままで優雅にひざを折って、あこさつの口上をのべた。

「このよつな姿で御前につかがいましたご無礼を、どうぞお許しくださいませ。

わたくし、診療所の建物を建てている現場へ、毎日馬で通つているんです。下町の狭い道には、馬車では入れないので」

侯爵令嬢とエレーナ姫の様子をうかがつていた貴婦人たちへ、驚きのあまり言葉を失つた。

国王陛下の御寵妃さまからの招待を受けておきながら、この令嬢は出先から直行で、王宮へ上がつたというのだ。自分たちは、朝から支度に、かかりつきりだつたといふのに。

しかもエレーナ姫は、王家を軽んじてはいるともとられかねない侯爵令嬢の行動のことなど、まったく気に留めていらっしゃらぬ様子で、にこやかに笑つておいでになる。

「ええ、お噂は、息子から聞いておつますよ。いよいよ下町に、診療所を開かれますのね」

「はい。ようやく、開設のめどが立ちました。これからもいろいろと問題はあるでしょうけれど、なんとか頑張つてやつていくつもりです。

エレーナさまには、クリームを凍らせる機械へ勅許状がいただけますよ、国王陛下へのお口添えをちょうどいしまして、心より感謝申し上げます」

「そのくらい、お好いご用ですね。

崇高な目的のためですもの。

おこしこ菓子をおつくりになつて、お店を繁盛させてくださいね

「はい、ありがとうございます」

「わたくしも、直接お手伝いができたらしいのこと、思いますわ」

国王の寵妃と侯爵令嬢は、手を取り合い、微笑みをかわした。

貧しい人々の暮らしを、一人はよく知っている。そつと握りあつた手から、エレーナ姫とモナは、おたがいに相通じるものを感じ取つたのだ。

エレーナ姫は侯爵令嬢の手を握つたまま、お茶会の客に宣言した。

「みなさま、モナショイラ嬢は、プレブナンの下町に住む貧しい人々と共に働き、助けの手をさしのべようとなさつておいでです。その素晴らしい行動に対し、いらぬ批判は、ご無用に願いますよ。

人の上に立つべく生まれついた者には、高貴なる義務がござります。何をおいても、まず臣民を守らなければなりません。そのことについては、皆様も同意してくださいますわね？

ときどき、思い出したように孤児院への慰問をおこなつたり、こまつている人にやさしい言葉をかけてあげたりするだけでは、その義務は果たされませんのよ」

その場にいあわせた者たちはみな、深く首を垂れて、エレーナ姫

のお言葉を拝聴した。

そして、ヴィダリア侯爵令嬢は、やはりローレリアン王子殿下の妃筆頭候補だったのかと、心中でうなずいたのだった。

\* \* \* \*

そんなわけで、エレーナ姫のとなりという最上の席に案内されたモナは、お茶会がはじまるやいなや、お客の全員から本日の主役あつかいをつけることになつたのだ。

実際、彼女は主役にふさわしい目立ち方をしていた。

女同士の集まりで美しい衣装を見せあうのは、貴族の女性たちにとって最高の楽しみだ。今日も、それぞれの夫人や令嬢たちは、自慢の衣装を身にまとつていた。

けれど、夏用の淡い色のドレスは、どんなに工夫を凝らしても、どれも同じような印象におちいりがちだ。そのなかで、きつぱりとした濃い色の乗馬服を着ているモナは、誰よりも目立つたのだ。

しかも、モナが着ていた乗馬服は、一風変わったデザインだった。

上着の丈は短く、前のボタンをすべて開けて、上着の下に着たブラウスの美しさを、わざと出して見せるようになっている。スカートの布の断ち方を工夫して、すつきりとした形につくりあげてあるのも、もちろんブラウスの柔らかさを見せつけるための演出だ。

問題のブラウスには、12段にもおよぶレースの前立てが重ねて縫い付けてあった。実用本位の上着とスカートの味気なさを、その華やかなレースのブラウスが、帳消しにしてしまうほど美しさだ。

すみれ色の瞳に黒髪というモナの個性的な容貌を、紺色のドレスと純白のブラウスは、これ以上ない組み合わせで引き立てているのである。

エレーナ姫に満足していただけた無難な話題を求めていた貴族の女性たちが、この美しい衣装のことを話題にしないわけがなかつた。

「まあ、モナショウラさま！ なんて素敵な御衣裳なんでしょうー。」

甘え上手そなごうかの御令嬢が、真っ先にそう誉めそやすと、ご婦人方はいつせいに衣装の話題へ飛びついた。

「その上着のデザインは、やはりブラウスを見せたいがためのものです？」

「ブラウスが美しすぎますわ」

「贅沢なレース使いですこと。さすがはヴィダリア侯爵家。ご令嬢の御衣裳に、物惜しみはなさいませんのね」

モナは、にっこりと笑つて答えた。

「「」のレースは、機械で編んだものですから、それほど高価ではありませんのよ。

いろいろ試作品を作つてみて楽しかったものですから、だれかに見てもいたくなつてしまつて、このブラウスを作つてみましたの

「機械で、ですって？」

「よく見せていただいて、よろしいかしら？」

「まあ、12段のレースすべてが、ちがう花の意匠だわ！ 近くによらなければ、わかりませんでしたけれど」

夢中になつたご婦人方は、とうとう自分の席を離れて、モナのまわりに集まつた。

モナは、何食わぬ顔で説明をつづけた。

「12の月の誕生花を、図案化してみました。わたくしが考えた図案を、技師たちが機械編みのパターンに起こしますのよ。

機械の性能を考えながら、花の模様をデザインするのは、とても面白いですね。

たとえば 「

30分後には、ご婦人方はたつぱりと美しいレースについての情報を入れ終わり、ご満悦だった。

この国でもつとも権威のある女性の集まりとされるエレーナ姫のお茶会に招待され、話題の人物であるヴィダリア侯爵令嬢と親しく

話せただけでなく、最新流行のファッショングの話題をいち早く聞けたなんて、なんと幸運だったのだろうか。

社交界のだれよりも早く、あの美しいレースを自分のスタイルに取り入れれば、さわかし注目を浴びることになるだろう。

「婦人方の顔には、そんなはやる気持ちが、露骨に表れていた。

招待客の話を微笑みながら聞いていたエーラー・ナ姫は、ゆつたりとあおぐ扇の影で、安堵の笑みをもらしていた。

このお茶会が、こやういう雰囲気になるように計算して、おしゃれ好きで有名な夫人や令嬢たちばかりを選んで集めたのは、じつはエーラー・ナ姫の計略だった。

息子から、ヴィダリア侯爵令嬢は面白いお姫様なのだという話を聞いていた彼女は、自分も侯爵令嬢の壮大な計画に、協力してやりたくなっていたのである。

人を集めて、その場で駆け引きをするなど、本當は、あまり得意ではないエーラー・ナ姫だ。

けれど、ヴィダリア侯爵令嬢のことを話しているときの息子は、とても楽しそうに見えた。彼女は、とにかく息子のために、何かをしてやりたかったのだ。

愛するひとに抱きしめてもうつ幸せに溺れて、エーラー・ナ姫は国王バリオス3世へ、求められるまま、その身を任せてしまった。

男と女が愛し合えば、いつかはその愛の結晶が新しい命となつて

芽生えることなど、若さある深窓の姫君だったエレーナ姫には、想像すらできなかつたのだ。

自分は、あまつにも重すぎる宿命を背負わせて、息子をこの世に産み落としあつた。

彼女がその事実に気付いた時には、すべてが後の祭りだつた。

こまでも、せざせざと懇こ出せん。

愛しくてならない幼いわが子が、みずから流した血の海のなかに虫の息の状態で転がつてゐるのを、見つけたときの恐怖。

わが身を切り裂かれるよりひどい痛みを感じて、エレーナ姫は絶叫した。

世界のすべてが終わつてしまつ絶望を、彼女は、そのとせ、せざと感じたのだ。

あの恐ろしい事件と気が遠くなるほど長い別離の時をへて、ローレリアン王子との再会を果たした瞬間に、よくぞ無事に育つてくれたと喜びもしたけれど。

いまた、エレーナ姫は、得体のしれない不安ことりわれている。

親の愛を知らずに育つた息子は、身の内に、なにか空虚な思いを抱えているようなのだ。

彼は、その空虚を埋めるためとでもこいつかのよつて、国を背負つ王子としての責務に、のめりこんでいく。

人々は口をそろえて、ローレリアン王子せの國の将来をまかせるに足る、立派な王子であるといつ。

その期待を裏切ることなく、次々に成すべきことを成していく息子を見ていると、エレーナ姫は悲壮感のようなものを感じてしまうのだ。

「エレーナさま、エレーナさま」

そつと腕をゆすりられて、エレーナ姫は我にかえつた。

彼女のすぐそばには、ヴィダリア侯爵令嬢の心配そうな顔があつた。

「お疲れなのでは？」このところ、午後になると暑いですから

令嬢の瞳には、心からエレーナ姫を心配してくれている、思いやりに満ちた人柄がうつしだされている。

不思議な色の、瞳だつた。

ローザニアの大地に、春を告げる花の色。

陽だまりに群れて咲く、すみれの花と同じ色の瞳だ。

「大丈夫よ。」めんなさいね。ちょっとだけ、ほほつとじてしまつたの

「あまり、お洋服の話は、面白くなかったのですね」

「そんなことは、ありませぬよ。監さんも満足してくれば、お茶会を主催したわたしあも、嬉しいのですから」

「毎回、どんな話題で進むお茶会であるのか、気を使っておいでになるのですね。」

「御苦労は大変なものだと思つます」

「わたくしが、国王陛下やお国のためにできることなど、本当に限られておりますからね。微力とはわかつておりますけれど、出来ることは精一杯やらなければ」

令嬢は、真摯な瞳でエレーナ姫を見つめる。

「立派ですか。わたしも、見習わなければ」

思わずエレーナ姫は、令嬢の手を握つてしまつた。

「見習うだなんて。あなたは、あなたにしかできないことを、もうすでに一生懸命やつておいでになるじゃありませんか」

愛する人といつしょにいたいと、それだけしか考えていなかつた若っこじんの自分の姿を振り返れば、エレーナ姫には令嬢がたのもしくさえ見えるのだ。

じつとエレーナ姫に見つめられた令嬢は、恥ずかしそうに答えた。

「そんな、たいそうことではないんですよ。」

「わたしは、いつも思いつきで行動を起こすものですから、周囲の者達は振り回されて、しまってばかりです」

「きっと、そのくらいの勢いで、よいのだと思いますよ。この国で女性がなにか行動を起こそうとするとき、考えこんだら最後、身動きがとれなくなりますからね」

「やついつてくださいるのよ、エレーナさまだけですわ。父や兄たちからは、ショッちゅう怒られます。もつ少し、おとなしくしていらっしゃないのかと」

エレーナ姫は笑った。ちょっとすねた表情になつた令嬢は、とても可愛らしかつたもので。

「おとなしいモナシヨイラさまなんて、想像もできませんわ。建国節の舞踏会で、空に舞い上がってしまい、その勢いで楽しそうに踊つていらしたあなたが、本来のあなたなのでしょう？」

席を離れて令嬢のまわりに集まつていたご婦人方が、ざつと笑つた。

そして、口々に、また美しいドレスのことについての話をはじめ、お茶会の話題は最高の盛りあがりを見せたのだった。

ローレリアン王子がお茶会の会場へ姿を現したのは、それから、ほんの少しあとのことである。

王宮の『夏風の間』は、窓を開放して木漏れ日があふれる庭と室内を一体化し、さわやかなローザニアの夏の風を楽しむための部屋だつた。

風にそよぐ葉擦れの音が満ちた室内に、淡い色のドレスを着て群れてさざめき笑う貴婦人たちの姿は、とても涼しげで美しく見えた。なにしろ女性たちは、エレーナ姫とヴィダリア侯爵令嬢がすわるソファーを中心に、床にすわったり、後ろからのぞきこんだりといった、思い思いの姿で集まつっていたのだから。

「これはこれは、みなさん」

王太子は『夏風の間』に入室してくるなり、感心した様子で言った。

「いや、どうぞ、お立ちにならな」でくださ」。どうぞ、そのままで」

王子殿下がいらしたというので、あわてて立ちあがつて王族への礼を取ろうとした貴婦人たちを、王子はしぐさでおしどめる。

「美しいみなさんが笑みを浮かべて集つ姿は、まるで一幅の絵のようですよ。

「まあじばりく、わたしにも、その様子を楽しませてくださ」

侯爵令嬢のまわりに集まっていた女性たちは、老いも若きもいっせいに頬をそめた。この場の雰囲気を楽しんでいる様子の笑顔を見せた國一番の貴公子から、「美しい」とほめられて、嬉しくならぬい女性はいない。

王子はそのまま彼女たちのもとまでやつてきて、一人一人と、ひとことびずつ挨拶をかわした。

女性たちは、うつとつと、王子殿下を見あげた。

ローレリアン王子は、今日も飾り気のない黒い法衣姿である。そのすつきりとした衣装のせいでの、王子の若さと美貌は、際立つて見える。

それに、王子の三歩後ろに、つねに控えている若い将校が、また麗しいのである。

かつちりとした濃緑色の近衛士官の装束に身を包み、無愛想な顔をした強そうな青年。

立派な体格ではあるけれど、彼はいわゆるむくつけ男ではない。それに、しなやかですらりとした彼の立ち姿の背後から立ちのぼるピリッとした気配は、女性たちの心を、ひどく騒がせるのだ。

王子との挨拶がすむまで、貴婦人たちは興奮したままだった。全員がほほを赤らめている様子は、まるで『夏風の間』の気温が、急激に上がったかのようであった。

挨拶をすませた王子は、侯爵令嬢のななめ前に席をしめ、お茶を

一杯飲むあいだ、女性たちの話をおもしろやうに聞いていた。

貴婦人たちはすっかり、ヴィダリア侯爵令嬢に夢中だったのだ。

節度をもつて着飾り、世界の流行をリードしていくことも、ローザニアの貴族に生まれた女性にとつては、国のために大切な仕事ですという侯爵令嬢の主張は、貴婦人たちのプライドを心地よく刺激したのだ。

すでに全員が、ファッショングに關することなら、どんなことでも相談に乘りますよという約束を、侯爵令嬢に与えていた。

その約束を受けて、大喜びの侯爵令嬢は、つきつきに質問をくりだすのだ。

「柔らかい羊毛のフェルトで、なにか気の利いた小物を作るアイデアはありませんか?」などと。

質問に対して、答えはいくつも返つてくる。

お茶会に集まつた貴婦人たちは、エレーナ姫の思惑通り、ヴィダリア侯爵令嬢のよきアドバイザーと化していた。

\* \* \*

お茶を一杯飲んだあと、ローレリアン王子はヴィダリア侯爵令嬢を誘つて、『夏風の間』の外につくられた、森の木立を模した植え込みがみごとな庭へむかつた。

もちろん、お茶会の招待客の手前、一人だけで姿を消してしまうわけにはいかないので、王子と侯爵令嬢は部屋から見える場所にとどまつてゐる。

腕こそ組んではいないが、仲良くよりそつているように見える二人の姿を遠目に拝見して、貴婦人たちは、こつそり言いあつた。

エレーナ姫のお茶会で噂話は「法度だけれども、こいつ噂ならよいではないかと。

「なんておにあいの、お二人なのでしょうね」

「賢くて行動力もあるモナシヨイラさまのことは、王子殿下も憎からず思つておいでになるように見受けられますし」

「実際、お二人は恋仲ですか？」

たずねられたエレーナ姫は、あいまいに笑つた。

ローレリアン王子は、自分には結婚など必要ないと、何度も公言している。今の王子の立場を思えば、その選択も確かにありかと、理解もできるのだ。

けれど、たつた一人の息子には、愛のある結婚をして幸せな家庭を築いてもらいたいと思うのも、親心である。

エレーナ姫は、ため息を押し殺しながら、おだやかに言った。

「わたくしにも、あの「一人の」ことは、よくわからないんです。でも、これからもモナシヨイラ嬢のお手伝いをする茶会は、時々開きたいと思いますわ。

みなさん、その時はまたいらして、彼女を助けてあげてくださいましね」

「ええ、それはもちろんですわ」

「わたくしたちも微力ながら、ローザニアの経済発展には、つくりたいと思いますもの」

「モナシヨイラさまが、わたくしたち女にもできる」とあると、その方法を示して貰うのだしたう、とてもありがたいですわ」

貴婦人たちは口々に、そう答えたのだった。

野次馬たちからは、『夏風の間』の前庭にある木立のしたで、恋人同士の会話を交わしていると思われていたローレリアンとモナであつたが。

しかし、この一人、実際のところは、あまり色恋沙汰とは関係がないことを話していたのである。

モナは、さつきからさかんに、商売へのアドバイスをローレリアンに求めていた。王子と呼ばれるようになつてから三年の間、政治や経済だけでなく、国民の心理にまで探究心をもつてかかわってきたローレリアンは、モナの絶好の相談相手だったのだ。

王子の後ろに立つて周囲に警戒の神経を張り巡らせながら、アレンは、この一人、どうしようもねえなど、あきれていた。

モナの口調は、あいかわらず可愛いおねだり口調なのだが、会話の内容には色氣がかけらも感じられない。

「ねえ、リアン。

クリームを凍らせる機械に国王陛下からの特許状をいただけたら、わたしはお店を、もう何軒か持とうかと、考えているのだけれど

王子は、ふむと答える。

「自分で店を持つためには、かなりの資金がいるんじゃないのかい？ いまは最初の店のつけを、投資に回せる余裕だつてないだろ

う？ 経営そのものも、手間がかかるし。

だから、店を作つたり経営したりするのは他人にまかせて、きみは機械をその連中に貸し出して、売り上げの上戻をはねねばいい

「それって、なんだか、ずるくない？」

「ずるくなんかないぞ。機械は特許状を持つた者にしか作れないんだ。その機械を借りてもうけようとする者達が、お礼をよこすのは、あたりまえの義務だらう」

「そうねえ。

お店をやつてみないかと誘えそうな人には、何人か心当たりがあるし。

冷たいクリームを売りにする店だから、店主はお菓子にくわしい女性がいいと思うのよね。

それに、店の付加価値を高めるためには、王都ではなく、他の大きな街でお店を持つほうがいいわよね。たとえば、すごく景気がいいらしい、ラカンとか。

どこの街でも、このお菓子をあつかっているのはこの店だけで、ここにしか食べられないって状態にしておくのよ

王子は田を丸くする。

「きみみたいに元気な女性が、まだほかにも、何人もいるつていうのかい？ しかも、よその街へ行つて商売を始めてもいいというほどの、勇ましい女性が」

モナは得意げに答えた。

「あら、リアンは女性つてみんな、か弱いものだと思つているの？」

男性に頼らざるに自立して生きていきたいと望んでいた人のつて、  
けつこういるわよ」

「ふーん」

「この素敵なブラウスも、そんな女友達にデザインしてもらつたの」

「今までにない、変わつたデザインだね」

「わかる?」

12段も重ねてあるブラウスのひだを、モナは嬉しそうになつた。  
「こういう、今までにない発想をする人つて、普通の人じゃないの  
よね」

「普通じゃないつて、どういう女性のことをして言つんだい?」

「花街の女性よ。

花街の女性は、男の人をその気にさせるのが商売でしう?  
売れつ子になるためには、他と同じじゃ、自立たないし。  
だから、彼女たちは綺麗なものに目がきくし、それをどう使うか  
も、普通の発想じゃなくて、あつと驚くような方法を思つづくの

「花街の女性つて……!」

ローレリアンの顔色が変わつたことなど気にも留めず、モナは  
話しつづけた。

「今日はエレーナさまのおかげで、貴族の女性から、一般的な価値

観の意見を集められたわ。

花街の女性からは、時代の最先端の意見を集めれるの。

商売を考えるためには、情報集めが、なによりも大切だと思つ

よ

「モナ、モナ！　たのむから、ちょっと黙つていてくれ

放つておいたら、いくらでもしゃべりそうなモナを、ローレリアンはしぐさで黙らせた。

つまり、彼女の二の腕を、両手でつかんだのだ。

遠くの『夏風の間』から、その様子をながめていた貴婦人たちが悲鳴をあげる。

なにしろ、王子殿下が、侯爵令嬢を捕らえではなさないという態勢に入ったのだ。つぎは抱擁か、それとも接吻かと、誰もが思った。

真剣な色の瞳で、ローレリアンはモナを見つめた。

「嘘をつかずに、わたしの質問に答えてもらいたい

「ええ、いいわ

「花街の女性とは、どこで知り合つた？」

「花街でに、決まつてゐるじゃない

「花街へ行つたのか？」

「モナー。」

ああとばかりに、ローレリアンは空を仰ぎ見た。木立の向こうに見える夏空は、青くて、まぶしい。眩暈がしそうなほどだ。

「わたしは、このあいだ、きみの兄上に、たずねたんだ。あなたの妹君は、ずいぶんといろいろ活動的にやつておいでになるようだけれども、彼女の身辺の安全には、もちろん侯爵家で注意を払つておいでになるのだろうねと。

彼は苦笑しながら、護衛は何人もつけてありますと答えた。わたしは、どうにも、そのときの彼の苦笑が気になつて……

ローレリアンは、モナをゆすつた。

「正直に言つたまえ！ どうせつけて、花街へいったのか

「さつきから、正直に話してるわ。

花街には、自分の足で歩いていきました。

護衛は、途中で巻いてやつたわよ。

足手まといだから

「足手まとい！？」

「そうよ。姫君がこんな場所へ出入りしてはいけませんとか、うるさいことを言つうですもの。

だいたいね、リアン。

花街の女性は、たまたま貧しい家に生まれたとか、赤ん坊のころに親から花街へ売られてしまったとか、みんなやむにやまれぬ理由

で、春を売っているのよ。

まさかあなた、花街の女性は人として劣るとか、けがらわしいとか、言いだすんじゃないでしょうね!」

「いや、わたしが言いたいのは」

「そうね。どんな境遇に生まれても、人の命の価値だけは、神々の前に平等ですものね。

命はひとりに、ひとつだけ。

替えはない。

そうでしょう? 神官の、ローレリアン王子殿下

「そのとおり。人の命の価値に、貴賤はない

「そうおっしゃるなら、ほうつておいてけりだい!」

「ほつっておけるわけがないだろ!」

きみは、わたしの大切な友人だ。

危険にみずから飛びこんでいくようなまねは、してもらいたくない。

それに、きみがひとりで花街へ出かけていったなんて話が、他人に知られてみる。嫁のもらい手が、なくなってしまうじゃないか! わたしは花街の女性に偏見など持たないけれど、世間一般の常識とは、そんなものだろ!」

ローレリアンはモナから、突き飛ばされた。彼女のすみれ色の瞳は、怒りで煌めいている。

「心配ご無用よ!」

お嫁になんか、いかないもの!

だいたい、どこに嫁に行けっていうのよ！

リアン、あなた、知ってる？

世間では、わたしはあなたの、お妃さま最有力候補なんですってよ！

プレブナンの庶民の間では、『踊る神官』なんてパンフレットが、回し読みされているくらいなんだから

「あれは！」

「あなたと恋仲だつて噂されるなんて、光榮よ。  
望むところだわよ。

おかげで、アミテージの布地仲買人のところには、刺しゅう入りの薄絹の注文が殺到しているんですつし。  
意図したとおりになつて、わたしは最高に満足よ

王子の勢いは落ちていく。

「わたしと恋仲だと噂されれば、きみの縁談にも、差し障りが出る  
ということか。

将来有望な青年ほど、王家に対しても遠慮してしまつだらうから。  
浅はかだつた。考へが足りなかつたよ。舞踏会で、きみと踊つた  
りして」

うなだれた王子の前で、逆に王ナは怒つてしまつてゐる。興奮の  
あまり、眼に涙が浮かんでしまつほどに。

好きでたまらないローレリアンから、嫁入り先の心配をされたう  
え、いっしょに踊つたのはまちがいだつたと、謝罪されてしまつた  
のだ。モナの恋心は、行き場を失つたよつなものである。

それに、女心を理解しない堅物の王子にも、腹が立つ。

「お嫁になんか行かないから、関係ないって言つてるでしょ！」

余計な心配は、『無用よ！  
わたしは、今までだつて、これからだつて、自分が正しいと信じることをするの。

花街へ行くのだつて、やめないわよ。

花街の人たちの情報網は、すごいんだから。  
こんなパンフレットが出まわつているわよと、『踊る神官』を見  
せて教えてくれたのも、花街の友達よ。  
彼女が働いている店で時々、その手のパンフレットの編集打ち合  
わせがあるらしいわ。

どんな男性が出入りしても、けして怪しまれることなんかない。  
花街つて、そういうことがありますものね

ローレリアンは思わず、自分の後ろに控えていたアレンのほうへ  
視線を投げた。

アレンの表情にも、緊張が走つていて。

「モナ」

真剣きわまりない様子で、ローレリアンは言つた。

「その女友達とのつきあいは、金輪際やめてほしー」

「あなたに、わたしの交友関係を、どうにつけられたくないわ

「そのパンフレットを作つてゐる男たちは、現在の王朝を倒して、  
革命を起こそともくろんでゐる危険な連中だ」

モナの瞳から、興奮の気配が消える。

「なんですか？」  
それじゃあ、ますます、彼女からは情報をとらないといけないじゃないの」

「だめだ」

「rian...」

「みずから危険に飛びこんでいくようなまなは、許さない」

モナは一步、あとずさった。

ローレリアンの瞳には、強い光がある。

その光は、過去に何度も、モナを立ち止ませた光だった。

女のくせに、これ以上、男の世界へ立ち入りとするなどモナを拒否するときに、男たちの目に宿る光である。

ふたたびふつぶつと、モナの感情は、熱く沸きあがりだす。

「それは、命令なの？」

ローレリアンは冷たく答えた。

「ああ、命令だとも。

わたしの命令が受けないとこつのなら、きみの兄上なり父上なり

に、命令する。

きみを侯爵家の屋敷から出すなどね

「横暴だわ！」

「なんとでも言いたまえ。王子としてのわたしに、どの程度の力があるか、試してみたいのなら試してみるがいい」

かつとなつたモナは、ローレリアンにむかつて手を振りあげた。

最終的には、理屈より、感性を信じる彼女なのである。権力で自分をしたがわせようとする王子を、許せはしなかつた。

しかし、彼女の手はあっけなく、ちがう男に捕まえられる。

冷静な表情の近衛士官は、モナの手をつかんで言った。

「モナ様。  
人目のある場所で王子殿下の横面を張つたりなされでは、こまります。

王子殿下には、王子殿下のお立場というものががあるので

「はなしなさいよー！」

力いっぱいもがいてモナは自分の手の自由をとりもどし、最初に近衛士官を、つぎに王子をにらみつけてから、踵きびすを返した。

立ち去る彼女の後ろ姿を見送りながら、アレンは小さくひゅうと、口笛を吹いた。

「あいかわらず、す」お姫さまだ

ローレリアンは、何も答えない。

だが、王子殿下の影となつたアレンには、このまま悶々と悩むだらう王子を、放置しておく気はなかつた。

叱られることなど百も承知で、ずけずけと言い放つ。

「あのなあ、リアン。この場では、いちおう、モナ様の手をとめたけどな。人目がなかつたら、とめやしなかつたぞ。

一度、殴られでもしたほうがいいんだ。大馬鹿王子殿下は。

おまえ、モナ様にひどいことを言つたつて、自覚はあるのか？

モナ様が好きなのは、おまえなんだぜ？

そのおまえから、将来有望な青年をつかまえて嫁に行けなんて言われたら、傷つぐだろ。

おまえだって、モナ様のこと、好きなくせして。

いざとなれば自分の命をさしだせるほどだつて、俺は知つてゐるんだからな。

それなのになんで、モナ様の想いを受けとめてやらないんだよ？

周囲だつて、おまえとモナ様は、お似合いだつて認めてる。

おまえさえ、その気になれば、國中が祝福してくれる恋人同士になれるのに

ローレリアンは皮肉一杯の笑みを唇の端に浮かべながら、アレンに言った。

「それで？

彼女を、このどうしようもない義務だらけの、自由など欠片もない生活に縛りつけるのか？ 彼女は大空を飛ぶ鳥のようになり、自由に

生きている女性だというのに。

だいたい、彼女のためなら死んでもいいと思えたのは、わたしが何も持たない神学生だったからだ。

いまは、ちがう。

彼女が国か、どちらかを選ばなければならなくなつたら、わたしはまちがいなく、国を選ぶ。

ローザニアの500万を超える民の命運と、一人の女性の幸福を、同じ天秤に、かけられるわけがないだろ。わたしはモナに、何もしてやれない。何の約束もできない。

だから彼女に、愛を【わ】うことはできない

「リアン……」

アレンは親友の名を呼んだきり、黙りこんでしまつた。

王室へかけてやるなぐさめの言葉など、なにも思いつけない。

いまの告白をモナに聞かせてやれば、モナは喜んでローレリアンへ、終生の愛を誓つだろ。彼女は人を愛することに、代償を求めるような女性ではない。

けれど、ローレリアンは、自分がだけが幸せを得るような関係を望んではいない。

彼の願いは、ただ一つだ。

愛する女性には、幸せになつてもらいたい。

ただ、それだけなのだ。

ローレリアンは執務へもどるべく、王宮の建物のほうへ歩きはじめた。

固い声が、アレンを呼ぶ。

「アレン」

「はい」

「モナが出入りしている娼館の名をつきとめる。街中に潜ませているわたしの間諜を、すべて使っていい。必要なら、おまえも街にでろ。

一刻も早く、ジャン・リュミネを捕らえるんだ。

多少脅したくらいで、モナがおとなしくしているとは思えない。

彼女を危険にさらすな。

これは、わたしの唯一のわがままだ。

聞き届けてくれ」

「しようじしました

彼らが『夏風の間』を通り抜けるとき、その場に集まっていた貴婦人たちは、恐れおののいて王子殿下に臣従の礼を取つた。

もうローレリアン王子の横顔には、やわらかな笑みなどなかつた。

その後ろにしたがう桂冠騎士の横顔は、もつと硬質で冷たい。『氷鉄のアレン』とあだ名され、王子に絶対の忠誠を誓う廉正剛直な性質が、そのまま表れた横顔である。

責めたエレーナ姫が、ローレリアンのあとを廊下まで追つてき  
た。人目がないところで、彼女は真実を知りうとしたのだ。つま  
らない噂の種を、無責任な貴族たちの間に、ばらまきたくなかったの  
で。

「ローレリアン、モナシエイラ嬢と喧嘩でもなさったの？  
彼女は、わたくしに暇<sup>こじま</sup>をするとき、涙ぐんでいましたよ」

母親らしく問い合わせながら息子に追いすがろうとしたエレーナ姫  
は、行く手をアレンにはばまれた。

「どうか、エレーナさま。  
我が王国の未来を担う、王子殿下の苦しい御胸中を、お察しきだ  
れこ」

「ローレリアン！」

その場に立ちすくみ、廊下に一人取り残されたエレーナ姫は、悲  
しげに息子を呼んだ。

あわれな息子を不憫がる響きを母の声から感じとったローレリア  
ンは、感情を押し殺すために拳を固くにぎり、王子の義務をはたし  
にもどるべく、せりに歩く速度を速めた。

王子の親友である護衛隊長は、黙つてそのあとに従つた。

そのまま夏の午後の時間はすぎてゆき、王宮は政務にいそしむ人々が仕事を終える時刻を迎えた。

ローザニア王国の王都プレブナンは四季の変化がはつきりしており、時のうつろいが、しみじみと感じられる街だ。8月の日没は午後7時をすぎたころなので、王宮の窓から見えていた夏の雲は、いまだ、まぶしい陽光のなかにある。

夏特有の湧き立つような形の雲は、まるで収穫されたばかりの綿花の山のようだなど、ローザニア王国の宰相であるカルミゲン公爵は思っていた。

精力的に國のあちこちを巡つて歩いていた若いころ、王国の南の平原で見た光景は、いまだに忘れられない。

茶色く枯れはじめた綿花の畑には、一面に綿の実りがあった。

そのなかを、大勢の老若男女が笑いながら歩きまわつており、農道に停めた荷車のうえに、摘み取つた綿花の山を築いていくのだ。

我がローザニアは美しく豊かな國だと、宰相は思つ。

その國を守りたい一心で、彼は自分の身体が枯れて朽ち果てそうになる今日まで、片時も休むことなく働いてきた。

いま、彼の目の前の夏雲の輪郭は琥珀色にかすみ、本来の色を失

つて いる。

最近ではめつきり視力が弱り、眼鏡をかけても何もかもがかすんで、そのうえ色が変調して見えるのだ。

医者は、老眼のほかに『白そこひ』という病が進行しており、いすれば視力が失われるだろうと言っていた。この病は年齢に関係する病で、長生きをした人間は誰しもが侵される病なのだという。

人の命数には限りがある。

おそらくこの病は、神々が戦い疲れて老いた男に引導を渡そうとなさる、御神託なのだ。

目が見えなくなる前に、もう一度、あの豊かな綿花の畑を見ておきたかった。

もつとも、それはもう、叶わない夢だが。

老いた今の自分の身体は、馬車に何日もやうやくられるような長旅には、とても耐えられないだろうと思つたのだ。

「何を見ておる、わが宰相よ」

公爵が立つ窓のそばに置かれた執務机にすわつて いる男が、仕事の手を止め、たずねてきた。

ふりむいたカルミゲン公爵は、相手の顔を見て、ふと笑つた。

相手は、むつとして言つ。

「なんなのだ、人の顔を見るなり、こきなり笑うとは」

公爵は、軽く首をたれる。

「申し訳ございませぬ。

おのれの老いについて考えておりましたもので、陛下の御尊顔を拝しました瞬間、なるほど、わたくしめだけではなく陛下も御年をしておいでだと、しみじみ思つてしまつたのでござります」

相手の男、ローザニア王国第18代国王バリオス3世は、手にしたペンをペン立てにもどし、自分の宰相へ笑い返した。

「あたりまえであろう。

余の長男はすでに三十路にあり、次男は二十一歳。余も歳を取つた。

「十八歳で、この国の王位についてより、早くも32年であるぞ」

「御年、五十であらせられますな」

「うむ」

「御年を頂かれたなとは思いますが、とても<sup>よわい</sup>五十には見えませぬ。世辞ぬきに申し上げますが、陛下はお若いによう、男前でございましたゆえ。

「次男のローレリアン王子殿下の御姿を見聞いたしますと、わたくしは昔が懐かしくなりませぬ。往時の陛下のお姿に、王子殿下は、とてもよく似ておいでになります」

「子の世代を見て、往時を懐かしむよつになれば、それこそが老い

た証なのであるうな。

先代の王の時代につづいて、余の治世をも支えてくれたそなたにしてみれば、余とて、子供のようなものであるうな。

よくぞ、ここまで長く、王国に仕えてきてくれた。感謝してある

「もつたいないお言葉をちょうどいし、恐悦至極に存じます」

国王は、最近、考え事をするとき田代のふたりに浮かぶようになつたしわを寄せ、深いため息をついた。

「そなた、身体が辛いのか？  
すこし前までは、余が老いについての話題に触れようものなら、自分はまだまだ壮健であると機嫌をそこね、しばらく怒つていたではないか」

じつと立つていたせいで動きだすときに軋む身体をなだめながら、カルミゲン公爵は国王へ歩みよつた。

「気がゆるんだのかもしれない。

わたくしは、ただ王国の未来を憂えて、あと十年、あと五年、あと三年と、みずから限度と決めた年月をすぎたびに、引退を先延ばしにしてまいりました。

先のことが、心配で、心配で、なりませなんだ」

「すまなかつたな。

余が、力のない王であったがゆえであるうな。  
許せ、宰相よ」

老宰相は首をふる。

「陛下のせいなどではございません。民衆が巨大な経済活動力を得た我が国は、もはや一人の人間の手には負えない怪物でございます。その怪物を御す新しい仕組みを生み出すのは、並大抵のことではなく。

わたくしも努力はいたしましたが、力およばず、今では老醜をさらすのみの身。

このままでは、けして一枚岩ではない貴族たちは派閥争いに終始するのみとなり、わたくしが死んだ後には、野放しにされた怪物が暴れるまま、国が乱れていくのではないかと、忸怩たる思いでおりましたが。

しかし、あと5年もすれば、ローレリアン王子殿下が、若さにあふれる力でしつかりと、バリオス三世陛下の治世をお守り下さる方に、おなりあそばすことござります」「う

国王は無言で、かすかに眉のみをあげ、じつと宰相を見た。

「そなたは20年前、国が乱れるもとになるゆえ、余にエレーナとの再婚はあきらめろと、言つたではないか。

それなのに今は、エレーナの息子を、自分の跡取りになる男だと言つて出すのか」

「あのときは、それが最良と思つたのです。

宰相のわたくしの力に衰えなど見せれば、次の権力者の地位を狙う者たちに、いらぬ野心を抱かせてしまつたことでござります。20年前の我が国には、内紛を抱える余裕などありませなんだ。

それに、壮年期に入られた陛下は当時、少々わたくしを煙たがつておいででしたな。

コレーナ姫との再婚を望まれたのも、わたくしとの姻戚関係を、解消したいとお考えだつたからではございませんのか」

「それは、確かにそのとおりだ。

そなたは、我が治世になくてはならない男であつたが、あまりに一人の者に権力が集まりすぎるのは、よくないことであらう」

「20年前の我が国には、独裁的な力で国政を動かせる者が必要でした。

すべては、王国のためでござります。

わたくしは、王国のためとあらば、なんでもいたします。

その覚悟は、今でも変わりませぬ」

国王の眉はますますあがり、瞳には険しい色が宿つた。

「今の今まで、」の疑いだけは口にしまいと、思つてきただが、……。またが、赤子のローレリアンに刃をむけたのは……、そなたではあるまいな。

王宮の奥深くに、とがめられることなく入りこめる人間は、ごくわずかであるう。

当時、いくら調べても、凶刃を放つた犯人が誰なのかは、わからなかつたが」

「わたくしは、ローザニア王国を守るために、すべてをさげてまいりました。

その忠誠心にかけて申し上げます。

赤子のローレリアン王子殿下に刃をむけたのは、わたくしではございません。

成人なされたローレリアン王子殿下が、中央へお戻りにならうと

されたとれ、妨害しようとはいたしましたが。

三年前、王子殿下は、貴族の派閥の領袖に抱き込まれそつた雰囲気で「ござりまし」とおっしゃったので。

しかし、王子殿下御自身に、貴族たちの派閥争いに加担するおつもりはないと確認できてからは、中立の立場を守つて、王子殿下のご成長を見守つてまいりました。毎年、王子殿下がお望みになられるおり、神官位を得られるように、取り計らつてもまいりました。

正直なところ、今では神々の御意志に感謝しております。  
やつと、我がローザニア王国の未来を託せるだけの人物が、あらわれてくれたかと。

王宮から離れてお育ちになられたローレリアン王子殿下の広い見識と聰明さは、まさに神々からのお恵みでござりましよう。いまの時代の指導者に求められる資質を、ローレリアン王子殿下は、いくつも持つておいでです。

神々は我がローザニア王国をお救いくださるために、ローレリアン王子殿下にそれらの資質をえとくさせようと、王宮から隔離なつたのではないかとおもえ、思つませじです。

王宮で育つておいでになれば、はたしてローレリアン王子殿下も、今ほどの人物となられていたかどうか。

その答えは、おそらく否ではないかと存じます。

苦勞知らずで育つた者が、苦難を乗り越えようとする忍耐を養え  
るでしょうか

「それは、王太子をやつの皮肉か」

「王太子殿下は、いわば王家の宿命の犠牲者でしうな。  
我が孫としては、不憫でなりません。」

ヴィクトリオさまは、おのれの能力の限界を、幼少期から早々と自覚しておられた。それでも周囲は、ヴィクトリオさまに次代の王としての聰明さを期待し、帝王学をつめこもうと躍起になりました。

どんなに頑張っても能力がないのですから、ヴィクトリオさまは、周囲の者達からの期待に応えることはできません。どうしても心は、卑屈になります。

くりかえされる失敗の体験から人がなにかを学ぶためには、落胆した心を慰めて支えてくれる者から、愛情を受け取っている必要が「ござります。」

しかし、王家に生まれ、母親の王妃殿下と幼少期に死別なされたヴィクトリオさまには、そのような愛情を与えてくれる存在はおりませなんだ」

「父親の余も、祖父のそなたも、国政に夢中であつたからな

「まじで。当時は、必死でございましたな」

「いまも、わが国の国政に難問が山積みである状態は変わらないが。不思議と、当時ほどは動じぬな」

「それが、年齢を重ねるとこり」となのでござります」

「王太子には、すまなかつたといつ気持ちがある。そのせいで、余はローレリアンに、余計な苦労を強いることになる」

長い年月を戦いぬいてきた老宰相は、口元に薄い微笑を浮かべた。

「ローレリアン王子殿下は、聰い方でござります。きっと、バリオス三世陛下の御心中にも、お気づきになられておいでと、臣は確信しております」

微笑しながら、老宰相は考えていた。

「この男が、こんな風に頼りないから、自分は権力に固執して老醜をさらしているなどと世間からののしられても、宰相の地位から退くことができなかつたのだ。

バリオス三世自身が、カルミゲン公爵の身体の衰えを追求し、宰相の地位をはく奪しようとするくらいいの氣概を見せてくれれば、自分は安心して引退できた。

情に流され、必要な決断の基準が鈍る。

それが、バリオス三世の最大の欠点だと、公爵は思つてゐる。

凡庸とまではいわないが、現在の難しい情勢下にある王国を統治していくには、頼りないとしか言ひようがない王だ。

長年仕えてきた国王を、このように評するカルミゲン公爵は、やはり独力で王国のかじ取り役をはたしてきた、深慮遠謀に長けた宿老と称される人物なのである。

その宰相から見ると、ローレリアン王子もまた、甘い男に見える。國家の役にたたない愚兄など、さつさと暗殺でもなんでもしてしま

えぱよいのにと、老宰相は思つてゐるのである。

王太子を精神異常者あつかいして廃嫡にされるのは、血がつながつてゐるカルミゲン公爵家にとつても不名誉だ。ならば、いつそ殺してくれたほうが、すつきりする。

狩獵と女遊びにうつつをぬかす次代の国王など、それこそ、革命をもくろむ輩にとつては、王朝を非難する格好の材料だ。

ヴィクトリオ王子が王太子になれたのは、他に王家の血を引く成人男子がいなかつたからにすぎない。バリオス三世には男の兄弟がおらず、妾腹の妹が三人いるだけ。この妹たちはいずれも母親の身分が低かつたために、国内の貴族のもとへ降嫁した。

その妹たちの生んだ男子が王位を争つ表舞台に出でくるようとになれば、これもまた、ローザニア王国が傾国の危機におちいる事態の原因となるだらう。

八方塞がりだと悩みながら、カルミゲン公爵は、すこしでも王太子にまともな生活をしてもらうために、必死で「あなたが王位につくことは、この老臣の夢なのです」などと吹き込んできた。しかし、あの孫が王たる器でないことくらいは、公爵にもわかっているのである。

その能無しの王太子を将来の王と定め、自分は摂政の立場で国政にかかわらうと、ローレリアン王子は考えている。王子の側近も、そのつもりで動いている様子。

しかし、そのあとは、どうするつもりなのだと、公爵は思つ。

王太子の子供は、精神発達異常の疑いをかけられている五歳の姫が一人だけ。

その姫に王位が継げるとは、とても思えない。血統を理由に、そんな娘を女王に立たせれば、経済を動かす力を持つようになった国民たちは、絶対に王家を許さないだろう。

ローレリアン王子は、兄を排することと、簫奪者の汚名を着ることを恐れているのだろうか。

王国のかじ取り役を自分から引き継いだところの男が、そのような甘い考へでいること自体、公爵には許し難く思える。

公爵の胸の奥深くに、ざわめきが湧く。

ならば、その甘さ、わたしの引退の土産に、叩き潰してやるひではないか。

嫌でも王位につかなければならぬに、ローレリアン王子を追いこんでやる。

この大国ローザニアを背負つて立つところとは、おのれの人生のすべてを捧げるところなのだ。

わたしは、國のためなら卑怯なことも残酷なことも、躊躇せず、やつてきた。

同じだけの覚悟がない男に、わたしの跡目は務まらぬ！

逃げの気持ちは、欠片も許さぬぞ！

信念をもつて、老宰相は国王に奏上した。

「国王陛下。ひとつ、ご提案を申し上げたいのですが

「申してみよ、宰相」

「この秋、陛下は御年五十才のお祝いをなさいますな。その際に、  
エレーナ姫を王妃としてお迎えになられてはいかがかと」

国王は、いまでも十分に美男子で通る顔を驚きでゆがめた。

「こまあ、なにを言いだす？」

「こまだからでござります。

国民の間におけるローレリアン王子殿下の人気は、いまや大変なものでござります。

我が国の次代を担う王子として、ローレリアンさまに欠けておいでになるのは、正統なる結婚から生まれた正嫡の王子ではないという問題だけ。

血筋自体は、この国で誰よりも濃い、王家の血をもつておいでとなるところなのです。

もし、いま、王太子殿下に万一のことがあれば、この国の王位継承権第一位を持つのは、王太子殿下の姫ということになります。

しかし、国王陛下とエレーナ姫が正式にご結婚なされば、王太子殿下につぐ王位継承権の所持者は、ローレリアン王子殿下となります。

「この国の将来を思えば、こぞとなればローレリアン王子殿下が王位にお着きになれるよつ、準備怠りなくしておく必要性も、お分かりになつていただけるかと存じますが」

「しかし……」

国王はうつなつた。

「ローレリアンは聖職に未練を残しておる。本来の望みを捨てて、おのれの義務のために生きよつと、困難を承知で王家に戻つてきてくれたのだ。王になれといつのは……」

そこで国王は、口をつぐんだ。

国王も宰相も、この話は将来、ローレリアン王子を王位につけるための相談だと、はつきり認識している。

愚昧な兄王太子を排して、聰明な弟王子を王にしてよつと。

再度、国王の口から深いため息が漏れた。

そのまま机に肘をつき、手で額を支えながら国王は言つた。

「しばりへ、考える時間が欲しい」

「御意のまま」

沈黙の中にたたずみながら、これもまたバリオス3世の甘さだと、宰相は思った。

真実、國のためを思つなら、息子の未練など、断ち切つてやればいい。追い込まれたローレリアン王子には恨まれるかもしだれないが、大義のためには、親子の情など切り捨てるべきだろう。いま王朝が倒れれば、ローザニアは未曾有の混乱におちいり崩壊してしまつ。

国が亡びるのだ。

500万を超える國の民が、見えない明日に怯えて、野をさまよつことになる。

そんな事態は、絶対に起してはならないのだ。

老宰相は、沈思に沈む國王の執務机のうえから書類をとりあげ、退出の支度をはじめた。

今日は、ひどく疲れた。早めに屋敷へ帰り、身体を休めようと思ひながら。

扉をたたく音があり、控えていた侍従が、前室の誰かとやり取りをする。

話を終えた侍従は扉を閉めて、おそれながらと、國王のもとへ近づいた。

「國王陛下。火急の用件にて、お目通りを願いたいと、ローレリアン王子殿下が先触れをよこしておいでですが」

つむいでいた國王が、顔をあげた。

「先触れなどよこす必要はないと、つねづね申しておるのに。」

まあよこ。あぐに伝つて返答せよ

国王は宰相を見る。

「帰らうとしていたところをすまぬが、そこにふたたびすわるがよい。余とともに王子の用件を聞くのだ。このところ王子が持つてくる用件は、余の独断では即答できぬ内容が多くてな」

じめつた顔をしてくるべせに、国王は嬉しかつでもあつた。

たよりになる息子がいるところせ、心強こものなのがうつ  
など、宰相は思つた。

ほんの数分待つたところで、ふたたび扉がたたかれる。

侍従が扉を開き、「ローレリアン王子殿下でござるまや」と、入  
室の宣言をする。

ローレリアン王子は秘書官をしたがえて、国王のもとへと歩みよ  
つてきた。

その足取りは、じつに若々しく、儼りしくなるほど颯爽としている。  
た。

いちおつ立ちあがつて王子殿下へ臣下の礼を取つとした宰相は、  
そのまますわつていなさいと、王子からじぐさで制された。お年寄  
りが無理をしてはいけませんよといつ意味のこもつた、聖職者らし  
い、優しげなじぐさで。

その王子の優しさが、宰相には苦々しくもあり、ありがたくもあつた。

一度すわってしまつと、宰相の身体は、あちこちが固まつてしまつのだ。歳をとるとは、本当に難儀なことである。

国王の執務机の前に立ち、王子は深く首をたれ、「ご機嫌麗しく……」などといった通りにしひんの挨拶の口上をのべる。

父親の国王は苦笑した。

ローレリアン王子は、自分は庶出子にすぎないからといって、いつも国王に對して臣下の礼を取る。

それは、三年前に国王と王子が親子の再会を果たしたときから、ずっと変わらずにくじかえされてきた習慣だった。

さつと、自分がローレリアンから離まれているのださつと、国王は思つてゐる。

離まれても、しかたがないとも思つ。

この王子には、自身の出生の秘密をなにも知らせずに、孤独な子供時代を過ごさせてしまった。ひねくれることもなく、まっすぐ育つてくれただけでも、ありがたいと思わなければならぬ。このつえ王子に、何を求めるものがあらうか。

せう思つと国王は王子に對して、父親めいた愛情表現を、やたらと示せなくなるのだ。

自然と、王子に語りかける口調も固くなる。

「火急の用件とはなんであるか。

このとおり、帰ろうとしていた宰相にも同席を命じた。

手短に説明するよつこ」

きわめて事務的な態度で、紙をとじあわせた報告書をさしだし、王子は答えた。

「かねてより探索を命じておりました、反政府系宣伝パンフレットの発行組織の拠点をつきとめました。

内偵者によりますと、今夜も会合があるということです。できることになら早々に摘発をと思い、憲兵隊を動かす許可を頂戴

いたしたぐ、御前にうかがいました

モナがもたらした情報をもとに、プレブナンの花街にある高級娼館を中心に調べさせたところ、ジヤン・リコミニネや彼と親交が深い文筆家が多く出入りしている店は、すぐに特定できたのである。

まさか、命じて半日もしないうちに報告があがつてくるとは思つていなかつたので、王子自身も驚いた。

しかし、そのあとは、なし崩しだつた。

その道の専門家が買収をしかけると、店主はいとも簡単に情報をもらした。おそらく不穏な様子の客が、そろそろ鬱陶しくなり始めていたのだろう。

何事もタイミングかと思つた王子は、すぐに行動を起こすことにしたのだ。

その一連の出来事が記された報告書をめぐりながら、国王は王子に問いかけた。

「早々にとは、今夜にもといつ意味か？」

王子はうなずく。

「はい。今年の秋には、国王陛下御生誕50年の式典が予定されておつます。憂ご」といは、早めに決着をつけておくべきかと」

「なるほど、王都に人が集まる機会があれば、不埒な輩の活動も活発になるな。  
うなづく

今夜とはいいかにも急なことであるが、摘発のチャンスを逃すのも惜しいか。

では、すぐに命令書を作りせよ。今すぐに動かせるのは、どの隊か

国王の問いかけは、執務室のすみに控えていた事務官へむけられたものだつたが、答えたのはローレリアン王子であった。

「いらっしゃがう前に調べてまいりました。リドリー・ブロンフ卿配下の第三機動部隊に、現在待機を命じてあります」

自分の息子の素早い判断と緻密な仕事ぶりに感心しつつ、国王は命令を発する。

「高等書記面を呼び、我が勅命を記録せよ」

事務官が執務室から急いで出てこや、にわかにあたりの空気が活気づく。

しかし、その空気は、椅子からゆきくと立ちあがつたカルミニゲン公爵によつて、急激に冷やされた。

「勅命の宣下は、いましばらくお待ちください」

老いて枯れ、わずかに残された命脈にしがみついているような姿の老宰相は、毅然と顔をあげていた。

いつのまにか、その枯れ木のような体には、氣力の炎が枝葉となつて燃え立つっていたのである。

深いしわの中にある濁つた色の瞳は爛々と輝き、曲がった背中から恐ろしげな気配が立ち登っている。低くかすれた声は、まるで地獄からの使者、ウラウノスのつぶやきのよひに聞こえた。

「その任務は、憲兵隊総監リンフォンダウル男爵と、第一機動部隊にお命じ下さい。

国家体制の転覆を謀るような輩に対抗する難しい判断は、一介の実働部隊の隊長に任せられるものではございません」

ローレリアン王が、静かに答える。

「被疑者を拘束し、後の判断は司法にゆだねる。それに、現場の指揮官の判断が入りこむ余地は、ないとthoughtしますが」

宰相は、声もなく笑つた。

「相手は民衆を煽り『革命』を起しそうと田論む、過激な集団でございましょう？」

国王陛下のお膝元、王都プレブナンの街中で、銃撃戦になる可能性も考慮せねば」

王子は表情を険しくし、国王のほうへ向きなおつた。

「そこまで事態を重くお考えならば、いそ、その作戦の指揮権は、王子のわたくしへお預けください」

「こやはや、これはなんとも」

愉快そうに、宰相は笑いつづけていた。

その場に居合させた者は、みな寒氣を覚えた。

宰相の口から声はまったく出でおらず、**臣下**だけが、くつくつと  
ゆれていた。その気配が余計に老人の様子を、恐ろしげに見せてい  
るのである。

一步、宰相は前に出た。

「王太子殿下、御心配めされん必要はござりません。

我が国の軍隊は、聖職者の王太子殿下に指揮をお頼み申し上げねば  
ならぬほど、ふぬけた集団ではありますまい。

エリは御心安く、リンフーン・ダ・ウル男爵めにて、すべてお任せあれ

「しかし……」

「王太子殿下、どうぞ」

宰相がローレリアン王太子にむかって最後に発した「どうぞ」の言  
葉は、「あちらへどうぞ」の意味であった。懇懃な態度で最上級の  
臣下の礼を取つた宰相の右手は、出口の扉の方向をさし示してい  
る。まだ、実權は、我が手にあるのだ。見習いの若造は、とつとつ、  
ここから出でていふ。

ローレリアン王太子は、再度、父国王を見る。

国王は眉をひそめ、王太子をこめた。

「ローレリアン。そなたは何でも器用にこなすが、軍の指揮は、さ  
すがに未経験の門外漢である。つ。

それに、そなたはこれから我が王国を背負つて立つ身。みずから危険を冒すような行動は、慎むべきである」

反論を飲みこんで、王子は深い一礼とともに答えた。

「出すぎたことを申し上げました。お許しください。

それでは、わたくしは明朝の報告を、おとなしく待つことにいたします」

国王の執務室から退出したあと、じぱりくのあいだローレリアン王子は無言だつた。

國務関係の執行部署が集まつてゐる王宮の西翼は、歴代の王が増改築をくりかえした壯麗な建物だ。

柱は前世紀に流行した「ワールド様式」。天井のレリーフは年月にすけて重々しい輝きを放つよくなつた薔薇紋の透かし彫り。階段の手すりは滑らかな白大理石で、足音をしつとり吸い取るのはバクスタ産の絨毯だ。

その絢爛豪華な構造物の内部を、王子は無言で歩いていく。

あとにづく筆頭秘書官のカール・メルケンも黙りこんでいるので、ローレリアン王子つき近衛護衛隊第三小隊長の副官であるシムスは、非常に気まずい思いをしていた。

心の中で、自分の上司をののしつてしまつ。

たいちょーつ！ いつも王子殿下のお側にはべる隊長のお役目に、代役を立てなくちゃならない野暮用つて、いつたいなんなんですか！

俺に『氷鉄のアレン』の代役は、無理ですつてば！

黙りこんだ王子殿下が、こんなに怖いなんて、知らなかつたです！ ついでに、メルケン首席秘書官も、おつかないですよ！ なんですかあ、この二人は！

階段を降りきり、長い廊下を通りぬけ、一行はやがて奥の宮へつづく通路へとしかかった。

その通路からは、王宮の花壇がながめられる。美しい幾何学模様を描くように配された夏の花は、夕方の光のなかでも鮮やかな色を放つていた。

風に乗つて漂つてくるのは、かすかなラベンダーの香りだ。

その香りのおかげで勘気をぬるめたのか、王子が立ち止まる。

シムスは王子殿下の三歩後ろに立ち、周囲を見回した。

お守りする王子殿下に公共の場所で立ち止まられると、護衛官たちはみな、とても緊張する。

銃や大砲は戦の方法を大幅に変えてしまつた武器だが、要人の身の危険を倍増させた武器でもあるのだ。離れた場所から飛んでくる小さな弾丸を、止めるすべはない。

ローレリアン王子には敵が多い。

王宮のなかでさえ、完全に安全とは言い切れないから恐ろしい。

訓練された目で危険が潜みそうな場所のチェックを終えて、シムスはほんの少しだけ警戒を解き、王子殿下のほうを見た。

殿下の御尊顔は、いつ拝見しても美しい。

男性を相手に美しいという形容を使うのも失礼なような気がするのだが、武骨な武人のシムスには、あまり美をたたえる言葉の持ち合わせがないのだ。

しかし、今日の王子殿下のお顔には、美しさだけではない何かがあつた。

広大な庭の花壇をながめる王子の横顔には、苦い後悔の気配が漂つていたのだ。

夏の風を建物の中に取りこむように、広く開けられた窓に、王子は手をかけた。

その手が、強く窓枠を握りしめる。

「殿下」

メルケン首席秘書官が、気づかうよつた口調で王子に話しかけた。

答える王子の声はかすれていた。

「しくじった！」

まさか、あの時間まで宰相が国王のもとへこるとは。わたしの失態だ。

事態の收拾を急ぎすぎて、いつもならこの時間帯には、もう国王はひとりになつていいはずと、つい確認を怠つて推測で行動にでてしまつた

「しかたがござりません。

時には、そのようなこともあるでしょ？」

「しかたがないでは済まされない。いいが、カール。

反政府運動の活動家にも、人権はあるんだ。

彼らは犯した罪について裁かれなければならないが、法による公正な裁きは、犯した罪と同等でなければならない。

だが、宰相は、そうは思っていない。

彼は苦労して長年国を守つてきたがゆえに、国家権力に反発する者を憎悪している。

とくに、革命派の活動家などには、宿怨の敵と言わんばかりの反応だ。

宰相の、あの激高ぶりを見たか？

彼はリンフェンダウルに、活動家たちを皆殺しにしようと命じるだろ、<sup>り</sup>。

今回の摘発は、相手が撃ちかえしてきたとして、まちがいなく銃撃戦になる。

現実は、一方的な殺戮だろ、<sup>う</sup>がな。

下手をしたら、無関係な市民も巻き込まれるだろ、<sup>う</sup>。

リンフェンダウルは、宰相の敵を排除することで、今の地位までのぼりつめた男だ。しかも、証拠がない疑いの段階で被疑者を痛めつけて、自白を強要するような卑劣なやつ。花街の住人など、虫けらのように思つてゐる。

いつた、どれだけの犠牲が出るか、考えただけで恐ろしくなる。しかも、そんな事態におちいる道筋をつけたのは、愚かな、このわたしなのだ！」

王子の拳が、勢いよく窓枠をたたいた。

開かれた窓のガラスが、音を立てて振動する。

メルケン首席秘書官は、また振りあげられそつた王子の手をおさえた。

「拳を痛めます、殿下」

「はなせ、カール

「はなしませんよ。明日、この手にペンを握れなくなつては、こまりますから」

「王子の責務を果たせと？」

では聞くが、王子の責務とは、いつたいなんだ？

わたしは、自分が恐ろしい！

わたしが、ほんの少しふくじつただけで、死ななくともよい人間が死んだりするんだぞ。

わたしは、ただの愚かな男なのに。

人の運命を変えるような、大それた存在ではないのに」

涙こそ出でていながら、王子は泣いているのだとシムスは思った。その証拠に、王子の背中は激しく震えている。

メルケン首席秘書官は、その震える背中に自分の手をそえた。

「では、同じ失敗をくりかえさないために、反省と検討をいたしましたか。

もの」とを分析して、新たに方策を考える。

そういうのが、殿下はお好きでしょ？」

弟に忠告する兄のような態度で、彼は言つ。

「今度また、国王陛下の御前で宰相と対立なさったときには、『父上』、わたしの意見を聞いてくださいと、申し上げればよろしい」といた。

『父上』とこう呼びかけの言葉には、わざと強い響きがこめられていた。

王子の孤独は、他人では癒せない。

彼の苦惱を同じ痛みとして理解できるのは、唯一、同じ立場で生きてきた肉親だけだらう。

メルケン首席秘書官は、そう確信しているのだ。

「ほんの少しで、よいのですよ。

お父上に、甘えなさい。

そうすれば陛下は喜んで、殿下の意見を最後まで聞いて下さるでしょう。

聞いてさえいただければ、理にかなうは殿下の言であると、陛下にも、納得いただけるはずなのです。

ちがいますか？」

王子の返答は、いまにも消え入りそうだった。

「……あなたは、正しい」

王子の背中から手をはなし、秘書官は、そつとうなずいた。

「情を軽んじてはなりません。

なにもかも、お一人で背負われることはないのです。

殿下と心を打ち解けあい、お支え申し上げたいと願つている者は、いくらでもあります。

遠慮なく、たよればよいのです

「わたしは……、人にたよるのが苦手なんだ。  
自分は天涯孤独だと思って、育つたから。  
自分が与える側にならなければ、誰からも愛されないと思つてい  
た。

だから、必死に、なんでも学ぼうとした。  
学んでいなければ不安だつた。

神官として、さんざん隣人を愛せ、世界は愛に満ちていると説い  
てきたくせに、私自身は、愛を信じきれないでいる

「顔をあげた王子は、窓の外の花園に目を向けた。

優雅な香氣をふくんだ夏の風が、渡り廊下を吹きぬけていく。

王子の金色の髪は風になぶられてそよぎ、王家に生まれた者の証  
である水色の瞳には、透明で寂しげな光がたたえられていた。

メルケンとシムスは、王子の側に控えながら、たがいの様子を盗  
み見た。

見たら、わかつた。

自分たちはいま、同じことを考へてゐるとい  
う。

傷ついている王子に、どうすれば自分たちの愛を伝えられるだろ  
うか。

おのれを殺し、ローザニア王国のすべての民を愛する人間になろ  
うと、必死に努力しておいでになるあなたを、わたしたちは心から

敬愛していると、どうすれば伝えられる……？

メルケンは王子の背中に話しかけた。

「殿下、今夜は眠れない夜になるのかもしれませんが」

「ああ」

「眠れなくとも、横にはおなり下さい。それだけでも、身体は休まります」

「そうだな」

「口約束ではなりませんよ。真夜中に、ラッティ坊やを確認にやりますからね。

一晩中、犠牲となる人が一人でも少なくて済むように」と、お祈りをなさつたりはしないでください」

「それは、こまつたな」

ふりむいた王子は苦笑していた。

かわいがっている小姓の少年に泣かれるのは、かなり苦手な王子なのである。

「さあ、まいりましょ」 と先をつながしながら、首席秘書官は通路の奥を見た。

見て、眉をひそめる。

奥の宮の方向から、一人の男が足早にやってくるのだ。

シムスがつぶやく。

「いつの隊長ですね。何を急いでいるのでしょうか」

変装用のフロックコートを着ていても、任務に意識を集中している時のローレリアン王子の護衛隊長アレン・デュカレット卿は、目立つ男であった。軍人らしい鍛えた体は、きびきびと動いているし、癖のある茶色の髪の下には、鋭い眼光を放つ瞳がある。

「王子殿下」

素早く彼らのもとへたどりついたアレンは、軽い一礼だけで挨拶を終え、用件を切り出した。

「モナさまが、やらかしてくれましたよ！」

殿下にモナさまを守れと命じられていましたから、俺は念のためと思って、気配を消すのがうまい部下を王宮から下がられるモナさまの後ろに、くつつけておいたんです。

案の定、モナ様は侯爵家の護衛を街の中でまいちまつて、花街へ直行です。殿下の本気は怖いって知つておいでになるから、屋敷へ閉じ込められる前に、花街へおいでになつたんだろうと思つります。

いまは、例の『ポワントの宵の花亭』という高級娼館へいらっしゃいます。

俺は、その報告を聞いて、あわてて街からもどつてきたんです

「なんだつて！？」

みるまに王子の顔色が青ざめる。

「その店は、今夜、憲兵隊に襲撃されるぞ！」

しかも、その部隊を指揮するのは、リンフォンダウルだ！」

「あの、嗜虐趣味があるんじゃないかと噂されてる、宰相の番犬野郎か！」

アレンの驚愕の言葉を聞きながら、王子は険しい視線を窓の外へむけた。

夏の夕暮れは、訪れると足が速い。

窓の外の花壇に降り注いでいた陽光はすでに弱くなつており、空には茜色に染まる雲があった。

あたりに吹く風は、涼しい夕風である。

日が暮れるまでの時間は、あと30分といったところだ。

ぎりりと、噛みしめた歯の鳴る音が、王子の口元から漏れた。

王子が強い葛藤に苦しんでいる様子が、そばに控えている者達には、手に取るよしに理解できる。

これから王国の未来を担つてこいつとこいつ王子が、危険に身をさらしてはならないとこいつとこいつ、国王に忠告などされなくとも、よくわかつている。

けれど、理性と感情は別なのだ。

最愛の女性が命の危険さえある状況に置かれているとわかつて、冷静でいられる男などいるわけがない。

おもてを伏せ、王子はしばらく、黙りこんでいた。

そして、ふたたび顔をあげたとき、その表情には固い決意があつた。

「アレン、街へ行くぞ」

「はい、お供します」

途中ですれちがうであろう王宮の人間に不信感を抱かせないよう走ることはせず、優雅な歩みで、王子は先へ進みだす。あとにつけくのは『王子殿下の影』。行き先は『黒の宮』。目立たずに出るために、王子はまず、服装を改めるのだろう。

その後ろ姿を呆然と見送りながら、シムスはメルケン首席秘書官へたずねた。

「王子殿下を、おとめしなくてよろしいんですか、メルケン殿」

メルケン首席秘書官は、苦笑しながら首をふった。

「殿下に、情を軽んじてはならないと申し上げたのは、このわたしだ。

それに、じつこう状況で、ヴィダリア侯爵令嬢をお見捨てにならないお方だから、わたしはローレリアンさまに、お仕えしているわけだね」

「しかし、殿下の身に、万が一のことがあれば……」

「王国の未来は、また暗雲に包まれるし、殿下の行動をお諫めしな

かつたわたしの首は、確實に吹つ飛ぶだらうな。下手をしたら、銃殺刑かもしれない」

「す」「ことを、ちらりとおっしゃるんですね、秘書官は」

メルケンは静かな顔で、シムスを見た。

「ローレリアン王子にお仕えすると決心した時に、わたしの命運は殿下と一蓮托生だと、覚悟は決めたのでね。

あの方は、我が身命をかけてお仕えする価値のある方だ。の方にお仕えして、わたしも国のために働く。そう決めたのは自分自身で、ほかの誰でもない」

カール・メルケンはあくまでも実務家で、人を威圧するような迫力や、華やかなカリスマ性を持った男ではない。

けれどもシムスは、このとき、この男は凄いと思った。男としての格で負けたような、そんな気もする。

「失礼ですが、メルケン殿は、おいくつですか？」

「32だが？」

「ええつ！？ もつと、うんと歳がいつてるのかと思いましたよー。」

むつとしたメルケンが、たずねかえす。

「どういふ意味だ」

「王子殿下をお諫めになつたときも、それに今も、めつちやかつこ

いいですよ！

これからは、敬意をこめて親父殿とお呼びしますー。」

「なんだと！」

「では、自分も王子殿下のお供をいたしますんで！」

「シムス！」

呼び止められて、走り出していた若き護衛官はふりむいた。

「わかつてますよ、親父殿。

我が命運は、王子殿下と共にあります！

自分も、覚悟は決めていますからー。」

敬礼をしながら気持ちいいくらいの鮮やかな笑顔を見せると、シムスは踵を返し、遠ざかっていくローレリアン王子と護衛隊長の後を追つていった。

渡り廊下に一人残ったメルケンはぼやく。

「あいつ、確かに自分は殿下と同じ年だと、このあいだ言つてなかつたか？ その年齢と屈託のない性格のおかげで、若いアレン・デュカレット卿と組ませても、それほど齟齬は生じないだろ？ と判断されて、副官に任命されたのだと。

ならば、わたしとは10歳違ひだ。なにが親父殿だ。失礼なー！」

あたりには、夕闇が迫っていた。

王宮の中央の方向から、照明のランプに火をともす下働きの一団

がやつて来る。

彼らは風で火が消えてしまわないよう、ランプの明かりをひとつ  
灯すたびに、大きく開かれた窓をひとつ閉めていく。

夏の夕風は、心地よい。

しかし、もう夏風を楽しむ雅な午後は終わつた。

今宵、闇のとばりがフレブナンの街をおおつとき、悪靈があたり  
を跋扈する。

老境へ入り、あとは後進へ道を譲るばかりとなつた宰相が、50  
年もの長きにわたつて育て続けた、『積年の恨み』といつ名をもつ  
醜悪な姿の悪靈が。

メルケン首席秘書官は、胸元へ手をやつた。

彼はそれほど信心深い男ではなかつたが、最近、お仕えする王子  
に影響されて、服の下に護符を身につけて持ち歩いている。

「天と地にあらせられる神々よ。どうか我らの王子に、最大のご加  
護を」

いつもの祈りの文言を口の中で唱え終えた瞬間、すぐそばの柱に  
取り付けられたランプに火がともされ、目の前の窓が閉められた。

下働きの者たちは秘書官に一礼し、次のランプに火をともすべく  
場所を移動する。

夕風はとだえ、あたりには暗闇が近づきつづいた。

王都プレブナンの花街は、王宮がそびえる高台から離れた商業地区の外れあたりにあった。

そのあたりは王都の不夜城と呼ばれる歓楽街で、広場や表通りには、大きな劇場や深夜まで営業している飲食店が建ち並んでいる。夜の客を自分の店へ招きよせるために、それぞれの店が軒先に煌々とランプの明かりを並べており、その輝きはガラスに反射して虹色にきらめき、目が眩みそうになるほどだつた。

歓楽街をいきかう人々は、それぞれに粋な夜の装いを凝らしている。まばゆい明りの中をゆつたりとそぞろ歩く人々には、明りがない夜など想像もつかないのだろうなどモナは思つ。

同じプレブナンに住んでいても、下町の住人はランプの油を買うことすらままならず、夜の闇に怯えながら暮らしているというのに。モナが窓から見下ろしているのは、歓楽街の表通りだ。道行く人々の服装は、どれも贅沢なものである。

金回りのよい男たちが利用する娼館は目抜き通りにあって、建物の外觀はまるで高級旅館のように見える。金持の男たちには、対面というものがあるからだ。

本当の意味での花街は、表通りから幾筋も別れている細い路地や裏道に存在する。

そのような道は、入り口から中をのぞいただけで見分けられる。

いわゆる春を売る女たちが路上で客引きをしていたり、酔つた男たちが徒党を組んで騒いでいたりするからだ。

さすがのモナにも、その本物の花街へ入つていく勇気はなかつた。

それに、彼女が知りたかつたのは高嶺の花として男たちから奉られ、妍<sup>けん</sup>を競う美姫たちのファッションセンスだ。

普段から金持ちの男の相手しかしない高級娼婦たちは、男たちに貢がせた金で身を飾り、ときにはそれらの男たちの要望に応えて、いつしょに劇場へ出かけたり、高級レストランで食事を共にしたりする。

貴族や平民でも裕福な階級に所属する女性は、そんな高級娼婦を軽蔑しきつた目で見ていたが、彼女たちの装いには、いつも注目している。

男を夢中にさせる高級娼婦たちの装いは、大胆で斬新なのだ。貴婦人たちの間の流行が、高級娼婦の装いの真似から始まるのは、よくあることだつた。

だからモナは、高級娼婦と懇意になりたいと願つたとき、迷うことなく歓楽街で一番立派な旅館に見える『ポワンの宵の花亭』に突撃をかけたのだ。

もちろん、昼間にだつたが。

高級娼館に出入りしている男たちに恥などかせたら、どんな報

復をされるか、わかつたものではない。

高級娼館のロビーにいるところを一般の女性に見られただけで、侮辱を受けたと感じる男もいる。金や権力を持った男のプライドは、山の「」とく高く、岩の「」とく硬いのだから。

そんなわけで、昼過ぎをねらって「この店で一番の人気をほこるご婦人と、お話しをさせていただきたいの」と、いかにも空気が読めていないとぼけた発言をしながら『ポワンの宵の花亭』に初めて訪ねて行った日、モナは店の用心棒によつて外へつまみ出されそうになつた。

しかし、用心棒はモナをつまむことすらできなかつた。

彼女は、ひらり、ひらりと、用心棒の手をかわしつづけ、ひざの裏にちよいと蹴りを入れて大の男を転がして見せたり、かけのぼつた階段を、手すり伝いに滑り降りて見せたりしたのである。

初対面の相手に失礼があつてはならないと、きちんとしたドレス姿で身を飾つっていたにもかかわらずだ。

その雄姿を見た娼館の女たちは大喜びした。

彼女たちにとつては、男を手玉に取る女こそが、いい女の条件である。

何の騒ぎだとロビーへ集まってきた女たちは、モナにやんやの喝采を贈つた。

そして、モナは望み通り、プレブナンの花街で一番の美女として

名高い「フイオーラ」と友達になつたのだ。

「それで？ あなたは王宮から」血宅へ帰る道の途中で、ここへよつたと、おっしゃるの？」

そのフイオーラに話しかけられて、モナは部屋の中のまづへ体の向きを変えた。

目抜き通りに面した二階にあるこの部屋は、『ポワンの宵の花亭』で、もつとも豪華な部屋である。

金と赤に彩られた部屋の中で、部屋の主のフイオーラは純白のドレスに身を包み、優雅なしぐさで茶器をあつかっている。

その色の落差が、じつに美しいのだ。

男女の駆け引きについては百戦錬磨の手管を持つはずのフイオーラが、可憐で清楚なお姫様のように見えるから恐れ入る。

茶碗に注いだお茶をフイオーラから受け取つて、モナは言つた。

「そうよ。それに、このブラウスの出来栄えも、フイオーラに見せたかったし。

やつぱりレースを引き立てて見せる方法を、あなたに相談したのは大正解だったわ。

それはともかくとして、なにしろいろいろ悔しかつたから、今夜のこここの花代は、兄のロワールのつけにしてやつたわ。

兄様つたら、ひどい。

リアンに、わたしの行動をばらすなんて！」

「あのね、モナ」

フィオーラは苦笑する。

「あなたのお兄様も、王子殿下も、純粹にあなたのことを心配して  
おいでになるのではなくて？」

モナは、つんと、そつぽをむく。

「余計なお世話だわ。

人身売買なんかに手を染めた悪い街の顔役が幅をきかせている花  
街の奥まで行くならともかく、『ポワンの宵の花亭』で、お友達の  
貴方とお茶を飲むことの、どこが危ないっていうの？」

「危なくはないけれど、ここに出入りしていることが世間に知れた  
ら、あなたの評判に傷がつくでしょう。  
まして、夜になってからも、ここにいるなんて駄目よ」

「あなたまで、リアンと同じことを言つの？ 嫁のもらい手がなく  
なるとか」

「殿下がおつしやることは、正しいわよ。

街中のあらゆる場所へ着飾つて出かけていつて、お高くとまつた  
貴婦人たちを悔しがらせてみたところで、わたくしが金銭を代償に  
男たちへ春を貢ぐ女である事実は変わらないの。

いい機会だから、これを最後に、もうここには来ないことが

「フィオーラ、それは、もうわたしと友達でいるのは、いやだって  
こと？」

「そんなわけないでしょ。あなたは、とても楽しいお友達だわよ」

「なら、もうここに来るなんて、言わないでちょうだい。リアンがお父さまに命令を出したら、しばらくはここに来られなくなるかもしけないけれど、ほとぼりが冷めたら、また一緒にお茶を飲みましょうよ」

「王子殿下から、お許しをいただけるかしら？」

「あの人は、とても厳しい人だけれど、理不尽なことはしないの。今度のことだって、反政府活動家がどうのとどうの問題にけりがつけば、もういいよと言つてくれるはずなのよ。わたしの女としての評判なんて、元から大したものじゃないし」

フィオーラは笑つた。

「モナ、あなたはとても、王子殿下を信頼していらっしゃるのね」

モナは赤くなつて答える。

「わたし、男の人って、じつは苦手だったの。高いところから、わたしを見下りしてくれるし、声が大きいし、話し方や動作も乱暴だし」

「あらあら、うちの店の用心棒を軽くあしらつた、あなたの口から出たとは思えない発言ね」

「だつて、本当に、そう思つていitanですもの。

剣術を習つたりしたのだつて、そういう男の人たちに負けないようになれば、苦手意識を克服できるかしらと思つたからなのよ」

「強くなつたら、気持ちは変わつたの？」

苦笑しながら、モナは首をふつた。

「変わらないわ。でも、大人になつたら、苦手の理由はわかつたの。男の人たちは、わたしたち女を、対等な相手だとは思つていなから。

いつだつて、男より劣る存在だと思つてるのよね。

それこそ、恋の駆け引きをしているときでさえよ。

きみはぼくの女神だ、とか言いながら、男の人たちは、その言葉を言つてはいる自分に酔つてはいるんだわ」

性に関する知識はあるけれど、実際の経験はないだらうモナに、この感覚は理解できないかもしれないなどいながら、フイオーラは説明を試みた。

「それはモナ。男は征服する側の性を持つ生き物だからよ。女を征服しないと男は子孫を残せないのでから、そういう思考になるのは自然の摂理だと思うわ」

「征服……かあ。

きつと、リアンは男と女の関係を、そういう風にはとらえていいな」と思つわ」

遠くへ夢見るような視線を投げて、モナはつぶやく。

「あの人は、ちがうの。

どんな人と向き合つときも、相手を一人の人間として見ている。だから、ローザニア王国の国民のすべてが幸せになれたらいのになんて、壮大な夢を見てしまつんだわ」

フィオーラは椅子にすわっているモナの背中に、背後から抱きついた。

「ローレリアン王子殿下のことを語つてこられたときのあなたとおたら、本当に幸せそうよね。」

「いやましくて、憎らしくなるわ。」

わたくしのように夜の世界で生きてこられる女には、もつとも純粋な恋はできなもの」

自分の首にからまるフィオーラの赤味がかつた金色の髪をじりじりながら、モナはため息をつぶ。

「これはこれで、けつこう辛いのよ？」

リアンは国家のために、生涯独身をつらぬく決心をしているみたいだし。

大好きな人に、将来有望な男を捕まえて、さっさと嫁に行けなんて、言われて、いらなくなさいよ。

本気で泣けるから」

「それでも、うらやましいのよ。」

わたくしたち夜の女の望みなんて、年季が明ける時に、それなりに性格がよくて、それなりにお金持の、よいパトロンが見つかればいいな、程度ですもの」

紅で彩られた艶やかな唇から、フィオーラは細くて長いため息をつぶ。

「本物の……、恋がしたいわ。」

あなたが無理をして、今夜こつして、わたくしをたずねてきてく

れたのも、本物の恋をしているからじゃない？

「ナナ……」

よせあつたおたがいの身体からは、心地よいぬくもりが伝わってくる。そのぬくもりは立場がまったく違つて一人の心を、わけへだたなく、優しくなだめてくれた。

いつのまにか夏の日はとつぱりと暮れ、あたりは暗くなつて行った。フィオーラに与えられている部屋は、男女が枕を並べて陸前をかわすための寝室なのだ。照明のランプは、それほど大きなものではない。

フィオーラは暗がりのなかで、自分が抱きしめているナナのうなじを見つめた。

なめらかで健康そうなうなじだ。

まだ、男に口づけられたことがない、清らかなうなじ。

暗い誘惑に齟られ、フィオーラはそつと、モナのうなじに口づけた。

男女の豊みの手觸を知りぬくした、その富能的な齟で。

「……」

抱きしめた腕の中で、モナがびくっと身を縮めた。

口づけのあとを指の腹で撫でながら、フィオーラは言つた。

「ねえ、モナ。

結婚なんかしなくとも、愛しい人を籠絡する方法はあるわ。  
なんなら、教えてさしあげるけれど」

「ほ、方法つて……」

「今夜の花代は、もういただいているから。  
わたくしは、あなたと、ひと晩ベッドですごしてもいいのよ」

「ひと晩！？」

夜通しここにいるなんて、む、む、む、無理よっ！

リアンの命令がなくとも、お父さまやお兄さまたちから盛大なお説教を食らつたあげく、年単位で外出禁止にされてしまうわ！  
下手したら、長兄のお嫁さんにまで叱られちゃう…。

わたし、あの人、苦手なのよ！

ヴィダリア侯爵家の女主人は自分だって威張り散らしているし、  
鼻持ちならないほどプライドが高くて、いつもわたしの顔を見ると、  
しううがない人ねつて感じで、露骨なため息をつくんだから…」

モナの慌てぶりはすさまじかった。

フィオーラの手を振り払いこそしなかつたが、椅子から飛び上がり  
るようにして立ちあがり、そそくさと壁際まで逃げてしまつ。

顔は、真つ赤である。

寝室のほの暗い明かりの下でも、はつきりと確認できるほどに。

フィオーラは大きな声で笑つた。

「冗談よ、モナ。そんなに怯えないで。  
義理の仲の奥様に叱られるのが、嫌なのもわかつたから」

「冗談つて、……ひどいわ！」

「なんと言えばいいのか、あなたつて、無防備すぎるのよ。」ソーラ  
「どういう場所なのか、もう少し自覚しておいたほうがいいわ」

「それは、わかつたけれど」

「じゃあ、早々に本題の話をすませて、ソーラへお帰りなさい。ま  
だ今なら、ちょっと夜の散歩を楽しんできました程度で済む時間で  
すもの」

「やつする」

すっかり意氣消沈したモナは、ぼそぼそと口の中をしゃべった。

「知りたいのは、『踊る神官』みたいなパンフレットを発行してい  
る、男の人たちの集まりのことなんだけれど」

「リジイの想い人のことね」

「ソーラの女性の恋人なの？」

「ちがうわよ」

フィオーラは、深いため息をついた。

「わたくしたち夜の女はね、みんな、本物の恋にあこがれているの。花街の女になつたときから、そんな恋はもつできないのだと、あきらめなくてはならないのだけれど。

なかには、あきらめがつかなくて、それっぽい雰囲気に騙されてしまう女もいるのよ。

リジーの恋は、その典型。

彼女が恋人だと信じている男は、彼女を利用しているだけだと思うわ。

リジーの年季が明けたら、田舎に小さな家を買って所帯を持つなんて、言つてゐるらしいの。

その言葉を信じて、彼女はせつせと男にお金を貢いだり、自分の部屋を集会所として貸してやつたりしているのよ。

でも、それもそろそろ、終わりになると想つわ。

最初のうちには、リジーの部屋で集会がある夜にはリジーが店主に倍額の花代を払つていたもので、店主も集会を黙認していたのだけれど。

この花代は、とても高額だから。

リジーは借金がかさんで、破産寸前みたい。

とうとう、たちの悪い高利貸しにまで手を出して、うちの店からは追い出されそうな雰囲気なのよ。

夜の女の借金のかたになるのは、自分の身体だけ。

きつとリジーは一晩に何人もの男と寝るよつた、ろくでもない売春宿へ売られるわ。

そうなつたら、恋人からも捨てられるでしょうね。

けつきよく、行き着く先は野垂れ死に。

それが、花街の女がたどる道なの。

わたくし、若くて綺麗なうちに死にたいわ。  
年を取るのが怖いのよ。  
いつか、この店で働けなくなる時のことを考えると、心配しよう  
もなく不安になるの」

「フィオーラ」

悲しそうなモナの様子を見て、フィオーラは後悔した。

モナは日々の生活に苦しんでいる人々のために何かをしようと考える、とても優しい人だけれども。

でも、しょせんは彼女も、侯爵家のお姫さまなのだ。

花街の女がたどる末路なんて、どうしようもない社会の底辺にある泥にまみれた人生の話なんか、モナに教えてやる必要はなかったのに。

ひとりと、「知らない」とだけ、言えばよかつたことなの。

どうして自分は、モナにリジイのかなわない恋の話など、してしまったのだろう。

フィオーラは泣きたい気分で、そう思った。

大急ぎで王宮から街へ降りたローレリアン王子と護衛の士官一人は、日が暮れてから間もないうちに、歓楽街へたどり着いた。

馬を預り所に預け、こつちですと案内するシムスのあとについて、一行は目抜き通りの人ごみを通り抜けていく。

意外にも、シムスは役に立つ男だった。

麦わら色の髪と琥珀色の瞳を持つ若手近衛士官の彼は、歓楽街の女たちのことを、よく知っていたのだ。そこそこ一枚目の顔と明るい性格のせいで、彼はどこの店にいっても女たちから大歓迎されるのだという。

要するに、遊びなれているのだ。

その事実を知った上司のアレンは、無愛想に拍車がかかったような仏頂面だった。

彼はローレリアン王子に仕えたいがために士官学校で勉強と鍛錬に明け暮れていたから、青春期の一番大切な時期に、まったく遊んでいないのである。

いまだって、まだ18歳なのだから、彼は青春期にあると言つていい。

けれども、今度は彼の任務が、遊ぶことを許さない。

責任ある仕事を任せられ、十数人の部下を持ち、毎日忙しく過ごしていることは、アレンの誇りである。

しかし、「あの店のミロචヤンは、歌がうまいんですよ~」などと浮かれている副官を見ていると、なんとなく面白くないアレンなのである。

しかも、いつもアレンが心配してやっているローレリアンまでが、なんだか失礼なのだ。変装用の伊達眼鏡を鼻の上でずり下ろし、小馬鹿にしたような視線でアレンを見てくる。

「アレン、そのふてくされた顔を、なんとかしない。我々は、歓楽街に遊びに来た若者なんだぞ。若者は若者じゃなく、この浮かれた街の雰囲気を楽しむなれば、怪しまれるだらう」

アレンは、ふんと、鼻を鳴らした。

「リアンだつて、こんな場所に来るのは初めてじゃないのか。おまえが育つた学問都市のアミテージには、いつこつた雰囲気の街はなかつただろう」

それぞれの店が灯す明かりが乱反射して煌めく大通りを見渡しながら、ローレリアンは言う。大通りは夏の夜を楽しもうとする人々で、おおにぎわいだつた。

「歓楽街はなかつたが、娼婦はどこかの街にでもこるや」

「へー、まるで経験があるみたいな言い草だな」

ローレリアンは、はたと、立ち止まった。

「アレン。 いぢめの確認しておぐが、わたしは童貞ではないぞ」

「はいっ？」

立ち止まつたローレリアンの背中にぶつかり合になつたアレンは、あわてて後ずさる。

その、あつけにとられた青年士官の顔を見て、ローレリアンは、にやりと笑つた。

「一国の王子が、22の歳まで、その手のことを知らずにいるわけがないだろう。

わたしの初体験は悲惨だぞ。

16のとき、大叔父の命を受けた者に連れていかれたどこの貴族の別邸で、待ち構えていたその道のベテランの女に、手取り足取りされてだな。

それでも、いたしてしまえるところが、男の悲しい性といつもので

「へへへへへ！」

赤くなつて開いた口を閉じられずにいるアレンは、とても国一番の剣士には見えなかつた。

ローレリアンはやれやれと肩をすくめ、かたわらのシムスに手をやつた。王子と同じ年の青年士官も、あきれた顔をしていた。

小声で、ローレリアンは言つ。

「シムス、御苦労だがな。次の公休日がきたら、ここを適当な店へ連れていくてやれ。

純朴な田舎青年が尻込みしたりせずこすむよつて、店は吟味するんだぞ」

「はいっ、了解です！」

完全に任務を忘れた護衛隊長は、わめきまくつた。

「なんだなんだ、おまえらは、一人で勝手に納得しやがって！  
だいたい、rian！ きさまは、聖職者だろ？ がー。  
汝、姦淫かんいんすることなかれとか、いわねーのかよつー。」

「アレン、娼婦はローラニアの神教聖典が成立したとされる時代より、もつと古い時代から存在する職業だ。

聖典は結婚を神聖なるものとして位置付けているが、娼婦の存在には言及していない。社会の秩序を維持していくためには、ある程度の必要悪を認める度量も必要だつてことさ。

もつとも、人身売買は恥ずべき行為だと思つから、わたしも何かしたいとは考へてゐる。

労働には正統なる対価を。

それが、わたしの目指している國の在り方でね

「ああああっ、おまえと話していると、時々俺は、頭がおかしくなるような気がするー。」

「まあまあ、隊長、落ち着いてください。ほり、目的の店に着きましたよ」

シムスがさし示した店は、立派な作りの旅館に見えた。

「Jの店が娼館であることを示すのは、重厚な鋳物で作られた『ポンの宵の花亭』といつ看板だけである。

「Jの界隈で店名に『花』をつけて名乗るのは、その手の店ですよ」とこの隠語のよつなものなのだ。

「わい、どのよつとして店に入りますかね？」

シムスの質問に、ローレリアンはあつわつと答えた。

「正面から、堂々と」

「はいはい。では、まいりましょ」

ものなれた副長は、わいわいと店の正面の階段を登つていいく。

ローレリアンは後ろを歩くアレンに言った。

「ここからは、思つどんぶん、無愛想な顔をしていていいぞ。わたしは王子にもどる。

おまえは『王子殿下の影』でも『氷鉄のアレン』でも、なんでもいいから、それらしくふるまえ」

反政府活動家のジャン・リュミネは、日が暮れてあたりが暗くなつたところを見計らつて、裏口から『ポワンの宵の花亭』に入った。歓楽街の表通りに店を構える高級娼館では、裏口も立派な玄関あつかいだ。背徳行為にふける館へ出入りしているところを知り合いに目撃されたくない紳士は、世間にいつぱいいるのである。

裏口から店に入ると、社交サロン風の造りになつていて表の待合室を通り抜けて、一階に部屋をもつ娼婦のもとへ直行できる。

王都でも名だたる美姫を寝所に待らせたいのならば、表の待合室で金をばらまいて自分の羽振りのよさを証明しなければならないが、なじみの娼婦と気心知れた夜を過ごしたいのなら、裏口経由が便利である。一階に部屋を割り振られている娼婦は、容姿が平凡だったり、少々年増だったりするが、その気楽さを楽しみに通う常連客も多いのだ。

裏口でなじみの案内係に小銭をわたし、懇意にしている娼婦の部屋へむかう。

案内係の後ろを歩きながら、この娼館の内装は、最近台頭してきた平民成金連中の館とそっくりだなと、リュミネは思つた。

できるかぎり豪華に煌びやかに、といつ意図はわかるのだが、時代も題材もがちがう統一感のない絵を並べてかけていたり、柱や手すりの装飾に金箔を多用しそうにする悪趣味さからは、主の教養

の程度が知れてしまつ。

主義や信条が、まったく感じられないのだ。

廊下のそこかしこに飾られている美術品や骨董の類からは、金にあかしてそれらを集めた人間の、浅薄な虚榮心だけが伝わつてくる。

しばらく歩いて、いつもの部屋の前にたどり着く。

案内係が立ち去るのをまつてから、リュミネは静かにドアをたたいた。

「俺だ」

短く名乗りを上げると、ドアが細く開く。

相手の男は、かなり緊張しており、早く入れとリュミネに手振りで伝えてきた。

男にひつぱりこまれるような形でリュミネが部屋へ入ると、そこに集まつていた十人足らずの仲間が、いつせいに詰め寄つてきた。

「どうこうじだ、ジャン」

「今日を限りに、しばらく集会を見合わせるとば

「官憲に、何か感づかれたのか

「危険はあるのか」

矢継ぎ早に発せられた問いは、かくしきれないあせりで、どれもうわずつている。

リュミネはゆっくりと、部屋の中を見まわした。

中央のテーブルには葡萄酒のグラスが並べられ、簡単な料理も取りよせてある。

貴人を相手にする高級娼館の名にふさわしく、ここでは望めばどんな時間の過ごし方も可能なのだ。

話題が豊富で教養高い美姫たちが褥の相手をしてくれるし、心ゆくまで楽しい酒の相手も務めてくれる。

時には詩の韻文をたわむれに重ね、楽器を奏でて即興の音楽をつけたり、自分の裸体の絵を描かせたり、ついさっきまで劇場の桟敷でともに鑑賞していた演劇の批評に興じたりも。

必ずしも男と床をともにしなくとも満足できる時間を提供できるのが、高級娼婦というものなのだ。

だから、リュミネ達の集会は、今まで小規模な紳士の親睦集会として、店主から黙認されてきたのだが。

「だいじょうぶだ、落ち着け。

ただ、この部屋の持ち主のリジィという女が、借金のせいで、この店から追い出されそうな雰囲気でな。

ここは、なかなか居心地の良い集会所だったが、そろそろ潮時といふことなんだろう

「うう

「なんだ、そういうことか」

「あせつて、そんをした」

安堵した様子の仲間たちを、リュミネは苦々しい気持ちで観察した。

この連中との付き合は、身体も、そろそろ潮時なかもしれないと思ひ。

仲間たちのうちの何人かは、ローラーの将来を語る青年達の集いが、しだいに宰相や政府を批判する地下出版物を発行する組織へ変わつていったことに怖気づいていた。

だれよりも熱心に批判を口にしていたやつばかり、自分の立場を気にしている。

徒労感でリュミネの思考は、どうしても後ろむきになる。

「こつらはみな、学生崩れや、中産階級出身のインテリばかりだ。言論に訴えて情報を得られない人々に危機感をもつてもらおうとは考へても、みずから手を血に汚してまでして、実力行使をしようと考える者はいない。」

期待倒れも、いいところだ。

苦労して集めた仲間だったのに。

「こつらは、理想論を唱えていれば、だれかがかわりに行動してくれるとしても思つていたのだろうかと。」

\* \* \* \*

『ポワントの宵の花亭』に正面から入つていったローレリアン王子一行は、まず社交サロン風のつくりになつたロビーで足止めされた。この店は王都でも指折りの高級娼館である。初めてここへ訪れた客は、自分が金回りの良い上客であると証明しなければ、つぎの段階には進ませてもうえないのだ。

「ひりくじりと案内されたのは窓際のすみの席で、じりやうら彼らは服装から、金持ちの平民の息子であるとクラス分けされたようだった。

部屋の中央で優雅に奏でられている音楽を聞きながら、シムスが言つた。

「うーん。楽団からも遠いし、女の子もよつてこない。

近衛士官の制服を着てこの手の店に来ると、もう少し上席に案内してもらえるんですがねえ。近衛隊には、けつこう大貴族の子弟が『口』『口』いたりしますから

「ほそりと、アレンが答える。

「軍服をくだらない目的に使つな

「やだなあ、隊長は。野暮なこと、言わないでくださいよ

周囲を観察していたローレリアンが、変装用の眼鏡を外しながら、うなずいた。

「なかなか、わかりやすいシステムになつていいようじゃないか。明らかに貴族らしい派手ななりの客には、すぐに接客係の案内がつく。

会社の経営者や羽振りの良い商売人風の年配の男には、とりあえず酌女がついて、しばらく酒や会話でもてなしたあと、格付けが決まって、ご案内だ。

では、われわれ若造には？」

「「」のシステムを実体験してみたいところですが、今夜は時間がないですから、はしょりましょつ」

真面目な顔になつたシムスは椅子から立ちあがり、すぐそばを通り抜けて「」とした男の召使に声をかけた。

まるで富廷に仕える従僕のような衣装を着た召使は、尊大な態度で立ち止まつた。

なにか飲み物でも欲しいのかね、若いの、といったところ。

しかし、シムスから小さなカードを一枚受け取つたとたんに、召

使の顔色が変わる。

その顔色の変化を楽しんでいるシムスは、わざと怒ったような声で言った。

「いさすが支配人なり店主なり、ある程度権限がある人物を、ここへ呼んでくるように」

「はい、ただいま！」

シムスから命じられた召使は、その場からかけだし、わずか数分で立派な身なりの初老の男をつれてもどってきた。『ボワンの宵の花亭』の主である。

主は震えあがっていた。シムスが召使にわたした小さなカードには、王家の紋章が刻印されていたのだ。

そのカードを見て、急いでかけつけてきたら、どうだろ？

窓際の椅子では、一人の青年が優雅な様子でくつろいでいた。

その椅子の左右には、服装こそ普通の裕福な平民と同じようなものを身に着けているが、いかにも軍人ですといつた雰囲気の、冷たくて無表情な顔をした男が一人立っている。

店主のおびえは、ますますひどくなつた。

青年は、淡い金色の髪と水色の瞳の持ち主だったのだ。

現在の王家で、その容姿をもつてゐる青年といえば、一人しかい

ない。

店主が田の前にかしげると、青年はあでやかに笑つ。

なんと鮮烈な笑顔であろうかと、店主は思った。

「この方が、わがローザニア王国の未来になつと尊われる、ローレリアン王子殿下なのだ。

「こゝ、このよつな場所へ、たつとき御方の、おみ、おみ足をお運びいただき……」

震える声で店主が拝謁はいえつをたまわつた感謝の口上を述べよつとする  
と、王子はそつと人差し指を唇の前にたてた。

「わたしは、こゝに来たことを、だれにも知られたくないのです。  
察していただけますね？」

店主は平身低頭である。

「は、はい！ もちろんござります！」

「こちうに、わたしの大切な友人が来てこることなので、つ  
れ帰りたいと思いましてね」

「ご友人さまでですか」

「ええ、すみれ色の瞳の、若いご婦人です」

恐れおののく店主の頭のなかで、ぴかりと、ひらめきの光がまた

たいた。

聖職者のくせに女性とダンスに興じる浅はかな男だとして、ローレリアン王子を非難する意図で書かれた反政府宣伝パンフレットの『踊る神官』は、いまでは王都の庶民のあいだで大流行中の読み物だった。王族の生活の様子など想像することすらできない街の住民にとって、王子と侯爵家の姫君の恋物語は、じつに楽しい読み物であつたのだ。

「あつ、ああ　っ！　はーっ、おいでになられておられます！」

王子はすこし、こまつたよひに笑つた。

「彼女はとても楽しい友人なのですが、ときどき周囲を驚かせるような行動にでる人で。

今夜も、こちらへいらっしゃるとうかがい、いよいよ直接、危ないことはしてくださいなるなど、お願ひするつもりになつたのです。彼女のもとへ、案内していただけますか」

「むひむひでござります。お望みは、なんなりとうけたまわります

店主はかしこまりつつも、御苦勞はお察しいたしますよといつた態度になつた。

それを見ると、心おだやかならぬローレリアン王子である。

おそらく店主の頭の中では、『ポワンの宵の花亭』にモナが初めて訪れた日の騒ぎが、鮮やかに去来しているのだろう。それがどんな騒ぎだったかについての詳細をローレリアンはまったく知らないのだが、だいたい想像できてしまうあたりが、恐ろしいのである。

椅子から立ちあがり、王子は店主の耳元で囁いた。

「ありがと。」

お礼に、ひとつだけ、よいことを教えてあげましょ。」

今夜はもう、店にお客を入れるのは、おやめなさい。適当な言い訳をして、帰つていただける方には、帰つていただくのもよろしいでしよう。

それが難しければ、一階にはお客様を入れないことです。

あなたは今日、お金をもらつて、ある人の質問に答えましたね。その結果が、もつすぐここへ、やってきますから

主の声は、派手に裏返った。

「ぐ、来るのですか！ それも、今夜！？」

王子は胸元で、聖なる印字を切つて見せる。

「あなたが王宮へもたらした情報は、たる方を、たいそう怒らせてしまつたのですよ。

しかし、わたしは聖職者ですの。」

そのよつな騒ぎに無関係な人が巻き込まれるのは忍びない。

わたしは、わたしの良心に従つて、あなたに忠告するのです。それをどう受け止めるかについては、あなたにお任せいたします」

「感謝申し上げます！ 感謝申し上げますとも！」

やはり王子殿下は尊に名高いとおり、わたくしたち國の臣を、慈愛をもつて導いて下されるお方なのでござりますね！

かつて、わたくしのもののような、世間から卑しこと見下される職

につく人間へ、あわれみをかけてくださる高貴なお方など、いらっしゃるのでしょうか！

「 真実、感謝申し上げます！」

感極まつた『ポワンの宵の花亭』の主はひざまますが、王子の上着のすそを手にとつて口づけた。

かたわらに立つシムスが、冷え切つた声で言つ。

「お許しなく殿下に触れではならん！」

もう一人の護衛官『王子殿下の影』は、もつと冷たい。

シムスの声におびえてあとずさり、上田づかいで王子の様子をつかがつた主は、腰を抜かしそうになつた。

王子の背後に立つ近衛士官の手には、すでに短銃がにぎられていたのだ。その武器の先端は、まつすぐ主にむけられていた。

「アレン。ふつそうなものを見せびらかすな」

不快をあらわにする王子に、アレンは淡々と答える。

「これが、俺の役目です。王子殿下の身に危険があよびそうになれば、相手がだれであるかと問答無用で撃ちます」

「その心意気は、ありがたいと思うがね。

見てござらん。

ほかの人たちを、驚かせてしまつていいのではないか」

王子がぼやく。『さから、あちこちで悲鳴やら、ガラスが割れる音やらが聞こえてくる。』

浮世の憂さを晴らしこそた高級娼館で、銃を持った人間に出会い、だれだつて驚くだろ？。氣の弱い者は、早々に出口を求めて逃げ出そつとしている。

シムスがつぶやく。

『今夜の摘発は、失敗になりますかね？』

アレンは鼻で笑つた。

『嗜虐趣味をもつリンフュンダウルに、手柄を立てさせてやる』ではない。

今夜の摘発が失敗したといふで、殿下の高名に傷はつかん。殿下は武力行使に巻き込まれそうな下々の者に、同情をよせられただけなのだからな』

ローレリアン王子は、唇の端をゆがめた。

『わたしがリンフュンダウルの邪魔をしたと、宣伝してどうする。おまえ、覚悟しておけよ。あとで、たつぱり説教だ』

『ご随意に。』

そもそも殿下がこの店の主に警告なさつた段階で、かくし』とは不可能な状態になつたのだと、反論してさしあげますよ。

『そりモナさまをここから連れ出すだけにしておけば、あとでとがめられても、モナさまを迎えて行つたのは王子ではないと、とぼけることもできたのに。』

喧嘩上等です。

受けて立ちましょ「う

上回の言ひ方とは正しこと、副官のシムスがうなずいている。

それを見て、やや分が悪くなつたなと思つた王子は、とほけにかかつた。

「まあ、このあたりで、目指す目的は同じでも、宰相とわたしでは基本的な考え方がちがうのだと、表明しておくるも悪くはなかろう。それが、自分の失敗を発端として、やむなく動いた偶發的な行為の結果として生まれたものだといつといひは、気に入らないがね」

「たく、殿下は、あいかわらず理屈っぽい。

さあ、早いところお転婆姫さんを捕まえて、ひとつと、ここから退散しましょ」

王子と護衛官たちの会話を聞いて、『ポワンの宵の花亭』の主は床にへたりこんだまま、目を白黒させている。

思わず苦笑いした王子は、主に言つた。

「すまないね。

王子と呼ばれるわたしだつて、しょせんは、ただの人間なのだよ。側近の者は、よい喧嘩相手だし、失敗すれば叱られもある。だから、わたしのようなものに、ひざまずいたりしてはいけない。最大級の敬意は、本当に尊敬できる人と出会つときまで、あなたの心の中にしまつておきなさい」

そのころ、モナと王都一の美女とうたわれた高級娼婦のフィオーラは、重い沈黙を返上して、ふたたび楽しい会話を始めた。

「わたしには苦しんでいた花街の女の人たち全員を救うほどの力はとてもないけれど、年季があけたあと春を売る生活から離れたいと思っている女性何人かにだけなら、手を貸してあげることができるかもしれないわ」と切り出したモナは、フィオーラに冷たいクリームを売りにするカフェの女店主を、何人か募りたいという話をしたのである。

「『ポワントの宵の花亭』くらいの大店に勤めた経験がある女性なら、読み書きも計算もできるし、社会経験も豊富だし、男の嫉妬のかわし方も心得ているしね」

そこまで話して、モナは顔をしかめる。

「女の商売が繁盛するとねえ、必ずといっていいほど、同業者の男から嫉妬を買うのよ。

仕事がらみの男の嫉妬って、とっても醜いわ。  
わたし、夜道や人気のない場所で、乱暴されそうになつたこともあるのよ。一発殴れば、女はひるむとでも思つたんじやないの？  
もちろん、返り討ちにしてやつたけど」

フィオーラは大喜びで笑つた。

「さすがは、モナだわ。相手の男性がどんな目にあつたか、眼に浮かぶようよ

「あら、ちょっと刃物をつきつけて、出るといひく出よりじやないのつて、脅しつけただけだわよ。

それでねえ、その手の男の人つて、どいつもこいつも逃げるときにお約束みたいに『覚えてるよー』って言ひのよねえ」

「ちょっと、モナ。

どいつもこいつもって、そんなに何度も、危ない目にあつているの？」

声を立てて笑っていたモナは、しまつたとあわてて、口をおさえた。

あきれたフイオーラが、モナをたしなめる。

「あなたは、あなたに護衛をつけるお兄様や、あなたの行動がありに突飛だからと心配なさる王子殿下を、うるさがつていらつしやるけれど。

でも、めんどくさいという理由で、侯爵家の護衛をまいてしまつたりするあなたにも、問題はあると思つわ。

もうすこし、御自分の立場を自覚なさらないと。  
あなたは国家の要職に就かれているヴィダリア侯爵様の『ご令嬢で、王子殿下の妃候補とされるお姫様なのでしょう？』

いままで、あなたに狼藉ろうぜきを働いた男たちが、お父様の政敵や、あなたを王子殿下の妃候補から追い落としたい人がよこした刺客でなかつたのは、単に幸運だったからではなくて？

そういう人たちは物陰から、あなたを銃で撃つたりするのよ？」

だつてと、モナはふくれる。

「銃で狙われたら、護衛がいつしょにいたって、意味がないでしょ。むしろ、わたしを逃がそうとして、死ぬ人が出たりするから。そういうの、嫌なのよー。」

「まさか、そういう目にあったことが、すでにあるとこいつの？」

黙りこんだモナは、ソファーの上で身を固くして、床をにじりんでいる。

「ああ、モナ。『めんなさいね。あなたの気持ちも考えずに、さも、わかつたようなことを言つたりして』

ソファーへ席をつづして、フイオーラはかたくななモナの身体を自分のほうへ抱きよせて思つた。

「お姫さまは、自分が思つているほど、世間知らずではないのかもしれないよ。」

何度もまばたきをして、目じりにたまつた涙をこぼすまいとしているモナは、きっと過去に体験した出来事を思い出してこらのだろう。

連れられないじがらみに絡み取られて、娼婦になるしかなかつた自分を、かなり不幸だとフイオーラは思つていたけれど。

本当は、生きるしが辛くない人間なんか、一人もいないのかもしない。

そつとフイオーラが滑らかな黒髪をなでていたら、モナの身体の

「わばりは、すこしずつ解けていった。

暗がりを見つめていたモナが、悲しげにつぶやく。

「ねえ、フィオーラ。

どうして人は、争わずにいられないのかしらね？

家族を愛するのと同じ気持ちで、隣人を愛せるようになればいいのに。

そう思うと、わたしは、家の中でじつとじてることじができないなくなる。

わたしのような立場の女は、家の中でおとなしくしておらへべきなのかもしれない。

そのほうが、周囲の人には、迷惑をかけずにするもの。

でも、わたしは知っているのよ。

プレブナンの下町には、助けを必要としている人が、いっぱいいるの。

その人たちを、すこしだけでも助けてあげる方法があるのも知っている。

それに、わたしは侯爵家のお姫さまで、ある程度お金も動かせるし、いろいろな知識もあるわ。

その力を使えば、普通の人にはできないことが、できるのも知っている。

だから……、ね。

知っているのに、何もしないでいることは、わたしにはできないの」

なんて素直で、可愛らしい人なのだろう……！

フィオーラは腕の中のお姫さまを、強く抱きしめた。

きっと彼女は、心から彼女を思いやる大人たちから、愛と導きをたっぷり受け取つて育つた人なのだ。

彼女の家族や友人が、苦笑しながら彼女を見守る気持ちが、わかつたような気がする。

そしてモナは、その人たちから自分が受け取つたものを、また誰かに渡さずにはいられないのだろう。

そうやって愛情の絆をつないでいけば、人はみんな幸せになれるのに、愚かな人間は、争うばかり。

かすかに空気が動き、娼婦の部屋の枕辺を照らす、ほの暗い明かりがゆらぐ。

フィオーラは顔をあげた。

扉の外に、複数の人の足音が聞こえた。

その足音は、フィオーラの部屋の前で止まる。

「フィオーラ。わたしですよ。  
ちょっと、ドアを開けてもかまわないかね」

『ポワントの宵の花亭』の主が、ドアのむこうから低い声でたずねてきた。

娼婦の部屋は、いつでも他人の閨房だ。店の主は、それを心得て  
いるから、来客中の娼婦の部屋へ入るときは、とても気を使つて  
いる。

モナがフィオーラの腕の中から身をはなす。

彼女の横顔には軽い緊張があった。

左手は、いつでもスカートをたくし上げられる位置へ移動する。  
街へ出るときはモナのスカートの下には、いつも細身の剣がかくさ  
れている。

その秘密を、フィオーラは知つていた。

目で、モナに「いいかしら?」とたずねてから、フィオーラはド  
アの外にむかつて言つ。

「どうぞ、お入りになつて」

「では、入るよ」

開いたドアのむこうから足早に室内へ入つてきたのは、店の主で  
はなく背の高い軍人だった。彼の服装は裕福な階級の平民のものだ  
つたが、一目で軍人だとわかるほど、彼の行動そのものには警戒心  
が満ちていたのだ。

「アレンー」

モナが見知った青年の名を呼ぶ。

ひととおり室内の検分をすませてから、青年は、にやりと笑った。

「じんばんは、モナさま」

そして、部屋の外へ呼びかける。

「どうぞ、殿下」

呼びかけに応じて室内へ入ってきた人は、不満そうな顔を青年士官にむけた。

「こちいち、大げさだ」

青年士官は、しれっと答えた。

「検分もしていない袋小路めいた場所へ殿下をおつれする勇気は、俺にはありません。

これをするなとお命じになるなりば、もう殿下のお供はお断りです」

「こまわり、つまらない労力を使う気はないさ。どうせ何を命じたところで、おまえは、わたしの言うことになど、したがいはしないんだ」

「俺の忠誠心を信じていただけないとは、心外ですね」

フィオーラはソファーの上で固まってしまった。

殿下と呼ばれた若い男は、淡い金色の髪と水色の瞳の持ち主だった。すこし憂いをふくんだ表情を宿した彼の顔は怖いくらいに整つており、姿勢のよい立ち姿には威厳が満ちている。

そういう男の噂を、フィオーラは嫌になるほど、モナから聞かされていたのだ。

恐れおののいて固まってしまったフィオーラのとなりで、モナは勢いよく立ちあがつた。

「ちょっと、どういひことなの！？」  
王子殿下が、こんなところに現れるなんて、ありえないわ！  
アレン。あなた、どうしてリアンを止めないのよ！」

つめよられた青年王宮は、天を仰ぐ。神々よ、どうぞ、あわれな王子を助けてやつてくださいと。

案の定、モナはアレンのそばから離れ、つまはローレリアン王子へと迫つていく。

すみれ色の瞳がきらきら輝いて、怒ったモナの横顔は、やけにきれいだなあと、アレンは思った。王宮からここへ直行してきた彼女は、娘らしくて綺麗な形に髪を結つていたし、化粧もしていた。もうおたがいに、子供ではないのだ。

両の足で床をしつかりとふみしめ、モナは人差し指で王子の胸を突いた。

「だいたい、あなたの横暴が、ことの発端なのよ？  
王子の権力でわたしの行動をしばらうとするから、わたしは反発

するんだわ！

わたしだって、自分の立場くらい自覚してるの！  
必要な情報を集めたり、お友達との仕事の打ち合わせをすませれば、しばらくはおとなしくしていろいろつもりだったわよー。  
なのに、どうしてー

「黙つて、モナ」

自分の胸に突きつけられたモナの手を、王子は強く握りしめた。

「きみは、本当に自分の立場を自覚しているのか？  
なぜ、王子のわたしが、ここへきみを迎えて来たと思つてている？」

今夜、ここには宰相の命令を受けて、憲兵隊総監リンフ<sup>ン</sup>ンダウル男爵が率いる一軍がおしよせる。きみがもたらした情報のおかげで、革命派の集会が今夜もあると、発覚したからね。

そんな場所に、きみの兄上や、わたしの腹心の部下を、単独で来させるわけにはいかないだろ？

もし、現場の乱戦に、彼らが巻き込まれてみる。

場合によつては、ヴィダリア侯爵の政敵に攻撃の口実を<sup>つ</sup>くるえるかもしれないし、わたしはわたしで、腹心の部下を失う。

きみの父上は内務省の長官で、わたしに政治の中核の動向を逐一ちくごく知らせてくれる最大の協力者の人だ。  
わたしをこの国<sup>こく</sup>の最高權力者にしたくない連中は、きみの父上を追<sup>お</sup>い落とすチャンスも、虎視眈々と狙つ<sup>ね</sup>っている。  
きみは、そういう立場にいる女性なんだ。

きみの存在は、すでに国<sup>こく</sup>の未来にかかる存在なんだよ。  
名門侯爵家の姫君として生まれ育つとは、そういうことなんだ。

だから、護衛を街中へ置き去りにしたり、一人で危険な場所へ出入りしたりしないでくれ。

きみの身におよぶ危険は、きみだけの問題ではすまない

最初の勢いはどこへやらで、モナはローレリアンに手を握られたまま、うなだれた。

「ごめんなさい。

わたし……、かつとなつて、そこまで深くは考えてなかつた……。わたしの行動が、国の未来に、かかわるなんて……。」

アレンがローレリアンをたしなめる。

「その言いぐさは、公平ではないな。

リアンはここへ冷静な判断力に定評があるリドリー・ブロンフ卿を派遣しようとしたけれど、宰相とやりあつて、しくじつたんですよ。その後始末を、しなくちゃならなくなつたわけで。

無関係な人間が銃撃戦に巻き込まれるなんて、悲劇は避けたいでしそう?

それに、リアンに行動を起こさせたのは、まちがいなくモナさんなんだ。

モナさまがここにいなけりや、リアンは行動を起こさなかつた。なにしろ、ここつは王子殿下ですからね。

なにもなさないうちに自分が死んだら、ローザニア王国のお先は真つ暗だって判断する程度の、自制心は持ち合わせてます

硬直が解けたフィオーラは、ソファーの上で優雅に身体をしならせて、嫣然と微笑んだ。

「つまり、殿下の自制心は、モナさまのために、吹き飛んだといつ  
わけですのね？」

アレンも笑つて答えた。

「そのとおりですよ。

俺はモナさまに感謝しますけどね。

殿下はきっと、ここに来なければ、無関係な人を銃撃戦に巻き込  
んだのは自分だとして、もんもんと悩むに決まってるんです。

こいつは陰気になると、際限がなくて。

そばに仕えている俺たちは、たまりませんよ

「アレン、おまえ」

怒ったローレリアンが文句を言つと身構えた瞬間、階下でなに  
かが壊れる大きな音がした。その音のあとに、大勢の足音と男たち  
の怒声が響き渡る。

「はじまつてしまつたか！」

「そのようですね」

シムスが廊下にいた『ポワントの窓の花亭』の主を部屋の中へおし  
こみながら言つ。

「自分が扉の前に立ちます」

「そうしてくれ。

こじは下手に出歩かないほうがいい。まさかリンフェンダウルの  
部下も、出合う人間すべてを、無差別に撃つたりはしないだろ？

わたしといつしょにこる限り、この部屋の中の人間は安全である  
はずだ」

「そりであるといいんですがね」

それだけ返し、シムスは部屋のドアを閉じた。

すでに階下では、何発か発砲の音がしている。

腋の下のホルダーから、銃を抜き取つて点検をする。ポケットの弾薬ケースから紙薬莢と雷管もいくつか取出し、いつでも手にとれる状態にして、シムスはぼやいた。

「リンフンダウルが乗り込んでくる前に退散したかつたけれど、やつぱり世の中つーのは、そんなに甘くはなかつたな。

がんばれ、俺。

王国の未来は、なにがなんでも、守らなくちゃなんねーんだから  
な」

一階の娼婦の部屋で、酒を飲みながら仲間とつきの反政府思想の宣伝パンフレットの内容について打ち合わせをしていた男たちは、破壊音と女の悲鳴を聞いて、いっせいに立ちあがった。

「なんの音だ、あれは！」

仲間の内で、もつとも氣の小さい男がドアに駆けつける。

ドアを開けると、その男はなりふりかまわず廊下へ飛び出していくつた。

「兵隊だつ！」と、絶叫しながら。

その声に、複数の銃声と悲鳴がかぶる。

ジャン・リコミニネと仲間たちは、緊迫した顔を見あわせた。

「Jのタイミングで仲間が撃たれるといつことは、警告しても逃げる者には発砲してよいといつ、許可が出ているのだらば。

複数の男の物である重い足音が、入り乱れて近づいてくるのが聞こえる。

ドアの外には、すでに退路はない。廊下に飛び出して自分だけ逃げようとした仲間は、兵隊を直に見ているのだ。

リュミネは中庭に通じている窓を開け放った。

窓から身を乗り出して上を見あげると、建物にぐるりと囲まれた狭い夜空には月が輝いていた。

緊張のせいで頭に血がのぼるのか、首筋や耳のまわりが焼けるようになつた。

必死に、考える。

逃げられる可能性が残っているのはどうだ？

おやぢく、建物の出口は、すでにすべて封鎖されてくるはずだ。

中庭に飛び出す。

仲間もあとに続く。

早くも兵士がリジィの部屋に――

高圧的な声が、リュミネ達の足を止めようとする。

「動くな！」

動くなと言われて従えるものか。

中庭を駆けぬけて、むかい側の部屋の窓ガラスを割った。

中に腕を差しこんで鍵を開ける。

リュミネが真っ暗な部屋に飛びこんだ瞬間、銃声がいくつもとどろき、背後でガラスが碎けて飛び散った。同時に、甲高い仲間の悲鳴が聞こえる。

撃たれたのか！？

迷つてなどいられない。

動かなければ、自分も標的になつてしまつ。

やつらが容赦なく発砲してくれたのは、リュミネにとつては、幸運なのかも知れなかつた。先から弾を込めなければならぬ銃は、一回発砲してしまつと、次の弾を装てんしおわるまでの一、二分間は、飛び道具として役に立たなくなつてしまつ。

鉄砲のことなど、どうでもいい。

じたなことを考えている暇はない。

逃げ場所として一番ふさわしいのはどじだ。

兵隊の足音が！

弾が出ない銃でも、先には銃剣という凶器がついている。追いつかれたら、自分の命はない。

自分は新聞記者だ。ペンは剣よりも強しが、これだけの暴力の前では、無力もはなはだしい。持っている武器はペーパーナイフ一本。護身の道具としては、お話にならないお粗末さだ。

暗がりで家具につまづきながら、ドアへたどり着いた。

同じ部屋に転がりこんだ仲間たちを呼ぶ。

先に廊下へ仲間を出して、自分も後に続いた。

われながら、あるこやつだ。

ひざら側の廊下に兵隊がいるかどつかの確認役を、仲間に押しつけたのだから。

廊下に出たコノミネは足をとめた。

後ろをふかえりもせずに逃げ散る仲間の背中を、ながめながら。

ひどく息があがつていて、胸が内側から心臓に連打されている。考えをまとめるためには、自分にむかって言い聞かせなければならなかつた。

「落り着け。落ち着くんだ、ジャン」

すぐに中庭にいる兵士たちがひざへ来ないのは、銃に弾をこめてこらからだらう。連中も、こちらが武装している可能性を、ちゃんと考へて行動しているのだ。

残りの持ち時間は、一分か、一分。

じつある。

両手をあげて、投降するか？

そうすれば、問答無用の射殺はまぬがれる。

だが、待て。

下つ端の仲間は抵抗しないかぎり、牢屋行きくらいですむ。だが、自分、ジャン・リュミネは、知識人が愛読することで有名なサンエット紙の論説委員だ。追及は政治犯としてだけでは終わらないだろう。

宰相なら、これを機会に反政府活動家のつながりを明らかにして、あらゆる反政府運動を根絶やしにしようと。リュミネを拷問して自白を強要するくらい、当然やるにちがいない。

今、捕まるわけにはいかない。

自分は、まだ目的をなにも果たしていない。

大昔の手柄で先祖が得た地位をそのまま世襲して、何の疑問ももたずに民衆から搾取した金で遊び暮らす貴族たちを、リュミネは絶対に許さないと誓つた。

何代にもわたって積み重ねられた、やつらの膨大な罪には、天誅が下つて当然だ。

そうでなければ、貴族の理不尽のせいで死んでいった者達がうかばれない。

何人もの人の顔が、リュミネの脳裏に現れては消える。

両親、弟や妹、無邪気な友達、生真面目で働き者の村の人々……。

20年前の飢饉の年、リュミネが生まれ育った村は全滅した。飢えて痩せ細った人々のあいだに、たちの悪い流行り病が出たのだ。

ひとたまりもなかつた。

みんなが死んだ。

その時、領主は王都にいた。

領主は何もしなかつた。

ただ、自分たちが流行り病にからないうに、遠くへ逃げただけだ。

怒りで、眼の奥が赤く燃える。

自分は、まだ死ぬわけにはいかないのだ！

「ジャン！」

女の声が自分を呼ぶ。

娼館の帳場のほうから女が走つてくる。

リュミネ達に自分の部屋を集会場として提供していた娼婦のリジイだ。

『ポワントの宵の花亭』ほどの店にいる娼婦なら、それなりに教養

があつて、社会事情にも通じてゐるはずだ。しかし、この女は頭が弱いんじゃないかと、リコミニネは思つていた。

何度か情を通じあい、娼婦らしからぬ控えめな性格が氣に入つて、「おまえみたいな女と田舎で所帯を持ちたい」と言つてみたところ、リジイはなんでもリコミニネの言ひなりになるようになつた。

金が必要だとなれば、いくらでも貢いでくるし、「集会が終わるまでは邪魔だから、どこかへ消えていろ」と命じれば、文句も言わずに部屋からでていぐ。

おかげで彼女は借金まみれになつた。

しかし、リコミニネは一度だつて、彼女に借金を強要したことはない。ただ、情事のあとで請求書や督促の手紙を見ながら、ため息をついただけだ。

リジイはリコミニネのもとへたどりつへと、彼の手を取り、強くひつぱつた。

「兵隊は憲兵よ。

抵抗するものは誰であろうと射殺しろといつ命令が出来るみたい。金所の下働きの男が、窓から逃げようとして撃たれたわ。やつらは、花街の住人のことを虫けらだと思つてゐ。ここにいたら、あなたは殺されてしまつ。」

「どうか、逃げ道はないか

リジイは、悲鳴や足音におびえながら、あたりを見まわした。

「外は無理。一階の道路に面したすべての部屋の窓には、娼婦の逃亡を防ぐための鉄格子がついている」

しばらく考えたりジイは、なにかを思いついたらしく、リュミネの手をひいて走りだした。

ひとつ扉の前にたどりつく。

そのなかは薄暗くて狭い使用人専用の階段だった。

リュミネの手をひきながら階段を登り、リジイは言つ。

「仲のいい売れっ子の部屋に、かくまつてもうつわ。彼女の広い部屋になら、身をかくす場所が、いくらでもあるの。夜が明けるまで、そことかくれていましょ」

階段を駆けあがつて、リュミネと娼婦は廊下を走った。

冷静になるために、リュミネは何度も深い呼吸をする。

階下の激しい物音を聞くと、胸を乱打している心臓が縮みあがる。

今、自分はいったい、どうこう顔をしているのだろう。

勇気の神オーリス、俺に、力を！

回廊をまわつて、店の表側に面した立派な廊下へ入る。

そこでリュミネは、また緊張した。

リジーが走つていく先には、一人の若い男が立つてゐる。彼の服装は街でよく見かける裕福な平民のそれだが、体格が立派だし、眼光が鋭すぎる。きな臭い男だ。

王子殿下がおいでになる部屋の扉の前に立ち、あたりを警戒していたシムスは驚いた。

階下では大変な騒ぎが起きており、その騒ぎが、いつ一階へ波及するかと思っていたのだが。

一組の男女が、自分のほうにむかって、走つてくる。

女は、まちがいなく、この店の娼婦だ。派手な赤い衣装を着て、素朴な顔に似合わない濃い化粧をしている。

彼女が手をひいているのは、情夫といったところか。一夜限りの客を、娼婦がかばつたりはしないだろうから。

さえない容姿の男だ。

年のころは三十をすこし超えたくらい。

やせぎすで、疲れた顔をしている。

情夫といつよつは、ヒモかな。

すがりついてくる情けない男の行動を、愛情があるからだと勘違 いする娼婦はよくいる。

だれだつて、愛が欲しいんだよなあ。だから俺も公休日には、歓樂街へ来ちゃうわけだ。

しかし、いまの俺は、お仕事中なんだぜ。

心の中でぶつぶつやつたあと、シムスは女の前に立ちふかせがつた。

「すまんが、ここから先には通せない」

女は取り乱した様子で、シムスにすがりついた。

「どうして？」

わたしは仲良しのフィオーラに用があるのよー。  
下では憲兵が、銃を撃ちまくっているのよー。  
彼女のところへ行かせて！  
わたしのいい人を、憲兵に殺させたりしないでー！」

\* \* \*

ドアの外の騒ぎを耳にして、ローレリアン王子とアレンは顔を見あわせた。

ローレリアンはソファーにすわるフィオーラにたずねる。

「ドアの外の女性は誰ですか」

「リジィです。わざわざお話しした、部屋を恋人に貸している娘です」

「では、こつしょにこるのは、ジャン・ココミネかー。」

「これは思わぬ僥倖ゆうこうだと、王子は笑う。ジャン・ココミネが、みずから我が手中へ落ちてきたのだ。」

彼は、この場で殺してしまつには惜しい情報源だ。

しかし、せつかく捕まえてもリンク・フュンダウルの手に渡つたのは、拷問され、まともな情報など取れなくなるだろう。

これも、神々のお導きか。

王子がここのよつな場所へ出でくるなど愚かな行動だと恥じていたが、ジャン・ココミネを自分の手で捕縛はばくできるといつにならば、恥をかく程度の気まずさなど、帳消しにできる。

「アレン、いいか？」

王子に絶対の忠誠を誓つ青年士官は冷静な顔でうなずくと、アランのわきに立ち、懷から短銃を取り出して構えた。

「これはこまつた、どうしたものかと、女に取りすがられながらシムスが思つた瞬間、彼が守つていた扉は内側から開いた。

扉を開いたのは、部屋の主のフイオーラである。

「リジイ、大きな声で騒がないで。早く部屋の中へ、お入りなさい」すでに泣きはじめていたリジイは、わななきながら言つた。

「あ……、ありがとう、フイオーラ。もう、わたし、どうしたらいいのか」

「泣くのは、あとにして。まあ、早く」

國一番の美女ともてはやされる美しい娼婦は白い衣装に身を包んでおり、唇には優しい微笑を浮かべていた。その姿は廊下のほの暗い明かりに照らされて、心やさしき天女とほかくやといふ様子である。

天女に誘われ、リジイは開かれた扉をくぐる。そのあとに続いて、ジャン・リュミネも部屋の中へ入つた。

その瞬間、早鐘の勢いで脈を打つていたリュミネの心臓は凍りついた。

「両手をあげて、ゆっくりと壁際まで下がれ」

ニアのすぐわきの暗がりから、低い男の声がさう命じる。

あたりの空気が冷え冷えとしているのは、まちがいなく、この男のせいだ。

銃をまっすぐに構え、リュミネの急所に狙いを定めた男の眼は、薄暗い空間に浮かんで爛々と輝く夜行性の獣の瞳のよう見えた。

「ビ、ビ! って! ?

悲鳴のように叫んだリジーにむかって、フィオーラは答えた。

「娼婦のせいでしてつたむ卑劣な男を、わたくしが助けると思つたの? ？」

「リジー、あなた、いい加減に田を覚ましなさい! 」

ゆるゆると自分の手をあげながら、リュミネは考えた。

どうやら俺は、この部屋の主の女に憎まれて居るらしい。女を食い物にする男だと。俺は一度だって、この女に、何かを求めたことはないところだ。

だが、最後くらいは、悪人らしくしてしまつていいか。なじみの娼婦とも、どうせ今夜限りだ。

勢いよく一步をふみだし、リュミネはリジーの首に腕をかけ、自分を引いた。

拳銃を構えていた男が、一瞬、躊躇する。

なぜ、撃たない？

なぜ、迷う？

おまえは軍人じゃないのか？

いかにもそれっぽい眼光で、俺を射殺しそつた勢いなのに。

リュミネは叫ぶ。

「動くなよ！ それ以上、俺に近よるな！ 近よれば、この女の首を掻き切つてやる！」

ペーパーナイフ一本でも、女を人質にとれば身を守る道具になつた。

リュミネは皮肉な笑みを唇の端に浮かべながら、ぐいぐいと部屋の奥へ進んでいった。

廊下から、その様子を見ていた、シムスがわめいた。

「たいちょー！ なにせつてるんすか！ らしくもない！

ドアのわきに立つアレンが怒鳴り返す。

「いぬわー！」

殿下の前で、無益な殺生などしてみろ！  
聖職者の懺悔つてのは、うざこんだぞ！

何日も、何日も、暗い顔で、『神々よ、罪深きわたくしをお許しください』なんて、お祈りされるのは、まっぴらじめんだ!』

「殿下だと?」

バルコニーへ通じる窓へむかおうとしていたリュミネは、歩みを止めた。

月明かりが差しこむ、その窓辺には、一人の男が立っていた。

彼の髪は淡い金色で、月の光を吸いこんだその髪は、まるで後光のよう輝いて彼の整った顔を縁取っている。

「おまえは、リュミネ殿

聞き覚えのある声が、リュミネに話しかけてくる。

「おまえは、リアン?  
クレール商会の、無氣力な跡取り息子……?  
いや、ちがう。おまえは……」

リュミネのもとへ、理解の波が、急激に押し寄せてきた。

金色の髪と水色の瞳。

どうして今まで、気がつかなかつたのだろう。

「の男は !

文章のつなぎ田が中途半端であるため、前のお話と始まりの3行がかぶります。

金色の髪と水色の瞳。

どうして今まで、気がつかなかつたのだろう。

この男は ！

自分の愚かそれに、無念の思いがわく。

言論をゆさぶる活動を長年つづけてきて、その世界では名の知れた存在となつてから、自分の思考にも奢りや油断による歪み<sup>ゆが</sup><sub>あい</sub>が生じていたのだ。

もつと澄んだ思考で考えていれば、疑いをもつたはずだ。こんな容姿に生まれついた男が、世界に何人もいるわけがない。

金色の髪、水色の瞳、整つた顔立ち。落ち着いた表情、威厳ある態度、聖職者らしい、慈愛に満ちた微笑……！

「 もちろん、ローザニアの聖王子、ローレリアンか！」

そう呼びかけたら、王子の表情に影がさした。その影に呼応して、窓の外の月が雲間にかくれ、部屋のなかも薄暗くなる。

まるで王子に備わつた魔力を見せられたような気分になり、リュミネは乾いた喉を鳴らした。

低い声で、王子は言った。

「あなたにとつては、悪魔かもしれませんよ。

民衆を煽つて国家の秩序を乱そうとする者を、わたしは許さない。人を敵として憎み、策を弄しておとしいれる背徳者になろうとも、この国のためなら、わたしはなんでもする。

王子として生きると決めた時に、わたしは神々と交わした『万人を愛する』という約束を破棄した。そのために、死後煉獄れんじくへ落ちようとも、けして後悔はしないと誓つて

「ちつー。」

悔しさのあまり、リュミネの口元からは、舌打ちがもれた。

相手が王子と知つて気が遠くなつたのか、彼の腕の中の娼婦は急に重くなり、いまにも床の上に崩れて倒れそうだ。

ちゃんと立てと、女をゆすりあげた。

なにをついたえる。

王子だつて、しょせんはただの人間だ。

それに俺は、長年肌をあわせてきた女を殺してしまつほど、ひどい悪人ではない。

おまえだつて、それがわかつていたから、恋人気取りでいたのだろうに！

女がよろめき、そばの家具にあたる。

いまいましいと思いながら倒れそうな女をもう一度ひきあげた瞬間、ペーパーナイフを握るリュミネの右手の甲に激痛が走った。

田の前に飛び散ったのは、自分の血だ。生ぬるい液体とともに、ナイフも音をたてて床へ落ちていく。

「アレンー。」

鋭い女の声が、青年士官を呼ぶ。

次の瞬間、飛びかかってきた青年士官によつて、リュミネは床の上にねじ伏せられていた。

床に押さえつけられた顔を横にむけると、視線の先には紺色の女性のドレスのすそと、血が滴る細身の剣があった。

その剣を持つ女は、怒りに震えている。

「あんたって、なんてひどい男なの？」

リジイは、本当に、あんたのことを好きだったのよ？！

あんたのためなら、身を滅ぼしてもいいと思つくり、愛してたのー！」

「ひどいな。この傷じや、もう右手ではペンを握れなくなるかもしない」

完全に、思考停止だ。リュミネは、声もなく笑いながら、自分の右手の心配だけをしていた。

血は流れつづけ、痛みがひどい。

なんて、女だ。一瞬のすきをついて、正確に狙つた場所へ、剣をくりだしてくるなんて。

おまけにこの女は、ヒステリーもちだ。

「なんなの、この男は！ 笑ってるわよ！ ほんと云ふと、自分のことしか考えてないのね！ その手、切り落としてやればよかつた！」

セーきーわめく女を、フィオーラと王子がなだめてこる。

「落ち着いて、モナ」

「ほり、剣をしまつて」

「だつて、リアンー」

後ろ手に縛られて、リュミネは床にすわらせられた。

それで、やつと女の姿が見られるようになる。

すんすん鼻をすすりながら、女は剣についた血をぬぐい、鞘に納めた。貴族の跡取りの少年が持つような、細身の剣だ。柄と鞘の細工がとてもみごとで、由緒あるものであることが、ひと目でわかる。

涙に濡れた眼が、ふたたびリュミネをにらんだ。

なんと印象的な瞳であろうか。

雲が風に流されているのか、窓から差し込む月の光は明るくなつたり暗くなつたりをくりかえしている。その光が当たるたびに、彼女の紫色の瞳は色味を変えた。

なるほど、この女が、ローレリアン王子との恋仲を噂されているヴィダリア侯爵令嬢なのだ。少々変わり者であるとは聞いていたが、実物は噂以上にすごい。とくに、瞳にあふれる力は圧倒的だ。

生気に満ちた彼女の瞳の力にあてられたのか、リュミネの耳元にも、現実の喧騒がもどりてくる。

銃声はいつのまにか止み、一階の廊下には男たちが走る荒っぽい音が響き渡つていた。

「くまなく探せ！」

首謀者のジャン・リュミネの死体がない！

外に出ようとした者はみな殺すか、拘束するかしたのだ！

やつはまだ、建物の中にはいる！

なんとしても、探し出せ！』

足音にまじる怒鳴り声を聞いて、アレンと呼ばれた青年士官が肩をすくめた。

「あのドリ声は、リンク・ハンドウルだ」

たのもから、その短銃を俺にむけるのはやめないと、リュミネは思つた。なにかの拍子に、うつかり引き金を引かれたら、たまつたものではない。

「の青年士官にも、まんまとだまされた。

よくよく思つて出せば、この青年士官とも街のカフェで会つてゐる。

あの時は、どうやら田舎者だと思つたが、王子の護衛だつたと

は。

とアーヴィングの前で、男たちがやり取りを始めた。

「なんだ、おまえはー。」

「はー！ 近衛護衛隊に所属しておつます、シムスありますー。」

「近衛護衛隊だと？ 上官は誰だ？」

「第一王子付き第二小隊長、アレン・デュカレット卿でありますー。」

「なんだ、なんだ、桂冠騎士殿は夜遊び中だったのか？」

「こんな高級娼館にお出入りとは、たいした御出世ぶりだな。あの小僧、王子のお気に入りだからといって、いい気になりやがって」

「恐れながら、上官の名誉のために申し上げます。わたくしどもは、任務中であります」

ドアの外のやり取りを聞いて、王子が馬鹿めと、額をおたふる。

「アレンの名誉など、どうでもよからうー。」

「こいつの優雅な夜遊びとこうにしておけば、部屋の内部の改めを、逃れられたかもしれないのにー。」

青年士官の眉が、ピクッと動く。

「やつやじつも、ひどくないですか」

「ひどくなんか、ないぞ。」

それどころか、おまえにとつては名誉な尊になるさ。

国一番の剣士アレン・デュカレット卿の夜遊びの相手は、国一番の美女フィオーラだとな

すこし離れた場所にすわっていた美女が、扇の影で艶やかに微笑む。

「尊ですませなくとも、よろしいですわよ。

アレンさまなら、いつでもわたくし、大歓迎でお迎えいたします」

モナが、そっぽをむく。男の人たちって、どうしてこうなの、といつた顔で。

そういふすうひけりに、ドアの外のやり取りの風向きが怪しくなってきた。

「あー、ですから、わたくしどもは、任務中でして

「護衛隊の任務とは、護衛であろうー。

誰の護衛をしているというのだ！

とにかく、この娼館は、いまは我が指揮下にあるー。すべての部屋は、内部を改めるー！」

「ですからー！」

アレンが顔をしかめた。

「あいつには、難しい交渉事はまかせられないな

「同感だ」

つなづきながら、ローレリアンは傍らのモナに手を差した。

「リンフンダウルが部屋にふみこんでくるとき、きみは顔を見られなければ、それに越したことはない。ちよつと、そここのカーテンの影にかくれておいで」

そういうた王子は、モナをフィオーラのベッドの上にあがらせて、みじことなビロードで作られた天蓋のカーテンを引いた。

男に手を取られてベッドの上にあがるなど、本来ならび、これ以上なまめかしい行為はない。分厚いカーテンで視界をさえぎられたあと、モナは暗がりのなかでうずくまり、赤くなつた。

無数の男女が愛の嘗みをくりかえしてきたのであるつ娼館のベッドからは、甘い匂いが立ち上つてくる。シーツや羽根布団は、やわらかく彼女の手足にあたつた。

結婚などしなくとも、愛しい男を籠絡する方法はあると、フィオーラは言つた。

それはまさしく、このベッドの上で嘗まれてきた愛の行為をひさすのだらう。

自分が女としてローレリアンを愛し、彼の疲れきった心を慰めようとするならば、やはり男女の愛の行為は無視できない。

たがいを抱きしめあつたり、口づけをかわしあつたりすると、人は強い慰めや満足を感じられる。その満足を得ると男も女も、一世を誓う契りを求めずにいられなくなるものらしい。その過程は、熱

く、狂おしく、激しいものであるとか。

男の人を怖いと思っていたころには、耳年増の小間使いの少女から聞きかじったその話を信じる気にはなれなかつたけれど。

いままなら、理解できる。

好きな人のことを考へると、心がうずくから。

好きなのは、ローレリアンだけなのだ。

他の誰にも、こんな気持ちは持てない。

彼になら、何もかも許して、さらけ出してもいい。

自分の身体を征服する男として、受け入れられる。

暗がりに身をひそめながら、モナは自分の手で自分を抱きしめた。息を止めなければならぬほど強く体を拘束すると、眩暈<sup>めまい</sup>がしそうな感覚にとらわれる。

ローレリアンの腕に抱かれる感触を、思い出すのだ。

刺客に殺されそうになつたとき。

衆田の面前で、王太子に迫られたとき。

その体験は、いつだつて極限の状態へ追い込まれてゐるときに限

られていたけれど。

強いローレリアンの腕の力からは、モナへの想いだけが伝わってきた。

それは、怖かったり恥ずかしかったりして、ひどく苦しい瞬間の出来事であったはずなのに、いま思い出すのは、ローレリアンの腕の感触だけだった。

自分はつづく、普通の貴族のお姫さまではないなど、モナは思つた。

好きな男に身も心も征服されたいと妄想するお姫さまなんて、聞いたことがない。

みずからを拘束する腕の力をゆるめたり、ちりつとしたかすかな痛みが首筋に走つた。

そこに痛みの原因を作つたのは、フィオーラの口づけだ。

口づけの感触を思い出すと、全身に、ぞくつとくる震えと熱がわく。

この身を焼く熱さのつさには、なにがあるところのだろう。

続きを読むのが、ローレリアンであればいいの。

モナは唇をかんだ。

王子の孤独を癒して慰めたいなんて、たいそうなことを、自分は

願つていたけれど。

でも、本当は、自分自身も幸せになりたいのだ。

彼を、抱きしめて。

やるせない思いに身をよじり、深くモナがうなだれた、その時だつた。

部屋のドアを蹴破る激しい音が、あたりにどどんこった。

それと同時に、野太い男の蛮声が人の名を呼ぶ。

「ささまは、ジャン・リュミネー！」

「やめろ、リンフーンダウル！」

「殿下、お下がりください！」

複数の声とともに聞こえたのは銃撃音と、女の悲鳴だ。

そして、乱闘めいた足音と、ガラスが割れる音。

モナは暗がりで息を殺し、身を固くした。いま下手に動けば、それこそローレリアンをこまらせるかもしない。

カーテンのすき間からは、部屋中に充満しているのだから硝煙の臭いが、ゆるりと入りこんできていた。

本文中に血が流れる描写があります。苦手な方は「」注意ください。

煮え切らない態度で、のらりくらりと言い訳を重ね、部屋の中の人物が誰なのかを明かそうともしないシムスに腹を立て、とうとう憲兵総監リンフェンダウル男爵は『ポワンの宵の花亭』で一番立派な部屋のドアを蹴破つた。

蹴破る必要など欠片もなかつたのだが、いらだちが最高潮に達していたので、そうせずにはいられなかつたのである。

ひさしぶりに、やりたい放題できると大喜びで乗り込んだ『ポワンの宵の花亭』で、リンフェンダウルは盛大な肩透かしを食らつたのだ。店に客はほどんどおらず、一階の奥の部屋で呑気に酒を飲んでいた反政府活動家たちからは、抵抗らしい抵抗もなかつた。すでにリーダーのジャン・リュミネを除く全員を、逮捕拘束している。半数は死体だつたが。

捕り物劇に巻き込まれて死んだ一般人は、店の従業員の一人だけだつた。いざれも、盗品売買にかかわつていたり、下つ端の麻薬密売人だつたりして、憲兵隊に捕まつたらただではすまない人間だったので、逃げようとして撃たれたのだ。

本来ならば、迅速に進んでいる任務遂行の具合を喜ぶべきところなのだが、リンフェンダウルは怒り狂つていた。彼は今夜、この場所で、血沸き肉躍る体験をするはずだつたのだ。王都一の高級娼館で、金や権力を持つた男たちが閨ねやをあばかり羞恥にまみれて裸で逃げ惑う姿を嘲笑あざわらい、彼は至福の時をすこすばずだつた。

それが、なぜ、何もない！

彼はもともと、あまり機転がきく男ではない。あくまでも宰相の命令に忠実で、汚れ仕事も嫌がらずにやってきたから、いまの地位まで登りつめた男である。

いらだちが最高潮に達していた彼の視界は、極端に狭まっていた。

そのとき、感情にまかせて蹴破つたドアのむこうに、今夜の捕獲目標最重要人物であるジャン・リュミネを発見したのである。見失つたかと焦つていた、彼の獲物だ。

自分勝手な怒りの感情と、ついに見つけたという歓喜の感情がないまぜになり、リンフェンダウルは迷うことなく、狭窄した視界の中心にむけて手にした銃の引き金を引いた。

もともと、この時代の銃の命中精度は、それほど高くはない。至近距離の相手を撃つときには、銃を腰に構えてまっすぐに撃てと兵士に教えるほどである。そのほつが、あわてて狙いを定めるより、よく的に当たるのだ。とりあえず体のどこかに弾が命中すれば、相手の行動力をそぐことができる。

それに、嗜虐趣味をもつリンフェンダウルがリュミネを撃つた真の目的は、獲物が苦しむ様子を見たいという、純粹な欲望を果たすためである。今夜の捕り物劇が思つよつた展開にならなかつたせいで、欲求不満は溜まりに溜まつてゐる。ジャン・リュミネを捕獲したあかつきには、とことんまでいたぶつてやるつもりだつたのだ。

リンフェンダウルの凶暴な性格をよく知つていたアレンは、ジャン・リュミネには目もくれず、ローレリアンに飛びついて凶弾の射

線から遠ざけた。

「やめろ、リンフォンダウル！」

「殿下、お下がりください。」

ふたりが叫ぶと同時に、銃声がどどりき、女が悲鳴をあげる。

悲鳴はフィオーラのものだった。

彼女は田の前の出来事に感情を翻弄ほんろうされて、何度も、何度も、絶叫した。

「どうしてー、どうしてなのー！ リジー！ いやあ つー

リンフォンダウルの凶弾を浴びたのは、ジャン・リュミネではなく、彼の前に飛び出した情婦のリジーだった。しかも、彼女は血にまみれながら、リンフォンダウルの行く手に立ちふさがる。彼女の腹からは致命傷にふさわしい量の血が噴き出していたが、それでもリンフォンダウルへとむかっていくのだ。

「逃げて……、ジャン。 はやく……！」

「このアマー！」

先込め式の銃は、一度撃つてしまつて、次の弾を込めるまでは玩具も同然だ。兵士の銃には白兵戦用の銃剣も取り付けられるが、より実戦むきの剣を持ち歩く士官の銃には、そんなものはついてない。

リンフェンダウルは迷うことなく銃を投げ捨て、腰の剣帯から剣を抜いた。その剣で、田の前の女に切りつけ、後につづく部下へ命じる。

「なにをしている、早く獲物を撃て！ 逃がすでない！ 殺してかまわん！」

断末魔の叫びとともに血だまりの中に倒れこむ女を飛びのいてよけながら、リンフェンダウルのそばにしたがつっていた副官と下士官は、とまどいの声をあげた。

「しかし、総監閣下。あちらの方からの」命令は ？」

その隙に、ジャン・リュミネはバルコニーへ突進し、後ろ手に縛られた肩で窓を破つて外へと脱出する。

リンフェンダウルは眼を血走らせてわめいた。

「追え！ あいつを、追え！ 殺せ！ 逃がすな！ 殺してしまえ！」

娼婦の血にまみれた剣をふりまわすものだから、あちこちに赤い滴が飛ぶ。

その滴の一滴が、ローレリアン王子の頬を濡らした。

王族の顔に、死人の血を塗りつけたのである。これ以上の不敬があろうか。驚愕のあまり震えながら、リンフェンダウルの副官は上司に取りすがつた。

「総監閣下。どうか、お氣を静めてください。御前でござることか」

「御前だと……？」

正気に返ったリンフンダウルは、壁際に王子の姿を認めて慄然とした。

頬に飛んだ血の滴をぬぐいもせずに、王子はリンフンダウルのほつゝやつて来る。その水色の瞳は極寒の地の湖のようにならへて冷たく凍りつゝ、整った顔は彫刻のよつに動かない。

薄暗がりに、王子の声は朗々と響き渡つた。その声はまさに、聖堂の中に響く聖職者の声である。人が犯すおろかな罪を追及する、裁きの声だ。

「すでに拘束されていた者を、なぜ撃つたのだ。リンフンダウル男爵」

リンフンダウルは一瞬、言葉をなくした。

月明かりが、王子の顔を半分だけ照らしている。

光の反対側には深い影が落ち、その翳りは美しく若い王子を、この世の者とは思えない様子に見せるのだ。

「陛下がいかへお出ましとは存じませず、ご無礼もつしあげ

」

「わたしの問い合わせよ、リンフエンダウル」

ローレリアン王子の前にひざまずき、首を垂れたリンファンダウルは唇を噛んだ。宰相の権力を後ろ盾に持ち、長年にわたり怖いものはないと言い放ってきた彼の前に、とつじょとして現れたのが、この王子である。

そして、ここ最近、憲兵隊への出動要請があると、わざとリンファンダウルの影響力が強くおよぶ部隊を外して命令を出してくるのも、この王子。

またかと、リンファンダウルは屈辱の思いを噛みしめる。

おそらく、今夜の出動命令には宰相が絡んでいるため、自分の思惑通りに事を進められなかつた王子は、ここへ直接出向いてきたのだろう。聖職者のローレリアン王子は、殺生を極端に嫌うという噂を聞いている。だから、残虐な行為を好むリンファンダウルは、うとまれるのだ。

リンファンダウルにしてみれば、聖人めいた王子の態度が歯がゆくてならない。不穏分子は徹底的に排除すべきなのだ。それが、結局は国を守ることになると、彼は信じている。

だが、王子の態度を苦々しく思つても、リンファンダウルには、どうすることもできないのだ。時の権力者の座はまもなく、この王子へ移りつつとしている。

その現実は、王子の自信ともなつていてのだらう。リンファンダウルの弁明は、はるかな高みからの叱責で、容赦なく封じられていく。

「宰相閣下からの命令で、やつらは殺してもかまわぬと

」

「被疑者を尋問する機会を、わざわざ逃す命令は、宰相も出してはおひめねはず」

「しかし

「あのつえ、貴殿はここで、反政府活動とは無関係な者も撃つている」

「その者達は犯罪者で、抵抗したので

王子は足元の娼婦の遺体を見下ろした。

「では、この女は、何をした

「ジャン・リュミネを逃がさうと

「貴殿がいきなり撃たなければ、この女は死なずに済んだし、ジャン・リュミネも逃げられはしなかつたはず。そうではないか、リン・フーンダウル

「言ひ逃れはできないと悟り、リン・フーンダウルは逆に居直った。自分を今の地位から追い落とそうとするならば、たとえ相手が王子であろうと、一矢報いてやるつもりである。とにかく、少しでも深い傷を負わせてやると、自分勝手な男は牙をむく。

「王子殿下、お言葉ですが。今宵摘発の舞台となる店に、よもや王子殿下がおいでになつていらつしゃるとは、誰が想像できますでしょうか？」

わたくしは、この店に入ると、決死の覚悟で「やこました。

軍人の決死の覚悟など、聖職者であらせられる殿下には、お分かれいただけないのかもしませんが。

決死の覚悟とは、生きるか死ぬかの、極限の覚悟でござります。

その覚悟で飛びこんだ場所で、敵に出会えば立ちむかう。

当然とは、思われませぬか」

「一軍の指揮をとる者に、わたしが求めるのは、勇気と冷静な判断である。

わたしの警告によって客がほとんどになくなっていたこの店で、貴殿はどのよろづな抵抗にあつたとこいつの？ 判断の根拠を示せ」

「わたくしの判断を狂わせた原因は、おそらく殿下の驚くべき行動でござります。

大勢の人の中から短い時間で、わたくしは反政府活動家どもを逃がすことなく、探し出さねばならないと考えておりました。ですから、抵抗するものは撃てと、部下に命じたのです。

しかし、殿下はこの店の客の大半を、あらかじめ逃がしておしまいになつた。肩透かしをくつた我々は、あわててしまつたのでござりますよ」

「そなたの詭弁は、もう聞きたくない」

「さて、わたくしの言が詭弁かどうかは、どなたがご判断くださるのか。

そのお裁きの場では、わたくしにも言つべきことがあると申し上げておきましょ。つ。

王子殿下は、国王陛下の勅命による憲兵隊の行動を、作戦開始前に外部へもらしてしまわれたのですからな！」

それだけ言い放つと、リンク・フンダウルは部下を引き連れて部屋

から出ていった。

「外の見張りは、どうしたのだ！ 街の警備兵にも連絡を取れ！ まだ反政府活動家のネズミは、そのへんにいるはずだ！ 何としても、やつを捕らえよ！」

開け放たれたドアのむこうで、リンクフュンダウルの怒声が遠ざかっていく。

ローレリアンは深く、息をついた。

王子としての気迫を求められる場面に遭遇すると、いまだに緊張で胸がつぶれそうになる。この感覚には永遠に慣れることはないだろと思つ、ローレリアンである。

あらためて部屋の中を見まわせば、陰鬱な光景が、そこにはあつた。

床のうえには、おびただしい血と娼婦の遺体。

娼婦は赤い衣装をまとっていたし、この部屋の装飾には赤が多用されていたから、眼の奥に赤い色が焼きついてしまってそうだ。

娼婦の遺体のそばではフイオーラがうずくまることにして泣いており、『ポワントの宵の花亭』の主が、「おまえのせいではない」と、彼女を慰めている。

「殿下、お顔の汚れを」

「すまない」

アレンがさしだした水に濡らした手布を受け取り、頬の血をぬぐう。

布にこびりついた赤錆色の血を見ても、ローレリアンの感情はあまり動かなかつた。

王子と呼ばれるよくなつてから三年の間に、ローレリアンは何度も、目の前で人が血を流す光景を見てきた。その多くは、ローレリアンを殺そうとする刺客の血である。師弟一代にわたる『王子殿下の影』は、ローレリアンに害をなそうとする者を、一度たりとも

手の届く場所まで近づけたことはなかった。

しかし、慣れとは恐ろしいものだと思つ。田の前で人が死んでも、涙ひとつ湧いてこないのだから。

なるべく早く、この場からは離れたほうがいいだろう。

そう判断して足をふみだすと、靴の先に割れて飛び散ったガラスが当たつた。

苦い思いで、ローレリアンは無残に破られた窓を見た。

ジャン・リュミネが体を張つて飛びこんだせいで、優雅な形の窓の格子は壊れ、床には無数のガラスのかけらが散らばつている。その欠片はどれも、月の光を反射して美しく輝いていた。

破れた窓からは、夏の夜風が吹き込んでくる。

その風は、遠い呼子の笛の音や、男たちの叫び声までも、一瞬く運んでくるのだ。

まだ、あの男は捕まつていない。

下手をすると、取り逃がしてしまつことになるだろう。

ローレリアンの胸中は、ざわつく。

激しい勢いで後ろへさがれと壁際まで押しやられたとき、たくましい親友の護衛隊長の肩越しに、ローレリアンは確かに見たのだ。

バルニーから飛び降りるすんせん、ジャン・リュミネはふりかえり、ローレリアンをにらみつけた。

必ず、もう一度、おまえの前に立つてやるー。

月の光に照らしされた彼の顔は、鋭く研ぎ澄まされた覚悟で、うちからはじけそうに見えた。

ローレリアンは、ジャン・リュミネが書く新聞の論説の愛読者だった。それどころか、地下出版される反政府思想の宣伝文であり、どれも素晴らしいと思つていた。

彼が書く文章には、いつも国の未来を憂える深淵な思想と、貧しい人々への愛がある。革命によつて現王朝を倒し、一刻も早く共和政治を実現しようといつ過激な思想の持ち主でさえなければ、自分の側近の一人として迎え入れたいくらいだった。

だから、ローレリアンはときおり、リュミネの様子をうかがいにフィールミニンティア街の『ふくろう亭』まで出かけたりもしていたのだ。

おそらく、ジャン・リュミネが目指す理想とローレリアンが目指す理想は同じで、そこにいたるまでの道筋が、ちがうだけなのだろうと思つ。

けれども今夜、おたがいの道は、決して一つにまとまることはないのだとわかつた。

革命をなそうとするジャン・リュミネは敵だ。敵として、憎まなければならない。

わたし、ローレリアン王子は、誰の血であろうと血が流れることはない。

神々との約束を破るのは、本当に必要な時だけ。そして、その罪は、すべておのれが背負つていく覚悟だ。

なんびとたりも、わたしと罪を分かつことはできない。

この恐るべき罪は、いまの時代に王子として生まれた者だけが、背負う定めのものだから。

壊れた窓から視線を外し、ローレリアンは豪華な部屋の一隅を占める立派な天蓋つきのベッドへ近づいていった。

閉じられたカーテンに手をかけながら、内部に話しかける。

「よく最後まで我慢してくれたね」

あの騒ぎの最中にモナが物陰にかくれたまま自制してくれたのは、かなりありがたかった。これ以上の混乱など、考えたくもなかつたから。

やはり彼女は賢い女性だ。ほんのひとこと助言しただけで、すべての状況を飲み込んで、最良の判断ができる。

そう思いながら、ローレリアンはカーテンを開き、息をのんだ。

重いビロードのカーテンにおおわれた空間は暗かつた。

その暗がりの中にへたりこんで、モナは宙を見つめ、放心していた。

いつも生き生きとした光に満ちているすみれ色の瞳からは輝きが失せ、ほほにはいく筋もの涙が流れている。

「モナ、どうして、きみが泣く？」

戸惑いもあらわにローレリアンがたずねると、モナはやっと我にかえり、ひいと、大きくしゃくりあげた。

また彼女のほほに、新しい涙が伝い落ちていく。

「みんな、わたしのせいだわ。リンフ<sup>H</sup>ンダウル男爵がここへ來たのも、リジイが死んじゃつたのも、みんな、思いつきで行動する、わたしのせい！」

わたしは、なんて馬鹿で、浅はかなのかしら。

もつといつぱい、考えなくちゃいけなかつたのに！

わたしの行動の結果で、なにが起こるかを、考えなくちゃいけなかつたのに！

ローレリアンはモナの側にすわり、自分の肩へモナの頭を抱きよせた。

「きみのせいではないよ。リンフ<sup>H</sup>ンダウルが今夜の指揮官になつたのは、わたしのしくじりが原因だ。そこからすべての出来事は、連縛とつながつてきてこりのだから

まだ涙があさまらないフィオーラも、モナの側に腰かけて、ローレリアンに同意する。後悔に打ちひしがれているモナの、背中をな

でながら。

「泣かないで、モナ。

きっと、リジーは満足していると思つた。

彼女は愛する人を守りたかったのよ。たとえ、だまされていたとしても、リジーは、あの男を愛したかったの。眞実の恋に、わたくしたち娼婦は心の底から憧れているのよ。

借金のかたに、ひどい環境の売春宿へ売られてしまうくらいなら、愛に殉じて死ぬほうが幸せ。

いつも思つたからリジーは、命をかけて、あの男を逃がしたの

「でも、こんなのが……、ひどい。男の人を好きになつた結果が、こんなふうになるなんて……」

黙つてローレリーアンは、泣きじゃくるモナを抱きしめた。

男と女が愛し合つて、また何か新しい幸せを見いだせたら、その男女には素晴らしい未来が開けるのだろう。けれども現実は、美しいばかりではない。世界は誰にでも、優しいわけではないのだ。運命に翻弄ほんのりされて幸せをつかみそこねる人間も、世間には大勢いる。

げんに自分だつて、普通の幸せとは縁遠い場所にいるではないかと、ローレリーアンは思つ。

愛しくてならない女性は、彼に抱きしめられながら泣いている。

彼女がこんなに苦しい思いをするのは、わたしとかかわりをもつてゐるせいだ。わたしは近しい者を、おのれの宿命に巻きこんでいく。それが、王子として生きるとこつゝことなのだ。

ローレコアンの胸に顔をうずめたまま、モナがつぶやいた。

「rian、わたし、一生懸命……、考える。もつと、ぢやんと、いろんなことを考えるから……」

「いいんだ、モナ。きみは、そのままで」

モナにはいつまでも、明るく元氣で笑顔の似合ひの人がいてほしかった。

やはり、彼女からはじめられ、離れてこよう。

すっかり娘らしくなった柔らかいモナの身体を抱きしめると、ローレリアンの決意は、こよこよ固くなつた。

彼女の身体は、娘らしく、華奢な身体だった。剣をふりまわすお転婆姫であるために、要所にはしなやかな筋肉もついているが、骨は細いし、肌はどこまでもなめらかだ。こんなに美しくて心優しい彼女が、涙するところなど、もう一度見たくない。

これで最後と思つと、彼女を抱きしめる腕にも力がいる。

彼女が愛しくてならない。

どうしてこんなに、愛しいのか。

やう思えば思ひほど、ローレコアンの引寄せられたゆづな心の痛みはひどくなつた。

その日の夜更け、モナは王子を迎えて現場へ駆けつけたアストウール・ハウエル卿につきそわれて、ヴィダリア侯爵邸へ帰り着いた。

目を泣きはらし、足元がふらつくほど疲れはてている様子の彼女を見て、父侯爵や乳母のシャフレ夫人は、あえてその日のうちに何があつたのかを問い合わせようとはしなかつた。

『ポワンの宵の花亭』のそとでローレリアン王子を待ち受けていたアストウールは、見なれない黒い軍服を着ており、同じ制服で身を固めた部下を数名つれていた。どの男も、まだ若くて精悍な顔つきをしている、立派な青年だった。

王子の無事を確かめるなり、アストウールは深く首を垂れながら言った。

「申し訳ございません、我が王子。かよつな時に、お役に立ちませず」

ローレリアンは、王子の顔で答えた。

「あせるな、アストウール。いくらあなたが優秀な男であつても、わずか数か月で新設の部隊を実働に耐える状態にできるとは、だれも思っていない」

隻眼の騎士は、かしこまつた。

「つぎの機会には、必ずや」

「たよりこしている。たのむぞ」

そんなやりとりをアストウールと交わしたあと、ローレリアンは護衛の青年士官たちをひき連れて街へ消えていった。

市民の姿に身をやつした彼の護衛は、いつのまにか小集団と呼べる人数に増えていた。

みなローレリアンを『我が王子』としたい、命運を共にする誓いを立てている男達であるらしい。彼らを束ねる桂冠騎士のアレンが王子とともに街へ下つたと聞きつけ、いずれも遅れを取るまいと、自身の判断でここへ駆けつけてきたのだ。

「きっと、俺はこのあと、なぜ自分たちにも声をかけてくれなかつたのだと連中から詰め寄られて、あげくに、袋だたきにされますよ」と言いながら、アレンは笑っていた。

自室にもどり、化粧を落として身を清め、夜着に着替えたモナは、月明かりが差し込む窓辺にすわって考えた。

ローレリアンは王国の未来を担う王子で、その責務を立派にはたそうと日々努力している人だ。周囲の人間も、そんなローレリアンに期待を寄せて、盛り立てようとしている。それをモナは、今日初めて真近で目撃した。

国境の街で神学生として生活していたこのローレリアンは、うちに何か熱いものを秘めてはいても、ごく普通の青年だった。嬉しければ笑ったし、憂鬱な時は暗い顔。自分が情けないとか言いなが

ら、泣いたりもしていた。

けれど今は、そういう普通の顔を見せられる時があるのだろうか。彼の感情を受け止めてくれる人が、いるのだろうか。

モナを侯爵邸まで送り届けてくれたアストウールは、道行きの最中に、現在自分は王子直属の親衛部隊を立ち上げる準備に追われていると話してくれた。今日のように微妙な成り行きになりそうな任務を安心して任せられる、えりすぐりの者を集めた精銳部隊だ。

泣き疲れた身体を冷たい窓ガラスにおしつけて、こもった熱をなだめようと試みる。モナのため息は、いまだに覚めない興奮の余韻を帶びているのだ。今日は本当に、いろいろなことが起こった日だつた。

なかでも情けないのは、『ポワンの宵の花亭』でローレリアンに助けてもらったこと。彼があの店へ駆けつけてくれなければ、もつとたくさんの死者が出たにちがいないと思つ。

ローレリアンからは、「侯爵家の姫君としての自分の立場を自覚して行動するように」と、叱られてしまった。

まったく、そのとおり。

もう自分だって、無邪気な子供ではない。もっと大人になって、物事の裏まで考えられるようにならなければ。

リンフェンダウルがフィオーラの部屋に押し入ってきたとき、自分は呑気に、恋の行方のことを考えていた。結婚さえ望まなければ、ローレリアンの心をとらえることができるだろうか。

ローレリアンが王子の責務に心を砕き、一人でも多くの人を助けていたと望んで行動しているときに、自分は馬鹿げたことを考えていたのだ。色ボケといつてもいいくらいに、馬鹿げたことを。

それがとても、恥ずかしかった。

いつのまにか、ローレリアンが遠い人になってしまったように思える。

彼は大国の王子で、自分は取るに足らない馬鹿な小娘。

せめて、彼の足をひっぱるような失敗だけは、しないようにしなくては。

周囲から王子の妃最有力候補だなどと噂されて、自分はすこし、いい気になっていたのかもしれない。このままの自分では、ローレリアンを影から支える女友達でさえいられないといつ予感がある。

彼を真実愛するならば、彼をまつだけの受け身の女でいたはだめなのだ。

彼の真摯な瞳は、つねに前を、広大な世界を見ている。

そんな彼を愛そうとするなら、必要な時に、ひから手をさしだせる女にならなくては。

彼の背中をつねに見つめて、その背中を抱きしめる。そして、そのままあなたは前を見ていていいのだと、わたしはわたしで、ちゃんとあなたの後についていくから、ふりむく必要はないのだと、言

い切れるだけの強さをもたなければ。

やうせ思ひつけれど、その先を、どうすればいいのかがわからないのだ。

よく考えて行動しなければ、また失敗をしそうだ。

けれども、考えれば考えるほど、先へふみだす勇気はしまんでいく。

するとまたモナのすみれ色の瞳は、新しい涙で濡れていいくのだった。

8月の初旬、王都プレブナンの歓楽街で憲兵隊が銃撃をもつて反政府活動の摘発行動を行つた翌日、ローザニア王国第一王子ローレリアンは、王子と呼ばれるよつになつてから初めての朝寝坊をした。

早朝から何度も、「お田代めになられましたら、すぐさま国王陛下の御前へおいでいただきたいと、王子殿下にお伝えください」との使者をもつつていったローレリアン王子付きの侍従は、夏空へ高く登つていく太陽を恨めしい気分でながめていた。

王子の宮では、といぐの間に出勤してきた事務官達が忙しそうに動きまわつてゐる。

そのなかから王子の筆頭秘書官カール・メルケンの姿を見つけだした侍従は、一縷の望みをかけて、彼にすがりついた。

「メルケン殿。無理なお願いであるのは重々承知なのだが、王子殿下へ、そろそろ寝所からお出ましあつたくように、たのんでみてはもらえまいか」

書類の束を小脇に抱えたメルケンは、肩をすくめて答えた。

「今日は特別、殿下に急ぎで決裁していただかなければならぬ案件はないので。べつに、たまの朝寝坊くらい、よろしいのでは？ 日頃、ローレリアン殿下は働きすぎですから」

侍従は苦り切つてゐた。

「お疲れでお休みだといつらうならば、何も問題はないのです。ただ、本日の朝寝坊の原因が、昨夜の夜遊びのせいであるといつらうが……。その件について、国王陛下が、いたくお怒りであるとのことで……」

「ほつ、夜遊びですか」

「護衛隊の若い者達をひきつれて、歓楽街の居酒屋で深夜まで飲酒された」様子なのです。小姓のラッティが、殿下は一日酔いですと、侍医を呼びに行きました」

はははと、首席秘書官は声を立てて笑つた。

「結構なことではないか。まだ殿下はお若い。憂き晴らしも必要なのでしょうか。今までがそもそも、優等生すぎたのです。やつと、のびのびと、やりたいことをなさるよつになつたといつらうが、まびしこどりですよ」

「そんなん、のんきな……」

王子殿下のお怒りを買つことなく寝所へ入れる次なる人物を求めて、侍従はメルケン首席秘書官から離れていく。

その後ろ姿を見送りながら、メルケンはやれやれと肩をすくめた。

昨夜、王子が憲兵隊の行動の邪魔をしたこと、どうやら王宮内では公になつていなさいらしい。

それはそうだろうと、メルケンは思つ。

王子がやつたことは、勅命を発した国王への背信行為にまちがいない。

しかし、たいした反撃もないというのに街中で銃を乱射し、あげくのはてに王子がすでにとらえていた革命派の大物を逃がしてしまつたのは、リンフェンダウルの大失態である。ことがすべて公になれば、作戦指揮官にリンフェンダウル男爵を指名した宰相の名誉までが、けがされてしまうだらう。

現実問題として、王子の行為は多くの人の命を救つてゐる。命を救われただけでなく、名誉を守つてもらつた者も大勢いるはずなのだ。なにしろ『ポワントの宵の花亭』は国一番の高級娼館だ。昨夜の客の中には、有力貴族の身内だの、大きな会社の経営者だのといった、名士も多かつたことだらう。その者達は、ひそかに王子へ感謝しているはずだ。

しかし、そのあとに酒盛りとは……。

書類を抱えたまま、メルケンは近衛護衛隊の待機所へ行つてみた。

すると、そこには今朝方王子殿下の身辺警護当番任務が明けたはずのアレン・デュカレット卿と、彼の部下である第三小隊の面々が、まだ居座つていた。

それがどうにも、おかしな光景だつた。

本日から当番任務に就く第一小隊の隊員に遠慮しているのだらう。彼らは部屋の隅に固まつていた。

その様子が、屍累々といった状態なのである。みな机に突っ伏していたり、椅子にへたりこんでいたりで、ひどい者は部屋の隅にうずくまり、壁に頭をおしつけて唸つている。

眉をひそめたメルケンは、アレンにたずねた。

「アレン隊長、ひょとじつにひりま、一日酔いなのか？」

一人涼しい顔で報告書の作成をしていたアレンは、書類から顔をあげて答えた。

「まったく、情けない連中です。殿下が酒盛りを御所望だったので、勤務中の飲酒を大目に見たところ、この通りのていたらくで。始末書を書き終わるまで帰つてはならんと申し渡したところ、全員撃沈です」

「殿下が酒盛りを御所望されたのか？」

「はあ。いろいろと、晴らしたい憂さも、おありのようで。シムスが陽気な男で助かりました。店選びから、料理と酒の手配、はては酔つた仲間のしでかした不始末の清算から宴会の盛り上げまで、すべてやつ任せですよ」

「で、アレン隊長は始終冷静に、しらふです」としたわけか？」

「喉をうるおす程度には、飲みましたよ。しかし、俺まで酔つてしまふわけにはいかないでしょ。殿下は俺がいるから、『憂さを晴らしに行くぞ！ わたしのおごつだ、全員ついてこい！』とか、言えたわけで」

「甘えてもらえて、嬉しそうだな」

「首席秘書官」いや、嬉しそうじやないですか。シムスから、いろいろ聞きましたよ。『まわりの者に甘える』と殿下に忠告したのは俺だぞと、顔に書いてある」

にやにや笑いながら、メルケンは言つ。

「知つてゐるか？ 王子殿下も本日は一日酔いだそつだ。さきほどラツティ坊やが、侍医を呼びに行つた」

めつたに笑うことがない『氷鉄のアレン』も、盛大な笑顔をみせる。

「それはよかつた。たまには殿下にも、羽目を外すことが必要なんですよ。」

昨夜も楽しそうでしたよ。レヴァ川に鋼鉄の橋を架けるなんて、夢みたいな話に夢中になつていたし。

意外と酒にも強いので驚きました。かなり飲んだはずなのに、最後まで理路整然としていましたからね。初代聖王パルシバル陛下も酒豪だったということですから、ローレリアンは姿だけではなく、体質も聖王陛下から受け継いでいるのかもしません」

「聖王パルシバル陛下の再来か……」

メルケンは遠い目で宙を見る。

「いよいよこれから、ローレリアンさまは、新しい伝説を築こうとなさるのだな」

手にしたペンを置か、アレンも深く嘆息する。

「それを成し遂げなければ、この国を救うことなどできません。ローレリアンには、頑張つてもひひこかないのでしょうか？」

その「ひり『黒の宮』」の最奥に位置する寝所のベッドの上では、側近から聖王の再来とたとえられ敬意を払われていたはずの王子殿下が、幼子のような態度ですねていた。

ただの青年としては、3年越しの恋をあきらめようとする苦しさと、尊敬すらしていた文筆家を敵としなければならなくなつた悔しさ。王子としては、その敵を取り逃がしたことに対する怒り。そして、聖職者としては、娼館などという破廉恥な場所でリンフェンダウルのような男とやりあわなければならなくなつた恥ずかしさと、無用な死者を出した哀しみ。

昨夜のローレリアンは、あまりにも多くの感情を抱えて、爆発寸前だったのだ。このままでは悪感情の渦に巻き込まれて、気が変になりそうだとさえ思った。酒でも飲まなければ、やっていられなかつたのである。

護衛隊の連中との酒盛りは楽しかつた。大勢での飲食を心から楽しんだのは、王子の地位に返り咲いてからは初めてだ。王子にとつて他人との会食とは、すなわち義務に他ならなかつたから。

といふが、朝になつてみれば、周囲の状況は何も変わつていない。

仕事は山積み。国王からは昨夜の件で呼び出しの伝言。おまけに自分はひとりだという孤独感は、もっとひどくなつていて。昨夜、護衛官たちが王子の酒につきあつてくれたのは、それが彼らの仕事だからである。王宮の奥の寝所でひとり目覚めると、その実感がひしひしと迫つてくる。

親友のアレンでさえ、昨夜は仕事中の態度だった。

部下と王太子が杯を酌み交わしながらござやかにしゃべっていたるそばで、アレンは酔わない程度に酒を舐めながら、静かにすわっていた。そして、ときどき目が合つと、ふつと笑つのだ。

その笑い方が、氣に入らなかつた。

あとのことばは俺にまかせて、おもいきり羽田を外せよ。

そうアレンの囁は語つていた。

甘えていこよどむわざると、ローレンは口惑つのだ。

素直に感謝すればいいだけなのに、罪悪感にかられる。そして、罪悪感を感じる自分が嫌になり、むらたに卑屈な気分におちこつてしまつ。

その卑屈な気分をひきずつて、今朝の目覚めは最悪だった。

頭が痛いし、鳩尾みぞおちもむかつく。

だから頭から布団をかぶつて、わめきまくる。

「わたしは頭が痛いんだ！ 今日は氣がすむまで寝る！ わたしにだつて、仕事をさぼりたい日くらいはあるんだ！ 何度呼びにきたつて、絶対にベッドからはでないからな！」

最悪の機嫌の王太子殿下を朝からあつかいあぐねている小姓のワッ

ティは、ため息をつきながら答えた。

「はいはい、好きなだけお休みになつてください。ですが、リアンさま。一日酔いのお薬は飲んだほうがいいですよ。ふて寝しているだけでは、一日中、お辛いままでしょう」

心優しい少年は、王子のために侍医から処方された薬を持つてくれたのだ。

もともと生真面目なローレリアンは、忠実なラッティ少年の世話を焼きに弱い。ここで薬なんかいらないと突っぱねれば、「殿下、そんなにお辛いのですか？ お辛いのは、お体だけではないのでしょうか？」ぼくに何かできることはないですか？ いったい昨夜は、なにがあつたのですか？ 急なおでかけだつたし、やつとお戻りになられたと思えば、お酒をすぐされたご様子ですし、御衣裳に血がついていたりするし…」とやられたあげくに、うわーんと、泣かれてしまう。

ラッティの涙には、いつも半分くらいは嘘泣きが入つているのだが、のじつの半分は本気である。やはり、泣かれるのは嫌だ。

しぶしぶ布団からでて半身を起こし、ローレリアンはラッティがさしだす銀の盆から、優雅な金彩をほどこしたティーカップを受け取つた。なかには、異様な臭気の湯気を放つ、どろりとした液体が入つている。

「ラッティ、これはなんだ？」

「ええとですね。ホソバオケラ、オモダカ、カワラヨモギ、ケイヒ、あとは……、ええと、なんかのキノコ、それに、……忘れました。

変なものは入っていないと思いますよ。宫廷医が処方したお薬ですし、御毒見も済んでいますから」

「なるほど」

ローレリアンはかつて医者の助手も務めたことがある青年だ。せんじ薬の内容を聞いて、顔をしかめてしまう。

しかし、ベッドから身体を半分起こしてしまえば、これ以上寝ているわけにもいかないなという気持ちになる。昨夜の行動の後始末として、国王のもとへ出向かなければならぬことは承知しているのだ。

覚悟を決めてティーカップを口に運んだら、予想したとおりの味だった。ひどく苦いくせに後味には微妙な甘さとえぐみが残り、鼻には青臭さと清涼な匂いが混じって届く。そのうえ、我慢して飲み下せば、微妙な喉越しのせいでむせてしまう。

「ひどい味だ」

けほけほとむせると、目に涙がにじんだ。しかし、一丁酔いに効きやうではある。

しばらく抱えた膝に額を押しつけてじっとしていたら、畠のあたりが、じんわりと温まつた。

なんとか動けそうだ。

「ラッティ、黒の聖衣を準備してくれ。丈が長いものを」

「はい、わかりました」

ラッティは、すこし緊張したおももちで寝室に隣接している衣装室へむかつた。

ローレリアン王子は聖職者としても高い地位にあるので、普段から黒い法衣を愛用している。この法衣の上着は詰襟つめえりで、丈は足の付け根がすっかりかくれる程度。細身のズボンと対になつており、とても動きやすくて実用的な聖職者の普段着にあたる衣装である。

ラッティが準備を命じられた黒の聖衣は、典礼服と呼ばれる公式用の衣装につぐ格式の衣装にあたる。上着の丈は足首まであり、腕は肘のあたりまで肩掛けにおおわれている。全体が重い布で作られているので、この衣装をまとった人の歩みは自然にゆるやかとなるて、神々しい雰囲気が醸し出されるしくみだ。

この衣装には、やはり特別感があるので、ローレリアンも王宮内の聖堂へ出向くときにだけ着用している。安息日の礼拝には、王子も三位の神官として祈りの唱和に参加しているのだ。その姿には独特の華があり、これまで王子を担当して、安息日の宮廷礼拝に人が集まるほどだつた。

\* \* \*

しばらくのち、ラッティに手伝つてもうつて身なりを整えおわつたローレリアンは、すっかり高潔な雰囲気をもつ王子殿下へともどつていた。

彼が長い黒衣のすそをさばきながら、ゆつたりとした足どりで私室からでていくと、廊下にはすでに本田の護衛役である第一小隊長のイグナーツ・ボルン卿と第三小隊長のアレン・デュカレット卿が控えていた。

イグナーツはローレリアン王子付き近衛護衛隊に3人いる小隊長のなかで、もつとも先任にあたる士官である。現在はアストゥール・ハウエル卿が他部署へ転任してから空席になつている第一王子付き護衛隊隊長の代理も兼任している。外見は謹厳実直な中年士官で、実際の性格も真面目そのもの。その働きぶりに人目を引く華やかさはないが、大過なく集団をまとめていく管理能力には定評がある。

当初、周囲はイグナーツをアストゥールの後任にすえようとしたが、管理職経験が長い彼は、その名譽ある役目を引き受けようとはしなかつた。

自分には『王子殿下の影』という異名を得ているアストゥールが持つようなカリスマ性がないことを、イグナーツはよく知つていたのである。そして、これから王国の舵取り役として政界へ漕ぎ出していくローレリアン王子に必要なのは、王子の特別さをより華々しく引き立てるだけの、輝く個性をもつ側近であることも十分心得ていた。

「その役目にふさわしい者が現れるまでの代理ならば、つつしん

で勤めさせていただきます」と、アストウールが去ったあの部隊管理業務を引き受け、イグナーツは誠実に任務を果たしている。彼もまたローレリアンを『我が王子』と呼び、王国と共に立て直していく誓いを立てた男なのだ。みずからの出世より、なにが王子にとつてもっとも大切な、一番の判断の基準としている。

そのイグナーツは苦笑しながら、ローレリアン王子とアレン・デュカレット卿の顔を見くらべた。

どちらも昨夜の騒ぎのことなど素知らぬ顔で溜ましているのだ。

「アレンは今日から王宮勤務明けの休暇だらう。宿舎へ帰らなかつたのか？」

王子からたずねられて、アレンは飄々《ひょうひょう》と答えた。

「俺はしがない富仕えの身ですよ？ 昨夜の騒ぎのあと、そう簡単に帰れるわけがないでしょ。殿下が国王陛下のもとへ出向いてお叱りを受けるところを、しっかりと見届けさせていただきますよ。そのあと、昨夜の報告書を近衛護衛隊総隊長のところへ持つて行つて、俺も説教されます。クビになつたり、左遷されたりしないように、祈つていてください」

隊長代理のイグナーツは、失笑をかくそうともしなかつた。肩を震わせながら、彼は言つ。

「報告書は読ませてもらいました。昨夜は殿下もデュカレット卿も、たいそうご活躍でしたな。いや、わたしもリンクフェンダウルがやりこめられるところを、ぜひ見たかった。

総隊長殿には、わたしからも一報を入れておきました。リンクフェ

ンダウルの横暴ぶりを好ましいと思つてゐる者はおりませんから、総隊長殿も鷹揚なものでしたよ。デュカレット卿の処遇については、4日ほどの嘗倉入りでいかがかと上申しておきましたので

「嘗倉ですか」と、アレンは顔をしかめた。

「飯がまづそうですねえ。しかも、期間が4日といつところが、山盛りうさんくさい。きさまは休みなく、せつせと働けといつわけですね。ボルン卿も、お人が悪い」

イグナーツは笑つてうなずいた。王族の警護につく近衛護衛隊は、小隊ごとに一泊の休暇、一泊の訓練、一泊の王宮勤務をくりかえす体制となつてゐる。つまり、今日から四晩を嘗倉ですごせば、アレンは出てきてただちに王宮勤務へ復帰しなければならないことになる。

「どうせデュカレット卿は、休暇のときも殿下のお側にいるではないか。いつそ黒の宮のなかに部屋をたまわつてはどうか？ 練兵場での訓練のとき以外は、いつも黒の宮にいるのだから、住んでいるも同然だらう」

国一番の剣士の証である桂冠騎士の称号を持つ若者は笑つた。

「俺だけ特別といつわけにはいきません。仕事は俺の趣味も同然ですから、当直室住まいも、べつに苦になりませんしね」

「では、早く管理者の仕事を覚えて『特別』になることだ。士官学校生活をつねに首席で押し通してきた貴兄は、管理業務に関しても優秀だ。そう時間は、かかるまい」

アレンは肩をすくめて苦笑した。わたしが隊長代理を預かっているのは、おまえが一人前になるのを待っているからだと、イグナーツは言いたいのである。

認めてもらつのは嬉しいが、十八の歳でそれだけの責任を背負えと言われても、正直、こまつてしまつ。それに、自分が周囲から、いづれは第一王子付き護衛隊の隊長になる男だと思つてもらえるのは、個人的にローレリアンと友人関係にあるからだらう。

ほんの一度、御前試合に勝つて国一番の剣士の称号を得た程度では、とうてい手柄とは言えない。これから自分は、名ではなく、実を積み上げていかなければならぬ。そう思つとアレンは、ゆっくり休む気になれないのだ。

腹心の者たちの会話を聞いて口元に笑みを浮かべた王子は、重い衣のすそを華麗にさばき、ふたたび歩きだす。

「さて、わたしがこれから国王陛下の説教を聞きに行く

「はい、お供いたします」

「いやいや、しかし一礼し、イグナーツとアレンも王子のあとへしたがう。

次の廊下の曲がり角からは、イグナーツの部下も数名合流した。ローレリアン王子は、行列を作つての移動を嫌う。護衛隊士達は、そのあたりも心得ており、いつもさりげない距離をとつて彼らの王子を守るのだ。

口づして守られているのは、歯がゆくもあり、ありがたくもある。

自分がこれからなそつとしていることは、とてもひとりの力ではなしどげられない大仕事なのだ。自分は王子として生まれたから、その大仕事の旗頭となつたけれど、本当は大勢の人の意志を代表する存在であるだけなのだろうとローレリアンは思つてゐる。

そうでなければならぬとも、思つのだ。

自分は、この国の独裁者になりたいわけではない。

ただ、少しでも多くの人を、できるだけ良い方向に導ければと願う。

神々に仕える人の証である聖衣をまとうと、ローレリアンの胸には切ない望みがあふれかえる。それを静かな表情の下に押し隠すと、あふれる望みには熱がこもり、炎となつて彼の胸を焦がすのだった。

国王の説教を聞きに行くと言ひながら、ローレリアン王子がたどり着いた場所は王宮の中にある聖堂だった。

ローザニア王国は神々に祝福された聖王パルシバルによつて開かれた国とされているので、王家と宗教のかかわりは、かなり深い。王族が王都プレブナン大神殿の大神官長に就任する例も多く、現在の大神官長も前国王の従兄にあたる老人であった。

王宮の中の聖堂は、いわばプレブナン大神殿の分院にあたる建物で、ここでは国家的な宗教行事とともに、日常の礼拝も行われる。もちろん、王族も安息日の礼拝には、必ず出席しなければならないことになっている。

先触れを走らせておいたので、ローレリアンは聖堂の入り口で、ここに管理責任者であるマーリン神官長に出迎えられた。先方も黒の聖衣をまとい、腰の帯の色は薄桃色で、神官位は二位。つまり、神官としては王子の上役にあたる人物である。

しかし、神官長からしてみれば、目の前の相手は王子殿下。総白髪の頭を深々と垂れて、あこがれの口上をのべる。

「ようこそおいで下さいました、王子殿下。祈りの場に貴きお方のおみ足をたびたびお運びいただき、神々もさぞや、ご満足なされておられることでございましょう。聖なる祈りの場を預かる我々も、嬉しくてなりません。世間が騒がしくなりますと、人々は万物に宿る神々の存在のありがたさを忘れがちになりますゆえ」

ローレリアンは腹の少し上あたりで両手を組み、聖職者の作法で返礼をかえした。

「そのお言葉は、わたしへのお叱りと受け止めておきましょ。近頃のわたしは、祈るよりも、俗世のしがらみのあじらこみばかり忙しい」

「殿下のご身分と責務を考えれば、当然のことだ」といます。折に触れ、こつしてこちらへおみ足をお運びくださるだけで、十分、神々はお喜びであると存じます。ト々への立派な範となつておりますゆえ。

ところで、本田はどのよつなじ用むきでございましょうか」

「神官長には煩わしこじのつえないであろうが、昨夜、わたしは殺生の場に立ち会いました。亡くなつた者のほとんどは政治犯とされる者や小さな罪を犯した者達だったが、わたしには彼らの罪が死に値するとは思えない。これも、わたしの力不足ゆえ。せめて死者のために祈りたいと思い、こちらへまいりました」

「死せる者は世に満ちる靈の力と融合し、世界を生かす存在となりましよう。御心を、あまりお痛めになりませぬよう。どうぞ、奥へお進みください。殿下の祈りを妨げる者は誰もおりません。心ゆくまで、神々との対話をなさこりますよ」

神官長に導かれて、ローレリアンと護衛騎士二人は祭壇の前へ進んだ。

王宮の聖堂の成り立ちは古く、伽藍<sup>がりん</sup>の装飾のすべては煤と埃で黒ずんでいた。細い窓から差し込む光は弱々しい。数百年前の建物はすべてが石でできているため、壁が厚く、大きな窓は作れなかつた

のだ。天井のドームも石組みだけで作りあげられており、その石の重みを支える力学的な曲線で構成された、独特的の美を放っている。

正面の祭壇には、絶えることなく火を灯す無数の蠟燭の明かり。

祈禱台に両の手を乗せ、王子は身をかがめる。

深い懺悔の礼が神々にささげられ、口元で祈りが唱えられる。

懺悔の祈りは、神々との対話。ほかの誰にも、聞かせるものではない。

いつたいローレリアンは、なにを神々に告白しているのか。

祈禱台からやや後ろの位置で跪拝の姿勢を取りながら、アレンは切ない思いで王子の横顔を見守った。

この国を守るためなら、神々との約束だつて破棄する。死後煉獄へ落ちよつとも、決して後悔はしない。

その誓いは、誰よりも優しいこの男を、苦しめていくにちがいないのだ。

しかし、危うい状況にあるローザニアを、救える男は彼しかいな  
い。

どうか、神々よ。万物に宿り、すべての命を生かす、靈力である  
神々よ。

我が王子、ローレリアンに多大なるご加護を。

神々の守りがなければ、この男の心は死んでしまいます。

アレンがそう思った瞬間だった。

聖堂の入り口の扉が開き、あたりに人の気配が押し寄せてくる。ローレリアンの祈りを妨げる者は、誰もいないのではなかつたのか？

アレンの側で同じように跪拝していたイグナーツが小声で囁く。

「国王陛下です。宰相閣下も随行されています」

ローレリアンの閉じられた目が開き、横顔にも生気がもどつた。

「祈りの場にふみこむとは、陛下もすいぶんと！」立腹のようだ。いつまで待っても、わたしが御前へ参上しないもので、しびれを切られたのだろう

アレンがぶつぶつと愚痴る。

「お祈りより先に陛下のところへ行かないからですよ。ますますお怒りを買つたんじゃないですか？」

「酒を飲んで憂さ晴らしなんて、兄上は毎晩じゃないか。なんでおたしだけが、お叱りを受けるのだ？」こうしてきちんと、みずから反省もしているの

「反省のつもりのお祈りだつたんですか？！」

「まあ、いわゆるアピールのパフォーマンスだな。なんでもわかりやすく説明しようとする」とは大切だ」

「またリアンの屁理屈へりくつがはじまつた……」

「ローレリアン！」

アレンのつぶやきの言葉尻に、国王の大きな呼び声が重なつた。

優雅な衣擦れの音とともに、ローレリアンは礼拝の姿勢を解いて立ちあがり、背後へ振りむく。

そのしぐさを見て、なるほど、パフォーマンスだなと、アレンは思った。

重い聖衣を華麗かれいにさばいて聖職者が立ちあがる姿には一種の様式美がある。その様式とは、歴代の神官たちが研究に研究を重ねて編みだしたものなのだろう。その証拠に、いまのローレリアンは、立つているだけで神々しい気配を放つていて。大きな声では言えないが、豪奢な衣装をまとい、大勢の随行者をひきつれている国王のほうが、位負けしてしまったそなうな雰囲気である。

その空気は、国王も感じている様子だ。聖堂へ入ってきたときは、かくしきれない怒りの感情を帯びた顔をしていたのに、王子の前へたどりついた今は、王子が持つ気配に驚いて鼻白んでいる。

古色蒼然こじやくあおぜんとした聖堂の高い天井と石壁に反射して鳴り響いていた人々の足音が、ぴたりと止まる。

あたりに静寂がもじるのを待ち構えていたかのようだ。ローレンが口を開いた。

「おはようござります、国王陛下」

おだやかな微笑とともにくりだされた王子の挨拶は、ますます国王を驚かせた。ローレリアンの軽い礼は、あくまでも父親への敬意の会釈だったし、呼びかけにこそ尊称の『陛下』を使っていたが、その口調には今までのよつな遠い距離感がまったくなかつたのだ。

とまどこもあらわに、国王は言つた。

「なにが、『おはよび』であります』だ。もつまもなく、暁ではないか

「はい、昨夜はいろいろと児戯に等しい失態をくりかえしてしまいましたので、深く反省しておつまししたところ、このような時間になつてしまつました」

「反省とな？ 余が耳にした話では、そなたは宿酔で起きられぬといふことであつたが」

「それも重大な反省点のひとつです。おのれの酒量の限界を知ることも、案外大切なことでした。しかし、わたしは俗人の楽しみを学ぶべき10代の時期を聖なる神々の家で過ごしましたので、大人になつた今ごろになつて、あらためて子供の遊びを体験しては、はしゃいでしまうのです。お叱りは甘んじて受けますので、どうか寛大なるお心をもつて、お許しいただきますように」

国王はローラーもる。ローレリアンを国境の町の神殿に預け、子供らしい体験をなにもさせてやらなかつたのは、他ならぬ自分自身なのだ。いくらそれが息子の命を守るためだつたとはいえ、酷なことをしたとも思つてゐる。

「今まで、息子と、そのことについて語るのは、あえて避けてきた。国王も人の子なのだ。家族から憎まれていふことを、わざわざ確認などしたくはなかつた。

しかし、いよいよその話題に触れなければならない時がきたのだ。

国王の勅命に反した行動をとった息子に対して感じていた怒りは、すでにしほんでしまっていた。ついさっきまでは、人の上に立とうとする者が規範を乱す行動をとるなど、息子に厳しく当たるつもりでいたのだが。

「そなたは……、神殿に預けられたことを、いまだ怨みに思つているのか……？」

ローレリアンは静かに、だが、壮大な伽藍がらんによく響く声で、父の問いかに答えた。

「いいえ、父上」

その場に居合わせた者達が、いつせいに息をのむ。国王の近くにいる者は、みなローレリアン王子が過去に一度たりとも、国王のことを父と呼んだことがないのを知っていた。

王の国王は、ぱつぜんと息子の前に立ちつくしている。

王は言った。

「いのして黒衣をまとい、神々におつかえする自分こなが、もつとも自分らしく自分だと思います。『ローザニアの聖王王』という異名を得たことは、いつか必ず、わたしの誇りとなるはずです。そういうよう、精一杯務めるつもりです。

ですから、父上の『命令を無視して、昨夜わたしが憲兵隊の行動の邪魔じやまをしたことについては、いつさい謝罪はいたしません。

そもそも、謝罪とは犯した罪に対してなされるもの。わたしは、罪を犯したとは思つておりません。反政府活動摘発のためであつて、無関係な国民が危険にさらわれてはならないのです。そのことについては、今後も信念を曲げる気は「ござりません」

すつかり王子を問い合わせる氣力を失つた国王に代わり、宰相カルミゲン公爵が叱責の言葉を浴びせる。

「では、王子殿下は国王陛下からお受けになられた『一刻も早く出頭せよ』とのご命令を無視なさり、ここにで神々と対面しながら、何を反省されたと言われるのですか。昨夜といい、今朝といい、国王陛下のご命令を、陛下のもつとも厚き信任を得ておいでになるはずの王子殿下がお破りになるようでは、周囲に示しがつきませぬ」

ローレンツは宰相の叱責など氣にもとめていらない様子で答えた。

「過去の自分について、いろいろとです。

幸いにも、わたしは側近に恵まれておりますので。

昨日も、じつをいいますと、側近から叱られました。国王陛下にわたしの愚のことを正しくお伝えできなのは、情を軽んじるからであると。

そして、彼らは失態の後始末を望んだわたしの行動をとがめもせず、気が済むようにせよと、黙つてつきあつてくれました。

まさに、わたしは側につかえてくれている者達の情に、支えられて生きているのです。

その事実にあらためて気づいて、神々に感謝せずにはいられませんでした。

ですから、ここでは神々へ自省と感謝の報告をしてから、父上のもとへうかがつもつておりました。

わたしの信念を貫くために側近がなしてくれたことに対する感謝の意を、父上にも聞いていただきたい。おそらく、わたしの今の気持ちを本当に理解してくださるのは、若くして王位へおつきになり、今日に至るまで32年ものあいだ至高の存在として周囲の者達に支えられ、守られておいでになられた、父上だけであろうと思つます」

宰相へローレリアンは語りかける。

「カルミゲン公爵。我が父を、よくぞ長きにわたつて助けてくれた。感謝申し上げる。

あなたの腹心の部下をわたしが嫌うのは、わたしが神々に仕える男であるがゆえの信念を曲げられないからだ。けして、公爵自身に對して、なにか含みがあるからではない。その件については、許してもらいたい」

王子から謝罪されているところの、宰相はむつとも謝られている氣分になれなかつた。

ローレリアン王子の声は聖堂のなかに朗々と響き渡り、神々の意志をもつて、宰相を叱責しているように聞こえるのだ。リンフェンダウルのような男を重用するおまえは、神々の教えを守らぬ愚か者であると。

表面では謝罪しているが、眞の正義は我にありと、王子は暗に宣言したのだ。この宣言をしたいがために、王子は国王を長々と待たせてじらし、会見の場所が聖堂になるようにじむけたのかもしれないと宰相は思つた。

空恐ろしかつた。

ローレリアン王子は、やまやまな才能を持つ人間だが、もつとも秀でているのは、この人の感情を読みとり、あらゆる場所をおのれの劇場と化して、さりげなく相手の立ち位置を自分の支配下に置いてしまう才能なのではないだらうか。

この王子は、王国の実権を握ったとき、こつたい何をなすのだろうかと。

国王が深いため息をつく。

「ローレリアン、そなたの気持ちは理解した。よくぞ、余の宰相に感謝の意を示してくれたとも思つ。

しかし、国王の勅命を破るのは、やはり重罪なのだ。たとえそなたが王子であらうとも、なんのどがもなしとこつわけにはゆかぬ」

「はい。承知しております」

「そなたには、一週間の謹慎を命じる。みずから富よつ出ぬ」とはもちろん、人と会つこともあいならん。よいな？」

「寛大なる」処置に感謝いたします」

「そなたの富の出口には、余の命をおびた憲兵を置く。

今度はいたかいにならぬよう、この役はそなた気に入りの、リドリー・ブロンフ卿へ命じるとしよう。あれは冷静な男ゆえ、そなたが懐柔に走つても、言つことは聞かぬだらう。

とにかく、そなたは油断がならぬ」

「油断がならぬとは、心外なお言葉です」

「心当たりがないとは言わせねど。

王国の将来を担う王子が、危険にみずから飛びこむようなまねをしてはならぬと、忠告したはず。

余が昨夜はどれだけ、心配したと思つておるのだ。

その心配には、もちろん、父としての情も入つていいのだぞ。

国王としての義務を抜きに言つ。

たのむから、危険なことはしてくれるな」

ローレリアンは苦笑した。

「こればかりは、お約束いたしかねます。

わたしは、王子として生まれたからには我がローザニアのためにのみ生きると、心に決めておりますので」

「しまつた息子だ。誇らしくはあるが

最後に、どこか諦めたような雰囲<sup>あ雰</sup>気の笑みを残して、国王は聖堂から出ていった。もともとバリオス三世は文治の王として名高く、芸術や文学を愛し、静かな生活を好む人物である。争い事からは距離を置きたいと、考える人なのだ。

隨行<sup>すいこう</sup>の者達が、ぞろぞろとあとにつけ。最後の一人が扉のむこうへ姿を消したのを確かめてから、王子は大きく息をついだ。

「やれやれ、なんとか事を荒立てずにするんだか

昨夜の事件の後始末について、さもざまな方策を考えていたアレンは、肩透かしを食つた気分だった。雨後の地面は固くなるという

ことわざを、思い出していたくらいだ。なにしり、こきなり、親子の和解を見せられたのだから。

まつとあるあまり、言葉も乱暴になる。

「なんだよ、その言ごべとは。おまえ、つこせりあまで愛國の精神と人の情につこて、熱く語つてこたくせに」セー。

ローレリアンは、むつとして答えた。

「なんだもへつたくれもあるか。  
わたしは自分の身が可愛くて、国王や宰相へ謝つたわけではない。  
おまえやカールに尻ぬぐい役が回るのは悪いと思つたから、こんな芝居しばゐがかつたまねをしたんだ」

「芝居にしちやあ、嬉しそうだつたな。親父さんから『誇らしき』  
なんて言われたら、そりやあ嬉しいよなあ、息子としちやあ」

「あれは、方便はんべんだ！

これからだつて、嫌でも国王陛下とは仕事を続けていかなければならぬのだからな。

それならば、わだかまりは自分の胸の内にしまつておひつと、思つただけだ！

「父上にしか、わたしの氣持ちはわからないつて、甘えていたじやないかあ」

「へぬせこつー！」

怒つてそっぽをむいたローレリアンは、乱暴な足運びで出口へむ

かつて歩きはじめた。

彼の足元では、さばききれない長い衣のすそが、バサバサと音を立てている。

アレンが思つていた通り、聖職者の優雅な動きは訓練のたまものなのだ。優雅にふるまつ目的を失うと、重い衣はやはり、あつかいにこまるものらしい。

それに、そっぽをむいた時のローレリアンのほほは、かすかに赤くなつていた。

アレンは笑いたいのを、懸命にこらえた。

父親から褒められて、嬉しくない息子はいない。

親子の情を知らずに育つたローレリアンが、けして埋められない孤独感に苦しんでいることは、アレンもよく知つてゐる。でも、神々は、人に絶望を与え続けたりはしないのだ。どんな苦しみのなかにも、一筋の光明はある。

國を統<sup>す</sup>べる立場を通して父と息子が情を交わしあえるというのならば、それもいいではないか。常人には想像もできない心の交流だけれども、それだって立派な愛の形だ。

王子として生きることで、ローレリアンは多くの苦しみを背負つているけれど、王子だからこそ凡人とは違つ形で、受け取るものもあるのだと信じたかつた。

アレンの忠誠心だつて、そのひとつだ。

アレンが、いつもいつもローレリアンのことはばかり考へているのは、友情だけが理由ではない。彼となら、大きなことをなしつげられる、信じていいからだ。

だから、俺は、いまここにいる！

強い想いを胸に刻みながら聖堂の外へ出たら、真夏の太陽は頭上はるかで輝いていた。

くらむ田をしばたきながら、アレンは先任士官のイグナーツに頭を下げる。

「では、自分は総隊長殿のところへ出頭いたしますので」

中年・うしろにしわをよせて笑いながらイグナーツは答えた。

「4日間の休暇と割り切つて、営倉暮らしを、せいぜい楽しむといい。あとで部下に、酒肴の差し入れをさせよう」

「ありがとうございます」

アレンとイグナーツは、おだがいに物のわかつた顔でうなずきあつた。

貴族の士官が入る営倉は、牢屋らうやとはいえ、それほど居心地が悪い場所ではない。よほど重罪を犯したのでなければ、差し入れも自由に受け取れる。営倉内に自前の家具や楽器を持ち込む強者もいるくらいだ。

桂冠騎士の称号を得て貴族の仲間入りをはたした時には、それで何を得るのだろうかと思ったアレンであった。しかし、こういう特権を享受<sup>きょうじゅ</sup>できるのは悪くない。

ローレリアンも、国王から一週間の謹慎処分を食らった。守らなければならぬ主が黒の宮から出ないというのならば、アレンも安心だ。

4日間、酒と毎晩で、思つ存分だらけてやる。

そう思いながら、アレンはイグナーツへ後を任せ、近衛護衛隊の本部へむかつたのだった。

ローレリアン王子と聖堂でのやり取りを終えたあと、ローザニア王国の国王バリオス三世は宰相のカルミゲン公爵とともに、王宮の長い廊下を歩いた。300年にわたって増改築がくりかえされた王宮は、とにかく無駄に広いのだ。

国王の背後には、護衛だけでなく侍従や事務官が列をなして歩いている。広い廊下に雑然と響く大勢の人の足音を聞きながら、国王はさまざまことを考えていた。

18歳で王位についてから、バリオス三世はひとりきりになつたことが一度もなかつた。それこそ、もつともプライベートな時間であるはずの閨の営みですら、侍従に見守られている。

若いころは、それも国王の義務かと思つていたが、歳をとつて物事の裏の事情を理解するようになると眞実が見えてきた。

国王は表向き、国の最高権力者であり、至高の存在とされている。だが、実際は個人として認めてもらつことすらできない、国家に所有されている奴隸なのだ。

国王の閨房けいぼうがいつも監視されているのは、国王にやたらと子供を作られては困るからである。国王の相手を務めた女が懷妊かいにんしたとき、胎内の嬰兒えいじが本当に国王の子供であるかどうか、知つてているのは本人だけという状況になつてもこまる。過去の歴史には、放蕩ぼうとう者の王が死んだあと、我こそは国王陛下の落とし種という人物が10人も現れて、国が大混乱におちいったという記録も残っている。だから

バリオス三世は、王宮に閉じ込められたのだ。

市井で育ち、国民の生活感覚を肌で知っている次男のローレリアンは、最近よく国王へ「その御判断は、民の感覚からしますと、許しがたいものであると思います」という意見を述べてくる。その見識の広さが、国王はうらやましくてならない。王宮からめったに出ることもなく、つねに重臣たちに囲まれて、自分の意志とは無関係に決められた政策の書類に唯々諾々と署名を続けた、自分の若いころとは大違っただ。

息子は父の国王より、はるかに自由なのだ。

国王と宰相のやりょうが氣にくわぬと、みずから街に出て憲兵隊とやつあたり、仲間と徒党を組んで憂を晴らしの酒盛りをしたり。その盛朝には堂々と、自分の信念は曲げませんと、宣言してのける。「王太子として生まれたからには、我がローザニアのためにのみ生きる」と言い切ったときの、息子の迷いのなさには嫉妬すら感じた。

ローレリアンには国のために生きる覚悟がある。やがて、本人も言つている。

今までは、父親らしことを何もしてやうなかつた負い田で、彼に王族の義務を強いるのはかわいそうだと思ったが……。

「宰相」

国王のすぐそばを歩いていた宰相が、なんじょうかと、じぐさで答える。国王は立ち止まることなく、なにげない口調で話し始めた。

「そなたが勧めてくれた、エレーナを王妃として迎え入れる話だが

「はい」

「そなたの提案通り、秋の国王生誕50年記念式典のさい、同時に婚儀も行えるように取り計らつてほしい」

「かしこまりました」

「ローレリアンは、王位になど興味がない様子ではあるがな。国家のためには、いざとなればあわが王位につけるよう、準備おこしたりなくしておくれべきなのだろう」

「御英断と存じます」

「ローレリアンには、また怨まれるであろうが、余も国王として国の将来を憂えるのだ。

因果なものだな。国王などという地位にあると、親子の情ですら、切り捨てなければならなくなる。その結果、長男は人生をあきらめ軽挙愚行をくりかえし、賢い次男からは怨まれる始末だ」

「陛下。ローレリアン殿下は、さきほどはつきりと、陛下をお怨み申し上げてはいないと、おっしゃられたではありますぬか」

「そういわねば、表面上の和解すらできぬ。それが、王と王子の親子関係なのだ」

さびしげに、国王は足元を見た。自分は息子から情を示されても、その想いを完全には信じきれない、悲しく愚かな男なのだと思う。バリオス三世もまた王族に生まれ、真の幸福とはなにかを知らずに

生きてきた人間だった。

国王の足元には、見なれた大理石の床があった。いつのまにか、国王が政務をおこなう王宮の西翼へたどり着いていたのだ。

石の床を踏みしめながら、さらに国王は思った。

32年間、国王はこの廊下を歩きつけた。歴代の王も毎日、この廊下を歩いたのだ。きっと、バリオス三世のあとを繼ぐ者も、この廊下を毎日歩くのだろう。

自分の力だけでは解決できない、さまざま問題に苦しみながら、ただ歩くのだ。

「そういえば、ローレリアンが特別あつかいしているというヴィダリア侯爵令嬢との仲は、どうなっているのか。堅物のローレリアンが令嬢には甘い顔を見せるというので、周囲の者達が騒いでいたと記憶しているが」

突然、国王が息子の恋路のことなど気にしあじめたので、宰相は面食らつて答えた。

「さあ？ 詳細は存じません。ローレリアン殿下は、公務の場に私情を持ちこまれる方ではございませんので。眞実をお知りになりたければ、いつも殿下のお側にいるデュカレット卿あたりに、たずねてみますが」

「いや、いまはまだよい。正嫡の王子としてローレリアンの足場を固めてやり、正式に国王の輔弼ほひつとして発言する権利を与え、将来は摄政大公となる王子であると国内外に知らしめることが、まずは優

先されるべきであろう。

しかし、それらの問題が落ち着いた頃には、ローレリアンにも眞面目に結婚を考えさせねば。酒浸りのヴィクトリオの種から、まともな跡取りが生まれるとは、とうてい思えぬ。ローレリアンの子供に、期待をかけるしかあるまい。

ヴィクトリオの祖父であるそなたに、このような相談をもちかけるのが酷であることは承知しておる。しかし、父親の余は、さらに断腸の思いなのだ。ゆるせ」

「陛下の御心の内、この老臣は十分に承知しております。どうぞ、わたくしへのお心づかいなど、無用に願います」

いよいよ国王も、できの悪い兄王子を切り捨てる気になつたかと、宰相は思つた。本人ばかりでなく、王太子の子供までも見放す発言には、国王の覚悟のほどがうかがえる。

これでやつと安心して自分も引退できると、宰相は深いため息をついた。ヴィクトリオ王太子の軽挙愚行に悩んでいるのは、父親の国王だけでなく、祖父の宰相も同様なのだった。

その日の夕刻、国王から謹慎を命じられたローレリアンは、自分の宮でのんびりと書類の整理をしていた。人と会うこともあいならんとの命令なので、本日から7日後までの接見の予定はすべて取り消されており、ぽつかりと予定に穴が開いたのだ。

黒の宮に訪れた客は接見の予定の取り消しにあい、最初は怒つたり落胆したりしていたが、秘書官たちから事情を聞かされて、最後には一様に笑つた。

いつも涼しい顔で膨大な量の公務をこなしていく超人めいた王子殿下にも、同じ年頃の若者たちと徒党を組んで街へくりだしたり、二日酔いになるほど酒を飲んだりするような人間臭い一面があるのかと、思われたのである。

しかも、国王と王子の間に、どういうやり取りがあつたのかについての噂も、刻一刻と広まりつつある。経済力で国の動向を動かすほどになった市民たちの口に、蓋ふたをしておくのは不可能なのだ。銃撃戦になつた昨夜の捕り物劇の顛末てんまつなどは、すでに街中の人間が知つてている。

宰相は、人心を読み、あらゆる場所を自分の劇場と化して、いつのまにか相手を自分の支配下に收めてしまう不思議な才能がローレリアンにはあると評した。しかし、彼の真の才能は、演技力にあるのではなかつた。自分のイメージをいかに見せるかという、演出力こそが、彼の才能の本領であつた。

街の噂には尾ひれがついて、王子殿下が反政府活動家の前で正体

を現した時の情景が、まるで見てきた事であるかのように語り広められていく。「あなたにとっては、悪魔かもしれませんよ」という王子の殺し文句は、それこそ流行語になりそうな勢いだ。

外見は華麗そのもの。頭脳も秀逸。本気で怒ると怖くもあるが、仲間と酒盛りをして父国王から叱責される悪戯小僧いたずらな小僧でもある王子。

そんな王子を、庶民は愛さずにはいられない。

どんな失敗も、見方を変えれば次の成果につなげられる。そう考えるローレリアンが、わざと『ポワンの宵の花亭』の亭主や従業員に事件に関する口止めをしなかつたとは、誰も考えつかなかつた。

もちろん、黒の宮の密に「父親から叱られてローレリアン王子は謹慎中」との情報を、おもしろおかしく流させたのも王子自身である。

そして、夕暮れ時を迎えたいま、執務机のまえに立ち不要な書類を処分用の箱に放り込みながら、ローレリアンはカール・メルケンと、これからのことについて話していた。いまだに一日酔いの体調が尾を引いているせいで、王子のしぐさは、どこか気だるげだ。

しかし、会話の内容は、めまぐるしく次の可能性を検討している王子の頭の中身を言葉に表したものである。メルケンは、つくることなくあふれ出る王子の言葉から、重要な命令を聞き逃さないように、せつせとメモをとりながら相手をしていた。

王子は空中に焦点の定まらない眼をむけながら、つま先を手に叩く。

「街の間諜かんちよに情報収集を怠るなど伝達をまわしておいてくれ

「はい、かしこまりました」

「噂なんてものは、どう転ぶかわからないからな。うまく反政府活動は悪いことで、みんなで王子殿下を応援しましちう方向へ、流れがさだまつてくれればいいのだが」

「いまのところは、こちらの意図通りに、進んでいるように思いますが。噂に、ヴィダリア侯爵令嬢のことがあがつてこないのも、ありがたいですな」

「おそらく彼女の友人のフイオーラが、その件についてだけはしゃべるなど、『ポワンの宵の花亭』の亭主に口止めしてくれたのだろう。

モナは不思議な女性なんだ。なぜか、周囲の者の保護欲をそそる。いつだて危なつかしくて、放つておけない。しかし、こちらがハラハラしながら見守っているあいだに、とんでもないことをやりとげてしまう。じつに、おもしろい人だよ」

ヴィダリア侯爵令嬢のことを語る王子殿下は、いつも優しく微笑んでいる。王子に近しい位置にいる者たちは、令嬢と王子の出会いから現在に至るまでのロマンスについて、だいたいの事情を知っていた。王子殿下の賢いお小姓であるラッティが、この人ならと思う人間を選んで、いきさつを語つていたからだ。年齢に似合わず処世術に長けた少年の人を見る目は確かに、事情を知つている者達は沈黙を守り、ただ密かに王子の恋の行方の心配をしている。どうせなら、王子自身にも幸せになつてもらいたいと、側近たちはみな願っているのだ。

だから、ローレリアンの笑顔を見たメルケンは、つい、言つてしま

また。

「殿下。さしあがましいことを申し上げますが、『結婚に関する方針について、今一度、お考えなおしになるおつもりはございませんか』

大きな音と共に、書類が箱に投げ込まれた。

メルケンは、しまったと、自分の失態を心の中でなじつた。ついさっきまで笑っていたはずの王子の表情は硬く冷たく変化して、感情がいつさい読めなくなってしまっている。

「カール」

呼び声も、はがね鋼のよう<sup>はがね</sup>に硬い。メルケンはかしふまつて、王子の言葉を聞くしかなかつた。

「結婚はしない。

わたしの意志は、何度もあなたに伝えたはずだ。あなたも賛成してくれていたのではなかつたのか。

わたしは、この国<sup>さこはい</sup>の議会制度と税制を改めて、ローザニアを民の意志で動く国にしたいのだ。国王など誰でもよい。兄上がこの国<sup>さこはい</sup>の歴史に名を残す最後の王になるなら、それでもいいと思つていいからいだ。

次代の王がほんくらであることは、きっと神々の采配<sup>さこはい</sup>なのだろう。わたしがヴィクトリオ兄上の腹違いの弟として生まれたことにも、奇跡の采配を感じる。

神々は、わたしに民の国を築けと、お命じなのだ。わたしが王になる必要はないし、ましてや、王家の血筋を残すための結婚など不要だ

「しかし、殿下は誰よりも濃い王家の御血筋をつぐお方です。ローザニアの民が王家の存続を望めば、殿下には御子をなす義務も生じるかもしれません」

「血筋などが、何の意味を持つ？　この国がいま必要としているのは、傾国の危機を乗り切る知恵をもち、人の力を集めることができる指導者だ。その力さえあれば、指導者の出自など、どうでもいい。わたしに子供がなければ、みな王家の血筋に頼る甘えを捨てるだろう。なんとか自分たちで国を動かしていく方策を考えようとしてくれるはずだ」

これ以上、この場でこの話を続けても、王子を怒らせるだけのはわかりきっていた。王子は愛する女性を、自分の宿命に巻き込みたくないのだ。その思いには、メルケンだつて共感できる。しかし、カール・メルケンは、これからこの国を一人で背負つていかなければならぬ王子に、心の支えとなる家族をもつことまで、あきらめてほしくない。妻子を争いに巻き込まないための努力になら、自分だって喜んで協力するにと思うのだ。

複雑な胸中を冷静な表情の下にかくして、メルケンは声をひそめた。

「殿下、この話は、そうそう他人に聞かれてよい話ではありません。この場で、これ以上の議論は、やめておきましょう」

王子はメルケンから視線を外し、陰気に黙りこんだ。

ローレリアン王子が目指す理想とは、民の国である。その国に、王は必要ない。いても飾りで十分だ。ヴィクトリオ王太子が、最後

の国王になるなら、それもまたよし。

「Jの考え方は、貴族の存在どころか、王家の存在そのものまでも否定する危険な思想だ。王子として生まれたというのに宮廷からは離れた場所で育ち、帝王学という名の洗脳にさらされなかつたローレリアンだからこそ、はぐくめた思想である。とても人前で、おおっぴらに語れはしない。

ローレリアンも、それは十分に承知している。今まで王宮以外の場所で、若手の側近を相手に、同様の話を冗談めかして語つたことは何度もある。しかし、その話に「自分は、この夢を実現可能だと思っている」という熱意を匂わせないよう、細心の注意も払ってきた。ここまで具体的な内容を真剣に話し合つたことがあるのは、もつとも自分の身近にいて、知性と見識の深さを尊敬している首席秘書官、カール・メルケンその人だけである。

親友のアレンにさえ理想について深く語らすにいるのは、ローレリアンが危険な思想の持ち主であると知れば、彼の負担になるかもしれないと思うからだ。

忠実な護衛騎士の地位にある彼は、ローレリアンのためなら、なんでもしてくれるだろう。国王の勅命に逆らい、馬鹿げた酒盛りにつきあつてくれたあげく、責任を取つて嘗倉入りなど、象徴的な出来事だ。

あの未来を信じる明るい瞳の持ち主が、鉄格子のはまつた部屋にとらわれている姿など、考えるのも嫌だとローレリアンは思つ。しかし、それはすでに現実となつていて。

アレンはローレリアンに、無条件の信頼をよせてくれている。『

我が王子』ならば、必ずやローザニアを良い方向へ導けるはずだと。

そんな彼から示される友情を感じ取ると、ローレリアンの乾ききつた心には潤つるおいがもたらされる。

その瞬間、どんなに心が癒いやされる」とか……！

皮肉な笑みが、ローレリアンの口元に浮かんだ。

自分が本心をアレンに打ち明けられずにいるのは、きっと彼からの友情を失いたくないからなのだろうと、思に至ったのだ。

だれも知るまい。

ローザニアの未来を担う男として期待を寄せられている王子は、本当はこんなに弱い男なのだ。孤独におびえ、友人からの愛を乞う。みつともないくらいに、惨めな男だ。

すっかり気落ちして窓辺に歩みよると、外の景色は夏の夕闇の中に沈もうとしているところだった。

ローレリアン王子の執務室は王宮の奥の宮の東翼にあり、その窓の下は王都の中央を大きく蛇行して流れるレヴァ川に面した急斜面となっている。

おかげで大きな窓にも、安心して近よれる。どんなに腕のいい射手でも、川のむこうから王子の執務室を狙撃するのは不可能なのだ。この時代の銃の有効射程距離は、まだ100モードにすら達していない。レヴァ川は水運に利用される大きな川なのだ。

王子の執務室からのながめはレヴァ川の東岸の街並みになる。その街並みは、王宮や商業地区がある西岸とはちがつて、ごみごみとしており、けして美しいものではなかつた。

王都プレブナンの現在の人口は公称30万人だが、統計は正確でないうえ、下町の人口は毎日増えつづけていると言われている。経済の活性化は、よいことばかりを生むわけではない。経済活動圏が広がると、たくさん生産された物は国境を越えて流通するようになり、今まで村単位の経済活動で暮らしていた人々の生活を脅かすようになつた。少しでも安い物が手に入るなら、人々は今まで使つていたものや食べていた物を、いとも簡単に捨てて、安い物へ乗り換えてしまう。それを作つていた作り手は仕事を失い、思いあぐねて都市部へと集まる。大きな都市になら、仕事があるかも知れないと。

都市に仕事があるのは事実だ。ただ、どの仕事も、極端に賃金が安い。仕事を求めている人は毎日都市へやつて来るのだから、雇い主側はいくらでも賃金を安くできるのだ。

少ない収入で喘ぎながら暮らす人々は、街の中心部ではなく、外縁部の新しい街に住む。レヴァ川の東岸も、昔はのどかな風景の農地であつた。それが、先代王の時代あたりから、しだいに街へと変わつていつたのだ。王都に集まり、従来の街へ納まりきらなくなつた人々があふれ出す形で、東岸の街は形作られていつた。

現在のレヴァ川の東岸は、小さな工場や臭いや騒音のせいで近隣から嫌われる食品加工場、石炭の集積場、船のドック、倉庫街など、街の機能を維持するためには欠かせないが、およそ文化的とは言えない施設が集まり、その施設で働く貧しい人々が肩を寄せ合つて生きている場所である。

ローレリアンは毎日、執務室の窓から東岸の街をながめては、その街に住んでいつも明日の心配をしている人々のことを想い、憂鬱になっていた。どうしたら、ローザニアの国民全員の暮らしを、もっとよくできるだろうか。彼はいつも、その答えを探している。

そもそも東岸の街は、王国の首都機能をはたす西岸の街からは、川によつて切り離された存在なのだ。

プレブナンの真ん中を大きく蛇行して流れるレヴァ川は大陸を横切るようにして流れる大きな川だが、上流の気候が安定しているため、一年を通じて水量があまり変化しない。そのおかげで川を利用した水運が栄え、川のほとりに王国の首都がおかれたのである。

帆に風をいっぽいはらんだ川舟がひつきりなしに行き交うレヴァ川の光景は、ローザニアの豊かさの象徴だと言われている。しかし、この川舟のマストの高さが、川に橋をかけられない原因のひとつになつてゐる。従来の技術でも、建築に金と時間と膨大な労力さえついやすれば、なんとかレヴァ川に石橋を架けることは可能だ。ただ、王都の周辺に石橋をいくつも架けられてしまつと、背が高いマストをもつ川舟の通行が妨げられてしまうのである。

王都の住民の生活利便性と経済や流通の円滑化を天秤にかけて比べてみたところ、より重かったのは経済と流通を支配している資本家達の利潤追求意欲だつた。貧しい人々の「王都の西岸と東岸を自由に行き来できる橋が欲しい」という願いは、簡単に、金持ちの欲望によつて踏みにじられてしまつたというわけだ。結局、川の両岸を行き来する交通手段は、いまだに小さな渡し船に頼つているのが現状である。

政治経済の中心部から分断された東岸の街は、西岸の街の豊かさ

からも取り残され、いつまでたっても貧しいままだった。農村を捨てて都会へ集まつた人々は無秩序に工場や住宅を建て、その貧しい東岸の街を、どんどん大きくしていった。

いちおう王都に建物を建てるときには、街を巻き込む大火事を起こさないように、建物の材料や建築法に一定の基準が定められている。しかし、明日をも知れない暮らしの人々に、約束事を守らせるのは至難の業だ。貧しい人々は、法令順守より、自分たちの生活を優先する。

結果、住人が無秩序に建物を建て、好き勝手に増改築をくりかえした街であるプレブナンの東岸は、地図が存在しない街といわれるほど混沌とした街になつた。

いまでは、王都の治安を守る憲兵ですら、東岸の街の奥へ入つていくのを嫌がるほどである。迷路のよつな街の中で方向を見失うといつまでたつても目的地へたどり着けないし、犯罪の取り締まりをする憲兵は貧しい人々からは嫌われているので、路地の奥で道に迷つていると頭から汚水をあびせかけられたりしてしまつ。もちろん、悪戯の犯人は付近の地理に詳しいから、気分よく腹いせをすませたあと、さつさと逃げてしまうわけだ。

いままさに闇のなかへ沈もうとしている東岸の街を見下ろして、ローレリアンは深いため息をついた。

この東岸の無秩序な街並みは、将来、王都の都市計画を考えようとするとときの、大きな足かせになるだろうなと思つのだ。

東岸の夜景は、暗い。

貧しい人々はランプの明かりにすら事欠く暮らしをしているので、薄汚くごみごみとした街並みは闇に覆われると、まるでそこに存在しないかのように見えなくなってしまう。唯一、夜も明かりを灯し続ける川べりの港湾施設の輪郭だけが、川むこうの街の存在を感じさせる程度だ。

その暗い風景の右奥に、赤く輝く点が一つだけあった。

おやと、ローレリアンは窓ガラスに身をよせる。田を凝らしてみると、その赤く輝く点は、ちらちらと瞬く炎のよつに見えた。

「あれは、なんだろうな？」

王子に問い合わせられて、首席秘書官も窓辺へよつてきた。

「鋳物工場の煙突の炎ではないでしょうか？ 日が暮れたというのに、残業でしょうかね？ 商売が繁盛しているというのならば、喜ばしいことですが」

「なるほど。炉で鉄を溶かしているとき、鋳物工場の煙突は火を噴くことがあるからな」

「はい」

「さて、今日は、わたしも早めに休む。あなたも、早じまいにしたらいどうだ？」

メルケンは慄懾に腰を折つた。

「わたしは気楽な独り身です。どうせ家に帰つても待つてゐる者な

「おつまみなので、もうございませんへ仕事をしておつまみ」

「勤勉なことだ」

「主に影響されました」

王子と首席秘書官は、たがいの顔を見て、にやつと笑った。

自分は本当に、側近に恵まれてこると思つローレリーラン王子であった。

夜の闇は、誰のもともに公平に訪れる。

自分の部屋の窓から暗くなつた街をながめおろしている、ヴィダリア侯爵令嬢モナシェイラ姫のまわりも、すつかり夜の帳におおわれている。

ローザニア王国の首都プレブナンの中心地である王宮を囲む城壁の内側には、さまざまな行政機関や神殿などのほかに、古い家系の名門貴族の館もたちならんでいる。

古い家系のなかでもとりわけ名門とされるヴィダリア侯爵家の屋敷は、貴族の屋敷がならぶ街並みのなかでも目立つ一角にある。これは王都にそびえる丘の上で、王宮につぐ高い場所にある一等地だ。ローザニア王国建国当時から王家に仕えていたヴィダリア侯爵家が、いかに名門とされる家系なのかは、王家から与えられている屋敷の用地の素晴らしさからもうかがえる。

高台にある屋敷だから、モナの部屋の窓からのがめも素晴らしいものだ。花の季節、雪の季節と、季節ごとに移り替わる美しい景色を、モナは子供のころからながめて育つた。

けれど、大人になつたいま、モナが一番氣にするながめは、レヴァ川のむこう側にある暗い街の影である。王都の東岸の街は、とても貧しい街だ。

遊学にでかけた国境の街アミテージで、貧しいとはどうこうとかを学んできたモナは、ひたすら陰気な気分で暗い街の影をながめ

た。

あの暗い街の影の中で、今夜はいったいどれだけの人が、お腹を空かせたまま眠りにつくのだろうかと思う。少しでも多くの人に仕事を与えようと、ローレリアン王子を筆頭に、この国の政治を動かす立場にある人たちが努力していることは知っているけれど。

でも、今現在苦しんでいる人には、今すぐに助けが必要なのだ。

自分がやっていることは、ほんのわずかな力にしかならないことかもしない。でも、何もやらないよりは絶対にいいはず。そう信じなければ、なにもできない。

部屋の扉にノックの音があり、どうぞと答えると、入ってきたのは盆を手にした乳母のシャフレ夫人だった。

「お嬢様、夕食をおもちしましたよ。本当に、食堂へ降りて、皆様と『じつしょに召し上がるなくてよろしいのですか？ 今夜は父君様もおいでですよ？』

モナは苦笑して答えた。

「いいのよ。もうお兄様方とアンナお義姉さまから、たっぷりと叱られたもの。このうえ、お父様からも叱られるなんて、まっぴらごめんだわ。

ファシエル兄様なんて、これがヴィダリア侯爵家の跡取りである長兄の役目だからとかいつて、わたしに当分の謹慎を命令したりするし。そのうえ、アンナお義姉さまにむかって、『侯爵家の女主人として妹に淑女の心得を教育してくれ』なんて言うんだから。おかげでわたしは、得意絶頂の雌鶏めんどりみたいになつた兄嫁といつし

よに、今日の午後は貴婦人らしく優雅に針仕事よ。外へ出られないならせめて、レース工場の設計図を見るとか、診療所の備品の発注書を書くとか、家でできる仕事をしたかつたのに

テーブルに盆を置きながら、シャフレ夫人は口をとがらせた。

「若奥様は貴族の奥方様の鏡のようなお方でござりますよ。つつましやかで、つねに旦那様をお立てになり、気品あふれるお姿で社交界へお出ましになつてファシエル様の人付き合いのお手伝い。

毎日のように外出なさつて、ドレスの裾を泥だらけにしてきたり、男性とケンカをして帰つてきたりは、なさいませんからね」

モナは、むつとして答える。

「なにが貴族の奥方様の鏡よ！ アンナお義姉さまつたら着飾るのが大好きで次々に新しいドレスを作るものだから、このあいだもファシエル兄様は、お父様に叱られておいでだつたわ。ヴィダリア侯爵家は質実剛健を家訓とし、古くから文武両道に秀でた功臣を多く輩出してきた家系なのだ。その名誉にふさわしい節度ある生活をするように、自分の妻をしつけろつて。

だいたい、アンナお義姉さまがお買い物ばかりなさるのは、ファシエル兄様も悪いのよ。お仕事、お仕事、お仕事で、いつもお義姉さまを一人になさるから。

政略がらみで愛のない結婚だつたからつて、それが奥様を放置していい理由になるわけ？ 結婚するからには、相手に対する責任を果たすくらいの覚悟は必要だと思わない？」

「はいはい、御説おせつ、『もつともで』ござりますよ

ぶりぶり怒りながら食事を始めたモナにお茶を入れてやりながら、

シャフレ夫人はさまざま思いを巡らせた。

ヴィダリア侯爵家の長男ファシエル様が、やつきになつて仕事ばかりしておいでになるのは、若いころには『ローザニアの鷹』とまで称され、いまでは内務省の長官職にある名臣の父親が乗り越えがたい存在だからだろう。ファシエル様は線の細い学究肌の方で、父親の侯爵のように大胆な発想や決断で周囲を引っ張っていく胆力はおもちでない。そんなご自分をよくわかつていらっしゃるからこそ、緻密な仕事ぶりで父親とは違う才能を証明したがつておいでなのだ。

田の前にすわって、健康的な食欲で食べ物をおいしそうに口へ運ぶモナを見ていると、若い時代つて誰でもけつこう残酷なものよねと、思つてしまつ。自分と違う価値観をもつて生きている人を認めるには、それなりの人生経験が必要なのだ。

モナが食事をしているあいだ、シャフレ夫人はそばの安楽椅子に腰かけて縫い物に精を出した。

夫人が侯爵家に仕えるようになつてから、すでに15年の歳月が経過している。自分の子供を6人育て上げてからのことだから、彼女も、もういい年である。王都へ帰つてきてからは、モナの身辺の世話も若い侍女たちに任せて、半分引退したような生活ぶりだ。

それでもシャフレ夫人が田舎で家督を継いでいる息子のところへ帰らなのは、大切に育てた侯爵令嬢の嫁入りを見届けたいからに他ならない。いま彼女がせつせと縫つているのも、モナの嫁入り道具にする下着や夜着だ。結婚後、当面必要となる身の回りの品は、たっぷり用意しておくに越したことはない。

針をピンクッシュョンに刺して、今まで縫つた部分を指でじごいて

落ち着かせる。

作業に満足すると、シャーフレ夫人は膝の上に手にした白い布を広げてみた。これは秋の夜の寝室で女性がくつろぐとき、肩が寒くないよう羽織る薄手のナイトガウンだ。裾や襟元に縫い付けたレースの美しさには、ほれぼれとしてしまう。モナが「いくらでも使っていいわよ」と、自分の仕事の関係で手に入る試供品のレースを山のようにくれたので、シャーフレ夫人は思う存分、大切なお嬢様の嫁入り道具に贅を凝らすことができるのだ。

ナイトガウンの打ち合わせは、縄のリボンをはりつとほどけば外せるように作つた。

新婚の女性のための着物なのだ。この程度の心づかいは、当然だろつと思つ。このリボンをほどく男性が、お嬢様の想い人であるようひと、あとはひたすら祈るだけだ。

「いいわひつさまでした」

モナが綺麗なしぐさで、ナイフとフォークを置く。

その様子を、シャーフレ夫人は満足して見守つた。お嬢様はハチャメチャな方だけれど、侯爵家のお姫さまとして、どこへ出しても恥ずかしくないだけの礼儀作法は、きつちり教えたつもりなのだ。その成果は、ちゃんと現れている。

「もう一杯、お茶をいかがですか」

「そうね、いただくわ。ばあやも、いつしょにどう? フィールミンティアのカフェから、秋の焼き菓子の試作品が届いているよ」

「あら、メニューを変えるのですか」

「商売つて、いろいろ考えないとね。この店なら『これ』をついて、定番商品と、目新しい季節商品を、両方そろえようと思うのよ。とにかくお客様に『もう一度来たい』と思わせる仕掛けを作らないと」

「はあ、大変なんですか」

「このひの成績を得たいと計画して、そこへ至る方法を考えるのは楽しいわよ?」

食後のお茶の用意を頼むために呼び鈴を鳴らしながら、シャフレ夫人は肩をすくめた。

きっと、モナと兄嫁のアンナが仲良くなることは永遠にないだろう。ひたすら受け身で夫を待つだけのアンナと、目標を決めてさつさと行動するモナは、水と油といつていいほど相性が悪いはずだ。だからこそ、ご立派なお嬢様にふさわしい、御嫁入り先が早く決まればよいのだと、夫人は思う。

食事の後片付けが終わったテーブルで、もう一度、熱いお茶を入れた。

モナがシャフレ夫人に披露してくれた秋の焼き菓子は、どれも女性客を意識した美しいものばかりだった。

とくに、枯葉の形に薄く焼いたパイに、粉砂糖をまぶした菓子がよかつた。粉砂糖が、まるで枯葉の上に降った霜のように見えるし、

パイも高温でカリッとした食感に焼きあげあって、枯葉を食べているようなイメージを豊かに感じさせる。ほっとする甘さは、少し肌寒くなつた秋の気候にぴつたりだ。

女一人で菓子を分けあって、ああでもない、こうでもないと話すのは楽しかつた。お屋敷の外の世界をよく知つてゐるモナは、話題も豊富だし、冗談もうまい。

あなたは、わたしの自慢のお嬢様ですよ。

シャフレ夫人が切ない氣分で、そう思つた時だつた。

窓の外の暗がりに、神殿の鐘の音が鳴り響いた。

夜のモナの部屋は、テーブルに置いた燭台の蠟燭と、暖炉の上の棚に据え付けられたランプの明かりで、ほの暗く照明されている。

静かで薄暗い部屋の中には、鐘の音は不気味に聞こえた。

そもそも、夕刻の祈りの時間がとつぐに終わつた今頃、鐘が鳴ること自体がおかしいのだ。いつたい、どうしたことだらうかと思つて、モナとシャフレ夫人が顔を見あわせると、鐘の音はどんどん数を増していくた。

最初は、遠い音だつたのだ。

それが、驚いていふうちに数をまし、大きな音となる。しかも、音が鳴りやむ気配はなく、無数の鐘が乱打をくり返すままは恐ろしくさえあつた。

何があつたのかを確かめようと、モナは窓辺へかけよつた。

窓の外を一目見て、驚愕する。

「火事だわ！ 東岸の街が、燃えている！」

普段は暗闇の中に沈んで見えなくなるレヴァ川の東岸は、いま、燃え盛る炎に明るく照らしだされていた。燃えているのは街の奥側の一部だつたが、そこから立ち上る火の粉のせいで、東岸の夜空は花火が上がつたような赤い斑点で覆われている。

モナは部屋着の上に薄手の上着を羽織つて、部屋から飛び出した。王都プレブナンは四季が美しい街とされているが、夏は短く、夜は肌寒い気候だ。

階段を駆け下りていくと、玄関ホールには、それぞれの職場へむかおうとする侯爵家の男たちが集まつていた。侯爵は王宮へ。長兄は内務省。次兄のエドウィンは判事なので司法省へ行く。三男のローワールは王都を守る第一師団の将校だから、普段は軍の官舎に住んでいて、今夜もここにはいない。ひょつとしたら、もう配下の部隊をひきつれて、火事の現場へむかつているかもしれない。

「お父さまー！」

階段の途中でモナが大声をあげると、侯爵は垂れ下がつた白い眉をひそめた。

ヴィダリア侯爵も、この3年でさらに歳を取つた。ローレリアン王子の最大の協力者として王子の地位を押し上げるべく貴族勢力の取り込みに奔走した侯爵の老体には、かなりの疲れがたまつている。

こつ之間にやうら髪も、みじとな総白髪となつてゐた。

老侯爵は、重い口を開く。

「よもや、モナショイラ。これから下町へ、出かけるつもつではなかるうな？」

「ええ、行くわ。診療所は、もうすぐ完成するのよ。燃やしてしまつわけにはいかないわ」

「モナ！」

無鉄砲な妹を叱りつけようとして大声をあげた長兄は、父親に押しどひめられた。

「モナショイラ。診療所は、もうあきらめなさい。

これからレヴァ川の東岸は大火事になる。あの街には、防災の機能などひとつもない。それどころか、建物は違法建築だらけで、道は狭く、そのうえ迷路になつてゐる。火はとどまることがなく、燃え広がるだらう。

いつかはこうすることになるのではないかと、政治を預かる人間は、みな心配していたのだ。

恐れていたことが、現実になつてしまつた。こまは、そのことを悔やんでいる暇はないがな。

とにかく、我々は登庁して、できるだけのことをするよつに努力する。

おまえは火がおさまるまでは、屋敷にいなさい。王子殿下から、お叱りを受けたのである。おのれの立場を考えてから行動せよと。

こま火事場に出て、おまえに何ができる？

おまえに求められている役割は、おまえの知識を生かして、火事のあとの始末をすることだと思うがな」

モナと侯爵は、まっすぐに見つめあった。

「火がおさまったら、東岸へ行つていいんですね?」

「もちろんだ、モナ・シェイラ。わしがそなたをどう思つていいか、いままで語つたことはないがな」

「はい」

「誇りに思つておる。自慢の娘だ。だから、よく考えて行動するようだ」

侯爵はそう言い残して、玄関から出でていった。

開かれた扉のむこうから、激しい調子で鳴りつづける鐘の音が聞こえる。

侯爵家の玄関ホールに集まつた人々は、恐れおののいて不安を口にしていた。

そのざわめきにむかって、モナはよく通る声で命じた。

「みんな、落ち着きなさい!」

家じゅうのシーツを集めてちょうどだい。それで包帯を作るの。

男の人たちは、荷馬車を準備するのよ。載せる物のリストは、すぐを作るわ。

コックは酒蔵から、ありつたけのシャデラ酒を出して。お医者様

が刃物を使うときに必要だから、いくらあっても足りないくらいなのよ。

近所のお屋敷にも、協力を頼んでちょうどいい。親戚の家にも、使いを走らせて」

どうしたらしいのかわからず、ただ不安がつっていた人々へ、目的が与えられたのだ。侯爵家の使用人たちは、一斉に了解の声をあげ、それぞれの持ち場へと散っていく。

不気味な鐘が鳴り響く玄関ホールの真ん中に立ち、次は何をするべきなのか、モナは懸命に考えた。

人手を集めて、物ももつと集めて、輸送の手段を考えて……。清潔な水を確保するためには、どうするのが一番効率的かしら？ 食料も必要だわ。まずは救援に行く人が飢えないようにしないと。そのうえで、焼け出された人たちにも……。

緊張のあまり、動悸が高まる。冷や汗が出る。

時間が惜しい。早く考えなれば。

「モナシェイラ」

ふいに話しかけてくる女の声が、モナを現実へ引きもどした。興奮ではちきれそうな頭をなだめて目を凝らしたら、モナの前には兄嫁のアンナがいた。

「モナシェイラ。この家の中のことは、すべて、わたくしに任せてくれさつていいわ。なにをすればいいのかだけ、教えてちょうどいい。これでも、わたくしはヴィダリア侯爵家の女主人ですからね。家

の切り回しのことは、誰よりもわかっているつもりよ。あなたは外との連絡に集中してください、大丈夫よ」

モナは驚いてアンナの顔を見た。彼女の表情には、真剣な覚悟の色がある。

『侯爵家の女主人は、わたくしよ!』といつアンナの口癖は、家中でなにかというと衝突する小姑のモナに対する牽制なのだろうと思っていた。けれども、それは、モナの勝手な思い込みであつたようだ。モナは、いつかは侯爵家から出ていく身なのだ。兄嫁のアンナはアンナなりに、この家を守るのは自分だと思ってくれていたのだろう。

モナは心の中でつぶやいた。

さびしいと買い物に走ったりする、ちょっとばかり頼りない人ではあるけれど。でも、この人は、お兄様の奥様なのよね。将来の、……ヴィダリア侯爵夫人。

おかげでひとつ、決心がついた。

モナは、はきはきと宣言する。

「ありがとうございます、アンナお義姉さま。じゃあ、必要なもののリストを作つたら、すぐにお届けするわ。よろしくお願ひします」

兄嫁に後を頼んで、モナは再び自分の部屋へむかう。

「ばあや、身支度を手伝つてちょうどい! 王宮へ参内するわ! 誰か、御寵妃のエレーナ様へ、これからお伺いしますつて、先触れ

を出してー。」

次から次へと方策を考えるモナ頭は、ふたたび沸騰状態に入る。

興奮しきった頭で考えるのは、もつとも自分らしいことだった。

利用できるものは何でも利用して、できる限りせやつてしまつてやるー。

反省するのは後でいいのよー。

いろいろな人から説教を食らって、すこし迷いはしたけれど。

結局、モナの主義は変わらないのだった。

時を同じくして、東岸の街の火事を知らせる警鐘けいしゆうを聞いた王宮では、大変な騒ぎが起っていた。

いつも御前会議が開かれる『会議の間』には明かりが煌々と灯され、次々に長官クラスの高官たちが集まつてくる。

東岸の火事は短時間で燃え広がつており、いまでは王宮の東側の窓が、すべて赤くきらめいて見えるほどだ。しかし、集まつた高官たちは、かつてない惨事にうろたえるばかりだった。

「いつたい、街の自警消防隊は何をしていたのだ？なぜ、こんなに火が燃え広がるまで、報告があがつてこないのだ？最初に警鐘を鳴らしたのは、プレブナン大神殿の鐘樓しょうろうにねずの番に立つ鐘樓守だそうではないか。対岸の火事に気づいたから、その者は鐘を鳴らしたと申しておるそうだが」

国王の問いかけに、答える者はない。得られる情報は、あまりにも少なかつたのである。

疲れた顔の宰相が言つ。

「調査に行つたものが、何人か帰つてきます。  
まず、自警消防隊の報告です。

東岸の街には、旧式の手押し式消防ポンプしか配備されておらず、その装備ではボヤくらいにしか対処できないそうです。自警消防隊は街の住人が納める防災基金によつて運営されておりますので、貧しい街にはそれなりの装備しか準備できなかつたようです。

応援を求められた西岸商業地区の消防隊は、渡し場の船着き場まで蒸気機関駆動の最新型ポンプを運んだそうですが、このポンプは重すぎて渡し船に乗せられませんでした」

集まつた高官たちの口から、一斉にどよめきがもれる。

宰相は報告を続けた。

「ポンプが届かないとわかつた時点で東岸の消防隊は有志の男手を集め、建物を壊して防火帯を作り、延焼を食い止めようとしました。しかし、東岸の建物には違反建築の木造が多く、燃える建物からは火の粉が上空高くまで舞つたのです。その火の粉が防火帯を超えてしまい、次々に新たな火の手があがりました。もう手のほどこしうがない状態です」

国王はうなつた。

「では、次に打つべき手はなんであるか？」

高官たちは口々に意見を述べる。

「軍隊を投入して、新たな防火帯を作るのはいかがでございましょう」

「いや、東岸の建築物の状況を考えると、それも無意味かもしけねぞ」

「けが人はどのくらい出でているのだろうか」

「そもそも、人間の避難はどのように誘導しているのだ？」

「あの街には、らくな地図もないのだぞ？」

喧々囂々の言ひあことなか、国王のもとへ侍従が歩みよつた。  
耳元で、用件がささやかれる。

「ただいま黒の宮にて詰めてゐる憲兵隊第3機動部隊隊長リドリー・ブロンフ卿が、ローレリアン王子殿下からの御伝言を国王陛下にお伝えしたいと、じつらくまつておつますが」

「ローレリアンから？ よし、ここへ通せ」

許可を得て会議の間へ入つてきた憲兵隊の士官は、いかにも職務に忠実といった感じの、硬い表情をした男だった。彼は国王の前で姿勢を正して敬礼する。

「おそれながら、国王陛下にローレリアン王子殿下のお言葉をお伝え申し上げます。王子殿下は、おんみずから街へ降りて、状況把握のつえ対策本部を立ち上げ、その指揮をとらせていただきたいとお望みです。謹慎の命を解いていただければ、ただちに行動したいと、おおせですが

「高官たちのあいだに、ふたたび、ざよめきがわく。

「おお、殿下がおでましくださるか！」

「軍も民間も、王子殿下の命になら従います。対策の指揮をとるのには、これ以上の適任者はおられぬと」

「さすがは、英明なる我らが王子殿下！」

口々に王子を褒めちぎる自分の廷臣を見て、国王は鼻白んだ。彼らは明らかに、ローレリアン王子が面倒な責任を引き受けてくれるとい、喜んでいるのだ。

会議の間に集まつた顔ぶれの中には、ローレリアン王子を支持する重臣の顔もいくつがある。

それとなく国王が視線を向けてみると、彼らは一様に渋い顔をしていた。つい先ほど会議の間に駆けこんできた内務省長官のヴィダリア侯爵などは、来るなりとんでもない話を聞かされてしまつたと、露骨に顔をしかめている。

彼はかつて『ローザニアの鷹』とまで呼ばれた賢臣だ。南三国の王女が戦争回避と講和のために、この男ならと見込んで親子ほども歳が離れていたヴィダリア侯爵に結婚を申し込んだ話は、いまでも彼の名聞をたたえる出来事として語り継がれている。

この男に、若い息子に頼る情けない王だと思われるのは、やはり嫌だ。

国王の胸に、そんな自尊心が芽生える。

それに、国王だとて人の子の親なのだ。手のほどこしよがない大火への対応などという、責任ばかり重くて得るものがない任務を、大切な息子へ押しつけたくない。

あの息子は、優しそうなのだ。目の前に苦しんでいる者がいれば、全力で助けようとしてしまうだろう。下手をすると、自分の身の危険もかえりみず、また大胆なことをやりそうだ。

さまざまなことに思いを巡らせながら、国王は重い口を開いた。

「余がローレリアンに謹慎を命じたのは、彼に物事の順序を教えるためである。困ったことが起きたから以前の命令は取り消しにしてくれでは、示しがつかぬどころか、王の権威にかかる。あらためて臣らに問う。

我が王国には、首都の半分が燃えてしまいそうだという事態に対処すべく、率先して働くとする才物はおらぬのか」

会議の間はしんど、静まりかえった。

国王は舌打ちしたい気分だった。

情けなくて、泣けてきそうだ。彼の廷臣たちは、おのおの壁をにらんだり、卓上に視線を落としたりといった様子。国王と視線をあわせようとすらしないのだ。

湧きあがる怒りをじらえて、国王は会議の間に響き渡る声で言い放つた。

「では、王国軍第一師団アルメタリア将軍に命じる。そなたの軍を率いて、こたびの事態へ対処せよ」

王都を守る第一師団の長を拝命するのは、軍人として最高の栄誉である。アルメタリア伯爵は南の大國オランタルとローザニアの属国である南三国の国境紛争などで功をなした軍人であり、年長けて將軍位を頂いてからも国軍の再編などで活躍した生粋の軍人だ。次は軍務省の長官職を拝命し、元帥となつて国軍を牛耳る人物であろうと周囲は思つてゐる。

会議の間に集まつた高官たちは、固唾かたずをのんでも將軍と國王へ注目した。両者はよく、國軍の在り方をめぐつて意見対立する間柄かねんぱだつたのである。軍の幹部には、ローザニア王國の民衆のあいだに鬱積うつせきしている不満を他国との戦争で一掃しようとする主戦論を主張する者が多かつた。穩健派おんけんぱの國王は、軍部にとつては目の上のたんこぶのような存在なのだ。

しかし、相手は仮にも國家の元首、國王である。

いつたいアルメタリア將軍は、何と答えるのか。國を動かす立場にある男たちは、興味しんしんで聞き耳を立てている。首都大火への対応責任が自分とは無関係になりそだとなれば、政治的な駆け引きは面白い見世物であつた。

アルメタリア將軍は、立派な揉み上げと鬚ひげをもつ、いかめしい外見の男である。年のころはバリオス三世と同世代。そろそろ知命の年齢ではあるが、これからもつゝ一仕事できるだらうといつ野心も持つてゐる。

口を閉じ、固く腕を組み、考えこんだ姿勢のまま將軍は口を開いた。

「わがローザニア王國軍第一師団の役目は王都の守備です。王都の非常事態に出動するのは当然と心得ますが、出動に際しては、ひとつ、言質けんちをちょうだいしたい」

「なにを求めるというのか」

「こたびの火災は、東岸の街の住民が起こしたものであり、その火

災によつて生じるであろう被害の責任は、軍には一切関係ありません。あとで、我々の対処がまずかつたなどと取りざたされるようでは、兵の士氣にもかかわりますゆえ。そのむね確認が取れねば、わたくしは部隊へ出動を命じられません」

国王は大声をあげた。

「そのような馬鹿げた保証を与えられるわけがなかろう！ 行動の結果の責任を取らなくてよい軍隊など、法治国家の軍隊にはありますね！ 我が国は法すらまともに働かない、蛮国に成り下がつたのか！」

国王が会議の場で声を荒げたのは、久しぶりだつた。高官たちは、ざわざわと噂しあつ。このところ国王は、何かと強気の発言をしがちだ。それはやはり優秀な次男を片腕に得て、宰相引退後の国政運営に自信が持てたからであつと。

しかし、叱責を浴びても、アルメタリア将軍は動じなかつた。静かに目を開いて組んでいた腕を解き、椅子の上で姿勢を正す。

「命令あらば、身命を賭してこれをはたす。それが法治国家の軍の在り方。国軍再編のおり、国王陛下は再三、その点にござわられました。軍部独自の判断は許さぬと。

ですから、非常事態に対処せよという命令のみでは、我々は動きようがございませんと申し上げているのです。せめて、具体的な行動目標をお示しいただきたい」

ぐつと言葉につまる国王である。国王と宰相派の政府高官たちは、国軍再編と近代化を進めながら、軍の将官クラスの権限を大幅に削り取つた。近代国家の軍隊が、現場の判断で勝手な作戦を推し進め

るようなことがあつてはならないからだ。

そのおかげで、既得権を失つた軍の上層部からは、かなりの反発もある。その反発が、こんなところで表面化してしまつたわけである。

將軍は、我々から決定権を取りあげて軍の行動に足かせをはめたのは国王自身ではないかと言つているのだ。だから、最終責任は国王と政策を決める政治家達が取るべきだと。

国王は、次の自分の発言の方向性を必死で探つた。ここでは下手な発言をすれば、軍の幹部に国の政体自体を批判攻撃する口実を与えるまい。

緊迫した空気が、会議の間に満ちる。

ところが、その空気は、老人ののんびりとした発言で霧散した。

「いやいや、アルメタリア伯よ。 そつ、もの『じ』とを、難しくするでない」

こまつた国王に助言を与え、御前会議を無難な方向へまとめていくのは、いつも宰相カルミニゲン公爵の役目であつた。その論法は、理詰めの正論、高圧的な威嚇、あらゆる人を煙に巻く放言と、なんでもありの多彩さである。

今日の宰相は、のらりくらりで批判をかわす古狸であるよつだ。にやりと笑い、なにげない口調で言つ。

「アーリーねや」と揉めておぬし、どどどん街が燃えてしまつ

わい。早く、なんとかせねば。

要は、軍の行動に対して、最終責任を取つてくれる司令官がおればよいのである。」

「そうですね」

「では、総司令官を立てようではないか」

「は？」

会議の間にいた高官たちは、虚を突かれて、ぼうぜんと宰相に注目した。宰相は、ひょうひょうと答える。

「王都防衛の最終責任者は、古来より王太子の役目とされてゐる。ヴィクトリオ王太子殿下におでましいだいて、後方のどこかに、座つておいていただきなされ。

王太子の肩書は、立派な王権の象徴。現場に鎮座していただくだけで、第一師団の行動には王権の承認が与えられます」

一瞬の沈黙のち、高官たちは、いつせいに失笑をかみ殺した。何人かは、失笑を封じるのに失敗し、ふすりと唇のすきまから無様な音を発してしまう。

宰相の提案は、詭弁きべんもはなはだし。しかし、妙案であることも確かだ。まともな判断ひとつできない王太子でも、総司令官に任じられれば立派な王権の代表者。「よきにはからえ」と彼が言えば、それがアルメタリア将軍の判断に対する国家の承認となる。

軍部へ最終権限は与えずにおきながら、とりあえず問題対処行動だけはとらせる。しかも、王国の将来になうローレリアン王子は

責任問題の矢面に立たせず、王宮の奥深くへ閉じ込めたまま温存しておこつといつのだ。

アルメタリア将軍は、いかめしい顔をかすかに赤らめ、「それで、よろしいですか」と国王に確認した。

国王もまた驚きをかくせない顔で宰相を見たあと、陰気な口調で承認の意志を示す。

「よからう。王太子ヴィクトリオに、王都大火の対策指揮を命じる。王国軍第一師団は王太子の命にしたがい、事態へ対処するよつ」

「御意にしたがいます」

古風なマントをひるがえし、アルメタリア将軍は会議の間からでていく。

その後ろ姿を、高官たちは、ざわめきながら見送った。

時代の風はローレリアン王子にむかって吹いていると、彼らは嫌でも悟らざるを得ない。

引退間近の宰相がローレリアン王子に有利な決定を下したのだ。自分のあとを継ぎ、これから国王を補佐していくのはローレリアン王子であると、国運を定めるまでに官位を極めた老臣は、いまここで宣言をした。そして、それに国王も承認を与えたのである。

御前会議の決定をはからずも聞くことになつた憲兵隊第三機動部隊隊長リドリー・ブロンフ卿は、大急ぎで黒の宮までかけもどつた。

彼の隊は国王の命令によつて黒の宮の出口を封鎖している。そのおかげで、王都の東岸が大火灾だといつたに、ローレリアン王子は宮の外に出ることはあるか人と会うことすらできないもので、業を煮やしてブロンフ卿につめよつたのである。「職務に忠実なのはけつこうだが、時と場合を考えろ!」と。

しかし、軍人が独自の判断で動けないのは自明の理。「いましばらくおまちを」と王子殿下に申し上げたブロンフ卿は、国王陛下の御下命を解いてもらうべく、あわてて会議の間へ走つたわけである。

黒の宮の出口までもどつて、彼は驚いた。

一応は国王からの命令があるので、王子のもとへ集まつた各所からの連絡役は、黒の宮の出口付近で待機している。その場は非常に騒がしく、イライラと歩きまわつている者、何かの書類をもつてどこかへ走つていく者、廊下へもちだした机におおいがぶさるようにして必死に書き物をしている者など、多士済々の様相である。

その人ごみをかき分けて、ブロンフ卿は宮の奥へと急ぐ。

王子の執務室の周辺でも、騒ぎは同様であった。伝令が次々に飛び出していく、秘書官達は汗をかいて走りまわつている。

「失礼いたします! 憲兵隊第三機動部隊長リドリー・ブロンフ、

ただいまもどりました！」

大声で帰着をつげると、10人ほどの人に取り囲まれて壁に貼った地図のまえに立っていたローレリアン王子は、ちょっと待つていろと、しぐさで応じた。王子のそばでは、一人の秘書官が必死になつて王子の言葉を口述筆記している。

「季節は8月であり、いま各地の神殿の備蓄食料を放出しても、2か月後の収穫期には補充がかなうはずであります。こたびの事態は大変不幸なことではあります、神々が我がローザニア王国をお見捨てになりはしないことを、民衆に知らしめるよい機会ともなりましょう。わたくしからの要請について、猊下には御英断を賜りますよう、お願いする次第でござります。書けたか？」

「はい！ これでよろしいでしょうか」

王子は受け取った手紙をすばやく読み、最後に自分の署名を書きくわえた。その手紙をもつて、秘書官は執務室から駆け出していく。手紙の相手に猊下と呼びかけているから、秘書官の行き先はプレブナン大神殿の大神官長のところだらう。

なんてことだと、ブロンフ卿は嘆息する。彼が、ついさっきまでいた会議の間では、政府の高官達が責任のなすりつけあいをしていた。そのあいだに王子の宮では、着々と大火への対応が進められていたのだ。

ブロンフ卿から御前会議での一連の決定を聞かされたローレリアン王子も、大きな嘆息をもらした。

「しかたがない」と王子は言つ。

「わたしは、まだ表むき、国王陛下のもとで国政を学ぶ見習いの身なのだ。とりあえず、今回は裏方に徹するところ。だれが司令官であるうと、現場に第一師団が出動したのならば、それでよからう」

黒の宮は、王宮の東端にある。ローレリアン王子の執務室の窓は、燃える東岸の街の火に照らされて赤く色づいていた。

その赤が、王子の暗い表情を闇に浮き立たせる。

きつと、いまこの王子の頭の中では、綺麗事だけではない深慮遠謀<sup>きれいごと しんりょえん</sup>が張り巡らされているのだと、ブロンフ卿は思った。

ローレリアン王子には、失敗を単なる失敗に終わらせないだけの、しぶとさがある。つねに次の目標を考えて行動する、千変万化の推進力も。そして、混乱に惑わされず、落ち着いて決断する力強さも。

だから、この王子のまわりには、人が集まるのだ。

しばし考えたあと、王子は休むことなく、仕事へともどりしていく。

「よし、状況整理だ。協力を取りつけた関係機関と人物のリストを作れ。できたら順次、それを国王陛下のもとへ届けるように。東岸へ直接送った伝令からの報告は、どうなつていてる」

ひょっとしたら自分は、歴史に残る瞬間に立ち会っているのかもしないと、ブロンフ卿は思った。ローザニアの聖王子が国政の表舞台へ出でていく、その瞬間に。

\* \* \* \*

そのころ、王宮の北に位置する近衛師団の本部では、下り端の兵士が一人で、ぼやきまくっていた。

彼らの任務は、罪を犯した兵士や士官が収監される嘗倉の警備である。ただでさえ、おもしろくない役目だというのに、今夜は格別いやな夜だった。王都の東岸の街が火事になつたとかで街中の神殿の鐘が鳴り響き、近衛師団にも待機命令が下つて、あたりには人気がまつたくない。

人気がないということは、ちょっととのあいだ誰かに任務を代わつてもらいたいという、願いもかなわない。街を焼きつくす大火事なんて、めつたに見られるものではないのに、それを一目見ることもかなわず、兵士は嘗倉を見張らなければならないのだ。

そもそも、今夜の嘗倉の客は、始末にこまるお客だった。一介の兵士にとつては、国一番の剣士の称号である桂冠騎士の肩書を持つ、王子殿下の護衛隊長殿なんて、雲の上のお方である。

その若き桂冠騎士殿は、警鐘が鳴るやいなや、嘗倉内で暴れはじめたのだ。

「俺をここから出せ！　ローレリアン王子殿下は民衆のためとあらば、平氣で火の中に飛びこんでいくお方だ！　俺もお供する！　これから出せーっ！　」と。

士官用の倉庫は、それなりに居心地のよい部屋である。出入り口の堅固な木戸に鉄格子がはまっていることだけが、この部屋が牢屋である証明となるような場所だ。

その中で4日間の反省をするはずの隊長殿は、大暴れだった。ガングン木戸を蹴<sup>け</sup>るし、ありとあらゆる罵詈<sup>ばりそん</sup>雜言<sup>ざげん</sup>をわめき散らす。

お願いですから静かにしてくださいと言いながら、うつかり木戸へ近づいた兵士の一人は、隊長殿から殴られた。近衛護衛隊総隊長のところへ特赦<sup>とくしゃ</sup>を頼みに行けと命じられて、断つたからである。今夜は交代要員がないのだから、彼らはこの場所から離れられないというのに。

神殿の警鐘は、いつのまにか、鳴りやんでいた。

倉庫の中の隊長殿も、いまでは扉を蹴<sup>け</sup>るのをやめて、檻<sup>おり</sup>に閉じ込められた熊そのものといった態度で、部屋の中を歩きまわっている。

兵士二人は、「もう火事は消えたのかな」「つまらんなあ」と、ぼやきをくりかえした。

そこへ、靴音も高く、歩み寄つてくる者がいた。

にわかに兵士二人は緊張し、やつて来る人物へ敬礼をおくる。

今夜は、とにかく、とんでもない夜である。桂冠騎士様には殴ら

れるし、将官クラスのお偉方の訪問を受けてしまつ。

見張りの兵士に答礼を返し、まだ新しい黒い軍服を華麗に着こなした将軍は倉庫の木戸の鉄格子から内部をのぞいた。

「おい、アレン」と、呼びかける。

倉庫の内部で熊にな引きつっていた青年騎士は、たちまち人間に木戸のそばまで吹っ飛んできた。

「アストウール様！ なぜ、こんなところへおいでのになるのです！ 街の火事は、どうなつたのですか！ 殿下は『無事ですか！』

隻眼せきがんの将軍閣下は、愛弟子である青年の血相を見て愉快そうに笑つた。そして、つい笑つてしまつた、おのれの不謹慎ふきんしんさに顔をしかめる。

「まだ、王都の東岸は燃えているがな。けつきよく、ローレリアン様は黒の宮で足止めだ。国王陛下が、そう」決断なされた。この場でローレリアンさまを表に出せば、殿下の足をすくいたい輩に、攻撃材料を与えかねないからな。謹慎命令は、ちょうど良い口実になつた」

「では、誰が現場の指揮を執つているのですか」

「アルメタリア将軍旗下の第一師団に出動命令が下つた。なんと、王太子を司令官に担いでだ」

「はあつ？ あの大バカ兄王子ですか？」

声がでかいぞと言いながら、アストウールも笑う。

「アルメタリア伯は責任を王太子へ転嫁できるし、もともと失う物など何もない王太子は、責任を取らされても痛くも痒くもない。名判断だと思うがな」

アレンは盛大なため息をついた。

「では、今回は、ローレリアンの身辺に危険はないということですね」

「いちおうはな。忠義に厚い、おまえのことだ。殿下の身を案じて、今頃は大騒ぎだらうなと思って、じうして報告に来てやつたのだ。せいぜい俺に感謝をしてもらおうか」

「感謝しますよ。ありがたくて、泣けそうだ。俺はてつきり、リアンから置いていかれてしまったのだと思って」

アストウールは、バリバリと頭をかぐ。

「曾鳴にこるあいだくらいは、身体を休めておけ。出てきたら、死ぬほどこき使われるに決まっている。今だって、王子の富で暇なのは俺くらいのものだ。俺の部下も、おまえの部下も、伝令に駆り出されて國中へ散つてしまつたぞ」

「國中ですか」

「そうだ。國中だ」

無言で、師弟はたがいの眼を見つめあつた。

いよいよ彼らの王子は、国政の表舞台へ出していく。

俺たちは、王子のために、死力をつくそう。それが結局は、国のためになるはずだ。

ふたりの瞳には、そんな固い決意がみなぎっていた。

しかし、<sup>はからいと</sup>謀が思つぬひすすまないのは、世の常である。

ヴィダリア侯爵家の三男、モナの異母兄であるロワール・イトリット卿は、第一師団の幕僚の一員だった。まだ歳が若いので肩書は下つ端だが、出身家系が名門であるつて腕が立ち頭も切れるので、将来を嘱望されている男である。

その優秀なる将校ロワールは、所属する部隊に出動命令が出ているところに、いまだ王宮の中にいた。

彼はべつに拘束されているわけではない。

だが、どうしても王宮から外には出られなかつたのだ。

当初、彼は上司である第一師団参謀長のダドフィー卿と共に、こへやつて來た。さる高貴なお方を、彼らの軍の司令官としてお迎えするためである。

ところが、その司令官閣下は体調不良を理由に、寝室からのおでましを拒絶なされた。

お迎えに参上した第一師団の幹部達にしれみれば、この拒絶は晴天の霹靂であった。国王陛下のお膝元である王都プレブナンをお守りする役目は、王国建国当初から、王太子が担つものと定められてきたのだ。

こま、またに王都は危機的状況にある。

それなのに将来至高の座に登るはずの王太子殿下から、御出座を拒否されようとは。

言葉をつくして、ダドフィー卿は王太子を説得しようとした。「殿下は後方で、どんと構えていてくださるだけでよろしいのです」とか、「なんなら天幕の中にベッドをしつらえて、お休みにならっていてもかまいません」と言つて。

しかし、寝間着姿のままベッドにもぐりこんだ王太子は、布団の下で震えながら、「いやじや、いやじや」と、くりかえすばかりだつた。30歳の大人である。

馬鹿げたやり取りに、すっかり嫌気がさしたダドフィー卿は、部下に対応を任せて本隊へもどつてしまつた。

任されたロワールと彼の副官にとつては、困惑の事態である。

この駄々つ子を、どうすれば王宮から引つぱりだせるというのだろうか？

いつも王太子の側近くに仕えている侍従たちですら、殿下の御衣裳を手にして、ベッドのまわりでうるたえるだけである。

いつも力づくでと思い、王太子の肩に「ご無礼をば！」と手をかけてみたところ、暴漢にでも襲われたかのような悲鳴をあげられてしまう始末。

悲鳴をあげつづける寝間着姿の王太子を担いで王宮の渡り廊下を歩いていく度胸の持ち合わせは、ロワールにはない。王族に危害を

加えることは死罪に相当する罪であるし、第一、そんな馬鹿げたことを実行すれば、ロワールの武人としての矜持も傷つく。

それからしばらくたつたあと、どうせ無駄だと思いながら、ロワールは再度、説得の言葉を口にした。

「王太子殿下、なにをそんなに恐れておいでになるのですか？ よろしければ、わたくしにお話し下さい。どなたかに、殿下のお気持ちをお伝えせよといつのでしたら、そのお使いもいたしましょう」

布団の中の意氣地なしさ、涙ながらに訴えた。

「どうにもこゝにも、わたしのことなど、馬鹿にしきつておぬくせよくおわかりですねとは言えず、ロワールは型どおりに答えた。

「そんなことはございません」

お約束の返事をもらつて、勇氣を得た王太子は大声をあげる。

「軍隊の指揮など、弟に任せておけばよい！ あれは田立ちたがり屋ゆえ、喜んでやるであろう！ あれは、わたしから王位を奪つつもりなのだ！ それなら、なんでも、あがやればよいのだ！」

「王太子殿下。弟君は、ただいま国王陛下より謹慎の命を賜つておいでですから、おまじになりたくても、おできにならなこのです

やうでなければ真っ先に街へ飛び出して、事態への対処にあたるうとなる方だ、の方は。たとえそれによつて、自分が不利益を

「つむれつとも。

悲壯な気持ちでロワールは、王太子をたしなめたつもりだった。しかし、王太子は他人の心を思いやれるような度量の持ち主ではない。ロワールの言葉は、表面の意味だけしか王太子に伝わらなかつた。

「ならば、わたしは弟の身代わりか！ 弟は、わたしに、面倒な責任をおしつけようというのだな！ ただでさえ、わたしは国民から嫌われているというのに！ このうえ、大火の対応の責任者など押し付けられたら、馬鹿よ、無能よと、さらに嘲笑を浴びるではないか！」

そう叫ぶと布団の中で、王太子は「うわーっ！」と泣き伏した。

ロワールは彼の副官と顔を見あわせた。つぐづぐ、この人は、自分のことしか考えられない人なのだなど。

だが、こまつた事態である。王太子を外へ連れ出すためには、なにをどうしたらいいのか、さっぱりわからない。言葉での説得は、不可能に思える。

それに、みなは王太子を馬鹿だ無能だというけれど、本人は本人なりに、自分の立場を理解しているじゃないかと思う。

国民から、さらに嘲笑を浴びるというあたりは、自意識過剰だと思うが。これ以上、だれがどのように、王太子を笑うというのだ。国民はとっくに、王太子への期待などなくしている。

しかし、自分は捨て駒だという判断は、じつにまつとうな状況把

握である。王太子を第一師団の司令官として担ぎ出す決定は、あくまでも、軍部の権限を抑制するために王権を象徴するお飾りが必要だから、なされた決定だ。

飾りは、なにがあつとも、ただの飾りだ。飾りが何もしないのは、あたりまえではないか。王太子が出動した軍の後ろでボーッとしていても、文句をいう者などいない。王宮の外でも思う存分、なまけていたらよからうに。

ロワールは意地悪く考えつづけた。いくら高貴なお生まれの方であろうと、こんな男を尊敬などできるものかと、舌打ちをしながら。

\* \* \* \*

ところが、飾りには飾りなりの、役目があつたのだ。

とりあえず王国軍第一師団は王都の大火灾に対処すべく、立派な隊列を組んで師団本部から街へ出た。

出るには出たが、そこで立ち往生してしまつたのである。

アルメタリア将軍は、まず彼の軍をレヴァ川の東岸へ渡河させよ

うとした。レヴァア川には橋がないのだから、軍隊を対岸に渡らせるためには舟がいる。

ところが、渡し舟を接收しようとすると、それは民間人の財産権を侵害する行為となるから、軍部だけの判断では実行できない。王権を代行する人物に「よきにはからえ」と言つてもらわなければ、第一師団は燃えている東岸の街へ、たどりつゝことすらできなかつたのだ。

渡し場に集結した軍団は、その場に立ちつくして対岸の火事をながめた。

やつと軍が出てきたぞと、彼らの行動を見守りとした市民も、渡し場の周辺で放心している。

時は刻一刻と過ぎてゆく。

対岸の火事は燃え広がる一方で、いまや天を焦がさんばかりの勢いだ。あまりに大きくなつた炎は上空に氣流を作り、うごめく空気は風となり、じづじづと人々の耳をゆする音を発している。

市民の一人が叫んだ。

「むこう岸を見ろ！ 火から逃げてきた連中が、こちらの岸に渡りたがつて舟をよこせと手を振つている！」

「火が背後に迫つてゐるんだ！」

「おい、渡し船の船頭たち！ 船を出してやれ！」

「あいつらは命からがら逃げてきたんだぞ！ 助けてやれよ…」

火事場見物に集まつた市民のあいだに、興奮はまたたく間に広まつていつた。

だが、渡し舟の船頭たちは、おびえて震えるだけだつた。日がな一日、川の両岸の往復をくりかえす彼らは、渡し舟を所有する親方に雇われている肉体労働者にすぎない。勝手に対岸の連中を助けに行つて舟を壊したり失つたりすれば、罰則として大きな借金を背負わされたあげく、たちまち明日から路頭に迷つてしまつ。

対岸からは炎の気流に乗つて、「おーい、おーい！」「助けてくれー！」と、泣き叫ぶ人々の声が届く。その声は、市民の興奮をさらにあおつた。

不穏な空気が、船着き場の周辺に満ちる。

アルメタリア将軍は歯噛みした。

王命を無視して、行動を起こすべきだらうか。ここで行動を起した結果、それが吉と出るか凶と出るか、将軍には先が読めない。それこそ、バリオス三世の胸の内ひとつだらう。よくやつたと認められれば、それは手柄。勝手な行動と批判されれば、将軍を更迭するよい口実を国王へ与えることになつてしまつ。

彼の軍を取り囲んでいる市民の興奮は高まるばかり。

興奮は権力への恐れを退ける。市民の叫び声は、「臆病者！」「腰抜け！」「それでも軍隊か！」といった、将軍への批判へ変わりつつある。

立派な軍馬にまたがり、風格たっぷりの堂々たる体躯を対岸の火事の炎に照りしだされながら、將軍は恨みのこもった丘で丘の上にそびえる王宮を見あげた。

憤りが、口をついて出る。

「とんだ貧乏くじにあたってしまった。王太子はこいつたい、何をしているのだ！」

その悲壮な叫びに、答える者は誰もいなかつた。

東岸の火事をまえに沈黙せざるをえなくなつた王国軍第一師団とは対照的に、ローレリアン王子が精力的に動く黒の宮は、人の出入りが激しく、とても騒々しかつた。とくに王子のまわりでは、さまざまな方面からあがつてくる報告が次々に叫ばれている。

報告を聞くたびに、人々は興奮したり、嘆息したりする。レヴァ川東岸の火災は拡大しつづけ、もたらされる報告によつて、人々の悲観的な気分はあおられるいつぱうなのだ。

東岸の火災の様子にまじつて、その報告は王子のもとへもたらされた。担当者は王子のそばにより、声をひそめて申し上げる。ローレリアン王子の側近達は、その担当者からの報告は各所へ放つてある間諜からの報告であると心得てゐるので、小声の会話の邪魔をしないように、あたりはしばし静まり返つた。

「殿下。王太子の宮へもぐりこませてゐる密偵からの報告です。王太子殿下はいまだ、王宮内におられます。おびえて寝所から出ないとのことです」

ローレリアン王子は眉間にしわを寄せた。首席秘書官が呼ばれる。

「カール、第一師団の動きについて、その後の報告はどうなつてゐる?」

「西岸の船着き場にて待機中の報告が最後です。その後、動きはありません」

「くそったれ！ 動きがないんじゃなくて、動けないんだよっ！」

ローレリアンは、いつもの優雅な王子殿下らしからぬ口調で悪態をつき、壁の地図をたたいた。側近たちは何事かと緊張しながら、王子に注目する。

固く口を閉じ、歯を食いしばる。そうしていなればローレリアンは、意氣地のない兄を、ののしり倒してしまった。しかし、ここで彼は取り乱すわけにはいかない。『ローザニアの聖王子』は、どんな状況にあっても沈着冷静で指導者にふさわしい態度でいなければならぬのだ。

落ち着けと自分に言い聞かせながら、ゆっくりと口を開く。

「ラッティ！」

疲れている黒の宮の人々に飲み物を配っていた王子の小姓は、「はい」と答えて姿勢を正した。

「聖衣を準備してくれ。ここにいたのでは、らちがあかない。聖堂に鎮火を願う御祈祷にいく。それが三位の神官位をいただいている王族のわたしに、もっともふさわしい行動だ」

首席秘書官が、不敵に笑つて問いかけた。

「はて、聖堂で、もうもうの指揮をとられますか？」

王子は憮然と答えた。

「馬鹿を言つた。聖堂は神聖なる祈りの場所だぞ。だが、聖堂へむ

かう道すがら、目的地が変わるかもしけんな。だから、カール。おまえもついてくるがいい」

「かしき」まつました

丁寧に一礼した首席秘書官は、一連の情報を記した壁の張り紙を、すべてはがして運ぶように指示を始める。

廊下では王子の護衛隊を指揮するイグナーツ・ボルン卿が、部下に整列の号令をかけていた。護衛隊の装備は銃を担つた実戦仕様で、とても王宮内の移動のための支度ではない。

五分後、ローレリアン王子は黒の宮から出でていった。

王命により黒の宮の出入り口を封鎖していた憲兵隊のリドリー・ブロンフ卿は、とっくにローレリアン王子を宮の中へおしどじめでおく意欲などなくしていた。聖衣とともに犯しがたい高貴な雰囲気をまとわれた王子殿下に、「わたしは聖堂へ祈祷をしていく。じゃまだでは許さぬ」と申し渡された瞬間、「ならば、わたくしもお供いたします」とだけ答えた。

王子のあとにしたがう秘書官、事務官、護衛官の行列は、王子の面の引っ越しであるかのような物々しさだったが、それを見てもブロンフ卿は表情一つ変えなかつた。

我が命運は、ローレリアン王子殿下とともにあり。

ブロンフ卿もここで、そう決意をしたのである。

\* \* \* \*

王太子惑乱の知らせは、当然、議論の声かまびすしい会議の間に  
ももたらされた。しかもそれは、王国軍第一師団西岸の渡し場にて  
立ち往生の知らせと、同時にどどいたのである。

議場は騒然となつた。

国王は頭を抱えてうなり、老宰相は怒り心頭のいで席を蹴つて  
立ちあがる。

宰相はしゃがれる声で言い放つた。

「みんなのもの、うろたえるでない！ 心配せらずとも、いまこの老い  
ぼれめが現場へでむいて、軍を動かしてくる！ 王都大火の責任も、  
わしが引退の土産に、我が墓場へともち去つてやるわッ！」

「おまちください、宰相閣下…」

「伯父上、無茶ですぞ！」

長年にわたつて宰相の下で働き、政府の要職について美味しい思  
いをしてきた親族たちが、いっせいに老人へ取りすがつた。

一族の頭首に引退されるのはかまわないが、引責辞任されでは困るのだ。彼らには、まだこれから長い人生がある。こんな形でカルミゲン公爵の時代が終われば、反宰相派の連中は大喜びで、宰相の一族全員に連座で責任を取らせようとするだろう。

しかし、怒りに我を忘れた宰相は聞く耳をもたない。長年にわたって、おのれを殺して守ってきたローザニア王国の首都が燃えている。しかも、その対応が宰相の孫である王太子の臆病風のせいで完全停止してしまったのだ。これが、怒らずにいられようか。老いから生じる短氣も手伝って、宰相の頭では血がたぎる。彼の一生分の苦労が、大火の炎とともに灰塵に帰すように思えるのだ。

「はなせ、馬鹿者ども！ あのように虚けた跡取りを国王陛下にさしあげたのが、我が娘かと思うと、情けなさで胸が張り裂けるわつ！ 孫の不始末は、わしの不始末も同然じや！ 王太子も現場へひきずつていき、大火の炎で焼き殺してくれる！ それが、ローザニア王国宰相としての、わしの最後の役目じや！ 後顧の憂いは、すべて断ち切ってくれようぞ！」

「「」乱心だ！」

「医者を呼べー！」

「宰相閣下、お氣を確かにー！」

もう会議ビーハの騒ぎではない。

国王を筆頭に、政府の高官達は、ぼつぜんと宰相一族の混乱ぶりをながめている。

そこへ、新たな人物の登場である。

自分の側近をひきつれて会議の間に入ってきたローレリアン王子は、騒ぎを一皿見るなり顔を強張らせて、あたりに一喝した。

「王都の大火灾が延焼を続けているさなかに、臣らはここで、何を騒いでいるのだ！」

王子の涼しい声はよく通る。一瞬にして会議の間は静寂に包まれた。

「王子殿下」

真っ先に、ヴィダリア侯爵が立ちあがり、王族への臣従の礼を取る。我にかえった高官達も、いっせいにそのあとへしたがつた。

王子はすその長い聖衣を着ていた。黒づくめの聖職者の衣装は、これ以上ないくらいに王子の高貴な雰囲気を引き立てている。

「王子殿下、じつは……」

事情を説明しようとしたヴィダリア侯爵は、黙つていなさいと、王子から力強い瞳の力で命じられた。

一同を見まわして、王子は静かに口を開く。

「わたしは謹慎中の身ゆえ、せめて聖堂で神々へ王国への加護を願う祈祷でもと思い、ひつそりと宮から出てきたが。その道行きで、事態の推移を聞いてしまえば、のんきに祈祷などしていられようは

「すもない」

王子は、父国王のまづくむきなおつた。

「父上。わたしへの謹慎の命は、お解き下さこまよう。元ひこ、重ねてお願ひ申し上げます。どうぞ、このわたしへ、こたびの事態への対処を、お命じ下せこ」

「ローレリアン、やなた……」

父と息子は、しばし見つめあつ。

父はおののいた。息子の瞳は、柔らかく笑っていたのだ。

そのおだやかな色の瞳を長く見ていられず、国王は手をそらしていった。

「余は、王都大火の対策指揮などで、いままさに始まらんとしている國を導く王子としてのそなたの経歷に、汚点を残したくない。その身に危険がおよぶ」とも、してほしくないのだ。だが……」

「つむき震える国王は、その姿で、ふがいない兄が引き起こした苦渋の事態の後始末を、弟にさせなければならなくなつた辛をを語つてゐる。

息子はその父へ、わかつてこますよと、伝えたいのだ。

「父上、申し上げたはづです。わたしは、このローザニアの王子です。國のためとあらば、命も捧げる覚悟。危険なことはいたしませんといつ、お約束もできかねますと」

国王の視線が泳ぐ。

「まだ迷いの中にある国王は、ローレリアン王子のつむらへ、リドリー・プロンフ卿の姿を認めた。

プロンフ卿は、深々と首を垂れた。

「申し訳ございません。聖衣をまとわれた高貴なるお方に聖堂へ祈祷に行くと言わなければ、どうしても面へお詫めすることもかないません」

国王は、顔をゆがめて苦笑した。

「よい。どうせ、我が息子は、一人とも余の思う通りにはならぬだ。

ローレリアン。これがそなたにとつては、国王から全権を委任される王子としての初仕事になる。すべて、そなたが思うどおりに、やってみるがよい」

「ありがとうございます」

一礼した王子は、自分の首席補佐官へ「ここへ残り、現場と御前会議の仲立ち役をするように」と命じた。そして、聖なる衣の裾を華麗にわざわざ、出口へとむかう。

プロンフ卿が、そのあとを追つ。

「殿へ、お待ちください。ここまで、わたくしを巻き込まれたのです。どうか、この先の御供も、お許しください。不肖リドリー・ブ

ロンフ、殿下の手足となつて粉骨碎身おつかえ申し上げると、神々  
へ誓いますゆえ！」

会議の間に集まつていた高官達が、どつと笑つた。また、ローレ  
リアン王子に心酔して、忠誠を誓う者が出たと。

しかし、和やかな雰囲気を楽しめたのは、ほんのしばらくの間だ  
けだった。

東岸の街の火は、勢いがいっこうに衰えない。そのうえ、渡し場  
で立ち往生している第一師団にむけて、とうとう怒った市民が投石  
を始めたとの知らせが届いたのである。

ローレリアン王子は会議の間を後にし、王宮の西翼の出口へとむかった。

いまは一刻を争つときだ。走りながら王子は聖衣の打ち合わせに手をかける。

聖衣の下から重い衣のすそをさばきをよくするために着用される白絹のローブは現れず、上着を脱ぎ捨てた王子は、普段愛用している詰襟つめえりの法衣姿となつた。

「おそらく後で必要になるから、そいつは現場へ持つてきとおいてくれ」

はからずも放り投げられた聖衣を受け取ることになつたりドリー・ブロンフ卿は苦笑した。やはり王子殿下は、最初から聖堂へなど行く気はなかつたのだなと。

壯麗なる宮殿の政治向きの表玄関にあたる西翼の前の広場には近衛連隊が列をなして待機している。

階段下には、ローレリアン王子の馬。

その馬に自分の馬の馬体をならべ、王子を待つアストゥール・ハウエル卿は、不穏な熱気をはらんだ夜空を見上げてつぶやいた。

「ああ、しまつた。アレンのやつを倉庫から出してやるのを忘れていた。

あいつには『今回、殿下はおでまじにならな』と云えてやつて、それっきりだ。

結果的に嘘をついたようなものだから、あとで山ほど文句をつけられちまつぞ』

アストウールのかたわらにいた王子の護衛隊第一小隊の指揮官であるスルヴェニール卿は、軽く肩をすくめて答えた。

「こまわら、あいつを迎えてやる暇はないですよ。どうせ、あいつの部下も、ハウエル将軍の部下も、今回は出番なしだらうといふことで伝令役に駆り出してしまいましたから、ここにはいらないのです。

デュカレット卿には悪いが、嘗倉から出してやるのは、こたびの成り行きに田処が立つてからとこいつにいたしましたよ』

「たく、俺はいい歳なんだぞ。やつと名前ある将軍位をちようだいして自分の部隊を持てる身分になつたつていうのに、非常事態が起きたら、また殿下の護衛役に逆もどりで肉体労働だ。しかも不肖の弟子の、代理ときた

ぶつぶつ愚痴りつづけるアストウールを見て、スルヴェニール卿は失笑する。

「不満そなお口ぶりですが、顔が笑つておいでですぞ、将軍閣下。『王子殿下の影』の尊称を返上なさるおつもりなど、欠片もないようにお見受けいたします

馬上でふんぞり返つたアストウールは、からりと笑つた。

「まあ、よつするに、俺には現場のほうが性に合つてこいつこいつ

とだ。俺の部隊は、まだ実戦部隊の体裁をなしていないのでな。現場で俺のことを閣下なんて呼ぶんじゃないぞ、スルヴェニール」

「承知いたしました」

笑いながらうなずいたスルヴェニール卿が、階段の上を仰いで表情を改める。

「殿下です」

「うむ」

階段をかけおりてきたローレリアン王子は、護衛隊付きの従卒の手を借りて馬上の人となつた。彼はあくまでも国王の輔弼ほじつをつかさどる実務家の王子である。おまけに副業は、お祈りが仕事の聖職者。馬や剣の扱いが仕事である騎士達を感心させるような、はつたりの利いた体の使い方はできない。

しかし、そんなことはどうでもいいのだ。

馬上の人となつた王子は、すらりとした姿をまっすぐに起こし、冴え冴えとした光を宿す瞳で、彼にしたがう男たちを見渡した。

兵士も将校も、みな王子に視線を注ぐ。

その熱い視線には、我が王子への信頼がある。

満足げに微笑んだローレリアン王子の表情はやがてひきしまり、声高に命令が発せられた。

「アストウール！」

「はーー！」

「王国軍第一師団が立ち往生している渡し場まで襲歩しゅうほにて進み、我々を先導せよ。事態は急を要している。騎乗していないものは、全力で走れ。

みな、よく聞け。ローザニアの民は、死力を頼たよして事に当たる軍隊こそ欲しているのだ。現場に駆けつけ、汗と熱意で、我こそは軍神マルスの申し子であると即そくに見せつけよー！」

王子の右手が高々とかかげられ、「我がローザニアのためにー」と男たちは大声をあわせて何度も叫んだ。

そのシュフレヒールを聞きながら、王子の護衛隊長達は馬の首をよせて打ち合わせをする。

第一小隊長とローレリアン王子付き護衛部隊長代理を兼任するイグナーツ・ボルン卿は緊張ぎみだ。暗がりでわかりにくいが、顔色も悪いように見える。

「ハウエル将軍閣下がいてくださつてよかつた。わたしの指揮では、何日にも及ぶであろう殿下の御城下での活動を、完全にお守りできるかどうか心もとない。殿下がお出ましになるまでの「こたごたのせいで、アレンの小隊は分解状態だし、やつもこなせません」

隻眼の将軍は、もと王子付き護衛部隊長である。かつての部下であつたボルン卿の肩をたたき、気合を込める。

「2個小隊で24時間の警護体制を敷くのは大変ではあるがな。憲

兵隊のリドリー・ブロンフ卿の協力もあるから、なんとかなるだろ  
う。

大丈夫だ、イグナーツ。おまえなら任せられると思ったから、俺  
は護衛部隊から退いたんだ。いまさら指揮権を、おまえから返上さ  
せるつもりなどないぞ。

それより、殿下は全速力でもって現場へ駆けつけるパフォーマン  
スを要求されている。

先導を俺にお命じになられたのは、はつたりが利く外見だからだ  
らつさ

王子が先導役にアストウールを選んだのは、背後の軍勢の様子を  
見ながら最速の進軍速度を定める難しい役を、経験豊富な彼なら問  
題なくはたせるだろうと踏んだからに他ならない。だが、アストウ  
ールは指名によってあらわされた王子からの絶対の信頼を、冗談で  
ぼかしておきたいのだ。戦場と大差ない混乱にみまわれた現場で、  
これから何日にもわたって王子を守らなければならぬ護衛隊長た  
ちに、無駄な緊張をさせないために。

イグナーツとスルヴェニールは、失笑をこぼした。

胸を誇らしげにそらし、ぐいっと親指を立てて自分を指し示した  
アストウールは、「俺様はいい男だからな」と言いたげな表情をし  
ていた。実際、きざ 気障な髭ひげと隻眼せきがんを持つ中年騎士は、かなりの伊達男  
ではあるのだが。

「まあ、ほどほどの全速力を心がけるから、殿下の馬のまわりを、  
おまえたちの部下の馬で遅れないように固めてくれ。現場の混乱に  
乗じて、えたいのしれないやつを殿下に近づけたりするなよ」

「承知しました」

「では、行くとするか」

馬の首を返し、仲間がそれぞれの位置に着くのを待つあいだに、アストウールは旗手から旗を受け取つた。黒地に二頭の獅子。二つの強きものが仰ぎ見るのは、王家を象徴する一重咲きの薔薇と王冠。ローレリアン王子がアストウールの新設部隊に下賜した隊旗である。

のちに、この旗はローレリアン王子の御旗として、敵からも味方からも恐怖の念で仰ぎ見られるようになる。その王子旗の初披露は、まさにこの時であった。

王宮の門の方向へ、まっすぐな視線をそそぎ、アストウールは咆哮した。

「全軍、この旗につづけ！　いまこそ、我らが王子の御名を、世にとどろかせるのだ！」

鬨の声をあげた軍勢は、怒濤のじとく動きはじめた。このさいの鬨の声は、王都の外れでも聞くことができるほど、大きなものだつたという。

王や皇帝を補佐すること。

馬の全速力。騎手は鞍から腰をつかせ、鐙のうえに立てバランスを取る。かなり練習しないとできないものらしい。

輔弼  
しゆほり

わずかの時間で王宮がそびえる丘から駆け下りた軍勢は、うねる人の流れとなつて目的地へ到着した。

そこには不穏な空気が満ちていた。川むこうの街は赤々と燃え、その炎の明かりで船着き場の周辺は不気味に照らしだされている。炎が燃え盛る音は耳にうるさく、立ちのぼる熱気は気流を生み、東の空は渦巻く火の粉で地獄の夜空とはかくやと思わせる色をなしている。

そして何より、民衆と軍隊が生む緊迫した空気が恐ろしい。近衛師団がさらにやつて来たというので、市民から軍隊への投石はいつたん止んでいたが、飛んできた石つぶによって肉体よりも軍人としての誇りを傷つけられた兵士たちの形相は醜くゆがんでおり、銃口は市民へむけられている状態だった。

第一師団の兵士たちが発砲許可を今か今かと待つてゐる気配を感じ取つたローレリアンは、迷うことなく民衆と軍隊のあいだに自分の馬を走りこませた。

間一髪だと、肝が冷える。

ここで軍隊が発砲すれば、民衆は怒り狂うだらう。下手をすれば、それがきっかけとなつて、現王朝を倒そうとする革命のさわぎに発展してしまいかねない。いつの時代でも政治体制の転覆とは、ささいな武力衝突から始まるものだ。

「グロリューズ！ 商業地区自警消防団長、アントン・グロリュー

ズはいるか！」

大声で、目的の人物の名を叫ぶ。ここで四の五の演説をするつもりはない。ローレリアンの頭の中では、次々に取るべき行動の選択がはじまっていた。

いきなり現場に乱入してきた近衛師団を率いる若い男に名前を呼びつけられて驚いた商業地区自警消防団長は、転がるようにして後方から走り出てきた。

王子の親衛隊旗がはためく方向を計算して、わざと少し離れた場所へ馬をとめたアストワールが声を振り立てて怒鳴る。

「こちらにおわすはローザニア王国第18代国王バリオス3世陛下の王子、ローレリアン殿下である！ 心して殿下のご質問に答えよ！」

「は、ははあーっ！」

消防団長は代々街の顔役を務める古い家柄の出であつたが、その家の格じたいは地方の豪族とあまり大差ないものだった。とても王族と直接謁見できるような立場にはなかつたので、あまりの畏れ多さに、跪いて地面に額をこすり付けそうになるくらい頭を下げる。

アストワールの大音声に驚いたのは、消防団長だけではない。船着き場の前の広場を埋め尽くした兵士たちも市民も、驚きのあまりどよめいた。

ローレリアン王子は、自身の肖像画を描かせない。噂には聞いていても、当の王子殿下がどのような外見の人物なのかは、まだそれ

ほど世間に知られていなかつた。いま田の前に立つてゐる青年が、名高い『ローラニアの聖王子』かと、誰もが思つたのだ。

馬上にすいりと臂を伸ばして居住まつを正す男。

服装は黒づくめの神官の法衣。

対岸の火事の火に照らしだされてゐる、憂いに満ちた秀麗なる横顔。

唯一の色を成す金の髪は、風になびられ、ゆるやかにゆれている。まるで王子の美しい容貌を、後光で縁取るかのようだ。

王子は凜としたよへ通る声で言つた。

「やうかしませうては、話もできない。立ちなさい、グロリュー  
ズ」

立てと命じられた消防団長は、おそるおそる地面から膝を離して、腰を低くしたまま王子の馬へと近づいた。

前置きもなく、ローラニアは消防団長にたずねる。

「最新型の消防用ポンプは、重すぎて渡し船へ乗せられなかつたと  
聞くが

「はい、さようじやござります。蒸氣機関は鉄と水と燃料の塊のよう  
なもので重量がござりますので、地面の上でも一頭の馬で曳かねば  
なりません」

「貨物用の川舟になら乗せることが可能か？」

「はい、貨物輸送用の甲板が広い平底船なら、なんとかなるかと」

「では、その船を準備させる。移送の段取りを頼むぞ」

「しかし、殿下。船舶会社からは船の貸しを拒否されております

「船を壊されたり、火災の一次被害を受けることを恐れているのか。ならば、接收した船に損害が生じた際の補償を約束すればよからう。ローザニア王国王子の名にかけて約束する。接收した船に損傷が生じた場合は、国がこれを補償する」

「殿下、それはまことでござりますか」

「わたしは国王陛下より、今回の大炎の対応については全権委任を受けている。わたしの約束は、国王陛下の約束である。心配はいらぬ」

消防団長の口調には懇願の響きが加わった。

「御慈悲深き王子殿下！ では、その補償の約束を、渡し舟の船頭たちにも与えてやつてくださいませぬか！ 対岸の船着き場には、火事から逃げてきたものの、大河の流れに行く手を阻まれている者が大勢おります！ どうか、その者たちを救いに行かせてやつてくださいませ！ 哀れな船頭たちには、雇い主の持ち物である渡し舟を危険にさらせる権限がありません！」

切なる願いを聞いた王子の声は、朗々とあたりに響き渡る。

「あいわかつた。渡し舟の船頭たちには、これから軍隊や資材を対岸に運ぶ役目も果たしてもらわなければならない。大火へ対応する作業により渡し舟の船体に損傷が生じた場合も、補償を約束する」

かつて権力者が、こんなに気前のいい約束をしてくれたことはない。消防団長の表情には、一瞬だったが、信じていいのだろうかと、いう迷いが浮かんだ。

その表情の変化を、王子は見逃さなかつた。不敵に笑つて宣言する。みなが固唾をのんで、このやり取りを見ているのだ。いまここで市民の協力を取り付けそこねれば、東岸の街は丸焼けだ。

「なあに、心配するな。万が一、舟の補償を財務省が渋るようなことあらば、王子のわたしが、みずから王宮の宝物庫をあばいて、父の宝冠の宝石を売りさばいてでも支払いをしてやる。民あつてのローザニア王国ではないか。市民との約束を、わたしは何よりも優先する。船頭たちは安心して大火の対応のために、我が王国の母なる大河レヴィアに舟を漕ぎ出すぐい！」

消防団長と王子のやり取りに耳をすましていた人々が歓声をあげた。

その歓声は、あつといつまに耳をつんざく民衆の大歓声へとなり替わる。

躍り上がつて船着き場へ駆けていくのは、対岸の悲鳴を聞きながら動けずにいた船頭たちだ。

「舟を出すぞ！」「王子殿下万歳！」「早く櫓を水に降ろせ！」「人々は口々に叫ぶ。

消防団長は興奮しきつて、王子を見あげた。

「感謝申し上げます、王子殿下！」

喜色にかがやく相手の顔を見て、ローレリアンはゆつたりと微笑む。本当のところは心の中で、芝居がかつた大台詞をつかえずにに言えてよかつたと、冷や汗をかいていたのだが。

「グロリューズ。あなたは自警消防団の団長を20年も務めた熟達の専門家だ。その経験と知恵を存分に發揮して、わたしを助けてほしい」

「はい！ しかし、殿下はなぜ、わたくしめの名と経験を？」

「わたしは自分が書面に署名し、感謝をささげた人の名前を忘れたことはない。あの表彰状が、わたしのもとへまわってきたのは、まったくの偶然だったがな。あなたとは初対面だといつ気がしない。頼りに思っているぞ、グロリューズ」

「はいっ、殿下！」

消防団長は大感激である。プレブナン商業地区自警消防団長勤続20年の表彰状にサインをした時、バカ兄の仕事ぶりに激怒していたせいで、この男の名前を憶えていたから助かつたと、ローレリアンがほくそ笑んでいたとは露知らず。

そして、次に呼びつけられるのは、今回、あまりいい思いをしていない将軍閣下である。

「アルメタリア将軍！」

「はい。御前におります、王子殿下」

「聞いてのとおりだ。わたしは国王陛下より全権を委任された。これより王都大火対策本部を立ち上げる。第一師団には近衛師団とともに、我が指揮下へ入るよ。」

「（ノ）命令、つけたまわりました」

将軍は「うやうやしく」、王子殿下へむけて騎士の礼をするしかなかつた。ローレリアン王子の名を呼ぶ市民の声は、いまや怒濤の大歓声となつてゐる。

あたりの騒ぎに負けないよう、王子は張りのある声で次々に言った。

「各師団の工兵隊長を呼べ！ グロリューズ、工兵隊長とともに東岸の地図を見て、どこへ防火帯を作るのが最良か検討を！ 市民にも協力を頼み、斧、槌、のこぎりなどの工具を集めらるるだけ集めろ！ 防火帯を作る手伝いをする男手を募れ！」

「ただちに」

「アルメタリア将軍。第一師団と近衛連隊の中隊長以上を集めて対策会議を開く。第一師団の指揮官達を、どのように任用するかの判断は将軍へ任せる」

「かしこまつました」

ここで初めて、王子は馬から降りる。すると、たちまち王子は護衛の人垣に囲まれた。

そのやうは、まるで表舞台からの暗転退場だとアルメタリア将軍は思った。ほんの一瞬の登場で観衆にみずからの中存在を鮮烈に印象付けて、過剰な露出はさけ、さつさと舞台裏へひっこむ。

最小の労力で、これ以上ない効果を生んだようなものだ。謎めいた雰囲気を残しておけば、人々はより『ローザニアの聖王子』に注目する。好奇心に駆られた男たちは、喜んで王子に手を貸そうとするだらう。

王子の指揮下に入るこれから数日間、おのれの言動には細心の注意をはらわなければと、将軍は思った。

この青年は侮れない。どうすれば自分をより魅力的に見せられるか、この若い王子はきちんとと考え、計算ずくで行動している。彼に悪感情を持たれてしまえば、アルメタリア将軍の「中央政界で、これから人生に、もう一花咲かせよう」という野望は、単なる夢想として終わってしまうにちがいなかつた。

アルメタリア将軍の予測の正しさは、それほど時間を置くこともなく証明された。

この日、ローレリアン王子の要請にしたがつて東岸の火災消火活動支援のためにレヴァア川を渡つた市民の数は、明け方までに五千人を超えた。

これだけの労働力をいつぺんに東岸へ渡河させることに成功したのは、軍隊の手柄でも、消防隊の手柄でもなかつた。ましてや、ローレリアン王子の手柄ですらない。

王子は対策本部の議場となつた天幕の中で、論議の行方をうまく誘導しただけだつた。大火への対策に有効だと思える提案があるものは誰でも会議に加わつてよいとし、最終責任は自分が取つてやるから忌憚のない意見を述べてみよと宣言して、誰でも物が言える雰囲気をつくつたのだ。そのうえで、よしとした意見に支持を表明し、提案者を励まし、計画実行を妨げる問題を解決する支援を与えたり、必要な労働力の割り振りを指示したり、関連部署との調整役をはたしたり……。

その結果、なんと市民たちは、たがいに協力しあつてレヴァア川の水面に貨物輸送用の平底船をならべ、船同士を渡し板でつないで、大河に浮橋をかけたのである。

その偉業を成し遂げたことで、市民たちは誇りと自信を持った。

自分たちの街は自分たちで守らねばという意識を持った市民は、

全力をつくして東岸の街の火を消そうと努力したのだ。

まさに、活動の主役は市民であった。

しかし、市民たちの活動に対し指導的な役割を果たした街の役人や世話役などは、彼らの行動を支えたローレリアン王子にそなわっている、ものごとの本質を見極める力や集団をまとめる力、そして、深慮に裏打ちされた確かな決断力に驚かされていた。王都大火対策本部の長として、どつしりと構えた青年は、ここぞというところでだけ、彼にしかできない決断を打ち出してきたのだ。

レヴァ川に浮橋をかけて東岸へ大量の作業員と資材の投入ができるようにしようと言い出した水運協会の幹部達に、浮橋によつて一時的にレヴァ川の上流と下流を行き来する交通を堰<sup>せ</sup>き止めてしまう許可を与えたのは王子である。

また、燃え広がる大火を食い止める防火帯を東岸の街のどこへ築くかという問題に、最終決定を下したのも王子だ。一通り会議の参加者から意見を聞いたあと、王子はここだと、地図の上に指で線を描いて見せた。

その選択には、誰も文句を言わなかつた。自信に満ちた口調でローレリアン王子が「ここしかあるまい」と言つたのだから、防火帯はそこに築くべきなのだ。人と物を運ぶ作業は順調に進行中。あと必要なのは、計画を実行に移す強力な命令だけだつた。

夜を徹しての作業は市民の熱意に支えられて、着々と進行した。明け方には、まだ火がまわつていない東岸の街の3分の1ほどが、燃えている街から防火帯で完全に分離された。建物を壊して築いた防火帯の幅は、広い場所で30メレモーブ、狭いところで8メレモ

ーブほど。夜明けの光を得て、市民はさらに疲れた身体に活を入れ、少しでも防火帯を広げようと努力した。飛んでくる火の粉によつてさらに延焼が広がらないよう、守りたい街並みには苦労して運びこんだ最新型の消防ポンプで放水がくりかえされる。

働く人々は思つていた。かつて、王都プレブナンの住民が、身分の差も貧富の差も乗り越えて、これほど一つにまとまつたことがあつただろうかと。

そして、この夢のような団結を生み出して支えているのは、彼らの國の民が『ローザニアの聖王子』とあだ名し、期待をよせている若き王子なのだった。

短くて申し訳ないです。物語の進行上、ここで切るのが一番かと思いました。

次回の更新は1週間ほどあとになります。ひどい風邪をひきこみました。咳と鼻水が辛くて、まともな文章が頭から出できませんでした。

文中に同性愛に関する描写と残酷表現があります。苦手な方はご注意ください。

そして、王都プレブナンに住まう数十万の民が劫火に怯え、戦つてすごした夜がいよいよ明ける。太陽はいつもと変わらずに暁光で街を照らしだし、その光はたちまちまぶしい夏の陽光へと変化していった。

火と闘っている人々にとつて、夜明けは待ち望んでいたもの。白日の下でなら、困難と闘う手段も増えるし、仕事の効率もあがる。だからきっと、この国で誰よりも不幸な気持ちで夜明けの光を見たのは自分にちがいないと、王太子付きの侍従長ソワイエ卿は思つた。

彼が王宮の窓からながめおろす川のむこうの街は、半分が黒焦げの焼野原と化し、まだ燃えている部分は渦巻く白煙黒煙に覆われている。煙の隙間からは、ちらちらと揺れる炎が見えた。

その炎の行く手には、王都プレブナンの市民たちが夜通しかつて築き上げた防火帯が細長くのびている。

こみあつて建つ下町の建物を壊してつくつた、その一筋の道は、希望へ続く道だった。

とくに、この国の行く末を心配し、暗い気持ちで夜をすごした政府の高官達にとって、あの防火帯は奇跡の産物に見えていることだらう。

しかし、ソワイエ卿にとつては、破滅への道に見える。あの道を

作り上げたローレリアン王子は、彼の主の最大のライバルなのだから。

彼が長年仕えてきた王太子ヴィクトリオは、じつに平凡な男であった。

平凡な男が王位を継がねばならない立場に置かれたことこそが、そもそもの不幸の始まりだつたのだ。王太子の祖父である宰相カルミゲン公爵を筆頭とする周囲の者達は、やつきになつてヴィクトリオへ王となるための素養を身につけさせようとした。

だが、ヴィクトリオには周囲の期待にこたえられるだけの能力がなかつた。

周囲の期待は、ヴィクトリオの小さな器にはとても納まりきらず、パニックにおちいった彼は少年時代から、よく身体的不調を訴える人間となつた。ひつきりなしに排泄をしたくなつたり、めまいと冷や汗がおさまらなくなつたり、顔の筋肉が痙攣したりするのが、日常となつたのだ。

大人になつてからは、そこに過剰な飲酒の問題もくわわり、緊張がひどいときには気を失つたりするもので、とうとう彼には大切な公務は任せられないという評判が立つた。普通の人々には、なぜヴィクトリオがささいなことで緊張状態におちいるのかが、さっぱり理解できなかつたのだ。

それでも、ヴィクトリオは大国ローザニアの王太子だつた。王太子妃には海のむこうの大国イストニアから姫君が迎え入れられ、この妃が女児を生んだあと病がちになると、我こそは次の王太子の母にならうという女が、ひつきりなしに王太子の寝所へ入りこんだ。

ヴィクトリオの情けを得て国母になりたい女たちはみな従順で、なんでもヴィクトリオの言いなりになる。寝所で女と同衾ひいきんしているときだけが、ヴィクトリオが自信を取りもどせる時間となつた。ヴィクトリオの女好きは彼の心の弱さの象徴であり、けして精力をもてあました若い男にありがちな性的衝動に支配されたものではない。

ちなみに、ヴィクトリオのもう一つの趣味が狩猟であるのは、王族が公務ぬきで王宮からぬけだせる手段が、狩猟くらいしかないからである。だから、向上心をもつて取り組んでいるわけもなく、ヴィクトリオの射撃の腕前は、いつまでたつても下手なままだつた。おもちゃを蒐集する感覚で集めた銃のコレクションだけは、たいそう立派なものであったが。

ソワイエ卿にとって、ときどき女をあてがつて狩猟につれだしてやりさえすれば、ヴィクトリオはそれほど、あつかいにこまる主人ではなかつた。幸いなことに、ヴィクトリオにあてがつた女が身ごもることもなかつたのだ。若いころから酒浸りだつたヴィクトリオには、種がないのではないかといふ噂である。王太子妃が生んだ姫が精神異常を疑われているのも、もっぱら種が悪いからといふ評判だつた。

それらの悪評から目を背けて、ソワイエ卿は自分の役目を無難にこなしてきたつもりである。

しかし、その安穏とした日々も、3年前のローレリアン王子の登場で終わってしまった。

優秀な弟王子に自分の立場を脅かされて、ヴィクトリオの精神的な不安定さには拍車がかかつた。しかも、今まで喜んで娘を王太子には拍車がかかつた。しかも、今まで喜んで娘を王太子には拍車がかかつた。

子の寝所へさしだしていた貴族たちが、いつせいに、その役目を嫌がるようになる。どうせ娘をさしだすならば、将来有望なローレリアン王子へさしだしたいのが貴族たちの本音だった。

感情をおさえきれずに泣きわめく、ヴィクトリオをなだめるのに辟易<sup>へき</sup>しながら、ソワイエ卿は勤めをはたしつづけた。辞表は何度となく提出している。侍従総長にも、宰相にも、国王にさえも、辞めさせてくれと直接懇願した。けれど、彼の後任者が見つからないといつ理由で、いつも話はそこで終わってしまっている。

夕べも惨めな夜だった。

国王から勅命を受けたといつのに、ヴィクトリオは寝所にこもり泣きわめいて、王都大火対策の司令官への就任から逃れようとした。迎えに来た第一師団の幹部達からは、後方で寝ていてもかまわないとまで言われたのにだ。

代わってローレリアン王子が城下へ降りたとの連絡がきたとき、王太子の寝所で、ヴィクトリオの説得をまかされて往生していた士官の顔は喜色に輝いた。その瞬間を、ソワイエ卿は忘れることができない。

かの士官ロワール・イトリット卿は、「ローレリアン王子殿下がお出ましなれば、もうこの場に用はない！　おい、俺たちも城下へくだつて本隊へ合流するぞ！　こんなところでぐずぐずしていたら、手柄を立てそこねてしまうではないか！」と叫び、部下をひきつれ、あいさつもせずに、王太子の寝所から飛び出していったのだ。もう、ヴィクトリオに礼をつくすのすら、馬鹿馬鹿しいと思われてしまつたのだろう。

そのあと、ヴィクトリオの狂乱ぶりは、思い出したくもない。引き裂かれた枕の中身の羽根がそこらじゅうに舞い散り、蹴られた小姓は悲鳴をあげ、ソワイエ卿にむかって投げらつけられた高価なガラスの水差しは粉々に碎けた。そのあいだじゅう、あたりに響き渡った、ヴィクトリオの叫び声ときたら……。

弟王子を呪う呪詛の言葉があまりにも陰惨で、それを国王やローレリアン王子の息がかかった者に聞かれては大変だと、王太子の寝室のまわりから、あらゆる人を遠ざけなければならなかつたほどなのだ。

深いため息をついて、ソワイエ卿は窓から離れた。どんなに嫌でも、彼はこれから王太子を起こしに行かなければならぬ。きっと東岸の火事が落ち着いたら、ヴィクトリオには国王からの呼び出しがかかるだろう。その時までにベッドからひきずりだして、身なりを整えさせておかなければ。

王太子の寝所に続く廊下へ入り、ソワイエ卿は最奥にある立派な扉の前に立つた。

タベ人払いをしたせいで、あたりはしんと静まり返つている。

「失礼いたします」とひとわり、扉を開く。

そこはまだ、寝室の前室だ。気品あふれるつくりの高価な家具の間をぬけて、侍従長はヴィクトリオ王太子の寝室の扉の前に立つた。

その場で、ソワイエ卿は固まつてしまつた。

背筋に冷たい汗がわく。

扉のむこうから、明らかに男女の痴態の声が聞こえてくるのだ。ことは佳境におよんでいるらしく、激しくベッドが軋む音や肉体を打ち合わせる羞恥にまみれた音までもが、ソワイエ卿のところへ漏れ聞こえてくる。

なんとこうことであらうか。

王太子は、彼が守るはずの街が今現在も大火に見舞われていると、いつのに、寝所で色道にふけっているのだ。

怒りで、ソワイエ卿の全身が震えた。

もうこんな馬鹿に、仕えるのはまっぴらぬんだ！

王宮の寝所で夜を徹して高貴なお方の枕辺を守る、宿直役の侍従は、いったいなにをしていたのか。國家の危機ともいえる夜に、国の跡継ぎが破廉恥はれんちな行為におよんでいると、どうして宿直役の者は、上役のもとへ報告に来なかつたのだ？！

そもそも最近では、ヴィクトリオ王太子の寝所に喜んではべらうとする女など、皆無に等しかつた。定期的に淫樂いんらくにふける楽しみを提供してやらなければヴィクトリオの感情の不安定さが増すもので、侍従たちはいつも苦労して女をあてがつてきた。

いま、王太子の相手をしている女は誰だ？

王太子はとうとう、王宮の侍女にまで手を付けたのだろうか？

そななによつて、王太子の宮には、なるべく女を入れないよ

うにしてきたのに。

早朝廊下を磨きに来る、下働きの女でも捕まえたのだろうか？

そんな女にまで手を出すようになつたのでは、もつ王太子の世話は我々の手に余る。この色情狂をおとなしくさせておくためには、どこかの塔にでも閉じ込めてしまわなければなるまい。

「（）無礼をばー！」

怒りに打ち震えながら、ひと声叫んで、ソワイエ卿は王太子の寝室の扉を開いた。

部屋にふみこむなり、くすんだ青い男の性の臭いが鼻をつく。

王太子の寝台の上には、異様な熱気。

裸体でからみあう二人の人間の姿を見て、ソワイエ卿は絶句した。

「で、殿下――！」

カーテンのすきまから差し込む夏の朝の光が、室内の光景をきらきらしく輝かせている。

その光の中で情事にふけっていたのは、二人とも男であった。

シーツのうえに縫いとめられるようにして艶めいた声をあげていた男が、正気に返った様子で、王太子の肩越しに侍従長を見る。

彼は王太子に昨年から仕えるようになった若い侍従で、優しげな

雰囲気を持つ男だった。ややくすみがかつた金茶色の髪と薫色の瞳の持ち主で、いつも眩しそうに眼を眇めている。そうすると表情にけぶるような色気が漂う美青年だ。主人から男色の相手を命じられれば、難なく女役をこなせそうな細腰の持ち主でもある。名を、ジョシュア・サンズといつ。

ソワイエ卿の知っているジョシュア・サンズは、控えめで落ち着いた男だった。ヴィクトリオ王太子が癪かんしゃくをあこしても、あわてることなく冷静に対処してくれる。だからこそ彼を信頼して、昨夜の醜態のあとベッドで泣き続けるヴィクトリオの世話を、彼にまかせたのだが。

驚愕きょうがくのあまり言葉を失つた侍従長を見てジョシュアは笑つた。

情事の興奮に赤らんだ顔で、艷然と。

そのほほ笑みに、ヴィクトリオの動物的な呼吸の音がかぶさる。

ぬちやぬちやと口内の粘膜をむさぼる卑猥ひわいな響きがそこらにこぼれ、激しく身体を突き上げられたジョシュアは再び息を乱す。

耳をふさぎたくなる男の嬌声きょうせいが、その口から生み出される。

もう耐えられない！

乱れる感情に翻弄ほんのりつされたソワイエ卿の心の内で、なにかが切れた。

熱い涙が自分の眼からこぼれ落ちているのが、他人事のように感じられた。

衝動にかられるまま王太子のベッドにかけより、獣じみた行為に夢中になっているヴィクトリオの髪をつかんだ。

腕に力がこもる。

思いつきり、大馬鹿者の頭をやすりでやった。

力むあまり奥歯を食いしばるから、絶叫する声が切れ切れになり、無様にゆがむ。

「あなたはっ、どこまで、愚かなのだ！ 国難にあつて、國中の民が、涙と汗につ、まみれているといふのに！ そのつ、苦しみを理解しようとしてないどころか、自分のことしか、考えずにつ！ あ、あらうことが、だつ、……男色になど走つてつ！」

「ひいっ、痛い！ 痛いっ！ 離せ、侍従長！」

「王都はまだ、燃えているのです！ 燃えているんだ つ！」

ぼたぼた涙を落としながら、ソワイエ卿は叫びつけた。右手でヴィクトリオの髪を、左手でヴィクトリオの耳をつかみ、渾身の力でゆすりながら。

「ジョシュア、ジョシュア！ 助けてくれ！ 痛い、痛い、痛いっ！」

ヴィクトリオが恐怖の叫びをあげる。実際、我を忘れたソワイエ卿は力の加減などしていなかつたから、ソワイエ卿の爪がくいこんだヴィクトリオの耳介からは血が流れ出していた。

「ジョシュア、わたしを助けるのだ！」

王太子の命令と同時に、銃声がどどりいた。

ソワイエ卿の怒り狂つた瞳の輝きは一瞬で消え失せ、力を失つた重い身体がヴィクトリオ王太子に倒れかかった。

「ひいっ、ひい、ひ つ！」

意氣地なしの王太子は、もつまともな言葉すら発せられない。

ベッドに転がつたソワイエ卿の頭には小さな穴が開いており、その穴からは鮮やかな色の血が噴き出していたのだ。

「ジョ、ジョ、ジョシュア……！」

寝台のわきに立つた若い侍従は、美しい裸体を惜しげもなく朝日にさりしながら、いやつやしく王太子へ臣下の礼をとる。

「王太子殿下、御命にしたがいました」

そういう彼の右手には、短銃が握られている。臆病なヴィクトリオが、いつも護身用にベッドサイドのキャビネットのひきだしに忍ばせているものだ。

「ひいっ……、殺したのか？」

「ひいでもしなければ、御乱心の侍従長は、王太子殿下にお怪我を負わせそうでございましたので。それに、男色は生命の誕生につながらぬ背徳行為。かくれて行為におよぶのは誰でもやつていいこと

ですが、おおやけにされれば、神々の教えに逆らう異端者として追及されかねません。ましてや、いまの王太子殿下のお立場は、かなり微妙なところござります。わたくしは殿下のおんため、わが身を捧げることにためらうなどございませんが、万人の理解を得ることは難しいでしょ？

ガタガタ震えながら、ヴィクトリオはジョシュアにすがりついた。

「どうすればよい、ジョシュア。助けてくれ、ジョシュア」

「お気持ちを強くおもちください。どうか、わたくしが殿下にそれをげる忠誠心を信じていただきたい」

「信じる！ そなたを信じるぞ！ わたしの苦しみを真理解して、心から慰めようとしてくれたのは、おまえだけだ！」

王太子のたわけた言い様を聞きながら、ジョシュアは床に落ちていた衣を拾つて、王太子へ着せかける。

「では、寝衣をお召しください。すぐに銃声を聞いた近衛兵が、ここへ駆けつけてまいりましょ。侍従長はタベの騒ぎについて殿下をお諫めしようとなさり、責任を取ると称して、この場で自害して果てたのです。命がけの忠言を受けて、ヴィクトリオ様はお心を打たれたらと、そう国王陛下には申し上げねばよろしいでしょう

「そ、そ、うか。あ、わ、か、つた」

自分の身なりも急いで整えながら、ジョシュア・サンズは寝室の窓を開けた。部屋中に充满した男の性の臭いを少しでも弱めようと思つての行動だったが、窓を開けた瞬間、王太子の寝室の空気は煙

の臭いでおおいつくされた。

ジョシュアの耳に、侍従長の声がよみがえる。

王都はまだ、燃えているのです！

王太子の寝所の窓から、その光景を確認することはできないが。

首都の半分を失う国難にあって、ローザニアは大きく変わるだろう。その時代の波を起こす力の一端を、今この瞬間、自分は手にしたのだ。王太子の宮に入りこんでから一年あまりの日がたつた。今まで虎視眈々と、権力者に取り入るすきをつかがつてきたが。今がまさに、その機会にちがいない。

煙くさい朝の空気を胸いっぱいに吸い込んで、ジョシュア・サンズは空をにらんだ。

背後では、寝室の扉が乱打されている。

扉の外では近衛兵が、「王太子殿下、御無事でいらっしゃりますか！」と叫んでいた。

夜明けとともに、みずからもレヴァ川の東岸へ渡河して王都大火対策本部を現場のそばへと移したローレリアン王子は、その後も精力的に活動した。

今度は活動の大まかな方向性がきまっているので、馬に乗つて現場をまわり、市民や兵士を励ますことに精をだす。

とにかく彼は、忙しかつた。現場に出れば出たで、こまごまとした問題に対処したり、新たな懸案とすべき事態を拾いあげたりと、やることはいくらでもある。

昏すぎになるころには、燃え広がる炎は防火帯の一部に達した。しかし、人々は慌てることなく、その場所への放水を増やすことで事態に対処した。

消防作業のために集まつた人の数は、西岸から川を越えて現場に入つた市民や軍隊だけにとどまらず、火事で自分の家を焼かれてしまつた東岸の住人達まで加わつて、すでに数万人にふくれあがつていたのだ。東岸の街の住人は動ける者ならそれこそ、女、子供、老人にいたるまでが活動に加わつていた。

女や年かさの子供達は、井戸や水路から水をくみだし、バケツリレーの列を作つて男達を助けた。

小さな子供や老人は、水に濡らした布をもち、防火帯を超えて落ちてくる火の粉を人海戦術でたたき消していく。

その光景をじかにながめ、防火帯のむこうにあがる火柱をにらんだ後、ローレリアンは黒煙渦巻く空へと視線をあげていく。馬は火を見るとおびえるため、少し離れた場所へ置いてきた。

王子のすぐそばに立つて熱心に話しかけているのは、放水作業の指揮をとっている西岸商業地区自警消防隊の隊長anton・グロリーズである。

「じらんのとおり、防火帯は立派に、その役目を果たしております。市民の協力のおかげで、この先の延焼も防げそうですし」

「それはよかつた」

「問題は、防火帯のむこうの火が、あとどのくらい燃えつづけるかです。今は市民がみな興奮状態で疲労を感じておりませんので、なんとかなつているのかもしません。これが、長期化いたしますと……」

グロリューズの言葉を、王子は心ここにあらずといった様子で聞いている。彼の視線は、火災から立ち上る煙のむこうにある空の雲に注がれていたのだ。

「火災の長期化は心配しなくていいよ」

「は？」

消防隊長は、虚をつかれて言葉をなくす。

あっけにとられたグロリューズの顔を見て、王子は苦笑し、空を指さした。

「季節が夏でよかつた。あの雲を見てみるがいい。立派な入道雲だ。おそらく、夜通し燃えつけた街の火災の熱気も吸い込んで、そうとつ重くなつた雲だらう。あと数時間以内に、間違いなくこの辺りには雨が降る」

「雲を見て、天気の予測ができるのですか？」

「何を驚いている。雲の形から天気を予測するなど、昔から農夫や木こりたちがやって来たことだ。学者は、それを学問として確立しようとしているのだがね。なんでも、気象学とかいうらしい。わたしは、その学問のほんのさわり程度しか、知らないが」

「いや、驚きました。王子殿下の博識ぶりには、このグロリューズ、驚かされるばかりでござります。この防火帯も、殿下の的確なご指示がなければ、こんなに早くは築けなつたはずなのです」

王子の苦笑は、ますます深くなつた。

「防火帯の整備が夜明けに間に合つたのは、そなたと市民の手柄だ。グロリューズ」

王子を守る護衛の人垣のむこうから、伝令が怒鳴つてくる。

「王子殿下！ 本部からの連絡です！ 近隣の街の神殿から食料を運んできた荷車が次々に到着しております！ 荷物につきしたがつてきた神官たちは、どこで食料を配ればよいのか王子殿下からの指示をお待ちするよう」と、上役から命じられているようですが

王子は後方へ踵きびすをかえす。

「わかつた、すぐに行く。グロリューズ、ここは頼んだぞ」

「ははっ。かしこまりました！」

どうやら王子殿下は昨夜のうちから早々と、東岸の街で消火活動に取り組む数万の人々へ、食事をふるまう手はずを整えておかれたようだ。

護衛に囲まれ馬が待つ広い道をめざして足早に立ち去る王子殿下の後ろ姿にむかって、グロリューズは深く首をたれ、お祈りの手を合わせた。きっとあの方は、正義と公平の神ロトや知恵の女神サガスをはじめとする、多くの神々の祝福を受けておいでになる聖者にちがいないと思つたのだ。

消防隊長のしぐさを見て、周辺の人々も作業の手をとめ、王子を見送る。彼らの顔にも、「よくぞ神々よ、わたしたちのもとへ、あの王子を使わされて下された！」という気持ちがあふれていた。

彼らは口々に「う。

「俺たちの王子殿下は、なんて若くて、綺麗で、賢い方なんだ！」

「そのうえ、俺たちみたいな貧乏人の災難にまで心を碎いてくださる、お優しい方だし！」

「それにさあ。優しさと弱さは隣りあわせだっていうけれど、俺たちの王子殿下には、弱つちいところなんか、ぜんぜんないしな！」

「さうとも。王子殿下は強い意志でもって人を統率したり、難しい

決断を迷いなく下す力もお持ちだ。しかも、その結果を自分の手柄として誇らしく、おまえたちの手柄だよと言い切る、謙虚さまでお持ちなんだからなあ！　ああいつお方をやして、男のなかの男といつや！』

「俺は、びっくりしたんだけどよ。ローレリアン王子殿下は、ローザニアの初代国王、聖王パルシバル陛下に、生き写しなんだぜ！」

得意げに、そう言い切った男のことを、みんなが笑う。

「おまえ、どうで聖王様に会つたんだ？」

「おまえさんの歳が三百才を超えてたとは、知らなかつたよ

「ずいぶんと爺さんだつたんだなあ！」

むきになつた男は大声をあげた。

「ぐだらねーチヤチヤをいれんな！　俺は、大真面目だ！　俺はなあ、建国節のときにフレブナン大神殿で公開される、初代聖王様の肖像画を見に行つたんだよ！」

「へえ、おまえ、金持ちだなあ」

「あれ、けつこうな見物料を、とられるじゃないか

「母ちやんといつしょになつてから20年たつた記念に、一生の思い出になるようなことをしたかったんだよ。それはともかくとして、ローレリアン王子殿下は、初代聖王様と、よく似ておいでになる！

淡い水色の瞳はローザニアの王家に生まれた者の証といわれるけれど、色の加減なんかほんとに、そつくりなんだぜ！」

「初代聖王様の水色の瞳は、千里先を見通したという話だが」

「俺たちの王子殿下の眼にも、未来が見えているのかもしかんなあ……」

男たちは、しばらく黙りこみ、自分たちが築きあげた防火帯や、そのむこうに迫っている炎を、じっと見た。

彼らのまわりには、身体にまとわりつくような熱気と煙の臭いが充満している。たがいに見合させる顔はみな、煤と埃で真っ黒だ。夜通し懸命に動かした手足の筋肉は固くこわばっているし、防火帯をつくるための道具を握っていた手には血豆ができている。

体の痛みは、彼らに告げる。

いま目の前にある光景は夢かと疑いたくなるほど非現実的だが、街が丸焼けになつたことも、万の人が集まつて炎と戦つていても、明らかな現実なのだ。

そして、この国にはただ一人だけ、誰もがまさかと思う今現在のこの光景を、予測していた人物がいたのだ。

いまこの時、この地に大量の食料が届くといつことは、かの王子が火災発生第一報を聞いた時からすでに、万の人が集まるこの消火作業の実現を構想していたという証なのだから。

これを千里眼といわずして、何という？

噂はまたたく間に、万の人々の口から口へと伝わった。

我らの王子は、未来をも見通す賢い王子！ 神々の祝福を惜しみなく受けた、聖なるお方！ 初代聖王様の生まれ変わり！

ローレリアン王子が大神官長に協力を求めて整えた食料が暖かい炊き出しの粥として市民へふるまわると、噂にはなあ、華やかな尾ひれがついた。

噂は、市民にとって、たつたひとつ光明だったのだ。

火災によつて財産や仕事を失つた人々の心には、深い悲しみが満ちていた。

けれども、あの王子とともに再起を誓えば、自分達にも必ずまた新たな未来が開けるだろうと、市民達は望みを持てたのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3863v/>

---

ローザニアの聖王子

2011年11月30日15時43分発行